

借景の展開と構成－日本・中国造園における比較研究

周 宏俊

## 目次

目次

図表目録

### 第一章 序論

1. 研究の背景と目的	1
2. 研究の方法	3
2-1. 研究の構成	3
2-2. 定義について	5
3. 既往研究と研究の位置づけ	6
3-1. 中国造園及び借景に関する研究	6
3-2. 日本造園及び借景に関する研究	8
3-3. 日本における中国造園に関する研究, 中国における日本造園に関する研究, 及び比較研究	10
3-4. 位置づけ	12

### 第二章 中国造園における借景という用語及び概念の展開と変遷

1. 本章における研究の背景, 目的及び方法	13
2. 語源の考察	15
3. 古典文献における「借景」	16
3-1. 概要	16
3-2. 嚆矢としての黄庭堅の「借景亭」	18
3-3. 『園冶』の「借景」と影響	20
3-4. 『閑情偶寄』の「借景」と影響	22
4. 近代の研究における「借景」の概要	24
5. 借景の構造	25
5-1. 構造の変遷	25
5-2. 「尺幅窓型」の主体自覚と身体性	29
5-3. 借景と眺望の相違	29
6. 本章のまとめ	30

### 第三章 日本造園における借景という用語及び概念の性格と変遷

1. 本章における研究の背景, 目的及び方法	3 2
2. 近代以前における借景という用語	3 4
3. 「借景」に関する明治期の様相	3 7
3-1. 概要	3 7
3-2. 小沢圭次郎の「借景」と『園冶』	3 8
3-3. 「見渡し」の伝統	4 0
4. 近代以降造園研究における借景の概念及び構造	4 2
4-1. 造園研究の発端	4 2
4-2. 「借景」の定義から見る借景の概念	4 4
4-3. 借景庭園の規定と典型構造	5 0
5. 「借景」のプロモーション『園冶』の普及過程について	5 6
6. 文学にみる「借景」	6 2
7. 本章のまとめ	6 3

#### 第四章 中国庭園における眺望の構成－蘇州庭園を中心として

1. 本章における研究の背景, 目的及び方法	6 5
2. 眺望に関する一般モデルとその特徴	6 9
2-1. 眺望に関する一般モデル	6 9
2-2. 現存の庭園にみる眺望	7 0
2-3. 「経営位置」：眺望視点の配置	7 1
2-4. 「遠」について	7 4
2-5. 眺望の理想と現実	7 6
3. 拙政園の眺望について	7 9
3-1. 蘇州古城について	7 9
3-2. 蘇州古城における塔の風景	8 1
3-3. 蘇州古城における山の風景	8 9
3-4. 拙政園の変遷	9 3
3-5. 拙政園における眺望	9 7
3-6. 水景について	1 0 3
3-7. 境界について	1 0 6
4. 塔までの眺望	1 1 1
4-1. 塔影と名付ける庭園	1 1 1

4-2. 「塔影」にみられる造園文化	120
4-3. 「隔」：塔のイメージ	124
4-4. 庭園のスケールと外景に関する意識	126
5. 山までの眺望	131
5-1. 見山庭園の分布	131
5-2. 視点配置に関する理想と反理想	140
5-3. 低視点について	146
6. 本章のまとめ	147
<b>第五章 日本庭園における借景庭園の構成</b>	
1. 本章における研究の背景、目的及び方法	150
2. 「小中見大」という意匠	152
2-1. 分析指標の設定	152
2-2. 一般的特徴	154
2-3. 「大小性指数」について	162
3. 眺望意識	166
4. 京都における臨済庭園からみた借景の遍在性	179
5. 本章のまとめ	188
<b>第六章 比較と結論</b>	
1. まとめ	191
2. 比較	194
2-1. 展開の経緯について	194
2-2. 造園理念について	195
3. 結論	196
<b>参考文献</b>	198
<b>本論文の要旨</b>	213

## 図表目録

### 第一章 序論

図-1 拙政園と円通寺庭園の借景	2
図-2 本研究の流れ	3

### 第二章 中国造園における借景という用語及び概念の展開と変遷

図-1 「借景亭」のイメージ	1 9
図-2 眺望のイメージ	2 1
図-3 「尺幅窓」のイメージ	2 3
表-1 文献の検索方法	1 4
表-2 古典における造園に関する「借景」	1 7
表-3 古典借景の構造	2 7

### 第三章 日本造園における借景という用語及び概念の性格と変遷

図-1 『帳中香』における借景に関するページ	3 5
図-2 清水寺延命院	4 1
図-3 大徳寺本坊方丈庭園平面図	5 2
図-4 慈光院庭園平面図	5 3
図-5 円通寺庭園平面図	5 3
図-6 大徳寺本坊方丈庭園の眺望	5 4
図-7 円通寺庭園の借景	5 5
図-8 慈光院庭園の借景	5 5
図-9 成就院庭園の借景	5 6
図-10 成就院庭園平面図	5 6
図-11 隆盛堂版『園冶』の扉	5 9
図-12 華日堂版『園冶』の扉	5 9
図-13 借景のページにおける欠けた様子	6 0
図-14 日本における借景の経緯	6 4
表-1 調査対象とした文献および結果	3 3
表-2 「借景」に言及した明治期以前の文献	3 7
表-3 代表的な借景の定義の分類	4 9

表-4	借景庭園として高い頻度で指摘された庭園	5 1
表-5	典型とする借景庭園	5 1
表-6	明治期以前における園冶という言葉が確認された文献	5 7
表-7	日本における『園冶』古版の所在	6 1

#### 第四章 中国庭園における眺望の構成－蘇州庭園を中心として

図-1	本論における蘇州地域の概念図	6 7
図-2	寄暢園の借景	7 1
図-3	滄浪亭庭園平面図	7 3
図-4	羨園平面図	7 3
図-5	郭熙「樹色平遠図」	7 5
図-6	宋「平江図」	8 0
図-7	「盛世滋生図」「蘇州城西南隅」部分	8 3
図-8	「乾隆南巡図」(巻六)「乾隆進胥門」部分	8 3
図-9	1745年「姑蘇城図」にみられる南園と北園	8 4
図-10	1940年代の北園	8 4
図-11	1900年代の南園	8 4
図-12	河西巷から北寺塔を見る	8 5
図-13	1930年代盤門から瑞光塔を見る	8 5
図-14	1930年代北寺塔からの俯瞰	8 5
図-15	「盛世滋生図」にみられる民家と塔	8 6
図-16	可視範囲の推測図	8 8
図-17	呉県における山の分布	8 9
図-18	蘇州古城における七子山を眺望する仰角の分布	9 0
図-19	現存の拙政園の配置図	9 0
図-20	滄浪亭看山樓	9 3
図-21	獅子林見山樓からの眺め	9 3
図-22	1533年版の「小滄浪」, 「湘筠塢」, 「釣砦」, 1551年版の「小滄浪」, 「湘筠塢」, 「釣砦」	9 7
図-23	拙政園平面図	9 8
図-24	借景に関する立地分析図	9 8
図-25	拙政園における借景	9 9

図-26	1533年版「夢隠楼」	1 0 0
図-27	1533年版「意遠台」	1 0 0
図-28	八旗奉直會館圖	1 0 3
図-29	推定された水景及び三十一景の配置図	1 0 4
図-30	1533年版「若墅堂」，「來禽圃」，「瑤圃」，「得真亭」	1 0 7
図-31	1551年版「繁香塢」，「小滄浪」，「湘筠塢」，「芭蕉檻」	1 0 7
図-32	郭忠恕「臨輞川圖」の一部	1 0 9
図-33	「菱濠」，「拙修菴」，「耕息軒」，「續古堂」，「桑洲」，「東城」	1 0 9
図-34	顧氏塔影園，蔣氏塔影園と邱南小隱の立地図	1 1 3
図-35	熊氏塔影園と適園の立地図	1 1 5
図-36	雙塔影園の立地図	1 1 6
図-37	憺園の立地図	1 1 6
図-38	鄧尉山莊の立地図	1 1 9
図-39	吳県における見山庭園分布図	1 3 3
図-40	長洲県・元和県における見山庭園分布図	1 3 4
図-41	常熟県における見山庭園分布図	1 3 5
図-42	昆山県における見山庭園分布図	1 3 6
図-43	太倉州における見山庭園分布図	1 3 7
図-44	怡園平面図	1 4 3
図-45	怡園立地図	1 4 4
表-1	文献調査方法	6 6
表-2	蘇州古城における見塔庭園	8 7
表-3	拙政園の沿革の概要	9 4
表-4	拙政園における眺望に関する記述	1 0 1
表-5	塔影に関する10点の庭園	1 1 1
表-6	「隔」に関する統計	1 2 5
表-7	配置とスケール	1 2 7
表-8	「選景」とスケール	1 3 1
表-9	見山庭園の統計	1 3 2
表-10	視点配置	1 4 1
表-11	低視点の眺望	1 4 6

## 第五章 日本庭園における借景庭園の構成

図-1	本章における研究の流れ	1 5 1
図-2	頼久寺庭園に関する可視分析	1 5 4
図-3	愛宕山までの眺望のシミュレーション	1 5 5
図-4	カシミール 3D における断面分析	1 5 5
図-5	頼久寺庭園平面図	1 5 6
図-6	庭園類型ごとの庭園面積と眺望視距離の関係	1 5 8
図-7	庭園境界ごとの「距奥比」と仰角の関係	1 5 9
図-8	庭園類型ごとの「距奥比」と仰角の関係	1 5 9
図-9	庭園立地ごとの「距奥比」と仰角の関係	1 6 0
図-10	天然図画亭庭園の借景	1 6 1
図-11	芦花浅水荘に関する可視分析	1 6 1
図-12	「大小性指数」と指摘回数との関係	1 6 3
図-13	庭園方向性と「大小性指数」の関係	1 6 4
図-14	庭園類型と「大小性指数」の関係	1 6 4
図-15	庭園所属と「大小性指数」の関係	1 6 5
図-16	庭園立地と「大小性指数」の関係	1 6 5
図-17	庭園境界と「大小性指数」の関係	1 6 6
図-18	庭園方向性ごとの標高差と指摘回数との関係	1 6 6
図-19	面山と背山の配置	1 6 8
図-20	天竜寺庭園	1 6 8
図-21	隣雲亭からの借景	1 7 0
図-22	隣雲亭に関する可視分析	1 7 0
図-23	修学院離宮上御茶屋庭園平面図	1 7 1
図-24	西江寺の借景	1 7 2
図-25	西江寺庭園に関する可視分析	1 7 2
図-26	泉森山までの眺望のシミュレーション	1 7 2
図-27	重森三玲の西江寺庭園に関するデッサン	1 7 3
図-28	成就院庭園の立地と平面図	1 7 5
図-29	成就院庭園に関する可視分析	1 7 5
図-30	成就院庭園の借景のシミュレーション	1 7 5
図-31	柴屋寺庭園の立地と平面図	1 7 6



図-32	柴屋寺庭園に関する可視分析	176
図-33	天柱山までの眺望のシミュレーション	177
図-34	平山亮一氏庭園平面図	177
図-35	平山亮一氏庭園の借景	178
図-36	平山亮一氏庭園に関する可視分析	178
図-37	平山亮一氏庭園から四方の山並みまでの眺望のシミュレーション	179
図-38	北の山の眺望に関する可視分析とシミュレーション	179
図-39	母ヶ岳までの眺望のシミュレーション	179
図-40	天文年間以降京都における寺院の分布	182
図-41	歴史に関する地図にみる大徳寺の所在地区の状態及び変遷	182
図-42	大徳寺境内図	183
図-43	大徳寺に関する可視分析	183
図-44	真珠庵庭園に関する可視と断面分析及び眺望のシミュレーション	185
図-45	孤篷庵庭園に関する可視と断面分析及び眺望のシミュレーション	185
図-46	竜光院庭園に関する可視と断面分析及び眺望のシミュレーション	186
図-47	芳春院庭園に関する可視と断面分析及び眺望のシミュレーション	186
図-48	大徳寺本坊方丈庭園の借景	187
図-49	竜光院庭園平面図	187
図-50	碧玉庵庭園	187
図-51	正伝寺の借景	188
図-52	正伝寺の借景に関する断面分析	188
表-1	31点の借景庭園に関する分析	157
表-2	背山庭園に関する分析	169
表-3	京都における臨濟宗庭園に関する分析	181

(註 出典を指摘したもの以外の図と表はすべて筆者に作られたものである。)

## 第一章 序論

## 1. 研究の背景と目的

「借景」は日本と中国において近代以来の造園研究における重要な概念の一つである。『園冶』に「借景者，造園之最要者也」<sup>1</sup>と指摘されているように，古典籍においても借景の造園上の重要性は認められている。また，古典造園の技法に関して，日本と中国の間で共通する用語は少ない。庭園内の人工の山を例としてみれば，中国における「假山」，「掇山」などの用語に対して，日本では主に「築山」，「立石」などの用語が使われている。これに対して借景は数少ない共通用語の一つである。このように，借景は日本と中国の造園上の交流の表れといえることができる。事實は，借景の解釈が掲載されている『園冶』は中国から日本へ伝来し，そして近代初頭には，日本から中国へ逆輸入された。

また，日本と中国において，借景の庭と規定されている庭園が多くみられる。中国では現存する庭園は比較的少ないが，この中で拙政園<sup>せつせいえん</sup>，寄暢園<sup>きちちやうえん</sup>と滄浪亭<sup>そうろうてい</sup>などの多くの庭園において借景という技法が用いられていることは一般的な理解である。日本の場合は借景庭園という庭園類型が規定され，多くの庭園がその類型に属するとされている。

しかし，日本における借景と中国における借景は概念においても規定されている庭園の構成においても，顕著な差異があると考えられる。概念に関しては，さまざまな解説が混在している。ここでは造園に関する辞書での概念を挙げてみると，『日本庭園辞典』には借景は「庭園から視界に入る敷地外の景観を，単なる庭園の背景としてではなく，庭園の重要な構成要素の一つととらえて処理すること」<sup>2</sup>と解説されている。これに対して，『中国園林芸術大辞典』には，借景は単なる造園技法としてだけでなく，人間と風景環境との関係を把握する上での造園理論として捉えられている<sup>3</sup>。この差異は借景の典型とされている拙政園と円通寺庭園の性格にも顕著に表れていると思われる（図-1）。

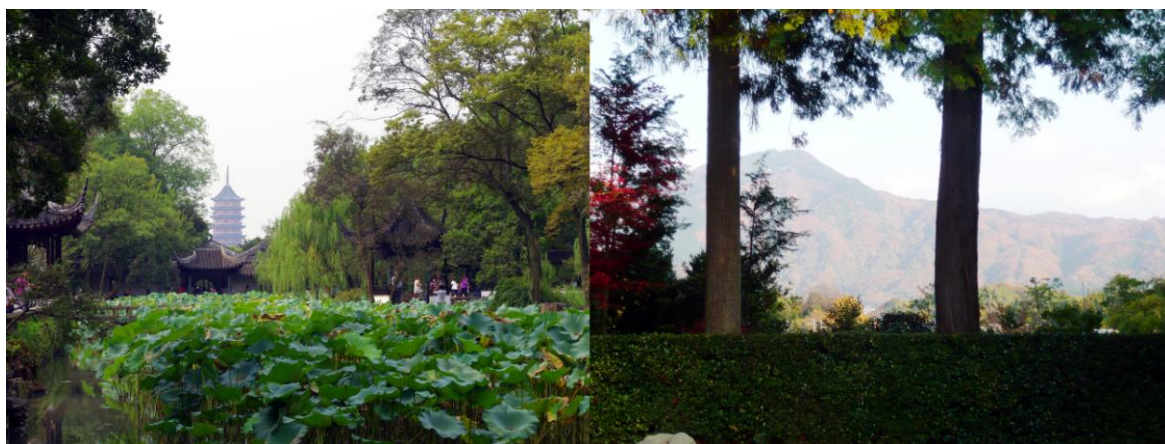
したがって，同じ起源の同じ用語であるにも関わらず，なぜこのような差異が起きているのかが疑問として残される。

従来，借景の概念については，『園冶』が起源であるというのが一般的な理解であ

1 陳植（1988）：園冶註釋：中国建築工業出版社，247

2 小野健吉（2004）：日本庭園辞典：岩波書店，134

3 張家驥（1997）：中国園林芸術大辞典：山西教育出版社，322-323



図一 拙政園と円通寺庭園の借景

る。しかし、この結論以外にそれを確かめるような考証がほとんど存在していないため、その妥当性は確認できていないのが現実であると考えられる。さらに、既に触れたように借景に関してさまざまな解釈あるいは定義があるが、この概念の変遷は中国、日本ともに未だ整理されていない。

また、借景に関する概念は多様化し混乱しているともいえるため、借景がどのような具体的造園技法に当たるのかも未だ十分に検討されていない。特に中国では、こうした研究は全く行われていなく、研究の空白といえることができる。中国では古典造園に関する「有法無式」という格言に示されているように、技法もしくは構成などの「式」よりも、借景を造園の思想と理念の「法」として把握することが多い。一方日本では借景をある庭園技法として規定した上で意匠と構造などを考察することが多いが、これも系統的な研究がなされているとはいえない。

中国においても日本においても、借景に反映されている理念に関しては、人間と環境の関連についての哲学面あるいは文化面の研究は比較的多くみられる。しかし、借景の定義と技法のうちに内包されている意匠の理念、さらに庭園美学の考え方に関する研究は極めて少なく、手付かずの状態にあるといっても過言ではない。

このように、日本と中国の造園研究では、借景の概念と技法を対象とした系統立った研究は未だ存在しておらず、両者の比較研究も行われていないといえる。そこで本研究は、借景を対象として、造園概念と技法の観点から借景は何かという問題を明らかにする。具体的には以下の四つの目的がある。日本と中国の造園において、借景という用語と概念の展開と変遷を考証すること、借景の技法と庭園の構造の特質を分析し明らかにすること、借景の概念と技法に内包されている一般理念を究明すること、及び以上の三点において日本と中国の状況を比較することである。

## 2. 研究の方法

### 2-1. 研究の構成

本研究の構成は借景に関して、概念の歴史の変遷、技法と空間構造、それらの中日の比較という三つの部分からなる。そのうち歴史の変遷と空間構造は中国と日本それぞれで行う（図-2）。よって、本論文は本章の序論を含めて六つの章から構成される。具体的には、研究問題と背景および方法、中国造園における借景という用語及び概念の展開と変遷、日本造園における借景という用語及び概念の性格と変遷、中国庭園における眺望の構成、日本庭園における借景庭園の構成、比較及び結論、の六つである。

借景という用語および概念に関する部分は、中日ともに主に文献調査に基づいた考証により行う。中国庭園における眺望の構成については、現存事例に関する空間および景観の分析が含まれているが、現存する庭園が比較的少ないため、主に古文書調査に基づいて歴史的事例を主対象に設定した。日本の場合は現存の借景庭園に関する分析を研究の主体とした。

六つの章の構成は以下の通りである。

第一章は序論とし、研究の背景と目的、本研究の視点、既往研究に対する本研究のと位置づけと論文全体の構成および用語の定義について述べる。

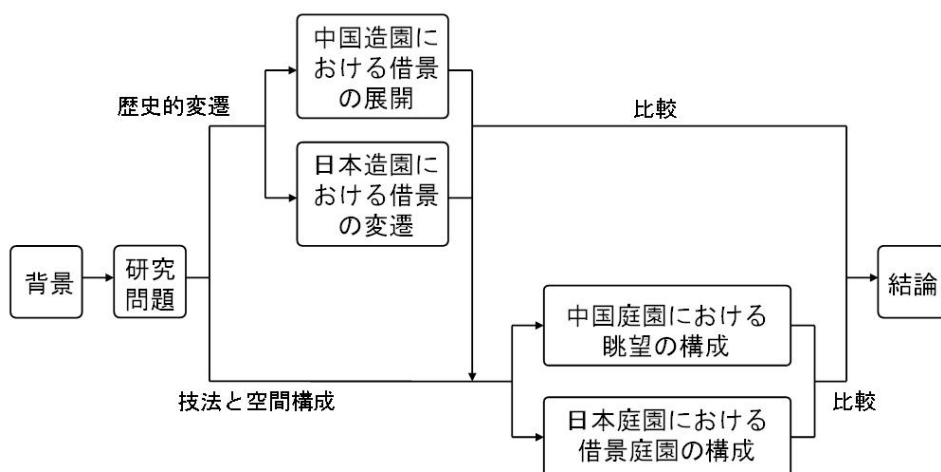


図-2 本研究の流れ

第二章は中国における借景の概念と用法についてその変遷を究明することを目的とする。本章は借景の概念の考証とそれを踏まえた借景を成り立たせる構造の分析・考察の二つの部分からなる。これらを通して借景の用語の起源、古典文献から近代の研究に至るまでの概念の変化、各概念に反映されている構造を究明する。その上、現在理解されている借景の概念と歴史上の概念の差異、及びその差異を引き起こした要因を考察する。

第三章は日本の造園における借景という用語の使われ方、即ちこの概念がどのように発生、展開、変容したかの解明を研究課題とする。明治期後半から大正期における近代造園学の誕生を大きな転換点と位置づけ、その前後において借景に関連する文献を可能な限り集め、整理した上で借景の概念の分類とその概念の変遷を明らかとする。そして、借景庭園の事例収集とその典型的な事例を分析し、典型的な空間構造を抽出する。続いて現存する『園冶』および既往研究に基づいて日本における『園冶』の版を調べ、『園冶』の普及の経緯を分析し、日本における借景の展開と『園冶』の普及の関連を明らかにする。さらに文学作品と文芸評論における借景の使用例も収集し、造園における借景の使い方や概念と比較を行う。

第四章は中国の庭園を対象に借景の「遠眺型」という性格に着目し、眺望に関する構造及び概念、空間と文化などの側面の構成意匠を解明することを研究課題とする。具体的な対象は蘇州地域における庭園、及びその代表である拙政園を分析の中心と位置付ける。まずその基盤として、園記などの古文献に基づいて眺望の一般モデルと一般理念をまとめる。次に時代に関わらず、蘇州地域におけるすべての古典庭園の例を収集し、中から庭園の様相と眺望の姿を抽出する。さらに、拙政園の眺望に特に着目し、拙政園の眺望に関する歴史の変遷を考証し、園から見える主要な対象である北寺塔までの眺望に関する意識と庭園内の水景と境界の変遷の関連性を明らかにする。続いて、庭園における眺望を眺望対象ごとに塔を対象とする眺望と山を対象とする眺望に分ける。塔を眺望対象とする庭園に関して、考証を加えながら、庭園の配置、視覚的な空間構成を分析する。その際に特に庭園と塔の間の境界性と庭園のスケールを重要視する。また山を眺望対象とする庭園に関しては、視対象、視点及び視点場などを明らかにする。また庭園分布の特徴を分析し、立地による分類化を行い、立地が異なる庭園の間で空間構成における視覚的な差異について検討を加える。以上を踏まえつつ、眺望における理想的なモデルとそこに含まれる造園理念を考察する。

第五章は日本の庭園における借景庭園を整理し、それぞれの特徴及び空間構成を把握するとともに、借景の現象に込められた本質的理念を明らかにすることを目的とす

る。出来る限り多くの借景庭園という評価の定まった庭園の実例を収集した上で、景観工学の手法に基づいて分析指標を設定し分析を行う。まず、31ヶ所の借景庭園を分析し、庭園に与えられた眺望に対する意識と庭園環境の空間特性との関連性を明らかにする。次にその中から隣接する山に背向するように設置されている庭園を10ヶ所抽出し、それぞれの庭園の眺望形式と対象及び眺望意識に注目して分析を行う。さらに、京都地域に置ける主要な臨濟宗寺院の庭園32ヶ所を取り上げ、庭園が造営された当時の借景の実態の把握に重点を置いて分析を行った。以上から、借景庭園における本質的理念を探究する。

第六章はまとめとして、日本における借景の概念と中国における借景の概念を比較した上で、両者の借景概念の差異の背景的要因を考察し、中国庭園と日本庭園の借景の構成を比較する。さらに、両者の借景に関する造園上の理念をまとめ、比較を行い、理念としての差異及びその背景的要因を考察する。

## 2-2. 定義について

すでに触れたように、借景に関しては、様々な概念あるいは規定が混在していることが造園研究の現状である。それに対して本研究では、借景を既に規定の済んだ自明の概念ではなく、多くの言説や表像に示された概念及びそれらに関連する庭園の造営行為や利用行為をも含む現象として把握する。そしてこの現象から中心的な借景の概念と庭園の事例を抽出し分析を行う。したがって、本研究には借景あるいは借景庭園という名称はあらかじめ定義されるものではなく、またある庭園の例を借景庭園と同定することも研究の目的ではない。

研究対象の時期に関して、文献調査には近代の文献も含まれるものの、分析する庭園の例はすべて古典庭園とする。したがって、新たに作られた古典様式の庭園は本研究の分析対象ではない。具体的には、中国の場合、研究対象の時期は概ね宋代から清代末期までであり、調査対象の実例は主に明代と清代における庭園である。特に現存する庭園は主に清代後期に新造あるいは改修されたものである。日本の場合、鎌倉から明治大正までの時期であり、この中江戸期における庭園の実例が比較的多く、明治大正期より後に作られた庭園は対象外とする。

対象とする庭園の地域は、中国では主に蘇州である。日本では一つの地域に限定されないが、多くの庭園は京都に位置している。中国庭園は、所在地域ごとに江南庭園、北方庭園、嶺南庭園の三類型があり、類型の間に顕著な差異がみられる。この中で、蘇州を中心とする江南地域に位置する庭園、すなわち江南庭園は中国庭園の典型とい

うことができる。日本庭園は、所在地域ごとの顕著な差異は比較的小さいが、京都は名園の集合地であり、各類型の庭園が立地している。

また、借景に関して、用語、概念、技法、構造、理念などの言葉が用いられた。具体的に、用語は借景という言葉の自体を表し、概念は用語の使われ方に当たる。技法は借景に関する設計手法であり、構造は庭園の現状からみられる配置に近い。構造は技法の表しであり、構造から庭園を設計した際の技法がある程度推察できる。理念は概念、技法、構造などの中に含まれている根本的な考え方といってよい。

### 3. 既往研究と研究の位置づけ

#### 3-1. 中国造園及び借景に関する研究

中国における造園研究の嚆矢は陳植が 1930 年に掲載した「中国造園史略」という論文である<sup>4</sup>。そして最初に借景という用語に言及した学術論文は王璞子が 1940 年に掲載した「中国園林建築」である<sup>5</sup>。さらに最初の借景を対象とする研究は陳從周の 1958 年の「建築中的借景問題」という論文である<sup>6</sup>。

中国における造園研究は 1930 年代から開始された。初期の造園研究において、陳植、童騫、劉敦楨、陳從周が一番重要な研究者とされ、彼達によって中国造園研究の基盤が確立された。陳植などの先駆者は造園の広範な分野において研究を行い、全体としては造園歴史、庭園意匠論、調査研究と庭園文化論の四つの分野が中心として扱われてきた。

造園歴史は、濫觴である陳植の研究の後、造園通史、歴史考証、古文献整理の三つの方面で行われて来た。造園通史については、陳植の「中国造園史略」は最初の論文であり、その後、劉致平が 1950 年代に完成した研究に、庭園を住居建築の一種として扱い、上古から清代までの庭園の変遷を述べた<sup>7</sup>。また、周維權、張家驥、汪菊淵なども中国造園通史を記したが、基本的に劉致平の記述内容を踏まえた傾向がみられる<sup>8</sup>。このほかに、童騫が『造園史綱』に中国、日本、西洋の造園史の概要を記し、比較

4 陳植（1930）：中国造園史略：新農通議 1(4)，3-9

5 王璞子（1940）：中國園林建築：中和月刊 1(7)，12-35

6 陳從周（1958）：建築中的借景問題：同濟大學學報 3(1)，44-47

7 劉致平（1990）：中国居住建筑簡史：中国建筑工業出版社，295pp

8 周維權（1990）：中国古典園林史：清華大学出版社，344pp。張家驥（1987）：中国造園史：黑龍江人民出版社，246pp。汪菊淵（2006）：中国古代園林史：中国建筑工業出版社，1047pp

を行った<sup>9</sup>。庭園の事例あるいは造園技法に関する考証研究は、闕鐸の1930年の「元大都宮苑圖考」以来、数多く取りくまれてきた<sup>10</sup>。曹汎の一連の論文はその代表といえる<sup>11</sup>。古文献整理においては、陳植が多大な貢献を果たした<sup>12</sup>。また、それに続く陳從周の『園綜』<sup>13</sup>と邵忠の『蘇州歷代名園記選註』<sup>14</sup>は園記の集成として挙げられる。

庭園意匠論については、童寓以来多くの研究が行われてきたが<sup>15</sup>、そのほとんどは定性的な分析による研究である。孫篠祥の理念論述<sup>16</sup>、彭一剛の庭園空間分析<sup>17</sup>、李允鈺の「園群」の設計論<sup>18</sup>などがその典型として挙げられる。特に近年は空間が中心的キーワードになった。調査研究に関しては、劉敦楨の1950年代の蘇州庭園に関する調査が現在まで最高の研究とされている<sup>19</sup>。潘谷西は劉敦楨の研究を踏まえた上で、庭園観賞などの観点から、さらに詳細な調査を行った<sup>20</sup>。そのほか、陳從周の揚州庭園と常熟庭園に関する調査も挙げられる<sup>21</sup>。庭園文化論に関しては、陳從周の1970年代の『説園』が典型であり、造園に関する文学、芸術、哲学などの多くの領域を含んでいる<sup>22</sup>。この領域では、呉世昌の1934年の「魏晉風流与私家園林」が嚆矢といえる<sup>23</sup>。それ以外の早期の研究として、孫篠祥は山水畫論と庭園配置との関連を分析した<sup>24</sup>。また美学研究者である宗白華なども有用な知見を提示した<sup>25</sup>。

これらの中で借景に関する研究は、劉敦楨と陳從周によってその底流が形づくられた。前述した「建築中的借景問題」という論文の中では、借景は庭園内から庭園外までの単なる眺望として扱われている。この眺望は古典造園において強く意識された意

- 
- 9 童寓（1983）：造園史綱：中国建築工業出版社，63pp  
 10 闕鐸（1930）：大都宮苑圖考：中国營造学社彙刊1(2)，3-9  
 11 曹汎（1986）：豊山名家戈裕良：中国園林（2），53-54。曹汎（1988）：造園大師張南垣（一）：中国園林（1），21-26。曹汎（1988）：造園大師張南垣（二）：中国園林（3），2-9。曹汎（2004）：網師園の歴史變遷：建築師112，104-112  
 12 古文献整理に関して、陳植の主要な著作は以下である。陳植（1981）：園冶註釋：中国建築工業出版社，262pp。陳植ら（1983）編：中国歷代名園記選註：安徽科學技術出版社，443pp。陳植（1984）：長物志校註：江蘇科學技術出版社，456pp  
 13 陳從周・蔣啓霆（2004）選編：園綜：同濟大學出版社，527pp  
 14 邵忠ら（2004）編：蘇州歷代名園記選註：中国林業出版社，355pp  
 15 童寓（1963）：江南園林志：中国建築工業出版社，136pp  
 16 孫篠祥（1962）：中国傳統園林藝術創作方法的探討：園藝學報1（1），79-88  
 17 彭一剛（1986）：中国古典園林分析：中国建築工業出版社，158pp  
 18 李允鈺（1982）：華夏意匠：廣角鏡出版社，447pp  
 19 劉敦楨（1979）：蘇州古典園林：中国建築工業出版社，479pp  
 20 潘谷西（1963）：蘇州園林的觀賞點和觀賞路綫：建築學報（6），14-18。潘谷西（1963）：蘇州園林的布局問題：南工學報（3），45-65  
 21 陳從周（1958）：常熟園林：文物參考資料（3），45-47。陳從周（1983）：揚州園林：上海科學技術出版社，145pp  
 22 陳從周（1984）：説園：同濟大學出版社，165pp  
 23 呉世昌（1934）：魏晉風流与私家園林：學文月刊1（2），3-9  
 24 孫篠祥（1964）：中國山水畫論中有關園林布局理論的探討：園藝學報3（1），63-74  
 25 宗白華（1987）：空間意識和空間美感：江溶ら（1987）編：中國園林藝術概觀：江蘇人民出版社，5-16



匠として解釈されている。この論文以外には、借景をテーマとする研究は少ない。借景は多くの場合、庭園に関する論述の一部として述べられている。比較的早期の研究である「中國傳統園林藝術創作方法」，「避暑山莊的園林藝術」<sup>26</sup>，「蘇州留園的建築空間」<sup>27</sup>などの論文においても借景は言及されているが、その概念については論述されていない。実際に、童寓が1930年代に完成した『江南園林志』にも借景を指摘した箇所はあるが、その論述は十分とはいえない<sup>28</sup>。

1980年代以降は、借景をテーマとする論文が多く掲載されてきた。それらに共通する特徴の一つは造園歴史ではなく現存する庭園に基づいて借景の事例を認定したことである。もう一つは『園冶』の記述を踏まえたことである。これらの論文の間で内容の重複がみられるが、その中で封雲が借景の「借」に関して美学的な観点から解説したことは興味深い<sup>29</sup>。近年の研究で、朱雷は媒介の理論に基づいて李漁の借景における窓の媒介性に注目した<sup>30</sup>。また、馮仕達は比較哲学の理論を引用し、『園冶』の「借景」の部分における文学的な表現に含まれている造園に関する理解と意匠を論述した<sup>31</sup>。

### 3-2. 日本造園及び借景に関する研究

中国庭園と比べると、日本庭園の歴史は比較的短い、現存する庭園は非常に多い。さらに、近代以来、極めて豊かな研究成果が生み出されてきた。それに対して、以下は早期の研究における最も代表的な文献のみ借景に関する研究の背景として挙げられる。

日本において造園研究は大正期初頭に造園学及び学術雑誌の誕生とともに発端した。これ以前では、近藤正一、杉本文太郎などが図画を使いながら庭園を解釈し、造園法をまとめている<sup>32</sup>。これらは江戸期における北村援琴と秋里籬島などの著作形式の踏襲といえることができる<sup>33</sup>。また、小澤圭次郎は造園に関する膨大な史料を整理し、

26 周維權（1966）：避暑山莊的園林藝術：建築學報（6），29-32

27 郭黛姮ら（1963）：蘇州留園的建築空間：建築學報（4），19-23

28 童寓は1930年代に江南庭園に関する研究を完成した。その成果として、『江南園林志』が最初に出版されたのは1963年であり、1984年に再版された。童寓（1984）：江南園林志：中国建築工業出版社，8-9

29 封雲（2003）：相地因借—中国園林的造園之法：同濟大學學報14（1），9-12

30 朱雷（2006）：有關李漁便面窗的分析：華中建築24（10），163-164

31 Stanislaus Fung(2000): Self, scene, and action: the final chapter of Yuan ye: Landscapes of memory and experience, edited by Jan Birksted: Spon Press, 129-132

32 近藤正一（1909）：庭園図説：博文館，211pp。杉本文太郎（1910）：日本庭造法図解：建築書院，217pp。

33 北村援琴の代表的な著作は『築山庭造伝（前編）』であり、秋里籬島の代表的な著作は『都林泉名勝図会』と『築山庭造伝（後編）』などである。上原敬二の『造園古書叢書』に集められ、

造園史の輪郭を明らかにした<sup>34</sup>。上原敬二と田村剛の一連の論文は基本的な概念を整理し、日本の造園研究の礎を築いた<sup>35</sup>。その後、『庭園』などの専門雑誌を中心に、数多の造園研究が展開されてきた。こうした研究では、現存する庭園に関する観賞と評価が主流であり、田村剛、竜居松之助、重森三玲、池辺武人などがその重要な担い手であった。同時に、田村剛の1919年の『庭園鑑賞法』<sup>36</sup>、上原敬二の1923年の『庭園学概要』<sup>37</sup>などの専門書物も出版され、造園研究に関する基礎が完成された。造園通史に関しては、最初に横井時冬が1889年の『園芸考』において日本庭園の歴史の概要を整理した<sup>38</sup>。その後、外山英策が室町時代における造園史を研究するとともに、膨大な史料を収集した<sup>39</sup>。また、森蘊は平安時代と中世における庭園の歴史を考証し、その時代の庭園様式を明らかにしている<sup>40</sup>。『園冶』の研究に関しては、橋川時雄、上原敬二、佐藤昌が『園冶』の解説と翻訳を遂げた<sup>41</sup>。これらの研究者の中で、重森三玲は早期の研究者の一人であり、集大成者ともいえる。重森三玲は1930年代から日本各地に散在している庭園を調査し、その成果を公表した<sup>42</sup>。その中では、実測と意匠に関する考察をもとに、各庭園の歴史が考証され、その変遷がまとめられた。

これらの造園研究の中に、借景が指摘されていることがみられる。小澤圭次郎は借景の概念を解釈し、「見渡し」という概念と比較した<sup>43</sup>。また、田村剛と上原敬二も

解説されている。

- 34 史料の整理に関して、小澤圭次郎の代表的な著作として「園苑源流考」があり、1890年から1906年まで『国華』に連載された。ほかに、「明治庭園記」なども挙げられる。
- 35 当時以下の論文が次々に掲載された。田村剛(1916)：造園術と林学：大日本山学会報 403号；上原敬二(1917)：森林美学と造園術：大日本山学会報 410号；田村剛(1917)：造園の起源と芸術としての造園：大日本山学会報 413号；田村剛(1917)：建築的造園の真髓：大日本山学会報 414号；上原敬二(1917)：造園用語集(第一)：大日本山学会報 417号；上原敬二(1917)：造園用語集(第一)：大日本山学会報 418号；田村剛(1917)：風景美と造園美と人工林の美：大日本山学会報 419号；上原敬二(1918)：庭園の字源的解釈：大日本山学会報 426号；上原敬二(1918)：造園用語集(第二)：大日本山学会報 428号；上原敬二(1918)：造園における花候学の価値：大日本山学会報 433号；上原敬二(1919)：造園における樹木の生長：大日本山学会報 436号；田村剛(1920)：造園美としての自然と人工：大日本山学会報 446号；田村剛(1920)：現代文明を背景として見たる造園：大日本山学会報 450号
- 36 田村剛(1919)：庭園鑑賞法：成美堂，312pp
- 37 上原敬二(1923)：庭園学概要：新光社，322pp
- 38 横井時冬(1889)：園芸考：大八洲学会，152pp
- 39 外山英策(1934)：室町時代庭園史：岩波書店，757pp
- 40 森蘊(1945)：平安時代庭園の研究：桑名文星堂，483pp。森蘊(1959)：中世庭園文化史：大乘院庭園の研究：奈良国立文化財研究所，93pp。森蘊(1962)：寝殿造系庭園の立地的考察：奈良国立文化財研究所，105pp
- 41 橋川時雄(1970)解説：園冶：渡辺書店，459pp。上原敬二(1972)：解説園冶：加島書店，108pp。佐藤昌(1986)：園冶研究：日本造園修景協会東洋庭園研究会，145pp
- 42 重森三玲は日本各地の庭園に関して調査、実測、研究を行った。その成果として、全26冊の『日本庭園史図鑑』が1936年から1939年までの間に出版された。その後、新たな実測と研究を加えて全35巻の『日本庭園史大系』が1970年代に出版された。
- 43 小澤圭次郎(1898)：園苑源流考：国華 109号，15-20

早期の研究において借景の概念を規定した<sup>44</sup>。上原敬二は借景をテーマとする論文で日本の借景と西洋庭園のヴィスタについて比較研究を行った<sup>45</sup>。これらの早期研究に始まり現在、借景に関する議論は多くの研究論文と専門書にみられる。これらは概ね二種類に分けられる。一つは借景の概念規定についてであり、もう一つは個々の庭園の借景庭園としての同定である。

借景をテーマとする研究に関しては、上原敬二の1926年の「借景とヴィスタ」を濫觴として、その後何点かが掲載されてきた。池辺武人は西翁院庭園などのいくつかの京都庭園を借景庭園として指摘した<sup>46</sup>。何英吉は自身の経験に基づいて借景を議論した<sup>47</sup>。伊藤ていじは1965年に出版した『借景と坪庭』で借景庭園における要素の構成に対して重点的に分析を行い、中景に基づく六分類を提唱した<sup>48</sup>。進士五十八は景觀工学の概念と方法で借景庭園の景觀構造を分析し、さらに借景庭園の日本庭園における位置づけ及び借景庭園に反映された自然観をまとめた<sup>49</sup>。本中真は1994年に公表された著作で典型的な庭園の事例を中心に庭園遺構の復原を行い、古代庭園の眺望の様子とその変遷を究明した<sup>50</sup>。また、『日本の美術』の借景に関する特集で、中世から近世までの事例を含め、数多の庭園を借景庭園として指摘し、時代ごとの差異に着目した論説を示した<sup>51</sup>。

### 3-3. 日本における中国造園に関する研究、中国における日本造園に関する研究、及び比較研究

日本における中国造園に関する研究は歴史が長く、日本造園に関する研究の開始と概ね同期に開拓された。伊東忠太の1918年の「西苑」という論文がその濫觴である可能性が高い<sup>52</sup>。また、原熙、龍居松之助なども関連する論文を掲載した<sup>53</sup>。特に、後藤朝太郎は1934年に出版された『満支風景庭園鑑』とその後の一連の論文において、中国の庭園と自然風景に関して様々な事例及びそれに関連する文化、歴史、風土など

44 田村剛(1920)：造園美としての自然と人工：大日本山林会報 446号, 10-17。上原敬二(1926)：借景とヴィスタ：造園学雑誌 2(1), 121-127

45 上原敬二(1926)：借景とヴィスタ：造園学雑誌 2(1), 121-127

46 池辺武人(1935)：京都庭園の借景：庭園と風景 17(10), 342-343

47 何英吉(1942)：借景：庭園 24(10), 417

48 伊藤ていじ(1965)：借景と坪庭：淡交社, 221pp

49 進士五十八(1986)：「借景」に関する研究：造園雑誌 50(2), 77-88

50 本中真(1994)：日本古代の庭園と風景：吉川弘文館, 384pp

51 本中真(1997)：借景：至文堂, 98pp

52 伊東忠太(1918)：西苑：庭園 1(1), 20

53 原熙(1926)：支那庭園と様式：庭園 8(12), 2-3。龍居松之助(1923)：北京住宅の庭：庭園 5(2), 8-9

を記述した<sup>54</sup>。この時期の顕著な特徴として、著者が見学した実例に関する紹介が比較的多いことが挙げられる。1943年に岡大路によって公表された『支那庭園論』では、庭園文化論と造園文献の翻訳紹介が行われ、その中で古典絵画理論と造園の関連に注目した<sup>55</sup>。造園に関する文献史料については、1929年の小寺駿吉の「中国園林典籍」という論文にも『三輔黄圖』、『吳興園林記』、『婁東園林志』などの21点の文献の概要が紹介された<sup>56</sup>。さらに、1950年前後には、田治六郎は「『洛陽名園記』と『金陵諸園記』とから見た宋明兩代の庭園」などの一連の論文を掲載した<sup>57</sup>。専門書として、杉村勇造の『中国の庭』は比較的早く1966年に公表された。その中で各時代における代表的な庭園と庭園文化が述べられ、多くの写真も収集された<sup>58</sup>。これらの庭園研究における庭園実例から史料への重視の変化は、佐藤昌の造園史に関する著作にもみられる<sup>59</sup>。このほかに円明園に関する史料も多く収集された<sup>60</sup>。しかしこれらの研究は、一次史料よりも二次資料によるところが圧倒的に多いのが実態である。特筆すべきことは、田中淡が秦代から隋代までの古文献から造園に関する史料を抽出し<sup>61</sup>、中国造園研究に関する文献を可能な限り集めた上で目録を編集したことである<sup>62</sup>。そして田中は、中国造園史に関する研究における現状と問題を分析した<sup>63</sup>。庭園構成の意匠については、稲次敏郎が庭園と住居の空間と視覚構成を分析し、日本、中国と韓国における事例の比較を行った<sup>64</sup>。さらに、仙田満らが環境心理学の方法で中国庭園における廊の空間を分析した定量的な調査研究もみられる<sup>65</sup>。

中国における日本造園に関する研究は比較的少ない。その中で、最初のもは童窩の著作におけるいくつかの論述である<sup>66</sup>。それ以外、1980年以前の文献は見つけられなかった。1980年代初頭、日本の研究者が書いた論文が翻訳され、中国の造園雑誌に

54 後藤朝太郎(1934)：満支風景庭園鑑：成美堂，1011pp。ほかに、1910年代から多くの論文が『庭園』などの雑誌に掲載された。

55 岡大路(1943)：支那庭園論：彰國社，285pp

56 小寺駿吉(1929)：中国園林典籍：庭園と風景 11(1)，7

57 田治六郎(1949)：洛陽名園記と金陵諸園記とから見た宋明兩代の庭園：造園雑誌 13(1)，11-16。  
田治六郎(1953)：李漁の庭園論：造園雑誌 14(2)，25-36。田治六郎(1953)：謝肇淛の庭園論：造園雑誌 16(3・4)，16-19

58 杉村勇造(1966)：中国の庭：求龍堂，267pp

59 佐藤昌(1991)：中国造園史(上，中，下)：日本公園緑地協会，481pp，359pp，523pp

60 佐藤昌(1988)：円明園：日本公園緑地協会，583pp

61 田中淡(2003)：中国古代造園史料集成：中央公論美術出版，785pp

62 田中淡(1997)：中國造園史文獻目録：京都大學人文科學研究所付屬東洋學文獻センター，73pp

63 田中淡(1988)：中国造園史研究の現状と諸問題：造園雑誌 51(3)，190-199

64 稲次敏郎(1990)：庭園と住居の《ありやう》と《見せかた・見えかた》：日本・中国・韓国：山海堂，174pp

65 仙田満ら(2001)：中国園林における廊的空間に関する研究：日本建築学会計画系論文集(542)，261-267

66 童窩(1984)：江南園林志：中国建築工業出版社，7-8，44-45

掲載された。田村剛の「日本庭園的歴史」などの三点と「日本庭園概論」の一連の論文は、一般意匠、歴史、構成、設計法などの方面から日本庭園の紹介を行った<sup>67</sup>。1980年代から、日本庭園に関する文献は多くなってきた。しかし歴史研究あるいは史料収集の成果は少なく、庭園文化、案例分析、意匠をテーマとするものが多い。この中、代表的なのは劉庭風の一連の著作と彼が編集した教科書である<sup>68</sup>。ほかに、張十慶は『作庭記』を中国語に翻訳した上で解釈を行っており、これは歴史研究の唯一の好例といえる<sup>69</sup>。

中国と日本ともに比較研究は多くない。中国では、張十慶が『作庭記』の翻訳の上、『作庭記』と『園冶』の比較研究を行った<sup>70</sup>。ほかに、劉庭風などの研究では全般的な比較が行われ、強引な論述が多くみられる<sup>71</sup>。日本では、1939年の『林泉』の満支庭園特輯に掲載された重森三玲の講話で、支那庭園と日本庭園が初めて比較された。ここでは山水画から日本庭園への影響、日本庭園と中国庭園の間の時代的な対応関係が指摘された<sup>72</sup>。近年は、主に張綺曼などの在日研究者による、いくつかの比較研究が掲載された<sup>73</sup>。またすでに触れたように、稲次敏郎は庭園空間と視覚構成の上で比較を行った。

### 3-4. 位置づけ

本研究は中国と日本における造園研究の全体像を把握した上で、中国造園研究における特に借景に関する研究、日本造園における借景の概念変遷に関する研究、及び日本造園と中国造園に関する比較研究が不足している現状に対して、借景を対象として、中国造園と日本造園における借景概念の歴史的流れを整理し、借景庭園における空間の構成を究明し、比較を行うことである。

67 これらの論文は翻訳された田村剛の「日本庭園的歴史」、田村津吉の「日本園林的一般特徴」、進士五十八の「有関日本庭園特性的探討」、清家清の「日本庭園概論」などの論文であり、中国の造園雑誌で掲載された。

68 劉庭風は2000年ごろから、中国の『園林』、『中国園林』、『広東園林』などの造園雑誌で日本庭園の実例の紹介と中日庭園の比較を主題として、数多くの論文を掲載した。そのほかに、『日本園林教程』という大学の教科書を編集した。

69 張十慶（2004）：作庭記譯註与研究：天津大學出版社，130pp

70 張十慶（1993）：作庭記与園冶—中日古代造園專書的比較：中國園林9(1)，19-22

71 劉庭風（2003）：中日古典園林比較：天津大學出版社，169pp。このほかに、曹林娣の『中日古典園林文化比較』が似たような書物として挙げられる。

72 重森三玲（1939）：支那庭園と日本庭園：林泉(55)，165-171

73 張綺曼（1986）：中国・日本住空間の比較研究：中国の庭園と日本の庭について：デザイン学研究(54)，37-42

## 第二章 中国造園における借景という用語及び概念の展開と変遷

## 1. 本章における研究の背景、目的及び方法

前章で既に触れたとおり、「借景」は日本と中国の造園における重要な概念であり、『園冶』に「夫借景，林園之最要者也」<sup>1</sup>と書かれていることが良く引用されるように、中国造園において、景観の設計についての専門用語は少ないなかで、借景は特別な専門用語であるといえる<sup>2</sup>。

一般的に、借景という用語は明代の計成(1582-?)が1634年に出版した『園冶』に初めて現れ、体系的に解説されたとみられてきた<sup>3</sup>。一方で、借景という用語の発端に関しては、宋代の借景の使い方に関心した研究もある<sup>4</sup>。しかし、借景という用語の発端と展開に関して、系統立った研究はまだなされていないのが現状であり不確かなことも少なくない。

さらに、近代の研究には、現在理解されている借景という用語（以下「借景」）の意味に基づいて古典の「借景」の実例と理論を解釈する傾向がある。しかし、言語の意味や用法は常に変化し続けるものといえ、「借景」も例外ではないと考えられる。景という漢字のみの意味と用法も変わりつつあった<sup>5</sup>ことから推測できるように、仮に借景という用語が宋の時代に作られたとしたら、現在までの千年の間で、「借景」は変化してきたと考えることが自然である。ところが近代の「借景」の解説にはこうした言葉の動態性を考慮していないため誤解がある可能性がある。例えば、宋代の李格非(1045-1105)は『洛陽名園記』に当時の「環溪」と「水北胡氏園」の庭園の眺望を描写した<sup>6</sup>。「借景」はこの時代も存在したが、李格非は借景や借という漢字を用

1 陳植(1988): 園冶註釋: 中国建築工業出版社, 247

2 景観の設計という言葉は、地形条件の利用や植栽などの手段で風景を作ることを指し示す。景観の設計についての専門用語が少ない特徴は以下の文献に見られる。張十慶(1988): 《作庭記》与《園冶》—中日古代造園專書的比較: 中国園林 9(1), 19-22

3 中国でも日本でも多くの研究はこの見方をもっている。例えば: 進士五十八(1986): 「借景」に関する研究: 造園雑誌 50(2), 77; Wybe Kuitert 著, 陳曉彤(2008) 譯: 借景—中国《園冶》(1634)理論与 17 世紀日本造園藝術實踐: 中国園林 29(6), 1-6; 薛曉飛(2007): 論中国園林設計“借景”理法: 北京林業大學博士論文, 1

4 現在集められた文献に以下の三つはこの見方をもっている。佐藤昌(1991): 中国造園史: 日本公園緑地協会, 494; 李偉(2008): 中国庭園における「借景」の史的研究—黄庭堅「山谷集」を中心に: 平成 20 年度日本造園学会関西支部大会研究事例発表会要旨, 1-2; 河原武敏(2004): 中国庭園における「景」構成(2)—「景」に関する用語の考察: 平成 16 年度日本庭園学会関西大会研究発表要旨, 1-13

5 Feng Jin(1998): Jing, the concept of scenery in texts on the traditional Chinese garden: an initial exploration: Studies in the History of Gardens & Designed Landscapes 18 (4), 339-361

6 本文は以下である。「樹南有多景樓，以南望，則嵩高少室龍門大穀，層峰疊巘，畢傲奇於前。樹北有風月台，以北望，則隋唐宮闕樓殿，千門萬戶，峇嶢璀璨，延亙十餘裏，凡左太沖十年餘

いていない。ところが、後の陳從周（1918-2000）はこの眺望を「借景」として整理している<sup>7</sup>。

以上のような、現代における「借景」の用語としての整理の不十分さや誤謬の可能性を問題意識として、本章の研究は中国における「借景」の概念と用法についてその変遷を究明することを目的とする。

研究の内容は主に「借景」の概念の考証と借景を成り立たせる構造の分析・考察の二つに分けられる。用語への考証は、古典文献から近代の研究までを対象に用語の概念及びその変化を究明することであり、構造の考察は用語の用法、即ち「借景」と表現された場面の空間の構成を探究することである。

考証の対象は、まず古典の漢語辞典を利用し借と景という漢字の様々な意味を調べた。次に三つの異なる時代（古典漢文<sup>8</sup>、1949年以前の文献、1949年以降）の文献を対象に、可能な限り「借景」に関連がある文献を収集した。1949年前即ち民国の文献については少ないので、庭園・造園に関係すると思われる全ての文献を収集した。収集は主に中国国家図書館の民国文献の検索システムを利用し、田中淡の『中国造園史文献目録』も参考した。1949年以降の文献は比較的多いため、さらに細かく検索を行った（表-1）。分析の対象の中心は「借景」に直接関連する文献とその事例で、こ

表-1 文献の検索方法と結果

	検索の対象	キーワード	結果	参考
語源	「康熙字典」, 「説文解字注」	借, 景		
古典漢文	四庫全書と中国基本古籍庫の電子検索システム	借景	造園に関する58点	
民国の文献	中国国家図書館の民国文献の検索システム	園林, 造園, 庭園	専門書4点, 論文13点, 散文12点	「中国造園史文献目録」
1949年後の文献	中国雑誌全文データ庫	借景	論文15点	
	中国雑誌全文データ庫	園林, 造園, 庭園	1970年前の論文約60点	「中国造園史文献目録」
	中国国家図書館の検索システム	借景	学位論文2点	
	中国国家図書館の検索システム	園林, 造園, 庭園	1980年前の専門書14点	「中国造園史文献目録」

極力而賦者，可瞥目而儘也。」「如其台四望儘百餘裏，而縈伊繚洛乎其間，樹木蒼蔚，煙雲掩映，高樓曲榭，時隱時見，使畫工極思不可圖，而名之曰玩月台。」

7 陳從周（1958）：建築中の借景問題：同濟大學學報 3(1), 44

8 所謂古典文献は主に四庫全書と中国基本古籍庫の検索システムに検索できる文献である。四庫全書は清代の乾隆年間（1736-1795）以前の重要な漢文献の集成であり、中国基本古籍庫は民国時代までの重要な漢文献の新たな集成である。

れを複数の検索システムで現在に至るまで探索し、あわせて民国時代との関連も含めた近代の中国造園と造園史の研究動向も背景として参照した。そのため、中国雑誌全文データ庫と中国国家図書館において借景をキーワードとする文献を全て収集し、結果は15点の専門論文と2点の学位論文である。その上、『中国造園史文献目録』と他の検索手段で中国造園文献の全体像を把握し、1970年代以前の文献を重要な先行研究と位置づけ、この時期の造園に関する論文と専門書を全て収集し、1949年以降現在における近代の造園研究の確立期との関係にも留意しながら分析を行った。

借景を成り立たせる構造の分析・考察は、以上の文献の調査から得られた「借景」に関係する記述を対象に、景観工学的な分析方法を参考にし、具体的な場面から視点場や視対象、視距離などの要素によって構成される空間構造を抽出した。さらに、これらの構造を分類し、借景の構成の歴史的な特徴と変遷を整理した。この他に、空間の身体性の分析方法も用いた。同時に、この歴史の変遷の要因を究明することも目指した。

## 2. 語源の考察

「借」という漢字について、『康熙字典』に「假也，貸也，助也，推奨也。『家語』在貧如客，使其臣如借。『註』言不有其身，如借使也。『前漢·文帝紀』假借納用。又艸履曰不借。『釋名』言賤易有各自蓄之，不假借人也。又設辭。『詩·大雅』借曰未知，亦既抱子。又與藉藉通。又與假通。『後漢·李充傳』無所借借」<sup>9</sup>と書かれている。つまり、借という漢字の意味は主に仮、貸と助という三つがあり、藉と假という漢字と同じように使われる場合もある。「景」という漢字については、『説文解字注』に「日光也，日字各本無。依文選張孟陽七哀詩注訂，火部曰，光者明也。左傳曰，光者遠而自他有耀者也。日月皆外光，而光所在處物皆有陰，光如鏡，故謂之景。車輦箋云，景，明也。後人名陽曰光，名光中之陰曰影，別制一字，異義異音，斯爲過矣。爾雅毛詩皆曰，景大也，其引伸之義也」<sup>10</sup>と書かれている。つまり、主に光，明，影，大などの意味があり、最初は光の意味であった。さらに、『康熙字典』から、境，白，星の名前，風の名前などの他の意味もあることがわかる<sup>11</sup>。現在の中国語で景という漢字は主に風景の意味で使われているが、風景という意味は唐代の中期に光の意味か

9 張玉書（清代）：康熙字典：中華書局香港分局，36

10 段玉裁（清代）：説文解字註，卷七篇上：清嘉慶二十年經韻樓刻本

11 張玉書（清代）：康熙字典：中華書局香港分局，424



ら派生した<sup>12</sup>。したがって、「借景」についても、現在とは異なる意味や文脈で使われていた可能性を考えるべきである。

「借」と「景」の二つの漢字が結び付いて、「借景」が構成されたのは宋代である。調べ得た範囲ではその初めの例は黄庭堅こうていけん（1045-1105）が記録した「借景亭」<sup>13</sup>である。なお南朝梁の王僧儒（466-522）の「武帝祭禹廟文」には「輕壁借景」と書かれているが、こちらの「借景」は実際には「惜景」であり、時間を惜しむ意味である<sup>14</sup>。

古典文献から集めた「借景」を含む記述は、その使われ方の文脈として主に二種類に分けられる。一つは風景や造園に関連して使われるものであり、もう一つは文学の評論に関連するものである。前者の例は黄庭堅が書いた「借景亭」であり、宋代にも多くみられる。後者は明代の後期から始まり、清代によくみられ、現在まで使われていることが確認された。後者の最初の例は明代の胡應麟（1551-1602）の『詩藪』に書かれた「詩流借景立言，惟在聲律之調，興象之合」<sup>15</sup>である。ここでの「借」は利用の意味であり、「景」は景物や光景の意味に解釈すべきと考えられる。このように二つの種類の間で借景という用語の使い方と文脈には違いがあるのに、借景という言葉自体の意味は概ね同様といえる。このことから「借景」は宋代から、用語そのものとしては定式化したものと考えることができる。

### 3. 古典文献における「借景」

#### 3-1. 概要

庭園・造園に関係する「借景」の例は全部で58点抽出された。宋代は11点、元代は3点、明代は19点、清代は25点であったが、この中には重複および文献相互での引用があり、これらを除くと宋代から清代まで26点が確認された（表-2）。なお時代ごとの数には明らかな相違はなかった。これら26点は主に詩歌および散文などの

12 馮晉（1997）：景字意義初探：華中建築 15(4)，103-105

13 黄庭堅（宋代）著，任淵（宋代）註：山谷内集詩註，内集卷十三：清文淵閣四庫全書本

14 「武帝祭禹廟文」に関して，以下の二つの文献に「輕壁借景」と書かれた。歐陽詢（唐代）：藝文類聚，卷三十八禮部上：清文淵閣四庫全書本；嚴可均（清代）：全上古三代秦漢三國六朝文，全梁文卷五十二：民國十九年景清光緒二十年黃岡王氏刻本。それに対して，以下の四つの文献に「輕壁惜景」と書かれた。梅鼎祚（明代）：梁文紀，卷十一：清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本；張溥（明代）：漢魏六朝一百三家集，卷九十二王僧孺集：清文淵閣四庫全書本；秦蕙田（清代）：五禮通考，卷一百十六吉禮一百十六：清文淵閣四庫全書本；張英（清代）：淵鑿類函，卷一百七十一禮儀部十八：清文淵閣四庫全書本。この矛盾したことの原因はまだ明らかではなく，惜という漢字が不意に借に書かれたあるいはこの借という漢字は惜と同じように使われた可能性があると考えられる。

15 胡應麟（明代）：詩藪，外編：四明刻本

表一 古典における造園に関する「借景」

時代	年代	出典	著者	引用され た回数
宋	1110	豫章黄先生文集	黄庭堅	22
宋	1133-1203間	江湖長翁集	陳造	2
宋	1129-1197間	橘洲文集	宝曇	
宋	1205-1217左右	翠微南征録	華岳	1
宋	1227左右	輿地紀勝	王象之	1
元	1270左右	月屋漫稿	黄庚	
明	1300左右	清江文集	貝瓊	3
明	1287-1359間	竹齋集	王冕	3
明	1435-1504間	家藏集	吳寛	
明	1488-1559間	升菴集	楊慎	
明	1521-1593間	徐文長文集	徐渭	
明	1630左右	息齋筆記	吳桂森	
明	1634	園冶	計成	
明	1604-1645間	媚幽閣文娱	鄭元勳	
清	1650-1727間	敬業堂詩集	查慎行	
清	1672前	園行隨筆	范光文	
清	1650左右	勸影堂詞	先著	
清	1611-1680間	閑情偶寄	李漁	
清	1653-1726間	粵西詩文載	汪森, 丁養浩	
清	1661-1722間	竹嘯餘音	王特選	
清	1682-1756間	陶人心語	唐英	
清	1742-1798間	悅親樓詩集	祝德麟	
清	1747-1799間	五百四峰堂詩鈔	黎簡	
清	1764-1849間	兩浙輜軒録	阮元	
清	1784-1847間	抱冲齋詩集	斌良	
清	1792-1869間	楸花齋詩	葉廷琯	

文学作品集であり、専門の造園理論書は明代の計成の『園冶』のみであった。出典文献の著者は『園冶』の計成以外、主に高い社会地位を持つ知識人である<sup>16</sup>。

具体的に「借景」が使用された文章の性格は概ね叙述的文章と論考的文章に分けられる。叙述的なものは具体的な景観を描写する場面に、論考的なものは造園の方法に関連し、叙述と議論をともに使う場合もある。論考的なものについて最も古い例は明代の計成の『園冶』である。他にも、清代の查慎行の「初夏園居十二絶句」に書かれた「亭臺廢後變溝塍，欲置茅齋力未能。大抵爲園多借景，別家高樹挂朱藤」<sup>17</sup>などが例として挙げられる。ここでは借景は庭園における実用的な手法として述べられている。もう一つの例は清代の祝咸叙の「王子統傳招飲園中看花作詩酬之」に書かれた「自古園林須借景，此間山水未全殊」<sup>18</sup>である。以上から、黄庭堅の時代の叙述を主流とした借景から、明代の後期と清代に議論が盛んになった借景にかけての変化は、造園の上の自覚的な意識が生み出された表れの一つと考えられる。このような借景の変遷は中国における造園の歴史の流れとも同じ傾向といえ、明代の後期と清代に造園に関

16 関連がある作家の大部分は科挙に合格した仕人である。黄庭堅は勿論、特に吳寛と楊慎は殿試に首席で合格した人である。それ以外、宝曇は当時の詩僧であり、王冕は一流の画家であり、李漁は当時の有名な戯曲と散文の作家である。計成は例外の一人といえる。

17 查慎行（清代）：敬業堂詩集，卷十三：四部叢刊景清康熙本

18 阮元（清代）：兩浙輜軒録，卷二十九：清嘉慶刻本

する文献は園記のような叙述や描写から造園と鑑賞の両面を含める議論に変わった<sup>19</sup>。

その中でも、黄庭堅や計成、李漁<sup>りぎょ</sup>などの借景の記録は比較的重要だと考えられ、以下詳しく考察する。

### 3-2. 嚆矢としての黄庭堅の「借景亭」

黄庭堅は「借景亭」という漢詩の中で、初めて借景という言葉を書いた。黄は中国の歴史において一流の詩人、書道家、文人として、伝統文化に大きな影響を与えた。黄子耕の『山谷年譜』によると、黄庭堅は宋代の元符三年（1100）当時、四川省の戎州に住み、七月から十一月まで親類を訪問するため青神県に赴いた<sup>20</sup>。そこで「借景亭」と名付けられたところを見物し、以下のような詩を書いた。「青神縣中得兩張，愛民財物唯恐傷。二公身安民乃樂，新葺城頭六月涼。竹鋪不涸吳綾襪，東西開軒陰清樾。當官借景未傷民，恰似鑿池取明月。」<sup>21</sup>同時に、序文には「青神縣尉廳葺城頭舊屋，作借景亭，下瞰史家園，水竹終日寂然，了無人迹，又當大木綠陰之間戲作長句，奉呈信孺明府介卿少府」<sup>22</sup>と書いている。この詩の「借」は借りる、「景」は風景という意味とみなされる。言い換えれば、城壁の上で亭を建築し、場所が高いため隣の庭園が見下ろせるようになり、他人の美しい風景を借り自分の鑑賞の対象としたということである。すなわち、自分がいる亭から近くの他人の庭園を觀賞するということである（図-1）。

ここで注目される点が二つある。一つは、借景という亭名は黄庭堅が創作したものではなく、そこに書かれていたものを見て記録したものである。もう一つは、黄庭堅がこの詩を書いた目的は庭園景観を叙述するあるいは造園の方法を議論するためではなく、「當官借景未傷民」の地方官を褒めるためである。これは黄庭堅の創作の特徴とも一致する。錢鍾書（1910-1998）によると、黄庭堅は作詩に関して議論することが好きであったが<sup>23</sup>、山水庭園への興味は高くないという<sup>24</sup>。そのため、この詩の中の「借景」は黄庭堅が意識して使用したものではないといえることができる。

19 明代後期の「園冶」は勿論中国造園史に唯一の専門書といえる。それ以外は、李漁の「閑情偶寄」、沈復の「浮生六記」と銭泳の「履園叢話」などの造園の上の議論が含まれる作品は明代後期から清代にかけて段々現れてきた。それら以前の造園に関する文献には主な内容は記述や描写だといえる。宋代の李格非の「洛陽名園記」のように、「兼六論」などの断片的な議論と比べると、庭園に関する記述は圧倒的な重心と言って良い。

20 黄子耕（宋代）：山谷年譜，卷二十七：清文淵閣四庫全書本

21 黄庭堅（宋代）著，任淵（宋代）註：山谷内集詩註，内集卷十三：清文淵閣四庫全書本

22 黄庭堅（宋代）：豫章黄先生文集，第六：四部叢刊景宋乾道刊本

23 錢鍾書（2002）：宋詩選註：三聯書店，155-157

24 陶文鵬ら（2004）：靈境詩心—中国古代山水詩史：鳳凰出版社，427

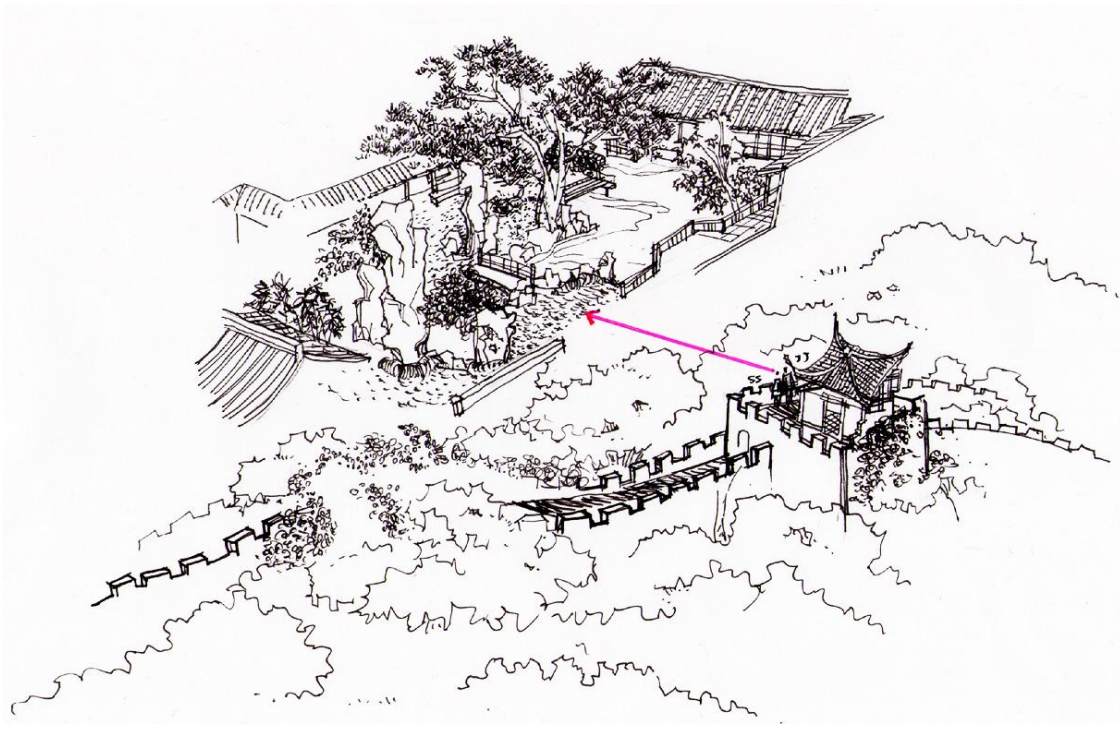


図-1 「借景亭」のイメージ

この詩には典故があり、上の漢詩の中で「借景」は池を掘り月を映すことに喩えられている。『山谷内集詩注』の任淵の解説によるとこの池を掘り、月を映すことは唐代の杜牧(803-852)の「鑿破蒼苔地，偷他一片天。白雲生鏡裏，明月落階前」を引用したとされる<sup>25</sup>。実はこの場面は中国のさらに古い古典庭園にもみられ、例えば、漢代の皇家庭園である上林苑には影娥という池があったことが知られている<sup>26</sup>。

典故を引用することは黄庭堅と黄庭堅の影響を受けた江西詩派の嗜好である<sup>27</sup>。例えば、黄庭堅は杜甫を崇拜し、杜甫の作品の特徴について「老杜作詩，退之作文，無一字無來歷」<sup>28</sup>と解説した。上記の任淵は注釈に詩中で4カ所の典故を挙げたが、「借景」についての典故は挙げていない。このことから借景という合成語がこの「借景亭」から始まったのかどうかは確認できないが、少なくともこの「借景亭」以前、借景という用語が文献上は存在しなかった可能性が高いと考えられる。

黄庭堅以降では、黄庭堅の「借景亭」自体も典故となり、宋代から清代まで他の文献に22回引用されている。特に『韻府群玉』，『駢字類編』という清代までの文人

25 黄庭堅（宋代）著，任淵（宋代）註：山谷内集詩註，内集卷十三：清文淵閣四庫全書本

26 周維權（1990）：中国古典園林史：清華大學出版社，73

27 劉乃昌・楊慶存（1981）：黄山谷的文藝思想和詩歌藝術：齊魯學刊9(6)，60-65

28 黄庭堅（宋代）：豫章黄先生文集，第十九：四部叢刊景宋乾道刊本

によく使われていた辞典書に採録され、影響が大きくなった。宋代に、陸遊と汪元量などの文人がその借景亭を訪問し、黄庭堅の典故を引用し、詩を作った。汪元量(1245-?)の「眉州借景亭」という漢詩の始めには「巍亭借景引壺觴，元祐詩人翰墨香」<sup>29</sup>と書かれた。特に、釋宝曇(1129-1197)は『橘洲文集』において黄庭堅の典故を引用するだけにとどまらず、借景を現実の技法として用い、自分の部屋を「清陰堂即予便齋，深可數室，廣才一室有餘，南依豐氏之隣，隣皆脩竹，因置短屏，開明窗以延致之。」<sup>30</sup>として改造した。即ち、「清陰堂」という狭い部屋は南の竹の庭園に隣接し、壁に窓口を作り、窓口を介して室内から隣の庭園の竹が見られるようにした。

なお日本への「借景」の移入に関しては、『橘洲文集』という中国の歴史では一度途絶えた書が日本には伝えられていることが関わっているとみられる。現在流通している版は元禄十一年(1698)に、宋代の鹹淳元年(1265)の版に基づいて出版されたものである。さらに、黄庭堅の文集も室町時代以前日本に伝えられ、広く流行した<sup>31</sup>とされる。大庭脩の研究によれば『園冶』は1701年に初めに日本へ渡されたとされている<sup>32</sup>が、以上の書は『園冶』より早く借景という言葉が日本に伝えられたといえることができる。

### 3-3. 『園冶』の「借景」と影響

借景という用語は、『園冶』では最後一章のタイトルを除くと、下記の4カ所で使われている。「遠峰偏宜借景，秀色堪餐。」「倘嵌他人之勝，有一綫相通，非爲間絶，借景偏宜；若對鄰氏之花，漏幾分消息，可以招呼，收春無盡。」「構園無格，借景有因。切要四時，何關八宅。」「夫借景，林園之最要者也。」<sup>33</sup>言葉そのものの意味は上記の借景亭と同様であるが、使い方は論考的である。また、「藉景」という用語が1カ所のみ使われている。「樹者，藉也，藉景而成者也。」<sup>34</sup>こちらの藉という漢字は借という漢字と同じように使われているが、利用の意味である。この点からみると、借という漢字の、借りるという意味と利用という意味の区別は「借」と「藉」の区別を通じて実現されている。

『園冶』全文では「借」は19カ所に、「藉」は8カ所に使われた。上記のように、

29 汪元量(宋代)：増訂湖山類稿：中華書局，137

30 釋寶曇(宋代)：橘洲文集，卷十記序銘：日本元禄十一年織田重兵衛刻本

31 芳賀幸四郎(1957)：五山文学の展開とその様相：国語と国文学 34(10)，110-118；内山精也(2006)：万里集九と宋詩：アジア遊学 8(93)，111-121

32 大庭脩(1967)：江戸時代における唐船持渡書の研究：関西大學東西学術研究所，719

33 陳植(1988)：園冶註釋：中国建築工業出版社，51-247

34 同上，85

「借」は借りるという意味であり、「藉」は利用という意味である。「借」に関する最も重要な用例は「借者，園雖別内外，得景則無拘遠近，晴巒聳翠，紺宇凌空，極目所至，俗則屏之，嘉則收之，不分町疃，儘為煙景，斯所謂巧而得躰者也」<sup>35</sup>のように借景を定義する文である。この定義は、『園冶』の「借景」は，風景の距離に関わらず，園内から園外の相応しい風景を生け捕ることであると解釈される（図-2）。

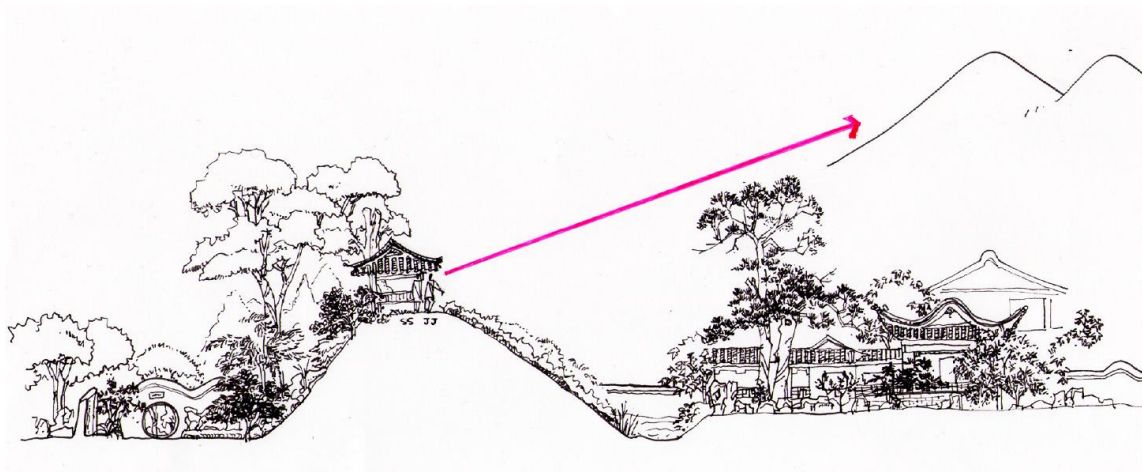


図-2 眺望のイメージ

さらに，最後一章は「借景」のみについて述べているが，論考は少なく殆どが文学的な叙述および典故である。『園冶』に関しての先行研究では，このような叙述特徴は中国伝統的な「以境叙述」<sup>36</sup>であり，4つの部分の風景は四季順で並べられ<sup>37</sup>，すべての叙述は風景から自己まで，さらに行動までの流れで述べられていると指摘されている<sup>38</sup>。特に最後一章の議論の一つの「夫借景，林園之最要者也」は，経典として尊ばれている。しかし，少なくとも現存の庭園と計成時代の庭園文献からは，当時「借景」が明確な述語として重要であったかどうかには疑問が残る<sup>39</sup>。計成が最後一章で「借景」を強調する理由はまだ明らかではないが，少なくとも二つの理由が考えられる。一つは「借景」で従来の認識と異なる斬新な主張を掲げ出す目的があったことが考えられる。もう一つは『園冶』は建築に関する内容が比較的多く，景観の設計に関

35 同上，47-48

36 王魯民・黄向球（2007）：對園冶叙述方式的探討：建築師 5(4)，66-67

37 張家驥（1993）：園冶全釋：山西人民出版社，133-134

38 Stanislaus Fung(2000): Self, scene, and action: the final chapter of Yuan ye: Landscapes of memory and experience, edited by Jan Birksted: Spon Press, 129-132

39 中国に現存する庭園にも，明代の庭園に関する文献にも，日本の借景式のような庭園はなく，『園冶』に強調される借景は園内から園外までの眺望に近いため，このような眺望は一部分の庭園の構成要素の一つに過ぎないとみることができる。

する内容が少ない。これは造園の専門書として弱点でありこれを改善するために、「借景」を強調したことが推測される。

しかしながら『園冶』は、専門著作としては古典の文化での影響は小さかったとみられる。一つの要因は『園冶』は清代の乾隆朝で禁書とされていたことである<sup>40</sup>。ただし、実際は清代に全く読まれていなかったわけではない。日本へ伝えられたのは康熙と雍正朝のときであり<sup>41</sup>、李漁の本にも書かれている<sup>42</sup>。もう一つより重要な要因は、計成が一流の文人、知識人とはみなされていなかったことにある。さらに『園冶』の文学の価値は高いとされてきたが、すべて自作ではなく、他人に潤色してもらった恐れがあることも推測され<sup>43</sup>、『園冶』の評価はさらに慎重に行う必要がある。

### 3-4. 『閑情偶寄』の「借景」と影響

李漁（1611-1680）は1671年に出版された『閑情偶寄』の「取景在借」という部分で「借景」を議論した。「開窗莫妙於借景」<sup>44</sup>のように、李漁が使った「借景」は上記の文献と大体同じ意味であるが、使われている文章の性格は叙述的文章より論考的文章の方が多い。文章全体が「便面」と「尺幅窓」の使い方と技法について述べ、行動心理学のような角度から借景が説明されている。李漁は、「便面」と「尺幅窓」の窓口を意匠し、この窓口を通じて外の風景を鑑賞できるようにした。「便面」は元々扇子の名前の一種であるが、ここでは扇子の形の窓口である。「尺幅」は伝統の絵画の名前の一種であるが、ここでは絵画の構成のような窓口である。「同一物也、同一事也、此窗未設以前、僅作事物觀、一有此窗、則不煩指點、人人俱作圖畫觀矣」<sup>45</sup>のように、李漁の窓口への操作は山水絵画の構成とアイデアに基づいて行われた。窓口は山水画のフレームにあたり、窓口を通して見られる風景は山水画にあたる（図-3）。こちらの借景は前述の宝曇の操作方法と類似しているが、窓口への意匠は宝曇の操作より精巧であるといつてよい。また、「凡置此窗之屋、進歩宜深、使坐客觀山之地去窗稍遠」<sup>46</sup>に説明されているように、窓口を通して外の風景を鑑賞するとき、鑑賞者は窓口まで十分な距離を維持したほうが良いとも述べている。こうしたことから、視覚を含め、観賞者の身体の特性にも関わる媒介と身体性について、李漁はより意識

40 佐藤昌（1991）：中国造園史：日本公園緑地協会，472

41 大庭侑（1967）：江戸時代における唐船持渡書の研究：関西大學東西学術研究所，245-719

42 李漁（清代）著，江巨栄ら（2000）註：閑情偶寄：上海古籍出版社，206

43 計成は「園冶」に自分の息子の「長生」と「長吉」という名前を記述したが、こうした名前は余り文化的ではないとされ、計成の文人としての教養の限度が推測される。

44 李漁（清代）著，江巨栄ら（2000）註：閑情偶寄：上海古籍出版社，193

45 同上，194

46 同上，202

していたものと考えられる。

このほか、李漁の『閑情偶寄』にみられる庭園と住宅についての全体の叙述と具体的な操作は、平凡を非凡に変える新たな芸術方法を示し、当代の芸術にみられる「異化」といったアイデアにも近い。「經營胡必作菟裘，借景爲園足臥游」<sup>47</sup>に説明されるように、借景は質素な材料や状況のなかでも芸術品をつくる手段と態度を作り出した。このように「借」は創造の主体の精神を引き上げる意味に展開しているとみることもできる。

なお李漁は有名な文人、商人であり、当時の一流の作家の一人であったと評価されている。『閑情偶寄』という書も明代と清代の文学代表の小品文の中で一番有名な作品の一つと言って良い。

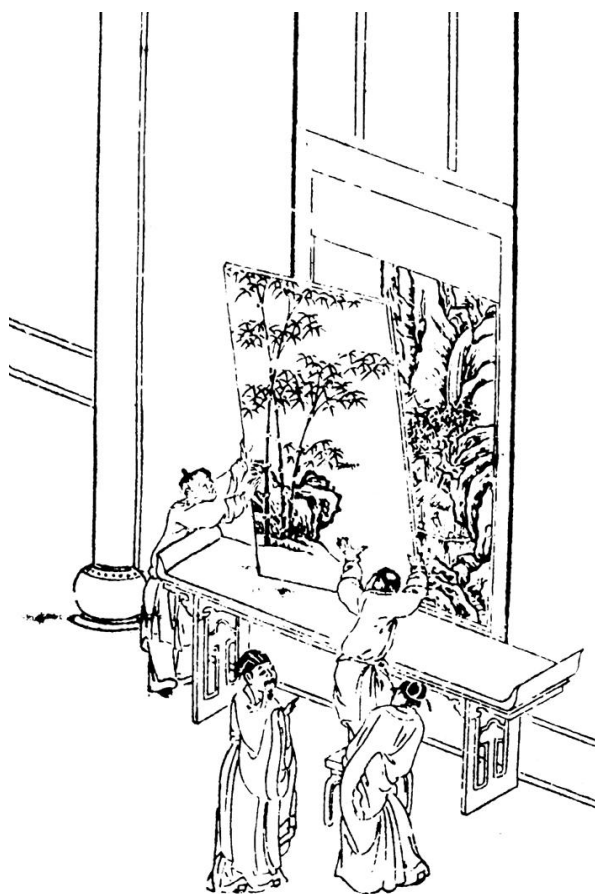


図-3 「尺幅窓」のイメージ（李漁『閑情偶寄』より）

47 斌良（清代）：抱冲齋詩集，卷二十三粉署趨承集一：清光緒五年崇福湖南刻本



#### 4. 近代の研究における「借景」の概要

陳植、童寓、劉敦楨と陳從周は中国庭園の研究者として最も早い時期の重要な学者といえる。中国の近代の庭園の研究は1930年代始まり、陳植と童寓が最初の研究者といえる。嚆矢としての研究成果は1930年に陳植に掲載された「中国造園史略」である。

借景の研究は大凡中国庭園の研究の展開とともに発展してきたといえる。最初に、王璞子（1940）の「中國園林建築」という論文は、「借景」と『園冶』に言及し、白居易の廬山草堂を借景の例に挙げた、李漁の借景の技法を詳細に解析した<sup>48</sup>。以降、多くの研究者の著作で「借景」への言及がなされた。劉敦楨の1957年の「蘇州園林」、陳從周の1958年の「建築中借景問題」、孫筱祥の1962年の「中国伝統園林芸術創作方法的探討」、汪菊淵の1963年の「蘇州明清宅園風格的分析」などはそのような文献である。さらに借景をテーマとする研究は、1980年代から盛んになった<sup>49</sup>。1980年代からの論文をみると、『園冶』と陳從周の研究の影響が大きいことが判る。しかし、重要な成果はおおよそ1960年代までに掲載されている。その中、陳從周の借景の研究は最も早く系統的といえ、中国の造園研究に大きく影響してきたと考えられる。

近代の研究では、一般的に「借景」が『園冶』から始まり『園冶』で系統的に解説されたと指摘されてきた。先の王璞子の「中國園林建築」と陳從周の「建築中の借景問題」からも、そういう傾向が読み取れる。さらに多くの研究において、『園冶』から借景を分析する方法が引用された。よく使われた分析方法は「『園冶』に言及された「遠借」や「近借」、「仰借」、「俯借」などの分類であり、最初の劉敦楨の『蘇州古典園林』にも、1980年代の論文にも、さらに日本での研究においても使われてきた<sup>50</sup>。

陳從周は借景に関して最初の研究者であり、「借景」に対して造園と建築の両面からその重要性を説いた。1956年の論文では、白居易の廬山草堂の眺望、拙政園から北寺塔までの眺めと寄暢園から恵山竜光塔までの眺めなどが借景の例として挙げられ、拙政園の内部の隣接する庭園の間の眺望も借景としてまとめられた<sup>51</sup>。1958年の研究でも、常熟の幾つかの庭園、頤和園と避暑山莊などの庭園から園外までの眺望が借景

48 王璞子（1940）：中國園林建築：中和月刊1(7)，12-35

49 借景をテーマとする15点の専門論文は、陳從周の1958年の「建築中の借景問題」を除いて、すべて1980年代以降のものである。

50 進士五十八（1986）：「借景」に関する研究：造園雑誌50(2)，77-88

51 陳從周（1956）：蘇州園林：同濟大學建築系，16

の例としてまとめられた。さらに、「借景」は庭園だけではなく、寺院、町、陵墓などの広い範囲にまで広げて捉えられた<sup>52</sup>。これ以降の研究で円明園、三海、西湖の幾つかの庭園、個園などの庭園の例が借景に含まれ、借景の範囲も岱廟と七星岩のような自然風景の地域にも広げられた<sup>53</sup>。

「借景」の範囲は陳從周によって大きく広げられてきたと言って良い。陳從周の最初の研究で、借景は園内と園外の間に対景と解説されたが、その後の研究では段々広げられた。「建築中的借景問題」に解説されたように、陳從周の研究と作品の「借景」は単純な眺望に近いといえる。なぜならば、陳從周は建築と庭園の研究者でありながら伝統的な文人であり、陳從周の視点は科学的な研究より、むしろ詩的な文学であるといえるからである<sup>54</sup>。例えば、陳從周は蘇州庭園と昆曲が同じ芸術のコンセプトの上の二つの表現形式だと解析し、詩と絵画の角度から庭園を理解することを強調した<sup>55</sup>。

## 5. 借景の構造

### 5-1. 構造の変遷

古典文献の26点の中のうち、14点は抽象的な表現で具体的な場面は述べられていない。残る12点において、具体的な場面の空間構造は大きく二種類に分けられる。これらの分析に景観工学の手法を適用し、12点の「借景」に関する場面から視点、視対象と媒介などから構成される空間構造をまとめ、さらに視距離、視角度、空間構造の規模などの特徴を分析し、このような空間構造の要素を基準として分類した。その結果得られた基本的な二種類の構造は、一つは自分の居所である高い視点場から、隣の庭園の風景が見える形式である。もう一つは部屋の中あるいは窓の内側で外の風景特に窓の外の植物が見える形式である。

一つ目の構造は「借景亭型」と呼ぶことができ、視点場は必ずしも庭園の中とは限らない。先述の黄庭堅の『豫章黄先生文集』に書かれた「青神縣尉廳葺城頭舊屋，作借景亭，下瞰史家園，水竹終日寂然，了無人迹，又當大木綠陰之間戲作長句，奉呈信孺明府介卿少府」の借景亭は庭園ではなく、高い場所にある建築である。黄庭堅の借

52 陳從周（1958）：建築中的借景問題：同濟大學學報3(1)，45-47

53 こうした例は陳從周の「克苔集」，「書帶集」，「揚州園林」などの作品から纏められた。

54 陳從周の代表的な作品としての「説園」から、こうした庭園に対する誌的な記述が明らかにみられる。

55 陳從周（1996）：中國園林：廣州旅游出版社，240-243

景亭はこの「借景亭型」の典型とみることができ、他に華岳の『翠微南征録』に書いた借景楼<sup>56</sup>と王象之『輿地紀勝』に記録した借景楼<sup>57</sup>などの例も見られる。視対象の主なものは隣の庭園の風景である。「邊池結構非吾地，乞得風光寄此身」<sup>58</sup>と描写されたように、こちらの視対象は隣の「結構」即ち庭園である。「借景亭型」の構造では、借景亭などの視点場は他人の庭園に隣接し、視点が庭園の塀より高いため庭園が俯瞰でき、他人の風景を借りるようになっている。すなわち「借景亭型」の形式は他人の庭園の風景を俯瞰し生け捕ることであり、構造の基本は視点場が高所であり、視対象が隣の庭園であることである。

二つ目の構造は「尺幅窓型」と呼ぶことができ、視点場は部屋の中あるいは窓口の内側であり、視対象は窓口の外側の風景特に築山や植物である。嚆矢としての先述の宝曇の例のように、視点場と視対象の間に視線に影響がある媒介が存在している。この媒介について、李漁は「尺幅窓」として意匠した。同じように、王特選の『竹嘯餘音』にも媒介としての窓口へ操作と飾りが行われた<sup>59</sup>。この構造では、窓口は視線をコントロールする見切り線であり、窓口と視対象の視覚的なコラージュも目指されている。このように「尺幅窓」のモデルは窓口を通して外の風景を生け捕ることであり、構造の中心は媒介としての窓口であるといえる。

このように古典にみる借景の構造は主に「借景亭型」と「尺幅窓型」として整理でき、構造に共通する特徴は短い距離、中小スケールであることが指摘できる。一方で「借景亭型」と「尺幅窓型」とで異なる点は、他人の庭園を高い視点からの俯瞰を中心とする「借景亭型」の概念と比べると、「尺幅窓型」には視角度がゼロに近い場合が多く、構造の中心は見切り線としての窓口であることである。さらに、「借景亭型」の園外から園内までの眺めと違い、「尺幅窓型」では園内あるいは園外の一定の約束がなく、李漁の例のように視点場と視対象の両方も園内にある場合が多く見られる。しかしながら、この二つの構造の多くの場合において、視対象は視点場の近くのものであり、視対象は植物や築山などのスケールが小さいものである。

なお、14点の抽象的な表現の例から具体的な場面や空間構造としてはまとめられないが、一部からは大きくない空間スケールの特徴が読み取れる。例えば、清代の唐英が書いた「片時借景慙過望，農圃漁樵作四隣」<sup>60</sup>はその例の一つといえる。

56 華岳（宋代）：翠微南征録，卷九：四部叢刊三編景舊鈔本

57 王象之（宋代）：輿地紀勝，卷第二十四：清影宋鈔本

58 汪森（清代）：粵西詩文載，詩載卷十六：清文淵閣四庫全書本

59 王特選（清代）：竹嘯餘音：清康熙刻本

60 唐英（清代）：陶人心語，卷三：清乾隆唐寅保刻本

表一3 古典借景の構造

構造	視距離	視点	視対象	規模	角度	媒介	出典	時代
借景亭型	近距離	借景亭	他人庭園	中	俯瞰		黃庭堅「豫章黃先生文集」	宋
	近距離	借景樓	他人花園	中	俯瞰		華岳「翠微南征錄」	宋
	近距離	借景樓	他人庭園	中	俯瞰		王象之「輿地紀勝」	宋
	近距離	借景亭	他人庭園	中	俯瞰		汪森「粵西詩文載」	清
	近距離	借景亭	他人庭園	中	俯瞰		黎簡「五百四峰堂詩鈔」	清
	近距離	屋内	窓外景	小		明窓	宝曇「橋洲文集」	宋
尺幅窓型	近距離		窓外景	小		墻(窓)	吳寬「家藏集」	明
	近距離	屋内	窓外景	小		窓	徐渭「徐文長文集」	明
	近距離		窓外景	中, 小		窓	計成「園冶」	明
	近距離	屋内	窓外景	小		窓	李漁「閑情偶寄」	清
	近距離		窓外景	小		窓	王特選「竹嘯餘音」	清
	遠距離	借景亭	自然景	大			楊慎「升菴集」	明
遠眺型	遠距離		自然景	大		計成「園冶」	明	

ただし二つの例外がある（表-3）。一つは明代の楊慎（1488-1559）が書いた「八村烟水移春檻，九寺雲山借景亭」<sup>61</sup>のように建築からの大きなスケールの眺望である。もう一つは『園冶』における借景である。

『園冶』における借景の描写は大体二つの構造にまとめられる。一つ目は前述の「尺幅窓型」の構造に近く、窓口の内側から外側の風景を鑑賞することといえる。例えば、『園冶』の「借景」という章節に「半窗碧隱蕉桐，環堵翠延蘿薜」<sup>62</sup>とあるのは、窓口を通して芭蕉などの植物を鑑賞する意味である。他に、「相地」という章節に「倘嵌他人之勝有一線相通，非爲間絶，借景偏宜，若對隣氏之花，纔幾分消息，可以招呼，收春無盡」<sup>63</sup>とあるのは、媒介としての窓口には言及されていないが、「有一線相通」と「纔幾分消息」の表現から窓口の存在が示唆される。二つ目の構造は「遠眺型」と呼ぶことができ、園内から遠距離の眺望である。例えば、「園説」の章節の「遠峯偏宜借景，秀色堪餐」と「借景」の章節の「高原極望，遠岫環屏」<sup>64</sup>など多くの描写が見られる。その眺望には視点場と視対象との距離が大きく、山や塔など視対象のスケールが大きい。『園冶』で借景は「遠借」，「近借」，「仰借」，「俯借」などのモデルに分けられ、上述の定義にも「得景則无拘遠近」が指摘されている。しかし、その次に書かれた「晴巒聳翠，紺宇凌空」のように借景の対象は山と寺などの遠景であり、借景の理想的な視覚効果は「煙景」のような大気効果としている。『園冶』において借景として強調されているのは「遠眺型」の構造であるといえる。

近代の庭園と借景の研究においては、借景は「遠眺型」に近いといえる。特に陳從周などの代表的な研究者の研究から、近代の「借景」が『園冶』の借景を手本としていることが判る。『園冶』の借景に「尺幅窓型」と「遠眺型」の構造がある中で、中心は「遠眺型」の構造ということができ、典型的な例としての拙政園から北寺塔までと寄暢園から錫山竜光塔までの眺めのように、当代の研究に纏められた代表的な借景の例は、殆どが「遠眺型」の構造、すなわち園内から園外までの大きなスケールの遠距離の眺望を指すのが特徴といえる<sup>65</sup>。

61 楊慎（明代）：升菴集，卷三十五七言絶句：清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本

62 陳植（1988）：園冶註釋：中国建築工業出版社，243

63 同上，56

64 同上，243

65 近代の様々な研究文献に、以下の16点の現存の庭園には借景の手法があると指摘された。拙政園，滄浪亭，畱園，羨園，曾趙園，謙園，寄暢園，小槃穀，個園，郭莊，西泠印社，豫園，十笏園，可園，頤和園と避暑山莊である。

## 5-2. 「尺幅窓型」の主体自覚と身体性

古典文献の中に、「尺幅窓型」の構造の例は多く、宝曇、徐渭、計成と李漁などの例がある。こうした建築の手段で二つ以上の景観要素を視覚的にコラージュする操作方法は、様々な文学作品の描写にもある。南朝の謝朓（464-499）が「冬日晚郡事隙詩」に書いた「颯颯満池荷、悠悠蔭窓竹」<sup>66</sup>、唐代の白居易（772-846）が「竹窓」に書いた「開窓不糊紙、種竹不依行。意取北檐下、窓与竹相当」<sup>67</sup>などの庭園詩はそうした例である。これらでは「借景」あるいは「借」にはあまり言及していないものの、その操作の方法は借景の「尺幅窓型」のモデルに近いと考えられる。

これらの例には、時代とともに変遷が見られる。この「尺幅窓型」の構造に視対象、視点と両者の間の窓口という三つの要素がある。言い換えるならば、三つの要素は主体、客体、媒介である。謝朓の例は、窓口も視対象も鑑賞の対象であり、意識的な操作があったとみることは難しい。それに対して、白居易の例では、視対象としての竹は人為的に窓口に対峙するように植えられ、客体の操作の意識が明確であるといえる。さらに、先述の宝曇における操作の対象は、視対象としての隣の庭園の竹ではなく、媒介としての窓口であり、このような媒介への意識の強まりを認めることができる。計成の「刹宇隱環窗、仿佛片圖小李」<sup>68</sup>も宝曇の操作に近いと言って良い。実は宝曇がしたことは窓口を開けたことのような簡単な操作でしかなく、目的は視点から視対象が鑑賞できることである。つまり、主体と客体の関連性の達成である。それに対して、李漁の操作には窓口への様々な意匠とコラージュのアイデアがあり、鑑賞者の身体も含まれて鑑賞者自身も鑑賞の視対象になる。言い換えるならば、李漁においては媒介への意識だけではなく、鑑賞者の自覚即ち主体の意識も含まれていると考えられる。このように「尺幅窓型」という借景のモデルには、客体への操作から、客体と主体の関係の達成を経て、媒介への操作までの展開があり、次第に媒介と主体の身体への意識が顕在化してきたものと考えられる。なお現存の中国庭園には、こうした「尺幅窓型」の意匠は多くみられ、借景より対景と框景<sup>69</sup>などの用語で呼ばれている。

## 5-3. 借景と眺望の相違

以上のように、古典文献に使われた借景には、主に「借景亭型」と「尺幅窓型」の

66 謝朓（南北朝）：謝宣城詩集，卷三五言詩：明末毛氏汲古閣景寫宋刻本

67 白居易（唐代）：白氏長慶集，白氏文集卷第十一：四部叢刊景日本翻宋大字本

68 陳植（1988）：園冶註釋：中国建築工業出版社，51

69 「框景」は「尺幅窓型」に相当する用語として現代において使用されるが、この用語の成り立ちについては別途明らかにされる必要がある。

二つの構造がみられ、さらに眺望に近い「遠眺型」が加えられてきたことがわかった。この古典の借景と眺望には違いがあったことが、以下のことからわかる。

「遠眺型」の構造、即ち園内から園外までの遠距離の眺望は、中国庭園の歴史に継続して存在してきた。最初の庭園の一つである晋代の謝靈運（385-433）の謝氏莊園の園外までの眺望は謝靈運の園記によく描写されている。その後、王維（701-761）の網川別荘と白居易の廬山草堂などの景勝地にある庭園にも、洛陽名園の環溪と司馬光（1019-1086）の独樂園などの町にある庭園にも、後の明代と清代の多くの庭園にも、そういう眺望の構成は多く見られる。しかし、これらの庭園についての晋代から清代までの約 1500 年間の 83 点園記などの文献には「借景」は用いられていない<sup>70</sup>。さらに、清代の路徳が「遠眺園」という庭園を記録し、この「遠眺園」は借景ではなく遠眺を園名とした<sup>71</sup>。これらの園記などの作家の大部分は当時の一流の文人であるから、「借景」を認識していたと考えられる。そうすると「借景」を使用しなかったのは偶然ではなく、借景と眺望という用語の使い分けがなされていたためであると考えられることができる。

## 6. 本章のまとめ

黄庭堅の「借景亭」は借景という用語の濫觴であり、宋代からの借景という用語の変遷に多大な影響を与えた。その後の李漁の「尺幅窓」は借景の流れと造園史において重要である。「借景亭型」と「尺幅窓型」の構造は小規模な技法であり、園内から園外までの眺望とは異なるといえる。それに対して、『園冶』の借景は例外である。ただし『園冶』は最初に「借景」を系統的に解説したにもかかわらず、古典の「借景」に与えた影響は弱いと考えられる。

古典の「借景」に、特に「尺幅窓型」の構造に、無意識から意識まで、客体への意識から媒介と主体への意識までの展開が認められる。この変遷は中国庭園の発展の特徴にも合致し、媒介と主体への意識は現存の庭園の意匠にもよく見られる。この歴史

70 これらの全ての園記の本文に借景という用語はまったく見つけられなかった。孫国光の書いた「遊勺園記」の最後に鄭元勛に以下の解説が書かれた。「園不依山依水依古木，全以人力勝，未有可成趣者。其妙在借景，而不在造景。若登高臨深，倚柯憩蔭，無一騁懷，而局于亭前之疊不台樹之花竹，猶魚游沼中唼藻荇以爲樂耳。」然し、「遊勺園記」という園記の本文に園内から園外までの眺望が記述されたが、借景という言葉は使わなかった。鄭元勛の解説から、この借景は園内から園外までの眺望に近いことが判る。鄭元勛と計成の交際から、鄭元勛が使った借景は「園冶」に関連があると推測される。

71 路徳（清代）：檉華館駢體文：清光緒七年解梁刻本。実際に、この遠眺園に高い場所があるが、植物に囲まれて眺望はできない。園名の意味は日本の伝統的な侘びに近いと考えられる。

の発展に伴い、造園の操作の対象は山水と植物などの物から建築と空間などの媒介に変わってきた。言い換えるならば、この展開は「景観」から「観景」への変化ということも可能である。

近代の借景という用語は、『園冶』の借景を基礎とすることが、陳從周などの研究に支配的であった。借景の構成は古典の「借景亭型」と「尺幅窓型」から比較的大規模な「遠眺型」に変わってきた。近代の研究で、借景という用語は庭園から自然風景区と歴史名所などの景勝地などの領域に広げられ、単純な眺望に近づく傾向が見られる。

なお借景という用語の日本への最初の伝来は若干触れたように『園冶』によるものではないと考えられる。そこで、日本造園における借景という用語の発端と変遷について次章において検討を行う。



## 第三章 日本造園における借景という用語及び概念の性格と変遷

## 1. 本章における研究の背景、目的及び方法

第一章で触れたとおり、借景は日本の造園技法においても重要な概念の一つといえる。『園冶』に「夫借景，林園之最要者也」<sup>1</sup>という解説があることは日本でも良く知られ、「借景式」という庭園の類型がなされることも少なくない。借景の研究は、近代以来日本の造園研究の始まりとともに展開し、多くの研究成果が示されてきた。しかしその一方で、たとえば「その概念規定さえもが人それぞれによって異なり、明析になし得ない、いや、山が見えれば何でも借景だとしてしまうような混乱さえきたしている状況である。」<sup>2</sup>との指摘もあるように、借景は術語・用語としてはまだ明確に整理されたものではない。さらに、多くの研究に借景という用語は中国の造園書の『園冶』から取り入れられ、借景という技法は古くから日本の造園に用いられてきたという論述がみられるもの<sup>3</sup>、借景という用語の展開と変遷については体系的な研究はまだなされていないのが現状である。

そこで本章の研究は、日本の造園における借景という用語（「借景」）の使われ方、即ちこの概念がどのように発生、展開、変容したかの解明を研究課題とする。具体的には、本章の研究は日本で使われて来た「借景」は『園冶』という書物とどのような関連があるのか、『園冶』の「借景」の概念とどのような差異があるのか、江戸時代から現代にかけてどのように変化したのか、借景という概念がいわゆる借景庭園とどのように関連して論じられたのかなどについて明らかにすることを目的とする。

研究の方法は、基本的には「借景」に関連する文献を集め、整理し、分析することである。その際に明治期後半から大正期における近代造園学の誕生を大きな転換点と位置づけ、その前後において若干異なる文献調査の方法を採用した。近代造園学誕生以前の概ね明治期以前に相当する時代の文献に関しては、点数が比較的少ないものの、可能な限り「借景」に関わる記載の認められる文献を収集した。近代造園学が現れてくる概ね大正期以降に相当する時代の文献に関しては、主に専門雑誌と専門書から「借景」の定義に関連性をもつ言説と造園空間の実例を集めた。

1 陳植（1988）：園冶註釋：中国建築工業出版社，247

2 本中真（1981）：「平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園」における眺望景観の復元的考察：造園雑誌 44(4)，203-219

3 小野健吉（2004）：日本庭園辞典：岩波書店，134

表-1 調査対象とした文献及び結果

	調査対象	時期	調査方法	結果			
雑誌	造園分野	「庭園」（「庭園と風景」, 「庭園と風光」） 「造園雑誌」（「造園学雑誌」, 「ランドスケープ研究」） 「林泉」	1918年から1944年まで 1925年から現在まで 1935年から1944年まで	借景をキーワードとする全文調査	借景を指摘した論文66点		
	美術分野	「国華」	1889年から1907年まで				
		「日本美術協会報告」	1888年から1910年まで				
		「京都美術協会雑誌」（「京都美術」） 「大日本美術新報」	1899年から1906年まで 1883年から1887年まで				
	園芸分野	「日本園芸会雑誌」（「日本園芸雑誌」） 「園芸之友」	1889年から1914年まで 1905年から1926年まで			借景, 「園治」, 眺望をキーワードとする全文調査	借景, 「園治」あるいは眺望を指摘した論文あるいは記事44点
		ほか	「大日本山林会報告」（「大日本山林会報」） 「建築雑誌」				
	庭園に関連する書籍	一般専門書	「庭造百題」, 「日本の庭園」, 「日本庭園」, 「日本式庭園」, 「借景と坪庭」, 「庭と空間構成の伝統」, 「庭（日本の美術）」, 「庭園論Ⅰ」, 「日本庭園要説」, 「庭の文化史」, 「造園大辞典」, 「庭に生きる」, 「造園修景大事典」, 「最新造園大百科事典」, 「造園用語辞典」, 「日本庭園史新論」, 「間の美学—日本の表現」, 「借景（日本の美術）」, 「日本の庭園と風景」, 「日本庭園辞典」			近代	借景に関する章節, タイトル調査
小沢圭次郎らを中心に		「明治庭園記」, 「園苑源流考」, 「園芸考」（横井時冬）, 「日本名園図譜」（本多錦吉郎）	明治大正	借景, 「園治」, 眺望をキーワードとする全文調査	借景, 「園治」あるいは眺望に関する章節35点		
黒田謙らを中心に		「名家歴訪録」, 「江湖快心録」, 「続江湖快心録」, 「続続江湖快心録」, 「京都名勝記」	明治大正	借景, 「園治」, 眺望をキーワードとする全文調査	眺望に関する13点		
古典籍について	五山文学を中心に	「五山文学新集」, 「帳中香」	鎌倉室町	借景をキーワードとする全文調査	借景に関する1点		
	秋里籬島を中心に	「都林泉名勝図会」, 「都名所図会」, 「拾遺都名所図会」, 「日本風俗名所図会」索引	江戸	借景, 「園治」, 眺望をキーワードとする全文調査	眺望に関する8点		

より具体的には、文献の調査は雑誌、庭園に関連する書籍等および古典籍の三種類を対象とした（表-1）。まず雑誌の調査は大正期に誕生した造園系の雑誌、すなわち「庭園」, 「造園雑誌」と「林泉」等を対象とした。さらに、調査範囲を造園という分野がまだ未確立であった明治期まで広げることを目的として、多くの美術系、園芸系、林学系と建築系の雑誌を対象に<sup>4</sup>、明治期の全体像を把握するためにキーワードを拡げて調査した。この中の「国華」, 「大日本山林会報告」など8点からいくつかの結果を得た。次に庭園に関する書籍については、近代以来現在までの様々な庭園に関する一般専門書を精査し、借景をテーマとする20点の章節を集めた<sup>5</sup>。さらに小沢

4 雑誌に関しては、『庭園』などの造園系雑誌を除いて、主に東京大学の「明治新聞雑誌文庫」を利用し調査を行った。具体的には以下の雑誌を調査対象とした。『大日本山林会報告』, 『建築雑誌』, 『園芸新誌』, 『園芸世界』, 『日本園芸雑誌』, 『園芸之友』, 『日本園芸会雑誌』, 『園芸時報』, 『国華』, 『日本美術』, 『東洋美術』, 『京都美術協会雑誌』, 『京都美術』, 『錦巷雜綴』, 『大日本美術新報』, 『日本美術会報告』

5 20点は以下の専門図書である。『庭造百題』（吉村巖, 1933）, 『日本の庭園』（森蘊, 1957）, 『日本庭園』（吉村巖, 1958）, 『日本式庭園』（上原敬二, 1963）, 『借景と坪庭』（伊藤ていじ, 1964）, 『庭と空間構成の伝統』（堀口捨己, 1965）, 『庭（日本の美術）』（早川正夫, 1967）, 『庭園論Ⅰ』（西沢文隆, 1975）, 『日本庭園要説』（長谷川正海, 1977）, 『庭の文化史』（江山正美, 1978）, 『造園大辞典』（上原敬二, 1978）, 『庭に生きる』（重森三玲, 1978）, 『造園修景大事典』（編集委員会, 1980）, 『最新造園大百科事典』（八田準一, 1984）, 『造園用語辞典』（編集委員会, 1985）, 『日本庭園史新論』（大山平四郎, 1987）, 『間の美学—日本の表現』（末利光, 1991）, 『借景（日本の美術）』（本中真, 1997）, 『日本の庭園と風景』（飛田範夫, 1999）, 『日本庭園辞典』（小野健吉, 2004）

圭次郎と黒田譲を明治大正期における重要な庭園論者と位置づけ、「借景」の使われた状況を明らかにするために、彼らおよびその関係者の著作や論文から、庭園の借景と眺望及び『園冶』に関する記述を収集した<sup>6</sup>。最後に古典籍については、二通りの調査を行った<sup>7</sup>。一つ目は万里集九の作品を中心とする五山文学の文集の調査で、「借景」について1点の例を得た。二つ目は秋里離島の図会の調査であり、結果として庭園の眺望に関するいくつかの例を収集した。

こうした文献調査に基づいて、「借景」の概念の分類とその概念の変遷を整理し、「借景庭園」の事例収集とその典型的な事例について空間構造を分析した。続いて現存する『園冶』および既往研究に基づいて日本における『園冶』の版を調べ、『園冶』の普及の経緯を分析した。さらに文学作品と文芸評論における「借景」の使用例も収集し、造園における「借景」と比較し、この「借景」の使い方と概念を明らかにした。

## 2. 近代以前における借景という用語

多くの既往研究において、「借景」という用語は『園冶』という文献で初めて記載され、中国から『園冶』の伝来とともに、日本に取り入れられたことが指摘されてきた<sup>8</sup>。しかし、この見解を疑わせる証拠がいくつかあることも明らかである。実際に、中国文献で最初に「借景」に言及したのは『園冶』ではなく、黄庭堅の詩集に収録された「借景亭」である<sup>9</sup>。さらに『園冶』の伝来より前に日本に渡った漢籍のうち、黄庭堅の詩集に加えて宋代の宝曇の『橘洲文集』、元代の陰時夫の『韻府群玉』<sup>10</sup>なども「借景」に触れている。そのため、日本における「借景」の起源に関しては再検討する必要があると考えられる。

黄庭堅の詩集は『園冶』より早く日本へ伝えられ、特に京都と鎌倉の禅宗寺院を中心とした五山文学に多大な影響を与えたことが、当時の「東坡（蘇軾の号）、山谷（黄

6 この作業では、小沢圭次郎と黒田譲の著作を中心として横井時冬と本多錦吉郎などの著作も検索した。この時期における庭園論者は他にも挙げられるが、検索の結果小沢と黒田の著作がこの時期において他の論者に比べて早期に出版されていたため、特に重点をおいた。

7 古典籍について、他に二通りの文献調査も実施した。一つはデータベースと索引であり、主に国文学資料館の全文データベースと日本随筆集成索引及び隠元、芭蕉などの様々な中世からの名家の著作や全集の索引を検索した。もう一つは古語辞書、主に江戸古語の辞書を対象に借景などの言葉を探査した。しかし、これら二つの調査からは結果が得られず、古典籍では「借景」は常用された言葉ではないと推測される。

8 伊藤ていじ（1965）：借景と坪庭：淡交社，117

9 周宏俊ら（2011）：中国造園における借景という用語の展開と構成：ランドスケープ研究 74(5)，389-394

10 川瀬一馬（1977）：古辞書概説：雄松堂書店，54



図-1 『帳中香』における借景に関するページ（万里集九『帳中香』より）

庭堅の号），味噌，醤油」<sup>11</sup>という言い方からも窺われる。鎌倉中期から室町末期にいたる五山文学では，当時の五山派学問僧の創作した漢文学が中心であり，杜甫，蘇軾などの数多の中国詩人は崇拜され，様々な抄物が残された。このなか，黄庭堅の詩集に関して惟肖得巖，江西竜派，万里集九などの室町中期以降の代表的五山禅僧の多くは黄庭堅の漢詩を講抄した<sup>12</sup>。

このうち万里集九の『帳中香』という抄物は黄庭堅の漢詩を抄録し，漢文で注釈した講義録である。このなかで万里は「借景亭」という漢詩を詳細に解説し，「借景」について発音と意味の両方について「借字二音，其一子夜切，見毛晃并韻府，去聲禡韻，東坡句云一夜清光天所借，又云白酒已儘誰能借，又草履曰不借，是等也。其一資昔切，見毛晃並韻府，入聲，入聲陌麥，昔左傳曰願借助焉，又高祖紀云從田橫藉助兵入（關），藉與借通用。今借景亭之借，以入聲為優，詳見序並詩中之義也，借用他人之景也」<sup>13</sup>と解釈した（図-1）。ここで「借景亭」の「借景」は「借用他人之景」と解釈され，「借」は「入聲」の発音で借りの意味ではなく助の意味と解説された。確かに，万里集九が参考した『韻府群玉』では「借」という字は「去聲」と「入聲」の発音の異により二つの意味に解釈されたが，この「借景亭」における「借」はその使い方からみて借りの意味に解釈してよいと考えられる<sup>14</sup>。

11 芳賀幸四郎（1957）：五山文学の展開とその様相：国語と国文学 34(10)，110-118

12 同上

13 万里集九（室町）：帳中香，第十三之下：慶長・元和年間刊本

14 借という字に関して以下のように解釈された。「借，子夜切，假也，又助也，漢朱雲少時借客

万里集九（1428-?）は室町中期の五山学問僧であり、五山文学の重要な担い手の一人であった。この『帳中香』という抄物は万里が1485年から1488年までの江戸に滞在した三年間に黄庭堅の漢詩を講義し、整理した講義録である<sup>15</sup>。一般にこのような抄物は写本として寺院に所蔵され、広い範囲に普及しないのが通例である<sup>16</sup>。しかし『帳中香』の場合は、現在室町末期の写本以外では慶長・元和年間の刊本がみられることから、少なくとも江戸初期頃には刊行されていたといえ、一定の範囲に影響力をもったことが窺える。また万里自身も漢詩の作家であり、数多の詩を作り、『梅花無尽蔵』という詩集が現在も知られる。ここに収められた数多くの漢詩に「借景」の記述をみることはできないが、「借」という字は多く使われている。たとえば、卷三の上の部分だけでも「借」は多く出現し、「太平寺里一僧房，借得明朝掛鉢囊」<sup>17</sup>、「洗儘玉堂雲霧腥，蠻材獨借雨聲聽」<sup>18</sup>などの9例が挙げられる<sup>19</sup>。

この他に、いくつかの既往研究に指摘されるように、喜多村信節（1783-1856）の1830年の『嬉遊笑覧』に「借景」に関する記述がみられる。『嬉遊笑覧』には『園冶』の内容の紹介とともに「借景」も言及され、「借とは園は内外を分つといへども、景を得むことは遠近に拘ることなく、晴巒聳へ秀紺宇空を凌ぐ極目俗ならばこれを屏く、是巧にして体を得るものなり。又云借景は園林の最肝要なり、遠借、隣借、仰借、俯借、応時て借る物情逗る所目寄て心期す。其意筆の先にあり描写するが如しなどいへり」のような『園冶』からの訳文が載せられ、これは日本で始めて『園冶』を紹介したものとされている<sup>20</sup>。

以上から、日本古典籍からは二つの「借景」の例を抽出することができた。『園冶』

---

報仇。又貸也，推奨也，亦作藉，又昔韻。」毛居正（宋代）：増修五注禮部韻略，卷四：清文淵閣四庫全書本。「借，子夜切。賈山傳，借秦為諭。假借，假借納用，文帝紀。資借，威德可資借，谷。不借，草履曰不借，釋名言賤易有宜各自高不假借也。前箸借，張良借前箸籌之，詳箸…酒誰借，白酒已盡誰能借，坡。遮道借，恂為潁川守，徵為執金吾，上過潁川，百姓遮道，願借寇恂二年，乃留拜之，本。車不敢借，阮裕曰，吾有車而使人不敢借，何以車為，命焚之，詳車。」陰時夫（元代）：韻府群玉，卷十六去聲：清文淵閣四庫全書本。「借，假也。左，願借助焉。亦作藉，前高紀，從田橫藉助兵入闕。」陰時夫（元代）：韻府群玉，卷十九入聲：清文淵閣四庫全書本。言い換えれば，借という字は二通りがあり，「去聲」の発音の場合は主に借りの意味で，「入聲」の発音の場合は助けの意味で解釈される。「借景亭」の「借」は「當官借景未傷民」のように使われ，対象物の所属や所在の変更を隠し，助けより借りの意味で解釈されるべきと考えられる。

15 内山精也（2006）：万里集九と宋詩：アジア遊学 8(93)，111-121

16 同上

17 万里集九（室町）：梅花無尽蔵，卷三上：玉竹村二（1972）編：五山文学新集第6巻：東京大学出版会，750

18 同上，785

19 万里と同様に五山文学者の琴叔景趣も「酬業叔詩」の「序」に「借」の字を用い，借りの意味で，「借景」の概念に近いといえる。「余就今之南澗借隙地一區，以營堵室，且復借山借水借煙雲，花時借花，雪時借雪，以為我有，我有者咸造物之無儘蔵也。」琴叔景趣（室町）：松蔭吟稿：塙保己一（江戸）編：続群書類従，第13輯：経済雑誌社

20 佐藤昌（1991）：中国造園史：日本公園緑地協会，476-477

の「借景」以前のものとして、『帳中香』における「借景」が唯一の例として確認された。あくまで調査した範囲内で確認されたに過ぎないが、『帳中香』の「借景」は『園冶』の「借景」に先立って持ち込まれた日本における「借景」の濫觴として位置づけることができる。

### 3. 「借景」に関する明治期の様相

#### 3-1. 概要

明治期の文献では、7点において「借景」についての言及が確認された（表-2）。横井時冬の1889年の『園芸考』が最初の例である。このほかに小沢圭次郎、湯本文彦、森鷗外、古宇田実と本多錦吉郎の論文や著作が挙げられ、ほとんどは庭園に関する専門書と論文である。これらの文献に、伏見山荘、天竜寺と西翁寺などのいくつかの庭園が借景が用いられた庭園として紹介された。この中での小沢圭次郎の見解が特に注目されるので次節で詳述する。

またこの時期、「借景」が登場し用いられた状況に対し、「見渡し」などの様々な言葉も使われていた。江戸末期の秋里籬島と明治大正期の黒田譲の著作に数多の庭園は言及され、庭園の眺望に関する記述も多くみられたが、そこに「借景」は一切見出せない。小沢などと比べると、秋里や黒田などは借景という言葉はまだ認識していなかったものと推測される。

表-2 「借景」に言及した明治期以前の文献

発表年	文献名・著者	指摘庭園	参照文献
1489頃	「帳中香」万里集九		「豫章黄先生文集」
1830	「嬉遊笑覧」喜多村信節		「園冶」
1889	「園芸考」横井時冬		「園冶」
1891-1902	「園苑源流考」小沢圭次郎	石田別業、伏見山荘、高山寺、天竜寺、金閣寺、清泉寺、修学院離宮、妙法院、詩仙堂、浴恩園、円乗院	
1894	「原氏園亭遊覧ノ記」小沢圭次郎	品川原氏庭園	
1895	「平安通志」湯本文彦	天竜寺	
1896	「園芸小考」森鷗外		「園冶」
1906	「庭覗き」古宇田実	天竜寺	「平安通志」
1911	「日本名園図譜」本多錦吉郎	西翁院、成就院	

1868年以前において、「借景」は既に前章で検討したように文献に認められるがまだ稀なものといえる<sup>21</sup>。明治期に入っても、「借景」はまだ常用されるには至らずに、「見渡し」などの言葉と混在して用いられていたことが確認できる。このことから、明治期は「借景」の発端期と位置づけることが妥当と思われる。

### 3-2. 小沢圭次郎の「借景」と『園冶』

小沢圭次郎（1842-1932）は日本の近代における造園研究の先覚者という評価が定着している<sup>22</sup>。1890年から1906年にかけて小沢が雑誌『国華』で141回連載した「園苑源流考」の長編論文は、日本における造園研究の最初の傑作といえる。この論文には、概ね時代順に、多くの歴史的庭園の例を骨子として園記と園詩などの膨大な史料が集められ、様々な論述と評論が行われた。さらに庭園の考察だけではなく造園古書などの紹介も含まれる。

この論文に、様々な庭園の眺望、即ち園内から園外への眺めへの言及が多くみられる。引用された数多の園記にも庭園の眺望に関する記述がみられ、これらはすべて「借景」ではなく眺望や遠眺などの言葉が用いられている。この点は中国の園記の状況に似ているといえることができる<sup>23</sup>。また積翠園に関する村瀬之熙の「憑欄楯而窮遠眺、攬萬象於眉睫」<sup>24</sup>、と六義園についての僧大浄の「此ニ憩ヒテ前後ヲ眺望スルニ、庭中ノ思ヒニハアラテ、寂寞タル深山ニ遊フカコトシ、此岳ヨリ西南ニ、芙蓉峰ヲ正面に見ル、則チ此庭中ノ茂林ヨリ、直ニ芙蓉ノ裾マテ續クカコトシ、絶景云フヘキ様ナシ」<sup>25</sup>などにみられるように、視覚における錯覚についての認識の存在を確認することができる。

なお、小沢はそのような庭園の眺望に関して、以下の具体的庭園の眺望を借景との繋がりから論じた。石田別業、伏見山荘、高山寺、天竜寺、金閣寺、清泉寺、修学院離宮、

21 この状況について一つの証拠が見られる。松平定信は「菟裘録」という文章に清代の李漁の『閑情偶寄』を挙げ、『閑情偶寄』からの影響を強調した。この文章にも、『閑情偶寄』の「居室部」と同様に、建築、庭園、装飾などの内容が述べられた。『閑情偶寄』の「居室部」で「借景」は要点として解説された一方で、松平定信の「菟裘録」では「借景」は一切言及されなかった。松平定信は作庭家ではないが、浴恩園の築造を監督するなど造園の素養を持っていたとみられるため、「借景」への言及がないことは「借景」が稀であった当時の状況の反映と考えられる。松平定信（江戸）著、江間政発（1893）編：楽翁公遺書、下巻：八尾書店；李漁（清代）：閑情偶寄：上海古籍出版社

22 小林治人（1995）：酔園小沢圭次郎—伝統庭園庇護・継承に生きた「設景家」：ランドスケープ研究 53(8), 245-248；小坂橋二三男、進士五十八（2010）：小沢圭次郎（酔園）の東京府立園芸学校に於ける造園教育について：ランドスケープ研究 73(5), 786-795

23 陳從周ら編集した『園総』は、晋代から清代までの325点の園記が収集され、中国の古典園記の大集成といえる。このなか、約83点の園記に園内から園外までの眺望は記述されたが、借景という用語は一切言及されなかった。周宏俊ら（2011）：中国造園における借景という用語の展開と構成：ランドスケープ研究 74(5), 389-394

24 小沢圭次郎（1895）：園苑源流考：国華 69号, 404-411

25 小沢圭次郎（1897）：園苑源流考：国華 98号, 33-40

妙法院, 詩仙堂, 浴恩園および円乗院である。小沢は清泉寺に関して、「清泉寺ハ城南伏見ニ在テ遙臨遠眺ノ借景觀望ニ富ミ」<sup>26</sup>と記し、藤原實岑が「眺望風光如有待, 玉欄映對滿山紅」<sup>27</sup>と描写した修学院離宮の「眺望」に関しては、「其眺望敞豁達風光遼遠ニシテ借景ニ富贍ナルコトハ西京名園中ニ冠絶セリ」<sup>28</sup>と述べた。これらの記述から、小沢は「借景」を概ね「眺望」の同義語として用いていたといえることができる。

さらに同論文には「借景」の定義も見いだせる。「凡ソ園治ノ方略ニ於テ, 天工人為ヲ湊合スルニ, 兩様ノ別有リ, 一ハ天景ヲ借リテ, 人工ヲ資クル者トシ, 一ハ人工ヲ加ヘテ, 天景ヲ糝フ者, 前者ハ則チ漢土ニ在リテ, 之ヲ借景ト稱シ, 邦語ニテハ, 之ヲ見越ト云フ, 借景トハ園外ノ景物ヲ借り來リテ, 園中ノ矚望ニ供スルノ謂ナリ, 見越トハ近ク眼前ニ見得ル所ノ景物ヲ超越シテ, 其上端若ク其間隙ヨリ, 遠方ノ景象ヲ眺覽スルコトニテ, 俗ニ見越ノ富士ト云ヒ, 見越ノ松ト云フノ類即チ是ナリ。」<sup>29</sup>そして石田別業を借景の嚆矢と評価した。この定義では、中国から伝来した「借景」は眺望に近い意味として解説されている。これは日本語の「見越」に当たるが、中景が存在するかしないかにより「見越」から区別された。類似のものとして妙法院の景観に関する論述では、妙法院の十二景の中の一部は園内の景色ではないことが指摘され、「所謂借景ト云フ者ニテ園外ノ景物ヲ假借シ來リテ以テ園中賞玩ノ勝概ニ充テシニ過キサルナリ」<sup>30</sup>として「借景」の定義が示された。この定義では借景は園内から園外までの眺望に過ぎないといえることができる。こうして橋俊綱が庭園の地形眺望論に挙げた石田別業は借景の嚆矢と評価された。

小沢は「借景」を園外までの眺望としたが、ただし単なる視覚の範囲にとどめなかった。上述の妙法院の十二景の中では「西山夏雲」のような園外の眺望のほかに、「青田乱蛙」や「蕭寺遠鐘」という情景が描写された<sup>31</sup>。「乱蛙」と「遠鐘」は視覚ではなく聴覚の体験であることが明らかなものの、小沢はこれを借景としている。これは『園治』の中の「蕭寺可以ト鄰, 梵音到耳。遠峰偏宜借景, 秀色堪餐」<sup>32</sup>に当たると考えられる。こうして、借景の範囲は視覚だけではなく聴覚にも及び、比喩的な抽象性を帯びていた。

しかし、小沢の「借景」の具体的な使い方にはある程度の曖昧性がみられる。上述の造園の人工と天景の関係についての記述では、造園の方略は「天景ヲ借リテ, 人工ヲ

26 小沢圭次郎 (1893) : 園苑源流考 : 国華 40 号, 78-80

27 小沢圭次郎 (1894) : 園苑源流考 : 国華 63 号, 283-290

28 小沢圭次郎 (1895) : 園苑源流考 : 国華 66 号, 346-350

29 小沢圭次郎 (1898) : 園苑源流考 : 国華 109 号, 15-20

30 小沢圭次郎 (1895) : 園苑源流考 : 国華 70 号, 430-432

31 同上

32 陳植 (1988) : 園治註釋 : 中国建築工業出版社, 51



資クル者」と「人工ヲ加ヘテ、天景ヲ糝フ者」の二つに分けられ、前者は借景と規定されたのに対して、後者は自然の景勝地を立地に選定し自然の風景を基調とし人為の築造と植栽を加えることと規定された。後者の典型として高山寺の例が挙げられた<sup>33</sup>。一方同時に小沢は、高山寺の立地を選定し建築を配置する意匠について「高山寺ノ七境ハ前記ノ如ク人造ノ泉石ニ非スト雖モ明恵上人ノ襟懷ハ瀟灑出塵ナルヲ以テ敢テ樹ヲ植ヘ石ヲ立テ泉ヲ引キ山ヲ築ク等ノ事ヲ為サス自然ノ谿山好处ニ就テ草庵ヲ點綴シ以テ幽栖ノ所ト為シ化工ノ活畫中ニ遊憩セラレタル者ト謂フヘシ」<sup>34</sup>とも記し、現地の天然風景を、利用する前者の借景の内容に相当するものとして位置づけている。

以上から、小沢が用いた「借景」は厳密に系統的なものではなかったとみられる。このような「借景」の使い方はある程度『園冶』における「借景」に類似したものであることができる。小沢は『園冶』という書物について一切言及していないが、「園冶」という言葉を用いている。たとえば同論文には「建築園冶ノ材料」<sup>35</sup>という言葉が、作庭の意味として使われている。その他、上述の定義に「園冶」ではなく「園治」という言葉も用いられているが、この「治」は「冶」と同じ意味である<sup>36</sup>。また、小沢の別の「公園論」という論文では「雖系人作宛自天開」という『園冶』からの引用文もみられる<sup>37</sup>。これらのことから、小沢は『園冶』という書物の知識があったことはもちろん、借景の用語を『園冶』から取り入れたものと推測される。

さらに、概ね同時代の別の文献においても、そこで使用された「借景」の出处がやはり『園冶』であることが窺える。既にみたように江戸末期の喜多村信節の『嬉遊笑覧』では、『園冶』の内容の一つとして「借景」が紹介されている。明治期の横井時冬の『園芸考』（1889年）と森鷗外の『園芸小考』（1896年）では、『園冶』の紹介とあわせて「借景」が言及されている。したがって、これらの時期に「借景」は『園冶』から取り入れたものと考えられる。

### 3-3. 「見渡し」の伝統

庭園からの眺望ということに関しては「借景」以外にも表現の形式があり、たとえば秋里籬島は天竜寺の嵐山の眺望について、夢窓疎石が「天竜寺方丈の集瑞軒より雪のふりける日あらし山をみわたして雪ふりて花かのみゆるあらし山松と桜ぞさすが

33 小沢圭次郎（1898）：園苑源流考：国華 109号，15-20

34 小沢圭次郎（1892）：園苑源流考：国華 28号，85-88

35 小沢圭次郎（1901）：園苑源流考：国華 132号，228-234

36 上原敬二（1972）：解説園冶：加島書店，3

37 佐藤昌（1991）：中国造園史：日本公園緑地協会，477

かはれる」<sup>38</sup>と書いて、「見渡し」という言葉を用いたことを伝えている。

秋里離島は江戸末期に十点以上の名所図会を出版し、「名所図会に先鞭をつけ、『都名所図会』をはじめ多くの名所図会を著わし、その後の名所地誌に少なからぬ影響を与えた」<sup>39</sup>人物である。この中で『都林泉名勝図会』は京都の庭園に関する図会の代表といえ、多くの庭園について園外の自然と風景まで含めた描写がなされている。その「凡例」には「法則によって遠景を取、庭中は都て其遠景を図し」<sup>40</sup>と記され、「取」即ち「とる」が用いられた。『拾遺都名所図会』では円通寺について、「東の方より比叡山を庭中へ採り」<sup>41</sup>とあり、「取」と類似の「採」即ち「とる」という動詞が用いられた。ことに秋里は「壯観」、「奇観」と「妙境」などの名詞を用いて、清水寺延命院（図-2）、円養院と松花堂などの庭園の眺望を描写し賞賛した<sup>42</sup>。これらの用法から、秋里が庭園の眺望に期待したのはその雄大さと巧妙さであったとみることができる。

次に黒田譲は、明治大正期に京都の美術文学界で活躍し、当時京都の芸術界と交流が



図-2 清水寺延命院（秋里離島『都林泉名勝図会』より）

- 38 秋里離島（江戸）：都林泉名勝図会：竹村俊則（1979）編：日本名所風俗図会 7（京都巻Ⅰ）：角川書店，232
- 39 竹村俊則（1979）編：日本名所風俗図会 7（京都巻Ⅰ）：角川書店，468
- 40 秋里離島（江戸）著，上原敬二（1972）編：都林泉名勝図会：加島書店，4
- 41 秋里離島（江戸）：拾遺都名所図会：竹村俊則（1981）編：日本名所風俗図会 8（京都巻Ⅱ）：角川書店，310
- 42 秋里離島（江戸）著，上原敬二（1972）編：都林泉名勝図会：加島書店，58，107

深く、雑誌の編集や『名家歴訪録』、『江湖快心録』、『京都名勝記』などの数多の著書の出版で知られる<sup>43</sup>。これらの著書に庭園に関する記述が多くみられ、眺望についての記述として、「借景」に代わって「とりこむ」、「とる」、「見渡し」などの言葉が用いられている。無隣庵の東山の眺めに関しては、「然しこう見渡した処で、此庭園の主山といふは喃、此前に青く聳へている東山である」<sup>44</sup>と記され、夢窓と同じ「見渡し」という言葉が用いられている。また円通寺の比叡山の眺望に関しては、「東の方より比叡山を庭中にとり風光絶佳にして」<sup>45</sup>と描写され、秋里が描いた「東の方より比叡山を庭中へ採り」と一致した捉え方であるといえる。

小沢の論文においても、庭園の眺望に関して「借景」と共に「見渡し」が用いられている。伏見殿の眺望について、「又苑外ノ眺望ニ富ミタル形状ハ増鏡ノ文ニ野山ノ景しき色つきたるに伏見山田面に續く宇治の川浪はるくと見わたされたる程いと艶あるをト云ヘルヲ以テ所謂借景ノ佳絶ナリシコトヲ徴スルニ足ルナリ」<sup>46</sup>と記されるなど、「借景」と同様の意味で「見渡し」が用いられている。

このように、庭園の眺望の場면을「見渡し」などにより描く表現が古くから存在し、かつ継承されていたことが推測される。庭園から園外の外景を眺望することは単純な行為といえるが、これに対して「見渡し」などの言葉には比喩の修辞性が与えられていることをみることができた。即ち、庭園の眺望は園内と園外の視線的な結びつきに過ぎないが、庭園も外景も本来のように存在している一方で、「見渡し」「とる」「とりこむ」などの言葉は、外景が向こうから庭園へ移されることを意味していると考えられる。これは「借景」の「借」の修辞性と共通するといえることができると考察される。

#### 4. 近代以降造園研究における借景の概念及び構造

##### 4-1. 造園研究の発端

日本における造園学の発端は大正期であるといえる。しかし、明治期にはすでに分野としての萌芽がみられたといえる。

大学における造園学の嚆矢は東京帝国大学で 20 世紀初頭に開講された造園学講座

43 小野健吉（1987）：対竜山荘庭園における小川治兵衛の作庭手法：造園雑誌 50(5)，13-17

44 黒田譲（1907）：江湖快心録続：山田芸草堂，7

45 黒田譲（1903）：京都名勝記：京都市参事会，123

46 小沢圭次郎（1891）：園苑源流考：国華 26 号，39-46

であった<sup>47</sup>。原熙は大正初年に『園治』から造園という成語を取り入れ、造園学という講座を開設した<sup>48</sup>。その後、東大における造園学教室が設立されたのは1920年ごろである。学会と専門雑誌の発足に関してみれば、日本庭園協会の設立と雑誌『庭園』の発行は1918年ごろのことであり、上原敬二によって1925年に『造園学雑誌』が発行された。

しかし、これに先立って大学ではなく専門学校において庭園についての教育課程がすでに1910年ごろ開設されていた<sup>49</sup>。さらに、いくつかの専門書あるいは専門論文も出現していた。すでに触れた横井時冬の1889年の『園芸考』と小沢圭次郎の1890年から1906年まで掲載された「園苑源流考」はその嚆矢である。明治期と大正初期における数十点の論文は主に美術、園芸、建築類の雑誌に掲載された。この中、田村剛と上原敬二は1916年から『大日本山林会報』に「造園術と林学」、「森林美学と造園術」、「造園の起源と芸術としての造園」などの論文を発表し<sup>50</sup>、これらが日本における近代造園学の胎動であったと考えられる。これらの論文では、造園学を他の林学などの学科から区分し、造園という概念と学科を確立する努力が見られる。また近代造園学は大正期に始まったことがここにも示され、さらに当時の造園学の中心は庭園研究であったということが判る<sup>51</sup>。

田村と上原は造園という概念と他の諸学科の関連を解析し、造園の歴史をまとめ、造園の体系的な内容を拡充し、造園学の諸概念を確立した。ことに様々な概念の規定

47 最初東大で造園の講座が開設された後、京大での講座開設は1920年代であり、高等園芸学校（現千葉大学園芸学部）では1930年代のことである。上原敬二によって東京造園高等学校が設立されたのは1924年である。造園修景大事典委員会（1980）：造園修景大事典5：同朋社、81

48 同上、101

49 小坂橋二三男、進士五十八（2010）：小沢圭次郎（酔園）の東京府立園芸学校に於ける造園教育について：ランドスケープ研究73(5)、786-795

50 当時以下の論文が次々に掲載された。田村剛（1916）：造園術と林学：大日本山林会報403号；上原敬二（1917）：森林美学と造園術：大日本山林会報410号；田村剛（1917）：造園の起源と芸術としての造園：大日本山林会報413号；田村剛（1917）：建築的造園の真髓：大日本山林会報414号；上原敬二（1917）：造園用語集（第一）：大日本山林会報417号；上原敬二（1917）：造園用語集（第一）：大日本山林会報418号；田村剛（1917）：風景美と造園美と人工林の美：大日本山林会報419号；上原敬二（1918）：庭園の字源的解釈：大日本山林会報426号；上原敬二（1918）：造園用語集（第二）：大日本山林会報428号；上原敬二（1918）：造園における花候学の価値：大日本山林会報433号；上原敬二（1919）：造園における樹木の生長：大日本山林会報436号；田村剛（1920）：造園美としての自然と人工：大日本山林会報446号；田村剛（1920）：現代文明を背景として見たる造園：大日本山林会報450号

51 田村剛は以下のように書き、造園学が大正期の前にはまだ成立していなかったということを意味した。「吾国で造園術が学者の注意を惹く様になったのは、極最近の事であるし、未だ学術的研究の見るべきものもないのであるが、兎に角造園術が立派な芸術として認められたのは事実である。」田村剛（1916）：造園術と林学：大日本山林会報403号、1-11。さらに、造園の定義に関して、以下のように述べられた。「造園術は植物、岩石、泉水等自然物と亭榭、橋梁、灯籠、手水鉢等の建設物とを材料として、一定の位置と面積との上に、理想化された風景又は建築的構造を製作する技術である。」田村剛（1916）：造園術と林学：大日本山林会報403号、1-11。この論述から、造園の概念は伝統的な作庭技術を基礎として整理されたことが判る。

が論述の中心に位置付けられた。この中で造園の概念を確立することが最も重要とされ、議論の中心は造園とは何かということであった。その中で借景の概念についても議論され、借景とは何かということも研究課題となった。「借景」を規定することが造園学の発展と軌を一にしていたといえる側面もある。

#### 4-2. 「借景」の定義から見る借景の概念

明治期以来、近代の造園研究の発端と展開とともに、庭園史、造園技法と造園評価などの学術著作が見られるようになり、借景についての専門書や借景を研究テーマとする論文も多く発表されるようになった。この中に、数多の「借景」の定義あるいは定義に準じる概念規定を見ることができる。

すでに触れたように、小沢の借景の論述は日本造園における最初の定義といえる。小沢の「借景」は「眺望」に近く、いわゆる「見越」と異なり、現在借景の要件とされることも多い中景や見切りの存在については主張していない。この中景や見切りの操作に関して、小沢の「園苑源流考」に引用された広瀬政典の「鷗巢記」には「有樹之繞而翳焉者，剔顛刺旁，大者斧之，小者鎌之，整然如剪馬鬣，高與欄腰齊。舟之上下於墨水，其近者，樹身為之遮隔，彼不侑我，而我得姿聞舳艫欸苒之聲，其遠者，彼之見我，不詳我所存，而我之望彼風帆雨篷，以增益我觀，是以在我者無傷，而取彼者可喜者也，巧矣哉」<sup>52</sup>と記されている。この操作によって、中景としての刈込が作られ、園外の近くの景物を隠し、遠景を見せる、眺望の楽しみと庭園のプライバシー性が巧みにバランスした意匠の極みが述べられているが、このような『園冶』に見られない意匠を小沢は「借景」とは呼ばなかった。

小沢の次に、田村の「借景」の定義は1920年の論文「造園美としての自然と人工」に示されており、「借景や背景を利用して園景をこれと調和させるためには、庭園布局から考案さるべきであって、そのために独特の意匠を出すこともある。そんなに著しくない場合でも、通景線を園外に延したり、園外の醜悪なものを隠閉したり、するために、局部の配置を変化せしめることは常である。そして園の境界として生垣や植込を造って区画することなども、多くは反って園外の景を借景とし背景として利用する目的に一致する場合が多いのである」<sup>53</sup>と述べている。この中で「借景」は「背景」と並置され、同じように解説された。借景に関する操作は庭園内部の配置と庭園境界の整備の二つに分けられ、特に庭園布局からの考案が強調された。この論文において、

52 小沢圭次郎（1898）：園苑源流考：国華 111号，52-60

53 田村剛（1920）：造園美としての自然と人工：大日本山林会報 446号，10-17

外景と庭園の調和は田村によって借景の標準として位置づけられ、「調和」が借景を利用する目的として主張された。

これに似た捉え方として、吉村巖は 1933 年の著作に、「借景」は「庭の風景を、丁度画家が風景を描く場合に、取捨選択して、好ましい一つの画面とすると同様に、庭園の風景を構図する場合」<sup>54</sup>と規定され、この論述から取捨選択する見切りの存在の必要性の主張がみられる。さらに、借景は庭の風景の一つの材料であり庭の風景と混然しながら自分の庭を完成することに役立つものと解釈され、眺望から区別された。加えて庭外と庭内の風景の調和と統一は借景の肝要と位置付けられた。吉村はその後の研究でも同様に借景と庭の形式を一体化することを借景の要と規定した<sup>55</sup>。

田村と吉村らが主張した「調和」、「統一」と「一体」などをキーワードとした「調和論」は日本造園研究において特異のものではなく、多くの研究者がそれを借景の要件あるいは判断基準と規定した。下って西沢文隆は 1975 年の『庭園論』において、借景を「最初庭にあった外の景を眺望するということから始まり、景を庭の景の一部として取り入れ、これに調和されさらに発展すると、借りてきた景そのものが庭の主賓となり庭がそれを主軸に展開する」<sup>56</sup>のように三つの段階に分け、借景を眺望から区別し、調和論から主景論までの移行を主張した。その上、「借景の庭は借景と庭を区切る塀ないし額縁があつて借景を美事に浮かび上がらせ庭自身はまったく自己を滅却してただの白砂の面だけになってしまえばよいということになる」<sup>57</sup>と記述し、借りて来た景が庭の主景となることが借景の終極の段階と規定した。この「自己を滅却」の状態、即ち「隠滅論」ともいえる庭園の極小化の状態は、大徳寺本坊方丈のような庭園意匠から導かれたといえることができる。

ところで西沢はこの借景の「主景論」の最初の論者ではない。上原の 1926 年の論文「借景とヴィスタ」は「借景」をテーマとしての最初の論文といえるが、この中で「借景」を、「この意匠は他の域外の地物を宛も自己の造園の一主要構造物として取扱ふ点にあるので、この意味に於て背景とは大に異なるのである」<sup>58</sup>と規定し、借景は庭園の主景になった背景であり普通の背景と異なると定義した。次に、借景を造園の構成技法の欠かせない一つであると強調した。さらに、「万一目的とした借景の地物が消滅した場合にはその庭園、公園は価値を失ふものとなるとの謂である」<sup>59</sup>と書か

54 吉村巖（1933）：庭造百題：明文堂，82

55 吉村巖（1958）：日本庭園：朝倉書店，14

56 西沢文隆（1975）：庭園論 I：相模書房，325

57 同上，327

58 上原敬二（1926）：借景とヴィスタ：造園学雑誌 2(1)，121-127

59 同上

れ、借景は借景の庭園において、庭園の要件さらには命脈として位置づけられた。上原の定義において、借景は背景から区別されるために、厳しく狭義のものに規定された。

上原はその後数回にわたり「借景」について言及した。1963年の『日本式庭園』には上述の借景「主景論」が継続され、借景要素論として借景対象物、自己の設計地と中間の空間という三つの大切な要素が主張された<sup>60</sup>。この借景要素論は伊藤ていじの研究によって推し進められ、屋敷内の庭園、借景の対象、見切り、そして前庭と遠景とをつなぐ要素の四つの要素が規定され、借景は眺望から明確に区分された<sup>61</sup>。上原による1978年の『造園大辞典』の「借景」の項目では、前述の「借景」の定義を「借景」の第一義即ち狭義とし、箱根の旧岩崎家別荘が唯一の理想的借景の庭として挙げられた。併せて「遠景の存在することは自己の庭の風格をよくするものであるがその取景なくとも独立のとして認められるもの」は「借景」の第二義と解説された<sup>62</sup>。

この「主景論」は以降の研究にまで影響を及ぼしている。渡辺康史(1980)は借景庭園について、借景は庭の主景であり借景が消滅すると庭も成立しなくなるのに対して、背景は庭園の付属物との解釈を示し両者を区別した<sup>63</sup>。この借景庭園の定義は上述の上原の「借景」の定義、特に第一義に相当する。しかし上原の定義は「借景」のみに対するもので、渡辺のものは「借景庭園」に対する定義である。一方で渡辺は借景庭園の項目とは別に「借景」の項目を立て、借景は眺望に近いと解説している<sup>64</sup>。このように、借景の概念上の曖昧性と混雑性がみられる。その上この厳密な意味での借景庭園の例はほとんどないという理由で、「借景庭園」は庭園自体の完成の上に借景を取り込むこと、即ち上原の第二義に相当するものとして再規定され、円通寺、正伝寺と慈光院が例として挙げられた<sup>65</sup>。

すでに触れた西沢文隆の「自己を滅却」のように、借景を庭の命脈とみなし庭自体の消滅を意味する「隠滅論」は、借景を広義の眺望から区分し借景という概念を確立するための極端化といえることができる。一方、上述の上原の「借景」の第二義や渡辺康史の借景庭園の現実的な規定は、この厳密化を補完する余地とみることも可能である。進士五十八(1985)は、先人と同じように借景を背景から区別し庭園構成の主対象に規定し、借景の比重が最大の場合即ち借景がもし消滅してしまえば庭の生命も半

60 上原敬二(1963)：日本式庭園：加島書店，108-109

61 伊藤ていじ(1965)：借景と坪庭：淡交社，135-139

62 上原敬二(1978)：造園大辞典：加島書店，389

63 造園修景大事典編集委員会(1980)：造園修景大事典4：同朋社，105

64 同上，105

65 同上，106

減してしまう場合を「本格的な借景庭園」と定義した。「庭は借りてきた景を引き立たせるための前景にすぎぬ、というまで自己を滅却した状態」と「借景が即主景となっていなければならない」と主張し、「遠景の青山を借景とするために、庭園内は白砂を敷くだけにする」ことを典型として挙げた<sup>66</sup>。

このような次第に系統化また極端化する議論に対して、表面的な定義も散見される。「借景といふ、景を借ることである。」<sup>67</sup>「是等は何れも自分の庭を持ち、其背景として、山や森を遠く部分的、添景的に借り入れて居るに過ぎない。」<sup>68</sup>「借景というのは、庭の外の景を借用するという意味である。」<sup>69</sup>このような定義における借景は眺望に近いといえることができる。

このほかには、森蘊と長谷川正海の定義が異色である。森は1957年の『日本庭園』で、借景園を二通りに分けた。一つは敷地が高所にあり、主に刈込を見切りとし彼方の大風景を見晴らすように自分の敷地と結び付けるものであり、これまでに挙げた定義に近いが、もう一つは山岳が押し迫る敷地を前提とし、山岳丘陵の麓に池を掘り山の影を水面に映すもので、美濃永保寺と天竜寺などの例が挙げられ、独特のものといえる<sup>70</sup>。長谷川正海（1977）の研究では、借景は背景と区分され、背景が「敷地外景観と庭との間に何等の隔絶がなく庭園の地続きである場合」と定義されたことに対して、「借景」は「敷地外景観と庭との間に判然たる断絶がある場合」と規定された<sup>71</sup>。こうして、庭と外景の間の視覚的な断絶があるかどうかによって、借景と背景は区別された。しかし、続いて同じ論文の中ではこの広い規定から大幅に厳しい評価へと移り、多くの研究に借景の典型として挙げられる円通寺と正伝寺などは「借景の痛痒を感じない」<sup>72</sup>存在と評価された。なお、森と長谷川の議論を比較すると、借景と背景の相違において、互いに矛盾が見られる。長谷川の定義に基づけば、森が第二の借景としている天竜寺などの庭園では、山は庭園の敷地と連続するため、借景ではなく背景の範疇に落ちることになる。

このような定義や議論の展開は、百花繚乱といえることができる。これに対して、「借景」の定義と概念を根本から立て直すことを試みた研究も現れた。本中真（1981）は「借景」を自然空間と庭園空間の視覚の上の連結したものと解説し、さらにこの二つの空間を相互に異なり互いに独立している空間と規定した。こうして、この二つの空

66 東京農業大学農学部造園学科造園用語辞典編集委員会編（1985）：造園用語辞典：彰国社，233

67 池辺武人（1935）：京都庭園の借景：庭園と風景 17(10)，342-343

68 何英吉（1942）：借景：庭園 24(10)，417

69 江山正美（1978）：庭の文化史：文一総合出版，28

70 森蘊（1957）：日本の庭園：創元社，164-165

71 長谷川正海（1977）：日本庭園要説：白川書院，136

72 同上，140



間の質的な違いが借景の前提と規定された。このため、寝殿造の庭園空間と園外自然空間は同質化であり、寝殿造の庭園の眺望は借景に属していないという結論を出した<sup>73</sup>。借景の概念に関して、本中が注目したのは借景と眺望の相違である。しかし、借景を背景から区分することによって借景の概念を明らかにする議論は以前から既に行われて来たことでもある。また庭園空間と自然空間の質における相違を借景の前提と主張することも初めてではなく既往の「調和論」にもあったといえる。飛田範夫は1999年の『日本庭園と風景』に上原の「借景」の第一義と第二義を引用し、借景と背景の区別の問題を提示した。さらに、飛田は「実際に庭園を見て、それが借景か背景かを判断することは非常に難しい」と指摘し、この借景と背景の区別の問題に対して、「背景の事物を構成要素として取り入れているもので、背景の事物がないとまとまりが悪くなる庭園」を借景庭園と規定した<sup>74</sup>。しかし、背景がないと仮定する定義はすでにいくつかの既往研究の「主景論」に言及され、庭園のまとまりが悪くなることを判断基準にすることにも曖昧性と不確定性があり現実的に判断しにくいと考えられる。

以上のように、近代以降「借景」の規定に関して、「眺望論」、「調和論」と「主景論」、「隠滅論」など、数多くの理論が提案されて来た(表-3)。これらの議論は、先人の結論を継承しながらも、互いに齟齬を生じることも少なくない。初期に小沢が述べたような借景の「眺望論」は『園冶』に解説された借景の概念に当たり、園内から園外までの広義的な眺望に過ぎないが<sup>75</sup>、初期から現在にかけて、「借景」の定義は複雑化されかつ狭められてきた傾向がみられるとあってよい。これらの「調和論」、「主景論」、「隠滅論」のように「借景」を厳しく規定したことは『園冶』の内容には余りみられない。このように様々の定義が徐々に出て来た現状は、「借景」の定義が依然として確定されていないことの表れと考えることもできる。

初期の借景の研究には眺望論があるのに対して、それ以降の研究の骨子は、主に借景を眺望や背景から区分することであったと考えられる。こうした「借景」概念の確立を目指すことは、借景を術語としてその概念と技法について学問的な体系に位置づ

73 本中真(1981):「平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園」における眺望景観の復元的考察:造園雑誌44(4),203-219

74 飛田範夫(1999):日本庭園と風景:学芸出版社,187-189

75 初期の借景の概念と『園冶』の借景の概念の合致は、小沢の定義だけではなく以下の上原の解説にもみられる。「云ふまでもないが其の要素は恒存的のものであって例へば天体、気象等即ち風景となって表はれては雲とか晴嵐とかは造り得ることは出来ずして借景するまでである。」雲と晴嵐などを借景の対象に取り入れたことから、概念規定の曖昧性と主観性をみることが出来る。これは『園冶』に述べられた「因借無由、觸情俱是」の特徴に当たると考えられる。借景の概念について、上原は『園冶』から影響を受けたと推測される。上原敬二(1918):庭園の字源的解釈:大日本山林会報426号,1-19

表一 3 代表的な借景の定義の分類

借景概念	文献名	概要	著者	発表年
眺望論	「園苑源流考」	「借景とは園外の景物を借り来て、園中の矚望の供する」	小沢圭次郎	1898
	「京都庭園の借景」	「借景といふ、景を借ることである」	池辺武人	1935
	「借景」	「是等は何れも自分の庭を持ち、其背景として、山や森を遠く部分的、添景的に借り入れて居るに過ぎない」	何英吉	1942
	「庭の文化史」	借景というのは、庭の外の景を借用するという意味である」	江山正美	1978
調和論	「造園美としての自然と人工」	「借景や背景を利用して園景をこれと調和させるためには、庭園布局から考案さるべき」	田村剛	1920
	「庭造百題」	「庭の風景を、丁度画家が風景を描く場合に、取捨選択して、好ましい一つの画面とすると同様に、庭園の風景を構図する場合」	吉村巖	1933
	「『平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園』における眺望景観の復原的考察」	相互に異なり互いに独立している自然空間と庭園空間の視覚の上の連結したもの	本中真	1981
主景論	「借景とヴィスタ」	「この意匠は他の域外の地物を宛も自己の造園の一主要構造物として取扱ふ点にある」	上原敬二	1926
	「現代和風庭園」	借景は庭園の主景であり庭園の風景の肝要になければならない	重森三玲	1969
	「庭園論」	「借りてきた景そのものが庭の主賓となり庭がそれを主軸に展開する」	西沢文隆	1975
	「造園修景大事典4」	借景は庭の主景であり借景が消滅すると庭も成立しなくなる	渡辺康史	1980
	「日本庭園と風景」	「背景の事物を構成要素として取り入れているもので、背景の事物がないとまとまりが悪くなる庭園」	飛田範夫	1999
隠滅論	「庭園論」	「庭自身はまったく自己を滅却してただの白砂の面だけになってしまえばよいということになる」	西沢文隆	1975
	「造園用語辞典」	庭は借りてきた景を引き立たせるための前景にすぎぬ、というまで自己を滅却した状態」	進士五十八	1985

ける努力であったといえる。しかし、この体系化の進め方自体は、主に研究者の解釈に近い議論であって厳格に科学的なプロセスとは異なる。そのため、現実に借景の概念が複雑になるほど、借景と背景や眺望を区別する論理に綻びがみられることとなる。進士五十八（1986）は借景庭園の景観構造に関する研究において、様々な「借景」の定義を指摘し、その中に自身の1985年の「借景」の定義も併記した。しかし、構造の分析の際には「借景」を「園外景観の眺望を前提にした庭園の全てを借景庭園」<sup>76</sup>と

76 進士五十八（1986）：「借景」に関する研究：造園雑誌 50(2), 77-88

広義に規定した。これは一貫した定義により理論と現実の庭園とを扱うことの困難さの表れではないだろうか。なお、いわゆる「窮極の借景」と「本格的な借景庭園」などは現実の庭園に対して客観的には特定しがたい抽象論といえるので、この言い方に表される借景の「隠滅論」は、学術的な論の展開としてはやや極端なものと位置づけることができる。

#### 4-3. 借景庭園の規定と典型構造

現在様々な庭園が借景あるいは借景庭園として規定されている。また既にみてきたように、現状において研究者による借景庭園の規定はそれぞれ異なる。同じ借景の概念を主張している研究者の間でも、規定された借景の庭園は完全に一致しない。このなかで重森三玲は特異な一人といえる。重森は借景を日本庭園の墮落の表れと批判した。重森の早期の研究において、桂離宮では一切の外景が隠されたことを指摘し、造園家は自分の技術を信じ自然の外景から力を借りる必要はないと主張した<sup>77</sup>。さらに、現実にある借景庭園自身は技術に欠けていると判断し、借景庭園は背景の力に依存し自身の芸術力が足りないという結論にまで達した<sup>78</sup>。借景の価値に対して徹底して否定的な姿勢がみられる。重森の早期の研究では大仙院、竜安寺方丈、無隣庵、大徳寺本坊方丈、松花堂庭園、稲畑氏庭園、居然亭庭園、慈光院などの庭園が借景の庭園として挙げられている<sup>79</sup>。重森の「借景」のはっきりした定義は管見では見いだせないが、借景と背景を区分する際に「あればあってもよく、無ければ無くとも差支えない庭の構成なので、こんな背景は一種の背景というわけです」<sup>80</sup>と指摘し、借景は庭園の主景であり庭園の風景の肝要になければならないという「主景論」の主張の一つともみなせる。続いて、重森はこの概念を基準として、平安期の平等院、鎌倉期の金閣寺と天竜寺、江戸期の大徳寺本坊方丈、正伝寺、円通寺と修学院離宮などの庭園の眺望が借景ではないと判断し、借景庭園は明治大正期の自然主義の発端とともに発展したと断言し、借景の例として無隣庵、対竜山荘、碧雲荘と平安神宮神苑などの明治大正期の東山庭園のみを挙げ<sup>81</sup>、以前の自身の見解を修正した。前述の様々な既往研究に、重森と同じく「主景論」を主張した上原は借景の例として竜安寺方丈、大徳寺方丈、孤篷

77 重森三玲（1931）：日本庭園に於ける塀及び籬の役目：風景と庭園 13(1), 24-28

78 重森三玲（1940）：近代日本庭園に於ける「自然」への理解：林泉 7(73), 36-42

79 重森三玲（1927）：京都名園の芸術的価値：庭園 9(10), 16-19；重森三玲（1931）：私の好きな庭園一つ：風景と庭園 13(2), 24-25；重森三玲（1936）：中井氏居然亭庭園と平井氏靈鷲山荘庭園：林泉 2(21), 257-264；重森三玲（1936）：慈光院の庭園及茶席：林泉 2(23), 319-350

80 重森三玲（1969）：現代和風庭園：誠文堂新光社, 153

81 同上, 152-153

表－４ 借景庭園として高い頻度で指摘された庭園

庭園名	地域	時代	頻度（63点の文献による指摘回数 の百分率）	類型
天竜寺	京都	鎌倉	14	池泉回遊
竜安寺方丈	京都	室町	21	枯山水
大徳寺本坊方丈	京都	江戸初期	37	枯山水
慈光院	奈良		22	枯山水
円通寺	京都		22	枯山水
修学院離宮	京都		16	池泉回遊
成就院	京都		16	池泉観賞
無隣庵	京都	明治大正	17	池泉回遊
芦花浅水荘	滋賀		11	築山山水式

表－５ 典型とする借景庭園

	大徳寺本坊方丈庭園	慈光院庭園	円通寺庭園
時代	江戸初期	江戸初期	江戸初期
流派	臨済宗大徳寺派	臨済宗大徳寺派	臨済宗妙心寺派
庭園様式	平庭枯山水	平庭枯山水	平庭枯山水
建築様式	書院	書院	書院
刈込境界	方形	方形	方形
立地	平地	コンケープ	コンケープ
奥行き	6-8メートル	4メートル	9メートル
眺望距離	7.67キロメートル	12.36キロメートル	5.44キロメートル
眺望方向	東	東	東
主な指摘者	上原敬二，重森三玲ら（主に主景論）	重森三玲，西沢文隆ら（主に主景論）	伊藤ていじ，進士五十八ら（主に隠滅論）

庵，古稀庵，無隣庵，修学院離宮などの庭園を挙げており，重森の結論との相違は明らかである。

このような借景の概念の多様性のなかでは，借景庭園もまたそれに応じて多様というしかないのであろうか。あるいは多様で輪郭の不明な概念の上にも，借景庭園と称される庭園には一定の共通する特徴があるのであろうか。このことを検証するために，まず借景の概念と借景庭園の規定基準の多様性にかかわらず，これらの指摘された庭園をすべて借景の庭園として包括的に捉え，典型的な例を抽出し，その借景の構造を分析することが必要と考えられる。調査対象とした造園史研究に関する文献の中で，1891年から2004年にかけての広い時期の63点の文献から，借景庭園の例の指摘が見出された。この63点の文献から，全部で95箇所の庭園が借景庭園として得られた。このうち10%以上の頻度で指摘されたのは高い順に並べると，大徳寺本坊方丈，慈光院，円通寺，竜安寺方丈，無隣庵，修学院離宮，成就院，天竜寺と芦花浅水荘の9庭園である（表－4）。作庭された時代に関しては，鎌倉期の天竜寺，室町期の竜安寺方丈，明治期の無隣庵と大正期の芦花浅水荘を除いて，すべては江戸初期の庭園である。重森の

分け方によると、大徳寺本坊方丈、慈光院、円通寺と竜安寺方丈は枯山水水平庭であり、無隣庵、修学院離宮と天竜寺は池泉回遊式であり、成就院は池泉鑑賞式であり、芦花浅水荘は築山山水式である。定視式と回遊式の相違からみれば、無隣庵、修学院離宮と天竜寺は回遊式に属し、他はすべて定視式に近いといえる。

この中で、頻度で上位の大徳寺本坊方丈（図-3）、慈光院（図-4）と円通寺（図-5）の三つは典型として挙げられるものと考えられる。三庭園の間にはいくつかの共通点が見られる（表-5）。まず三つは禅宗の寺院である。大徳寺と慈光院の二つは臨済宗大徳寺派であり、慈光院の開山の玉舟和尚はもと大徳寺の禅僧である<sup>82</sup>。円通寺は臨済宗妙心寺派に属している。次に三者は小規模の枯山水定視式庭園といえる。さらに構成要素に関して、伊藤ていじ<sup>83</sup>によると、三者とも庭園、借景の対象、見切り、前庭と遠景とをつなぐ要素の四つの要素が存在している。三者の見切りはすべて刈込である。前庭と遠景とをつなぐ要素は、大徳寺本坊方丈（図-6）と円通寺（図-7）は木

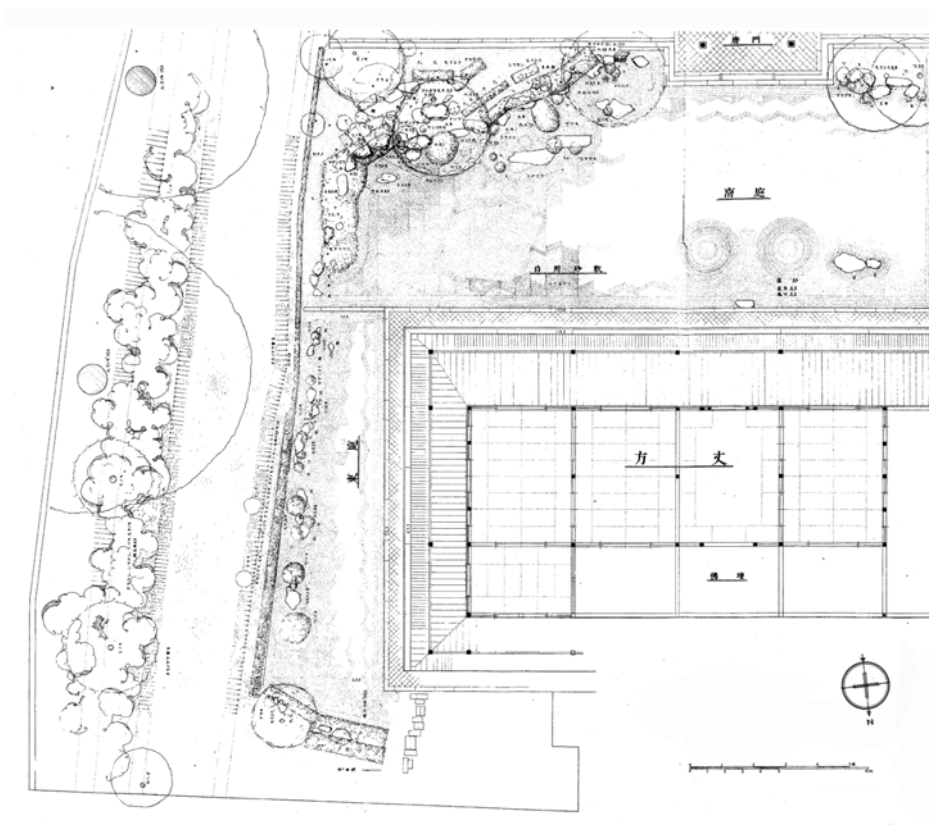
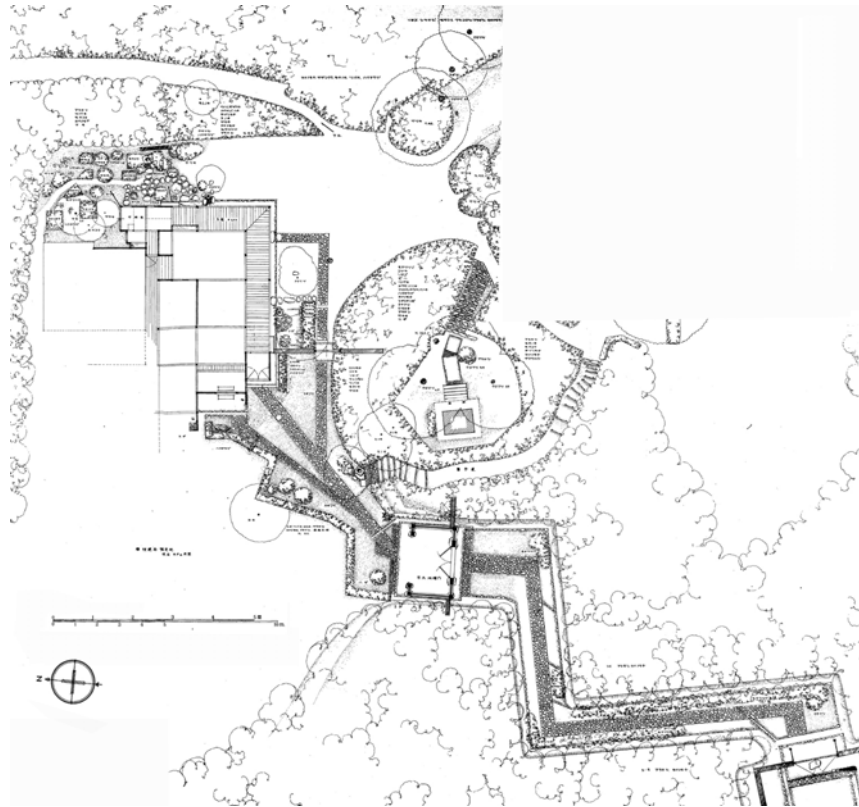


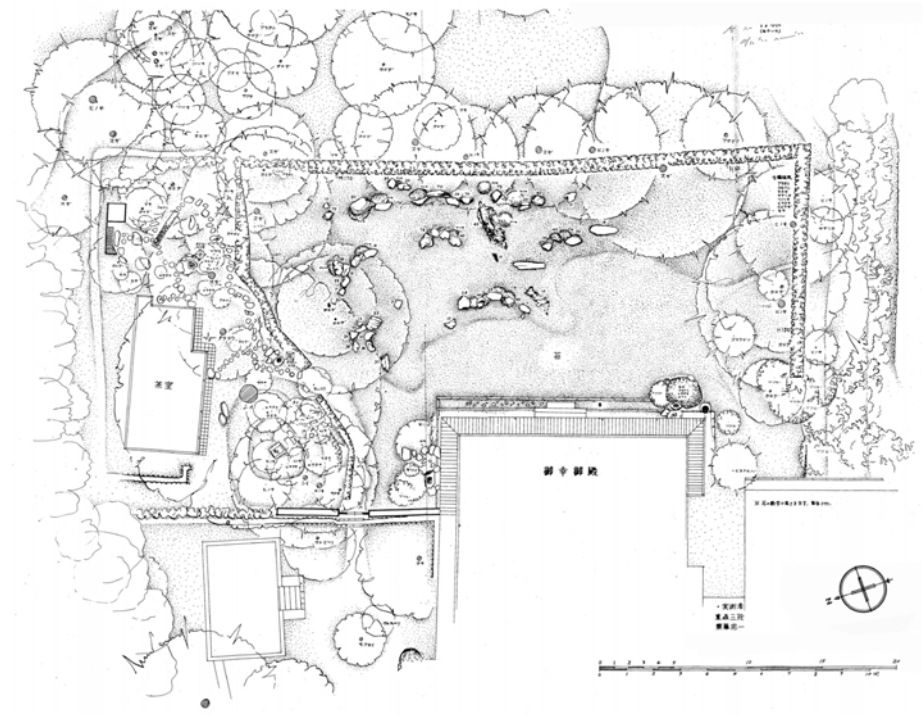
図-3 大徳寺本坊方丈庭園平面図（重森三玲『日本庭園史大系 20』より）

82 重森三玲（1936）：慈光院の庭園及茶席：林泉 2(23)，319-350

83 伊藤ていじは 1964 年の『借景と坪庭』で、借景に関して庭園、借景対象、見切りとつなぐ要素の論調を主張し、大徳寺本坊方丈、慈光院、円通寺と修学院離宮などの様々な庭園についての分析を行った。



図一四 慈光院庭園平面図（重森三玲『日本庭園史大系 15』より）



図一五 圓通寺庭園平面図（重森三玲『日本庭園史大系 15』より）

の幹であり、慈光院（図-8）は柱と軒である。加えて、この三庭園はある程度建築の付属物に近く、スケールは余り大きくない。庭園の眺望方向に対応する空間の奥行きについてみれば、大徳寺本坊方丈の東庭は約 8m、慈光院は約 4m、円通寺は約 9mである<sup>84</sup>。これに対して、眺望対象までのスケールとの関係に着目し、庭園から眺望される山までの距離を指標に検討すると、大徳寺本坊方丈から比叡山までの距離は約 7.67km、慈光院から高峰山までは約 12.36km、円通寺から比叡山までは約 5.44kmであり<sup>85</sup>、庭園の規模に対して眺望の距離はそれぞれ概ね千倍に及ぶスケール比である。さらに庭園自体の空間の特徴をみれば、これらの庭は囲繞性を持ち方向性が明確な空間と考えられる。大徳寺本坊方丈庭園では、西は方丈の建物があり、南と北は塀が置かれ、東は低い刈込といくつかの高い木が配置され、東方へ開放する庭園空間として構成されている。同じように、慈光院と円通寺にも東方へ開放する庭園空間が成立している。以上から、三つの庭園に、庭園の規模の小ささ、眺望距離の大きさ、庭園空間の方向性の三つの特徴としてまとめられ、これを端的に表現すれば「小中見大」即ち「小」の中から「大」を望む意匠として整理することができる。

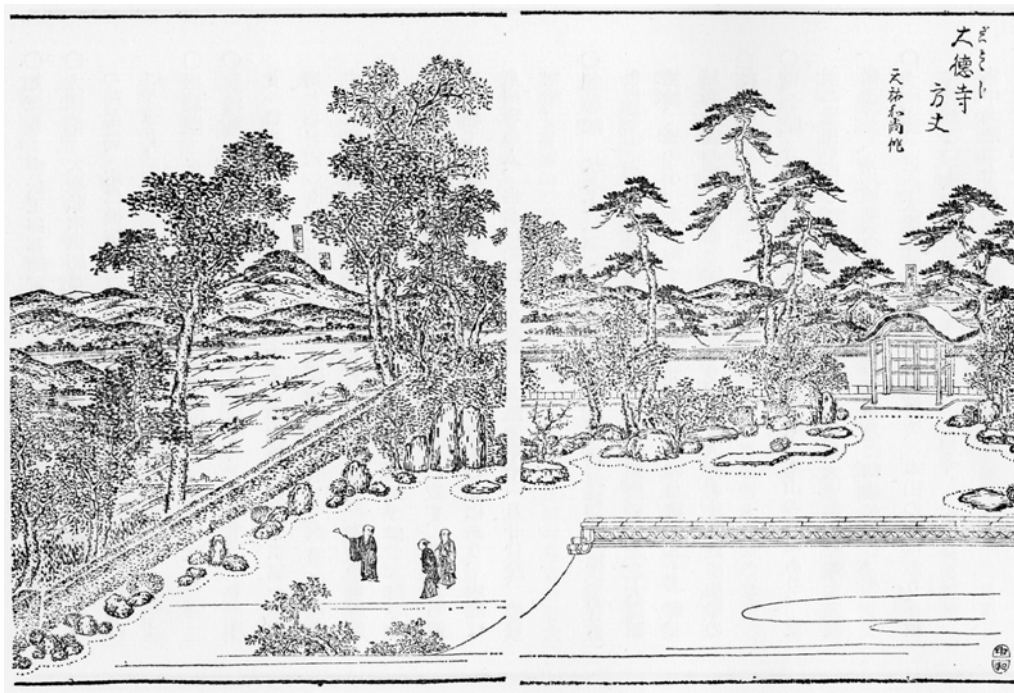


図-6 大徳寺本坊方丈庭園の眺望（秋里籬島『都林泉名勝図会』より）

- 84 庭園の奥行きは以下の文献内の実測平面図を使用して図上計測した。重森三玲（1936）：日本庭園史図鑑，江戸初期一：有光社；重森三玲（1936）：日本庭園史図鑑，江戸初期四：有光社；重森三玲，重森完途（1978）：日本庭園史大系，江戸初期の庭二：社会思想社
- 85 眺望対象までの距離は地形図を使用して図上計測した。国土地理院（1969）：5万分1地形図15，京阪地方：国土地理院



図-7 円通寺庭園の借景



図-8 慈光院庭園の借景

九つの庭園の中で、三庭園のほかの竜安寺方丈、成就院と芦花浅水荘はこの「小中見大」の空間意匠に近いといってよい。ただし円通寺などと比べると、庭園空間の方向性は比較的弱い。特に成就院の場合は庭園空間の圍繞性は高くなく、軒端からの眺望は一定の方向へのものではなく開放的である（図-9）。さらに主な眺望方向に対する庭園の奥行きは約 24m に対して（図-10）、庭園から眺望対象の湯屋谷までの距離は約 100m であり、眺望距離の「大」と庭園の「小」の比率は比較的小さく、この「大」は余り大きくないといってよい。

この「小中見大」の空間意匠に近い概念は既往の庭園研究にも指摘されている。円乗寺について、小沢（1900）は「庭中數畝に不過、杜鵑花なを残り、蓮池は庭に接す、數萬畝一目に了すへし」<sup>86</sup>と指摘し、「數畝の庭」から「數萬畝の景」を一目瞭然すること、即ち「小中見大」に等しい空間意匠として捉えている。

またこの空間意匠と上述の借景の「主景論」や「隠滅論」あるいは「本格的借景庭園」の概念には、いくつかの共通点がみられる。確かに大徳寺本坊方丈庭園のような「小中見大」の庭園空間では、外景が主景であり、庭園自体は小さく配置も単純であり、いわゆる庭園の「隠滅」という概念が比較的理解されやすく、庭園と建築の空間が組み合わせられた眺望の装置が構成されていると考えられる。「眺望論」から「主景論」、「隠滅論」までの展開は、先述のように借景という概念を規定する過程における理想化・極端化の表れであり、借景庭園としてよく良く挙げられる大徳寺本坊方丈庭園と

86 小沢圭次郎（1900）：園苑源流考：国華 125 号，94-96





図-9 成就院庭園の借景（重森三玲『日本庭園史大系 23』より）

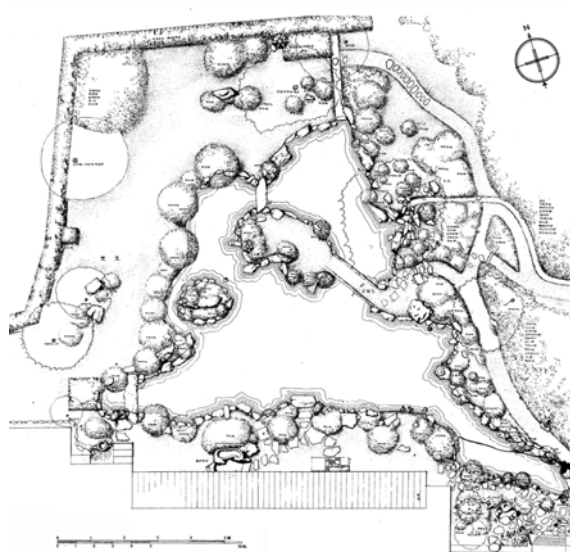


図-10 成就院庭園平面図（重森三玲『日本庭園史大系 23』より）

円通寺などのような庭園はこの理想化の傾向に合致する典型であるといつてよい。さらに、このような「小中見大」の眺望装置の庭園意匠は、日本庭園の借景の特質であると考えられる。芸術におけるいわゆる「小中見大」という概念と表現は中国造園において古くから存在してきたが<sup>87</sup>、このように庭園を眺望装置として設計する手法は、現存する中国庭園にも、古文献にも見付けることができない。特に『園冶』ではこのような意匠はない。そうすると、「主景論」や「隠滅論」などの「借景」の定義は日本庭園の独自の特質を反映した議論の展開であったといったほうが妥当と思われる。

##### 5. 「借景」のプロモーション『園冶』の普及過程について

既に触れたように、小沢の論文には園冶という言葉が作庭や庭園の意味として用いられていたが、一方で中国において園冶という言葉は常用の言葉ではなかったといつてよい<sup>88</sup>。しかし小沢が使った「園冶」は唯一の例ではなく、「明治庭園記」にも「則

87 中国基本古籍庫での検索の結果から、「小中見大」という用語はすでに宋代に存在したが、主に明代と清代に文学評論によって用いられたことが判った。他に、絵画と庭園の評論にも使用された。「小中見大」は諸種の芸術に共通する概念であり、有限の時間あるいは有限の空間に無限を表現する意味であるといふことができる。庭園についての例として、以下の論述は有名である。「若夫亭台樓閣，套室回廊，壘石成山，栽花取勢，又在大中見小，小中見大，虛中有實，實中有虛，或藏或露，或淺或深，不僅在周回曲折四字，又不在地廣石多徒煩工費。」沈復（清代）著，羅宗陽（1981）校点：浮生六記：江西人民出版社，20

88 中国基本古籍庫により「園冶」をキーワードとして検索し、結果として明代と清代と民国の時

表-6 明治期以前における園冶という言葉が確認された文献

発表年	文献名・著者	園冶の意味	掲載文献
1830	「嬉遊笑覧」喜多村信節	書名	
1884	「園冶の間」「園冶の答」	書名, 作庭	「大日本美術新報」
1885	「小説神髓」坪内逍遙	作庭	「日本国語大辞典」
1889	「園芸考」横井時冬	書名	
1889	「詩文の粉飾」内田魯庵	作庭	「日本国語大辞典」
1893	「園冶の話」前田健次郎	書名, 作庭	「日本美術協会報告」
1895	「平安通志」湯本文彦	作庭	
1896	「園芸小考」森鷗外	書名	
1899	「園苑源流考」小沢圭次郎	作庭	
1905	「庭園の話」本多錦吉郎	作庭	「日本美術協会報告」
1910	「支那絵画小史」大村西崖	書名	
1916	「明治庭園記」小沢圭次郎	作庭	

園冶能事畢矣」<sup>89</sup>と書かれている。さらに、「園冶」の使用例は明治期の文献にもいくつか確認され(表-6), たとえば湯本文彦は『平安通志』に天竜寺に関して「本寺の園冶は所謂嵯峨流の蘊奥を究むと謂ふ」<sup>90</sup>と記述し, 本多錦吉郎は「庭園の話」という論文に園冶の言葉を取り上げ, 「此園冶即ち園芸の事…」<sup>91</sup>と解説した。『日本国語大辞典』によれば, 園冶という言葉は二つの解釈がある<sup>92</sup>。中国最古造園書の項目の他に, 庭としてかざったものと庭園の解説も見られる。例として文学者の坪内逍遙(1885)の『小説神髓』と内田魯庵(1889)の『詩文の粉飾』が挙げられ, 二つには「園冶」は「建築」と並列された。たとえば坪内は「所謂有形の美術は絵画, 嵌木, 織(おりもの), 銅器, 建築, 園冶(エンヤ)等をいひ」と記しており, 園冶は有形美術の一種であり庭園の意味であったことがわかる。

このように明治期に園冶という言葉が作庭や庭園の意味として用いられたことは偶然ではなく, 『園冶』の造園書の普及と関連する可能性が高いと推測できる。さらに既に触れたように小沢などの初期研究者は『園冶』から「借景」を取り入れたことが

---

代から9点を得た。この中で造園書のタイトルと重複を除くと, 作庭や庭園の意味で用いられたのは3点しかない。一つは「観省野物, 登臨園冶, 緩歩代車, 無事爲貴, 又其幸四也」である。樊深(明代): (嘉靖)河間府志, 卷二十四人物志: 明嘉靖刻本, 470; もう一つは「三日不得強占官民場泊園冶」である。陳鶴(清代): 明紀, 卷三: 清同治十年江蘇書局刻本, 66; さらには「觀山上怪石如牛馬如熊羆者, 不可殫紀, 園冶間得其一二足稱奇玩, 棄置荒山, 遂無知者可為太息」である。張貞(清代): 杞田集, 卷四: 清康熙春岑閣刻本, 51

89 小沢圭次郎(1915): 明治庭園記: 玉利喜造等(1975)合著: 明治園芸史: 有明書房, 329

90 引用された部分は古宇田実の「庭覗き」という論文に『平安通志』から引用された文章であり, 『平安通志』自体は確認できなかった。古宇田実(1906): 庭覗き(五): 建築雑誌 20(237), 565-580

91 本多錦吉郎(1905): 庭園の話: 日本美術協会報告 168号, 15-26

92 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部(2001)編: 日本国語大辞典, 第二卷: 小学館, 787

判り、「借景」の展開は『園冶』の普及に影響されたと推測できる。したがって、『園冶』という古本の普及、特に明治大正期ごろの『園冶』の流布を明らかにする必要があると考えられる。

中国からの『園冶』の伝来に関しては、大庭侑の唐船持渡書の研究の中に、元禄十四年（1701）に持ち込まれた一部三本の『名園巧式奪天工』、正徳二年（1712）の一部四本の『園冶』と享保二十年（1735）の四部の『奪天工』の三点を見付けることができ<sup>93</sup>、これは橋川時雄の論説にも指摘されている。

次に、日本の図書館検索システムと橋川時雄などの先行研究により、現在残る古版『園冶』として確認できるのは約10点である<sup>94</sup>。このうち刊本は2点のみであり、国立公文書館蔵の『園冶』と橋川氏家蔵の『木経全書』である。国立公文書館蔵のものは中国の研究者によく知られている日本内閣文庫本『園冶』であり、公文書館の解説によればこの『園冶』は明代崇禎七年（1634）の序刊即ち初版である。元々この『園冶』は紅葉山文庫の蔵書であり、後に内閣文庫に移管されたもので、先の正徳二年（1712）に伝来した『園冶』に当たる可能性が高いと考えられる。橋川家蔵の『木経全書』は1970年に『園冶』というタイトルで出版され、橋川の解説も含まれ、日本では近代以降最初の刊行である。『木経全書』の扉には「隆盛堂梓行」と確認できるが（図-11）、中国と日本のどちらで刊行されたかは判断し難い。橋川の考察により『木経全書』は明版の『園冶』と同じ刻版で印刷され<sup>95</sup>、中国からの伝来版と推測できる。

国立公文書館にはもう一つの『園冶』が存在し、橋川も指摘している。この『園冶』は明版の『園冶』と同じように上、中、下の3巻3冊で構成されている。表紙にタイトルとして「園冶」と書かれ、「昌平坂学問所」という印がある。扉には「名園巧式奪天工」がタイトルとして、右側に「松陵計無否先生著」、左側に「華日堂蔵書」と記されている。同様の扉の表記は他に三つの版に見られ、一つは元森鷗外の蔵書が現在東大総合図書館に収蔵され（図-12）、他の二つは現在国立国会図書館に収蔵されている。この四つはすべて写本である。この中、国立公文書館の『園冶』は「昌平坂学問所」の印に表れているように元来は林家（大学頭）の蔵書であり、巻三の末に「寛政七年以近藤重蔵本謄録」と書かれ、1795年に作られた写本である。この四つは同じ

93 大庭侑（1967）：江戸時代における唐船持渡書の研究：関西大学東西学術研究所，245，708，719

94 陳植は『園冶全釈』の序文に1920年代に東京帝国大学の本多静六のところで明版の三巻三冊の『園冶』を見たことを指摘した。しかし、現在の東大の諸図書館・研究室の蔵書からは存在が確認できなかった。ほかに、「涉園陶氏依崇禎本重印」と標示された『園冶』もあり、京都大学と京都工芸繊維大学の附属図書館の蔵書にみられた。この版の『園冶』は陶湘（号涉園）によって明版に基づいて1930年代に刊行され、日本にも流入してきた。

95 橋川時雄（1970）解説：園冶：渡辺書店，34



図-1-1 隆盛堂版『園冶』の扉（橋川時雄『園冶』より）

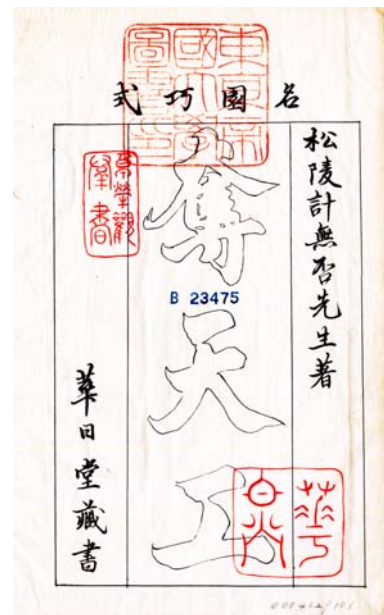


図-1-2 華日堂版『園冶』の扉（東京大学 鷗外文庫に収蔵された『園冶』より）

版即ち「華日堂版」であり、国会図書館所蔵の1巻のみの残本以外の三つは3巻が全て揃っている。なお、三つの全本には同じように、巻三の「借景」の章節の末のページに数箇所文字が抜け落ちたところがあり、完全な版と比べて<sup>96</sup>、右から四行目に二番目の「月」、三番目の「書」と四番目の「窗」の一部分と、五行目に四番目の「過」、五番目の「剡」、六番目の「曲」と七番目の「掃」の一部分が欠けている。このほか国会図書館に「華日堂藏書」が書かれた扉のページがない3巻3冊の『園冶』があり、巻三の「借景」の章節の末のページも同じ状況である。さらに、京都大学図書館には3巻3冊の『園冶』が保存されている。この表紙には「玉池仙館本園冶一名奪天工」と書かれ、扉のページはなく、巻三の「借景」の章節の末のページも同じように欠けている（図-13）。これらのことから、上記の6点の写本は同じ原本から写されたか、あるいは相互に抄され、原本の巻三の「借景」に関する章節の末のページに欠落が生じたと推測できる。つまりこの6点の写本は華日堂刊本の版と同じものといえるが、この華日堂は中国清代の刊行所であり<sup>97</sup>、この版は中国から伝来したものであると考えられる。

このように10点中8点の内訳は、約明代初版、隆盛堂版と華日堂版の三つの版があ

96 橋川の『園冶』を完全な版として比較の基準に使用した。

97 中国国家図書館の検索システムで「華日堂」をキーワードとして検索した結果は1点を得た。清代の伍涵芬が書いた『偶詠草續集』は、康熙四十年に華日堂において刊行されたことが記録されている。この『偶詠草續集』は「四庫全書存目叢書」に収集された。他に、同じ著者の『読書樂趣』という本は民間の古籍競売に見られ、康熙三十七年華日堂刻本と標示された。

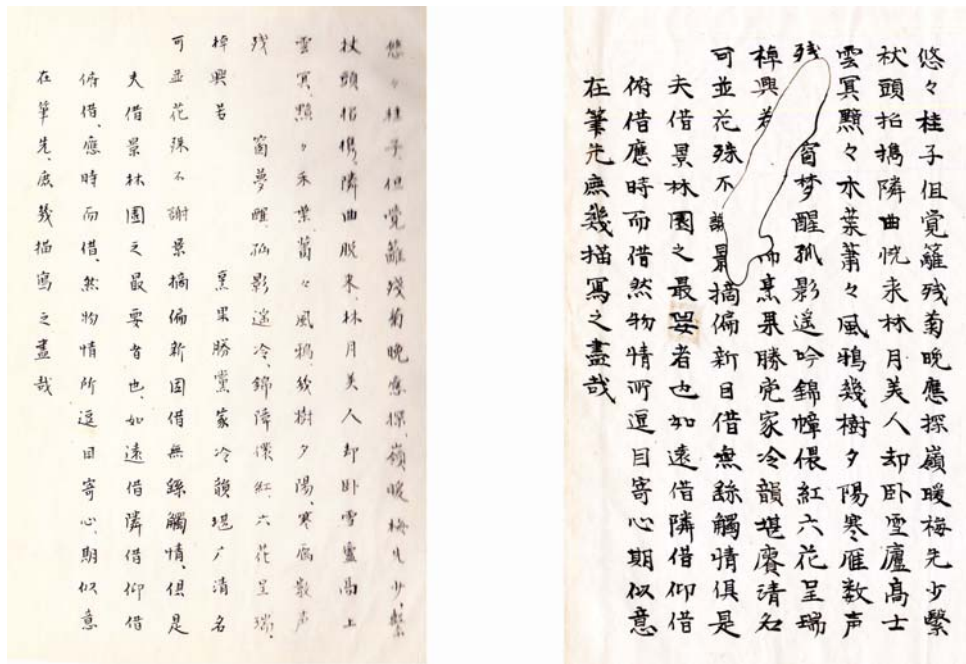


図-13 借景のページにおける欠けた様子（左は京都大学に所蔵された玉池仙館本『園冶』より、右は東京大学鷗外文庫に収蔵された『園冶』より）

り、すべて中国からの伝来版である（表-7）。ほかの2点は残本であるから、具体的版を確認し難いものの、第2巻の図を分析すると、華日堂版を基準とした写本である可能性が高いと考えられる。そのため、江戸時代に『園冶』が日本において刊行されたことはなく、写本の形式で伝わったと推測できる。したがって普及の範囲はごく限られていたと考えられる。

10点の中に、現在公共図書館に保存されているのは6点であり、国立公文書館に2点と国立国会図書館に4点保存されている。これらの公開時間は異なっている。国立公文書館に収蔵された明版の『園冶』を元来保存していた紅葉山文庫は江戸時代の図書館の一種といえる。紅葉山文庫は江戸初期から発端した。将軍の利用が第一義であり、申請に応じて幕府諸機関やそれに関係する学者・幕臣および尾張藩・加賀藩なども利用できた<sup>98</sup>。明治維新以降、紅葉山文庫の蔵書は太政官文庫から内閣文庫に引き継がれた。国立公文書館に収蔵された華日堂版の『園冶』は元来昌平坂学問所の蔵書であった。昌平坂学問所は寛政年間に始まり、林羅山及びそれ以降の林家が大学頭として主宰していたが、将軍に仕える武士のための学校であり、藩士などの外来人にも公開された<sup>99</sup>。この昌平坂学問所の蔵書と上述の紅葉山文庫が内閣文庫の根幹である

98 国史大辞典編集委員会（1992）編：国史大辞典，第十三巻：吉川弘文館，850

99 国史大辞典編集委員会（1986）編：国史大辞典，第七巻：吉川弘文館，608-610

表一七 日本における『園冶』古版の所在

標題（表紙）	標題（扉）	写本・刊本	巻	版	元所在	所在	収蔵時期
園冶	無	刊本	3巻3冊	明崇禎七年 (1634) 序刊	紅葉山文庫	国立公文書館	江戸末
不明	名園巧式木 経全書	刊本	3巻3冊	隆盛堂版	不明	橋川時雄	
園冶	名園巧式奪 天工	写本, 寛政七年以 近藤重蔵本謄録	3巻3冊	華日堂版	昌平坂学問所 (林家大学頭)	国立公文書館	江戸末
無	名園巧式奪 天工	写本, 江戸末明治 初	3巻1冊	華日堂版	森鷗外	東京大学	大正15年
奪天工	名園巧式奪 天工	写本, 江戸	3巻3冊	華日堂版	宮川文庫	国会図書館	明治28年
園冶	名園巧式奪 天工	写本, 江戸	1巻1冊 (第1巻)	華日堂版	白井氏蔵書	国会図書館	昭和15年
園冶	無	写本, 江戸	3巻3冊	華日堂版	不明	国会図書館	明治38年
園冶一名奪天 工玉池仙館本	無	写本	3巻3冊	華日堂版	不明	京都大学	昭和39年
園冶	無	写本, 江戸	2巻1冊 (第1、2 巻の一部分)	不明	不明	国会図書館	昭和17年
奪天工	無	写本	1巻1冊 (第2巻)	不明	不明	関西大学	不明

といえる。明治維新以後、昌平坂学問所の蔵書は複雑に変遷し、1872年から「書籍館」で一般の閲覧は許可された。この書籍館は日本最初の官立公開図書館とされる<sup>100</sup>。紅葉山文庫の蔵書は宮城内の旧書庫に保存されたままであったが、1884年に内閣文庫（1885年12月以前の名称は太政官文庫であった）の所管になった<sup>101</sup>。内閣文庫は1884年に設立され、本来諸官庁の参考図書館であり諸官庁のみに開放されていたが、1907年から一般にも部分的に開放された<sup>102</sup>。国立国会図書館に見られる4点はすべて帝国図書館時代に購入されたものである。図書館の印により、4点が購入された年はそれぞれ1895年、1905年、1940年と1942年である。この中の一つには「宮川文庫」、もう一つには「白井氏蔵書」の印が見られ、購入以前は私人の蔵書であったと推測される。

江戸期に『園冶』は写本の形式で伝えられ、紅葉山文庫のような特定の対象に公開された図書館にも保存されたが、数も限られており公開された範囲も一定の階層に限られていたことから普及の範囲は余り広くないと考えられる。1872年に書籍館の公開によって、『園冶』という本は初めて一般の眼に触れるようになり、近代化以来の公共図書館の発展とともに広がっていたといえる。上述の作庭や庭園の意味として用いられた園冶という言葉が明治期の美術と文学の出版物に出現し始めたのは、明治期に『園冶』という書物が普及したことによる影響のためと推測できる。近代以降で最初に『園冶』を意識したのは美術界である可能性は高いといえる。日本における『園冶』

100 国立公文書館（1985）編集：内閣文庫百年史：汲古書院，31-32

101 同上，30

102 同上，14

の状況を初めて中国の学者に伝えた大村西崖も美術史家であるが<sup>103</sup>、この時期に『園治』が公開されたことによって、借景という用語と借景の概念の受容と展開が進んだと考えられる。

## 6. 文学にみる「借景」

造園の専門分野だけではなく、日本の近代文学にも「借景」は用いられるようになった。たとえば和田利男（1972）が著わした『文苑借景』という本がある。はしがきに著者は先ず「借景」に関して、造園法の借景を「前景に、あるいは背景に、山や林や川や湖沼など、自然の雄大な風景を取り入れて庭園の美を完成させる工夫」と解説し、光悦寺と円通寺を典型的な例として挙げた。次にタイトルに使われた「借景」を「私の専門である中国文学という苑の前景に、多くの場合日本文学がなんらかの形で姿を見せている」と解釈した<sup>104</sup>。ここでの「借景」は比喻の一種であり、近景と遠景の視覚的な結び付きを意味している。このほかにも「借景」は日本近代文学評論において多くの論者に用いられてきたが、中でも大輪靖宏と柄谷行人は代表的な二人とされる<sup>105</sup>。

大輪靖宏（1981）は芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天河」という俳句を分析する際に、「俳句の借景性」を指摘し、俳句と庭園の共通性を示した<sup>106</sup>。大輪によると、俳句は独立した価値を持っている文学形態であるとともに、与えられた背景の違いによって味わいに変化することが文学的な長所という。つまり、俳句は日本の借景庭園と同じように背景と敏感に反応し合うという特徴である。さらに借景庭園に関して、「庭園それ自体も独立した芸術的価値を有しているが、低い塀の外側に広がる山などの遠景と調和することによって一層の価値を増す」<sup>107</sup>と述べた。こうした庭園と共通する借景性は俳句だけではなく、物語、歌舞伎あるいは和歌などの形態にもみられる。庭園にも俳句にも、背景は重要であるが、存在しなくても自身の価値は存在し別の味わいを示すことになる。柄谷行人（1998）も「借景に関する考察」の論文に、俳句の借景性即ちそこにはないものを指し示すことを指摘した<sup>108</sup>。柄谷行人によると、庭園の借景は外的な風景が庭を通して見られることであり、巨大な自然を一種のレンズを通し

103 このことは橋川時雄の解説と陳植の『園治全釋』に載られた闕鐸の序文に指摘された。

104 和田利男（1972）：文苑借景：渙乎堂，1

105 染谷智幸（2005）：西鶴小説論：翰林書房，548

106 大輪靖宏（1981）：俳句の借景性：上智大学国文学論集14，41-60

107 同上

108 柄谷行人（1998）：借景に関する考察：批評空間2(17)，35-46

て縮小することに当たり、さらにいえば、庭園は表象装置である点で絵画や文学と共通しているとされる。

以上のように、文学評論において「借景」が造園学から借りられ、鑑賞対象とその背景の関係を論述する際の修辭的表現として用いられた。両者に共通している点は、借景の本質を対象（前景）と背景の結び付きと相互の反応に置いていることである。よって、文学評論に用いられた「借景」は借景の「隠滅論」と比べると、余り厳しくなく、意味が広い概念であるということが出来る。大輪が述べたように、これらの借景の概念は「調和論」あるいは「主景論」に近いと考えられる。

文学評論による借用だけではなく、文学者による庭園の借景そのものへの興味もみられる。文豪森鷗外は既に 1896 年に庭園史の考察の中で、借景にも及び、借景は自然の山水に依頼し庭園と自然の混交したことでであると指摘した<sup>109</sup>。ほかに、山本健吉（1977）は修学院離宮と円通寺を訪ねたことを記録し、両者の借景を特筆した<sup>110</sup>。注目すべきことは、山本健吉の描写だけでなく、先の和田や大輪の叙述にも庭園の借景に関して「雄大」あるいは「壮大」などの形容が用いられていることである。多くの造園研究者の叙述にもこのような言葉がよくみられる。さらに、柄谷は借景の庭園は巨大な自然を窺う道具として解説し、対象の巨大さと庭園の微細さの関係について意識的な比較を行っている。このように文学の分野においてもこの風景の雄大さは借景の理想的な状態と認識されており、先の借景の「小中見大」の典型的な構造との合致がみられる。

## 7. 本章のまとめ

「借景」は最初に『園冶』ではなく黄庭堅の詩集によって中国から伝来した。『園冶』の伝来より前に「借景」は日本の文献に用いられていた。万里集九の『帳中香』は日本における「借景」の濫觴である可能性が高い。

しかし、造園の領域における「借景」の発端期は明治期である。明治期に、「借景」が次第に論じられるようになり、小沢の「園苑源流考」によって「借景」は日本の庭園及び造園研究に結びつけられた。この時期の借景の概念は『園冶』に解説された概念に近く、遠距離の眺望に当たるということが出来る。明治期に「借景」はこの時期の『園冶』の普及によって展開したと推測される。その背景には明治期からの近代美

109 森林太郎（1973）：鷗外全集，第二十三卷：岩波書店，271-274

110 山本健吉（1984）：山本健吉全集，第四卷：講談社，283-286



術と庭園研究と造園学の萌芽というまでもなく、明治期に近代公共図書館の発端と古籍のパブリック化ということも見逃せない要因として挙げられる。『園冶』の「借景」は日本における「借景」の嚆矢ではないが、明治期以来の造園研究における「借景」は『園冶』から取り入れられたと考えられる。

近代以降の造園学の展開に伴い、「借景」に関する定義や議論が多く重ねられてきた。「借景」と「背景」の区別の仕方を底流として検討すると、借景の概念は明治期の眺望に当たる借景の概念と比べると、次第に狭く、厳しく、複雑に規定されてきたことがわかった。このプロセスは「借景」を造園学の高度な専門用語として確立することであった。この系統化と専門化の確立過程において、極端化の傾向が多少みられる。その結果借景の概念は『園冶』における借景の概念から離れてきた。これまでに様々な概念が現れたが、「借景」の定義はまだ十分に成立していないのが現状といえる。

「借景」の定義はまだ曖昧である。数多の既往研究で借景に結び付けられた庭園は非常に多く、性格も様々である。その中で、代表的とされる庭園、たとえば大徳寺本坊方丈庭園などは「小中見大」という空間意匠として整理することができた。このような庭園の例は「借景」の様々な定義との間にいくつかの関連性がみられ、『園冶』の借景の意匠とも中国の庭園意匠とも異なっている。このように、日本の造園における借景の概念は『園冶』から離れ、日本庭園自身の意匠として展開してきたと考えられる。(図-14)

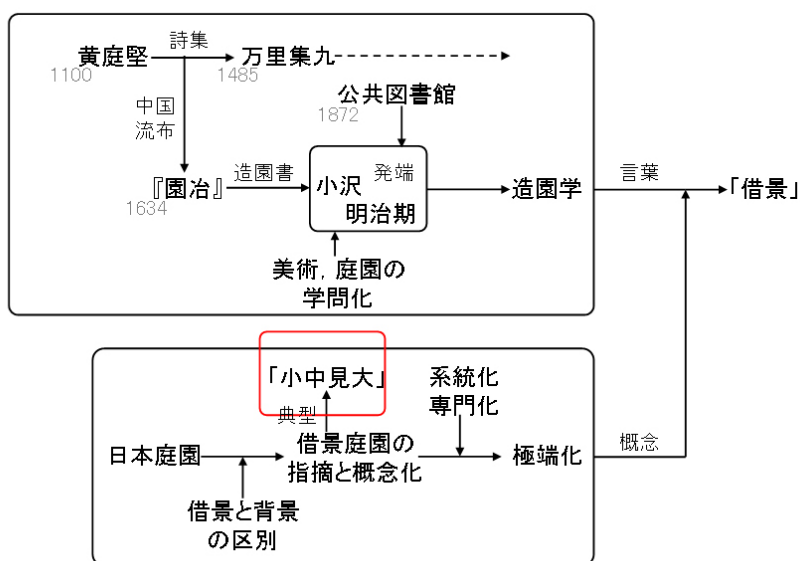


図-14 日本における借景の経緯

## 第四章 中国庭園における眺望の構成－蘇州庭園を中心として

## 1. 本章における研究の背景、目的及び方法

第二章において示したとおり、借景は「借景亭型」、「尺幅窓型」と「遠眺型」という三つの空間構造があり、古典文脈で借景は主に「借景亭型」と「尺幅窓型」として解釈されていた。しかし、近代において借景という概念は、『園冶』における借景を基礎として、陳從周方の研究に支配されてきたとあってよい。この中で借景の構成は古典の「借景亭型」と「尺幅窓型」から規模が比較的に大きい「遠眺型」に変わってきた。さらに、近代の研究で、借景という概念は庭園から自然風景区と歴史名所などの領域に広げられ、単純な眺望に近づく傾向がみられる。以上のように、借景は定められた概念あるいは構成というより、むしろ時代とともに変化してきた文化現象とあってよい。

本章では、具体的な借景の構成を分析するために、借景を上記のうち「遠眺型」、即ち園内から園外までの眺望という空間構造として規定する。そしてこれを「眺望」と名付けることとする。その理由は以下である。

近代以降、借景に関する研究では借景はほとんど「遠眺型」として捉えられてきた。また、「借景亭型」は借景の濫觴であるが、園外から庭園を望むことを示し、庭園の意匠との関連は強くないと考えられる。また一方で、「尺幅窓型」という構造は現存の蘇州庭園によくみられるが、近代研究によって「借景」ではなく、「対景」あるいは「框景」という意匠として捉えられるようになった<sup>1</sup>。さらに、本論の第三章で分析したように、日本造園において借景は眺望、あるいは眺望の特別な構造の一つとして解説されてきた。

なお、すでに触れたように、拙政園における「吾竹幽居」という亭の近くから北寺塔までの眺望は、近代研究によって中国造園における借景の典型として評価されてきた。それに対して、拙政園の「見山楼」という建物において名称から山を眺望する意識がみられる。かくして、拙政園の古典意匠において、塔までの眺望よりも、「見山楼」と名付けられたことに表されるように、山までの眺望が重要視されたと考えられる。一言で言うと、眺望に関して、近代研究の認識と古典造園の意匠との間に齟齬がみられる。

1 「尺幅窓型」のような構造は劉敦楨の『蘇州古典園林』に「対景」の形の一つとして整理されている。劉敦楨（2005）：蘇州古典園林：中国建築工業出版社，18

一方、近代以降、借景についてさまざまな論考がなされてきたが、造園史を踏まえないまま現存する庭園の実例のみに基づいて解説されてきた傾向があり、借景あるいは眺望に関して系統的な研究が行われていないのが現状である。すでに触れたように、劉敦楨と陳從周方は借景に関する研究の底流を定めたが、その後のさらに詳しい調査あるいは研究は非常に少ない<sup>2</sup>。また、前述のような眺望と拙政園の借景に関する系統的な研究はまだ空白の状態にあるといえる<sup>3</sup>。

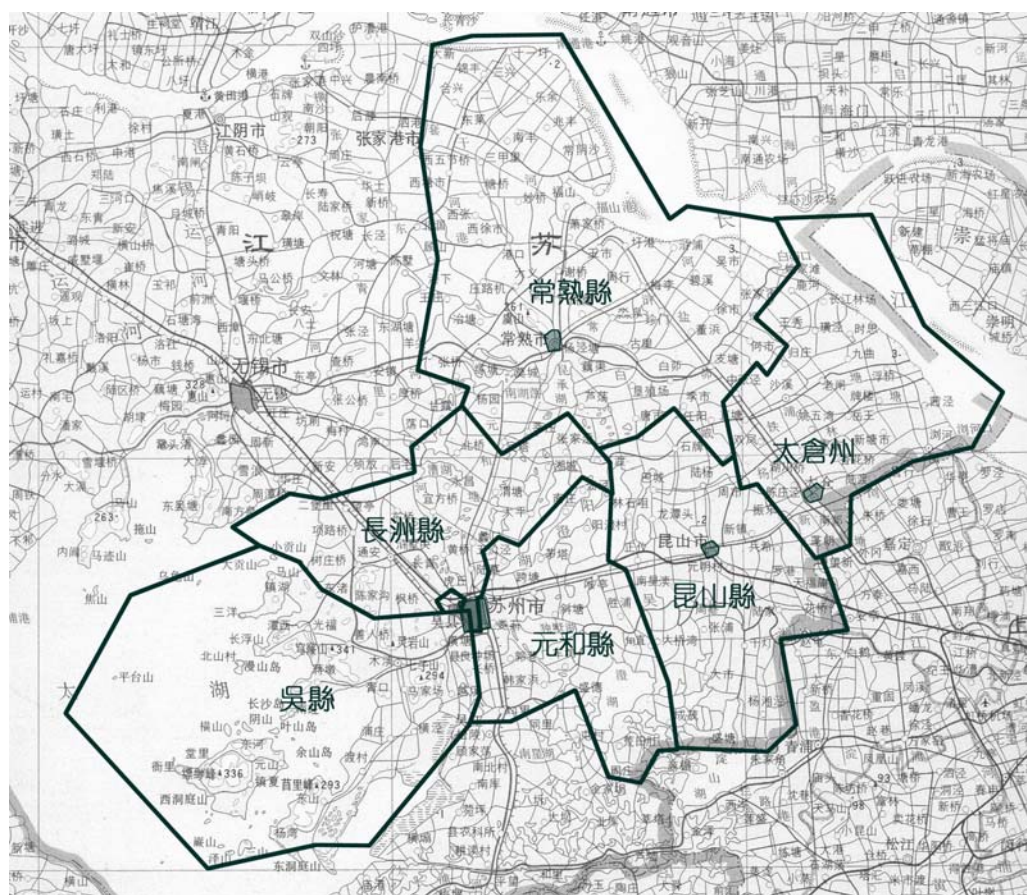
そこで本章では、借景の「遠眺型」即ち眺望に関する構成及び概念、空間と文化などの方面の構成意匠を解明することを研究課題とする。具体的には、研究は一般モデルのまとめ、拙政園における眺望、塔を対象とする眺望および山を対象とする眺望の四つの部分に分けられる。本章は、中国古典庭園の全体像及び眺望の様相への関心を背景とするが、周知のとおり蘇州庭園は中国古典庭園の典型として挙げられるため、中でも蘇州地域における庭園に着目し、拙政園における眺望を特に重要なケースとして位置付けた。

研究方法に関しては、現存する古典庭園を対象として、庭園に関する歴史文献を主な分析対象とし、古典造園における意匠の解明を目指した（表－1）。一般モデルのまとめについては、陳從周の『園総』に収集された数多の園記の分析に加えて、現存する庭園における眺望の事例を収集し、あわせて庭園史、芸術史、社会史などの文献

表－1 文献調査方法

	調査の目標	調査の対象	結果	参考
眺望に関する一般モデル	眺望に関する園記と庭園	『園総』、『蘇州歴代名園記』、中国基本古籍庫、等	園記89点、現存庭園17点	庭園史、芸術史、社会史に関する既往研究
蘇州地域における庭園調査	庭園の統計、庭園に関する記述	蘇州地域に関する地方志、中国基本古籍庫、等	庭園634点、記述がある庭園250点	
拙政園に関する調査	古文獻における拙政園に関する記述	中国基本古籍庫	記述約168点、眺望に関する記述12点	庭園史と蘇州都市史に関する既往研究、『拙政園志稿』
塔影に関する調査	名称が塔と関係する庭園	中国基本古籍庫	庭園10点	蘇州地域における庭園調査
見山庭園に関する調査	蘇州地域における山が望める庭園	中国基本古籍庫	庭園108点、庭園分布図5枚	蘇州地域における庭園調査

- 近年における出て来た借景に関する文献には研究方法の上に参考にされる論文は非常に少なく、馮仕達が『園冶』に関する論文は中の一つである。Stanislaus Fung(2000): Self, scene, and action: the final chapter of Yuan ye: Landscapes of memory and experience, edited by Jan Birksted: Spon Press, 129-136
- 庭園内部における風景観賞の構成について、既往研究としては、潘谷西の1963年の「蘇州園林的觀賞点と觀賞路線」が最初の一つといえる。しかし、外景の眺望に関する構成について、系統的な研究はまだ行われていない。



図一 本研究における蘇州地域の概念図(ベースマップは『中華人民共和國國家普通地圖集』より)

をも参考としながら分析した。

次に「蘇州地域における庭園調査」に関しては、時代に関わらず、蘇州という地域におけるすべての古典庭園を収集し、可能な限りこれらの庭園に関する古典文献を集め、この中から眺望に関連する記述と庭園の実例を整理した。蘇州地域という概念には時代による変化があり、本論では馮桂芬(1809-1874)方が清代同治年間(1862-1874)に編集した『蘇州府志』における蘇州府の概念を参考として、蘇州地域を呉県、長洲県、元和県、常熟県、昆山県と太倉州との六つの地域に分類した<sup>4</sup>(図一)。研究の流

4 馮桂芬の『(同治)蘇州府志』は本論の参考文献におけるもっとも重要な地誌である。『(同治)蘇州府志』に蘇州府は九つの県があったことが記され、具体的に呉県、長洲県、元和県、昆山県、新陽県、常熟県、昭文県、呉江県と震澤県との九つである。このような「一府九県」の制度は雍正二年(1726)に発足し、この前元和県は長洲県の一部であり、新陽県は昆山県の一部であり、昭文県は常熟県の一部であり、震澤県は呉江県の一部であった。さらに、太倉州、嘉定県と崇明県との三つも含まれ、「一府一州七県」の制度であった。雍正二年から、太倉州と嘉定県などは蘇州府から分けられ、太倉州の地域から鎮洋県は区画され、『(宣統)太倉州志』に記述された。既往研究にもとづき、有名な庭園の分布の傾向をふまえ、『(同治)蘇州府志』における蘇州府の地域範囲と分け方を前提にはせずに、呉県、長洲県、元和県、常熟県(昭文県含み)、昆山県(新陽県含み)と太倉州(鎮陽県含み)との六つを研究対象地として設定した。

これは、各種の地誌から六つの地域における庭園に関する記述と<sup>5</sup>、中国基本古籍庫に基づいて各庭園に関する記述を抜き出し、これらから庭園の様相と眺望の姿を抽出した。収集した資料は、晋代から清代までの庭園 634 点、中国基本古籍庫における関連記述が見出された庭園 250 点であった。

続いて、拙政園の眺望に関しては、まず蘇州古城における塔及び山の風景即ち見え方を解明した。具体的には蘇州古城に関する歴史文献と既往研究に基づいて、古城におけるマクロ及びミクロな空間構造を明らかにするとともに、古城内の塔と郊外の山に関するデータを調査し、視距離と仰角を重要な指標として見え方を分析した。その上で拙政園の眺望に対して、拙政園の歴史を究明し、眺望に関する記述を可能な限り収集し、特に水系と境界の変化を解明し、水系と境界の両者と眺望との関連性を明らかにした。

上記の蘇州古城における塔及び山の風景即ち見え方の検討を通して、眺望対象とする塔と山の差異を明らかにした。これを踏まえて塔を対象とする眺望の特徴を明らかにすることを目的として、塔を眺望する体験を風景の主題とした庭園の例を収集し、分析した。これをここでは「塔影に関する調査」と呼んだ。具体的には、二通りのデータを用いた。一つ目は、主に中国基本古籍庫を利用し、「園」と「塔」をキーワードとして、約 870 点の記録を集め、中から関連する例をまとめた。二つ目は、前述した蘇州地域における庭園調査から、塔を対象とする眺望に関連する例を集めた。結果として合せて 10 点の庭園の例が得られた<sup>6</sup>。これらの 10 点の庭園を対象として、細かい考証を行い、庭園の配置、視覚的な空間構成、眺望のイメージと庭園のスケールなどを解明し、比較した。

最後に、山を対象とする眺望に関する分析を、主に蘇州地域における庭園調査に基づいて行った。中国基本古籍庫における関連記述がある 250 点の庭園から、山が眺望された庭園が 108 点得られ、各個庭園の眺望に関する視対象、視点及び視点場などを明らかにした。さらに、庭園分布の特徴を分析し、立地による分類化を行い、立地が違う種類の庭園の間に、視覚的な空間構成にどのような差異があるについて検討した。

5 蘇州地域即ち呉県、長洲県、元和県、常熟県、昆山県と太倉州との範囲における庭園の集計は主に以下のような地誌を参考として行われた。馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志：清光緒九年刊本。丁祖蔭（民國）：重修常昭合志：上海社会科学出版社 2002 本。王昶（清代）：（嘉慶）直隸太倉州志：清嘉慶七年刻本。王祖畬（清代）：（宣統）太倉州志：江蘇古籍出版社 1991 影印本。王祖畬（民國）：（民國）鎮洋縣志：江蘇古籍出版社 1991 影印本。

6 この 10 点以外、ほかの 2 点の例は見つけられたが、関連する記述は少なく詳しい考証ができない。一つは星園という庭園における塔影楼であり、庭園は南京に位置した可能性がある。星園に関する記述は以下の文献にみられる。先著（清代）：之溪老生集，卷七藥裏續集上：清刻本。もう一つは安園という庭園における塔影楼であり、庭園は天津に位置した可能性がある。安園に関する記述は以下の文献にみられる。華長卿（清代）：梅莊詩鈔，卷十白門續集：清同治九年刻本

以上の調査と分析に基づいて、本章では、借景の「遠眺型」即ち庭園の眺望に関する空間構成に加えて眺望という現象に隠された古典意匠を明らかにした。

## 2. 眺望に関する一般モデルとその特徴

### 2-1. 眺望に関する一般モデル

「遠眺型」の借景は主に『園冶』によって以下のように主張された。「借者、園雖別内外、得景則無拘遠近、晴巒聳翠、紺宇凌空、極目所至、俗則屏之、嘉則收之、不分町疃、儘為煙景、斯所謂巧而得躰者也。」<sup>7</sup> 言い換えれば、借景の対象は園外の相応しい風景であり、対象までの距離にかかわらず、山とお寺が理想的な対象として挙げられた。一方、「煙景」という記述から、遠景が示されたことも伺える。このほかに『園冶』の本文では、いくつかの「遠眺型」の場面が文学的な表現として記述されている。「遠峰偏宜借景、秀色堪餐」<sup>8</sup>、「適興平蕪眺遠、壯觀喬嶽瞻遙」<sup>9</sup>などである。

園記は庭園の歴史、意匠と营造などの情報を記録した。陳從周方が編集した『園総』には晋代から清代までの約 322 点の園記が集められ、中国園記の大集成といえる<sup>10</sup>。この中で、80 点の園記において「遠眺型」の借景即ち眺望が記述されていたことがわかった。『蘇州歴代名園記』からほかの 9 点が得られた。

89 点の中で最初の例は唐代の白居易の廬山草堂である。また早期の典型的な例として、すでに触れたように、宋代の李格非が記録した洛陽の名園が挙げられる。このほかに、明代の王世貞（1526-1590）が著作した『弇山園記』には、庭園の眺望に関して、以下のように書かれている。「自此遂陟縹緲樓、取少陵城尖徑仄獨立飛樓語、又以洞庭西山嶺名名之、尺鷃逍遙不自知其非九萬也。此樓是三弇最高處、毋論收一園鏡中、啓東戸則萬井鱗次、碧瓦雕甍、織悉莫遁、啓西戸更上三級得臺、下木上石、環以朱欄、西望婁水如練、馬鞍山三十里而遙、木落自露、北望虞山百里而近、天日晴美、一抹弄碧、名之曰大觀臺。」<sup>11</sup> ここには、「縹緲樓」という建築は園内の最高の場所であり、この場所から約五十キロ以内の山、川と町の風景が見えることが示されている。清代の有名な隨園ずいえんにおいては、同様の眺望の様式の記述もみられ、園内の高い建築から、園外の範囲の広い風景が眺望されたとされる<sup>12</sup>。これらの 89 点の園記を検証

7 陳植（1988）：園冶註釋：中国建筑工業出版社，47-48

8 同上，51

9 同上，71

10 陳從周ら（2004）選編：園総：同濟大学出版社，529pp

11 王世貞（明代）：弇州山人四部續稿，卷五十九文部：清文淵閣四庫全書本

12 本文は以下である。「其上曰天風閣、登閣四顧、則長幹塔、雨花台、莫愁湖、冶城、鐘阜、虎踞龍槃、六朝勝景、

した結果として、眺望のモデルは園内の築山や建築などの高所から山、川或は町などの風景を遠眺することと整理することができ、これを「登高眺遠」と表現する。

「登高眺遠」というモデルには、一般的に、視点は高所であり、視対象は山の場合が多いが、ただ山に限定されるのではなく、農地、河川、湖、塔、町、集落などのさまざまな風景も含まれる。眺望の状況に関する書き方をみると、視対象は自由列挙するように挙げられ、視対象よりも、視対象までの遠距離と眺望の視野の広さを表す傾向がみられる。清代の休園は揚州における庭園であり、眺望については「石勢突兀起伏不一，約其大者，有三峰焉，登其最高之顛望之，維揚兩城，歴歴鱗次，江南諸山，縹緲煙霧間」<sup>13</sup>と書かれ、「登高眺遠」の傾向が明らかである。89点の中にみられる多くの眺望はこのモデルであり、時代に伴う変化はみられないが、いくつかの例外もある。例えば、『揚州畫舫録』に載られる西園曲水という庭園に関する園記には「尺幅窓型」の借景の意匠が記述されていた<sup>14</sup>。ただし、園記という文体は文学的な特徴があり、完全に現実の意匠と同列に扱うことができないと考えられる。

## 2-2. 現存の庭園にみる眺望

第二章において、近代以来の数多の借景に関する研究と記述に触れた。近代以来の既往研究において、17点の現存の庭園においてそこに借景という意匠が認められるとされている。この17点は、頤和園と避暑山荘の皇家庭園を除いては、すべて規模が大きい私人庭園である。さらに、13点は江南庭園であり<sup>15</sup>、うち7点は蘇州地域に位置する庭園である。典型的な例として、拙政園では「吾竹幽居」という建築の近くから庭園の西方に位置する北寺塔が眺望されることが挙げられる。近代以来の研究で、最初にこの眺望を指摘し、借景に結びつけたのは陳從周と劉敦楨の1950年代の論文である<sup>16</sup>。このほかに、童寯は1930年代完成した『江南園林誌』に、無錫の寄暢園から龍光塔を眺望することと（図-2）、蘇州木瀆の羨園から靈岩山を眺望することが借景の例として指摘し<sup>17</sup>、留園に関して留園の平面図では西部の築山に「其南西

星羅棋佈於窗前，遙望三山，白鷺洲，江光帆影，映帶斜陽，歴歴如繪。」袁起(清代)：隨園圖說：陳從周ら(2004) 選編：園総：同濟大学出版社，191

13 方象瑛(清代)：重修休園記：陳從周ら(2004) 選編：園総：同濟大学出版社，91

14 本文は以下である。「觴詠樓之左，作平台，通東邊樓，樓後即小洪園射圃，多梅，因於樓之後壁開戶，裁紙為邊，若橫批圖式，中以木榻嵌部，俟小洪園花開，趣抽去木榻，以樓後梅花為壁間畫圖，此前人所謂尺幅窗無心畫也。」李斗(清代)：揚州畫舫録(一部分)：陳從周ら(2004) 選編：園総：同濟大学出版社，94-95

15 江南という地域は中国の歴史地理でいくつかの解釈方があり、普段は現在の江蘇省の長江の南側，上海市と浙江省の北部に近い。こちらで童寯の『江南園林誌』における地域の概念に基づいて長江の北側の揚州における庭園も江南庭園に含まれた。童寯(1984)：江南園林誌：中国建築工業出版社，122pp

16 陳從周(1956)：蘇州園林：同濟大學建築系，16。劉敦楨(1957)：蘇州的園林：13

17 『江南園林誌』は童寯によって1930年代に完成され，その時期に出版される計画があるが，戦争のため，



図－2 寄暢園の借景

諸峰林壑尤美」と標示している<sup>18</sup>。これらの例から、多くの眺望の構成はすでに触れた「登高眺遠」のモデルに近いと考えられる。17点の眺望のケースでは、名勝地は眺望の対象として挙げられ、山が主流にされることが共通する特徴である。

眺望の視点は、多くの例において建築であり、うち6点の庭園における建築には、外景あるいは外景の眺望を意味する名前が付けられている。具体的には、拙政園の見山楼<sup>ししりん</sup>、獅子林の見山楼、滄浪亭の看山楼、留園の舒嘯亭<sup>しゅうせうてい</sup><sup>19</sup>、羨園の見山楼<sup>よえん</sup>と豫園の望江亭である。建築の名前だけでなく、庭園の建築に多く設置された対聯から外景を眺望する意識もみられる。拙政園の見山楼において対聯は「南西諸山，林壑尤美，春秋假日，觴詠其間」<sup>20</sup>と書かれ、南西方の山が眺望対象とされている。羨園では、見山楼以外に、延青楼という建築も配置され、山までの眺望を暗示する。この建築の対聯は「閣鄰佛寺經盈耳，窗對靈岩翠滿晴」と書かれ、靈岩山が眺望対象として明記されている。以上のことから、これらの庭園では、山までの眺望が造園の際に意識された風景であるといつてよい。

### 2－3. 「経営位置」：眺望視点の配置

「経営位置」即ち建築と景観の配置に関して、童寯は『江南園林誌』で『金瓶梅』にの記述を引用し、以下のように述べた。「初入園，有朱欄迴廊，逐見亭臺，然後到

止められた。最初の出版は1963年のことである。童寯（1984）：江南園林誌：中国建築工業出版社，9

18 同上，図版

19 舒嘯という用語は高く長い声で歌い口笛することを意味している。さらに、高い所に登り遠眺する意味も含まれる。陶潜の名作の『帰去来兮辞』に「富貴非吾願，帝郷不可期，懷良辰以孤往，或植杖而耘耔，登東臯以舒嘯，臨清流而賦詩，聊乘化以歸盡，樂夫天命復奚疑」と書かれ、舒嘯という用語の濫觴である可能性が高いと考えられる。陶潜（晋代）：陶淵明集，陶淵明文集卷六：宋刻遞修本

20 范煙橋（1964）：拙政園志稿：鄭曉霞ら（2006）主編：中國園林名勝志叢刊30：廣陵書社，144



池，而以樓及假山殿後。登其高處，顧盼全局，由小及大，由卑至高，斯經營位置之定律也。」<sup>21</sup>つまり，庭園の配置に関して，観覧ルートにしたがって，小空間を通過して大空間へ，低い場所を通過して高い場所へ導くことが一般の法則であるという。『金瓶梅』からの引用文には，ルートの最後で築山が配置され，頂上から全園の風景を俯瞰するようになったことが書かれている<sup>22</sup>。具体的には，これらの「経営位置」として，楼と築山などの俯瞰と眺望に相応しい高所が庭園のルートの最後に配置され，観覧の際の視野が小さい状態から大きく広げられることが理想的であるとされている。

実際に，すでに触れた眺望に関する園記の多くには，この配置の法則も記述されている。ただ一つの差異は，『金瓶梅』の記述には全園を俯瞰することは言及されているが，園外までの眺望は言及されていないことである。錢謙益（1582-1664）の「西田記」には西田という小庭園は以下のように記述されている<sup>23</sup>。「西田者，太倉王奉常遜之之別墅也。」先ず庭園の所在地と創立者を指摘し，次は庭園の立地環境を記した。「出太倉西門，郊牧之間，隩隈表裏，沙丘灑迤，疇平如陸，岸墳如防，瓜田錯互，荳籬映望，撥棹挂門，苓箸緣路，水南雲北，迥異人間，游塵市囂不屏而絕，西田之風土也。」続いて，主な建築と景観の配置を述べた。「娛賓之堂顔曰農慶…燕處之菴顔曰稻香…越長隄而西，菰蒲蔽虧，鳧鴨凌亂，清潭瀉空，秀木漏日，有霞外之閣以覽落日，有錦鏡之亭以俯遠水。」最後に，西廬という建築に及び，園外までの遠眺を描写した。「又折而西，西廬在焉，中祠純陽，法筵精潔，旁繪屋壁，粉本蕭疎。啓東軒則婁江如鏡面，北窓則虞山如障，顔之曰垂絲千尺，曰緣盡，而西廬之事窮。」庭園には，高所からの遠眺は観覧のクライマックスとして，景観シークエンスの最後の一節に計画されたことが伺える。

これをいくつかの現存庭園から，視点配置の原理として検証した。前述の拙政園と滄浪亭などの6点の庭園では，外景に対する鑑賞視点として高建築が設置され，平面的な高建築の配置にも共通点がみられる。拙政園では，見山楼という建築は中部の北

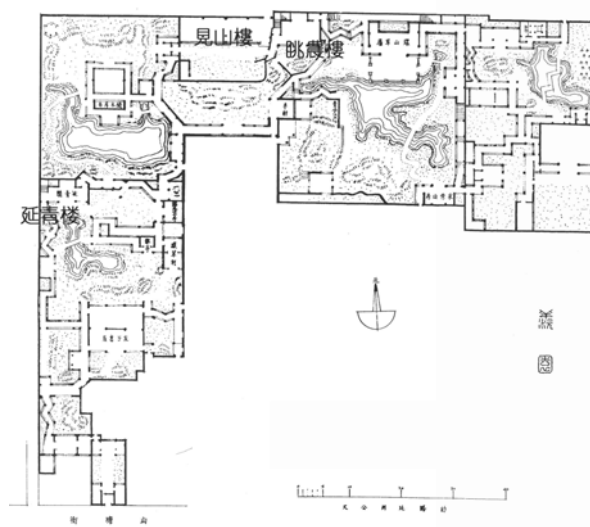
21 童寯（1984）：江南園林誌：中国建築工業出版社，42

22 本文は以下である。「西門慶見二人去了多時，便乘轎出門，迤邐漸近，舉頭一看，但見千樹濃陰，一灣流水，粉牆藏不謝之花，華屋掩長春之景，武陵桃放，漁人何處識迷津，庾嶺梅開，詞客此中尋好句，端的是天上蓬萊，人間閬苑。西門慶贊歎不已，道，好景致。下轎步入園來，應伯爵和常峙節出來迎接，園亭內坐的先是韓金釧兒，磕了頭，纔是兩個歌童磕頭，吃了茶，伯爵就要遞上酒來，西門慶道，且住，你每先陪我去瞧瞧景致來。一面立起身來攙着韓金釧兒同走，伯爵便引着慢慢的步出迴廊，循朱欄轉過垂楊邊，一曲茶蘼架，逡過太湖石松風亭，來到奇字亭，亭復是繞屋梅花三十樹，中間探梅閣，閣上名人題詠極多，西門慶備細看了。又過牡丹臺，臺上數十種奇異牡丹，又過北是竹園，園左有聽竹館鳳來亭，扁額都是名公手跡，右是金魚池，池上樂水亭，凭朱欄俯看金魚，却像錦被也是一片，浮在水面，西門慶正看得有趣，伯爵催促又登一箇大樓，上寫聽月樓，樓上也有名人題詩對聯，也是刊板砂綠嵌的。下了樓往東一座大山，山中八仙洞，深幽廣濶，洞中有石棋盤，壁上鐵笛銅簫，似仙家一般，出了洞登山頂，一望滿園都是見的。」笑笑生（明代）：金瓶梅，卷十一：明萬曆刻本

23 錢謙益（清代）：牧齋有學集，卷二十六記：四部叢刊景清康熙本



図－3 滄浪亭庭園平面図（劉敦楨『蘇州古典園林』より）



図－4 羨園平面図（童寯『江南園林志』より）

西端に配置される。元の出入口は遠香堂の南側に、庭園と住宅の境界部に位置し、出入口から見山楼までは主に三つのルートがあり、ほかの建築より見山楼までの距離が一番長い。滄浪亭ではより明確な関係がみられ、看山楼という建築は庭園の出入口から最も奥深い場所に位置している（図－3）。留園では、舒嘯亭という小さい建築は庭園の西部に位置し、大築山の頂上に設置され、庭園の出入口から非常に離れている。同時に、冠雲楼という建築も庭園の北東端に配置され、空間シークエンスの最後の一節といえる。この建築は虎丘塔を眺望できる場所である<sup>24</sup>。同じように、豫園の望江亭は庭園の北西隅に位置し、大築山の頂上に設置され、こちらから黄浦江が眺望される。これらに比べて、羨園の場合にはさらに注目すべき特性がある（図－4）。羨園は蘇州郊外の木瀆に位置し、靈岩山から近いことも関係し、山を眺める場所が見山楼にとどまらず、いくつかの建築が設置されている。延青楼という建築では、その名称は山の眺望を意味している。また見山楼の隣には、眺農楼という建築があり、遠眺の場所として配置されている。この二つの建築は連結され、園内において外景を眺望する意識の最も強い場所であり、全体的なシークエンス景観の末端に配置されている。

羨園の例から、前述の「経営位置」に関する造園原理が見山楼のような眺望の建築の配置に影響したことがうかがえる。羨園の中において、靈岩山が眺める場所が一箇所だけではなく、見山楼が観覧ルートの末端に設置されたのは、小から大まで、低か

24 陳從周（1959）：私家園林：古代建築史編輯組（1959）編：古代建築史初稿：内部発行本，174

ら高までの空間配置の理念の反映ということが出来る。また、拙政園では、見山楼は高さが約6メートル二階造であり、最高所ということではない。見山楼から郊外の山が眺望できると、庭園中部においては、このほかに二階造の香洲という建築と、大築山の頂上に位置する雪香雲蔚亭から、山を望む可能性も高いとあってよい。しかし共通しているのは景観のシークエンスの末端には、眺望の場所が配置されていることである。

#### 2-4. 「遠」について

小から大まで、低から高までという視点配置の理念をさらに徹底させると、ルートスタートとしての入り口は小さく、よく囲まれ感の高い空間に設計され、シークエンスの最後には眺望のための高所を設置することが理想的な形式ということができる。確かに、多くの現存庭園から、入り口は視野が狭く制限されていることが判る。拙政園を例として挙げると、元の入入口空間は大築山にふさがれ、非常に狭い。『紅樓夢』という小説名作には、大観園という庭園と造園のことがプロットの背景として述べられ、入り口の空間意匠は拙政園のように論述された<sup>25</sup>。入り口小空間に対して、眺望の高所は大空間であるといつてよく、これらの大空間は庭園以内にとどまらず、園外までの眺望に関する距離と視野の広さを意味する。「遠」という意匠として捉えることができる。

『園冶』にも、多くの園記にも、近代以来の研究にも、「遠眺型」の借景は「登高眺遠」のモデルとして把握され、「遠」という意匠が重要視されてきた。「遠」というのは中国芸術における重要な概念の一つであり、特に山水画、山水詩と庭園の領域によくみられる。これらの三つの芸術領域の間にいくつかの共通点と互いの影響があることは中国芸術の特徴として指摘されている<sup>26</sup>。さらに、「遠」という概念は人物の外形と資質の評価にも適用され<sup>27</sup>、古典文化のキーワードの一つといえる。

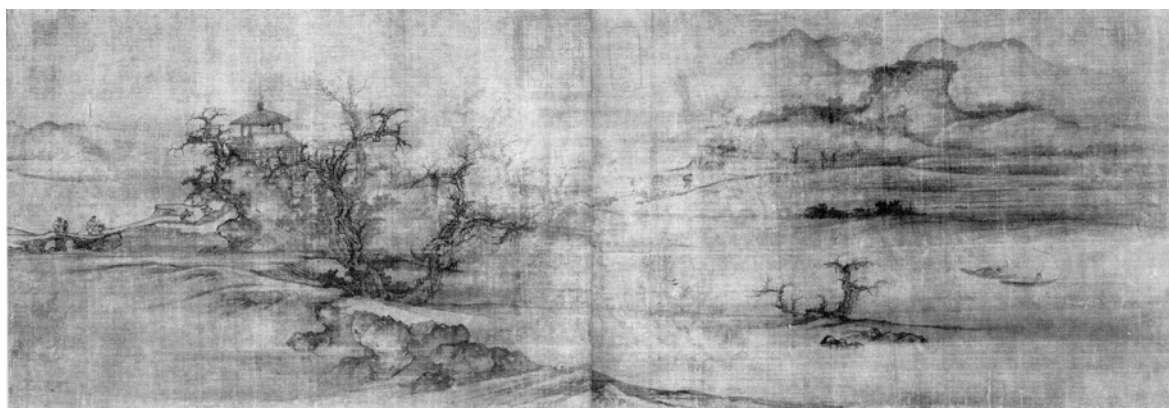
絵画については、宋代の郭熙（1023-約 1085）によって「三遠」、即ち「深遠」、  
「高遠」と「平遠」という理論が発表され<sup>28</sup>、山水画の構成基準と評価システムとし

25 この例は近代の研究者によく引用され、全文は以下である。「遂命開門進去，只見一帶翠嶂擋在面前，衆清客都道，好山好山，賈政道，非此一山，一進來園中所有之景悉人目中，更有何趣，衆人都道，極是，非胸中大有邱壑，焉能想到這裏。」曹雪芹（清代）：紅樓夢，第十七回大観園試才題對額榮國府歸省慶元宵：清乾隆五十六年萃文書屋活字印本（程甲）

26 陳從周（2002）：説園：同濟大學出版社，122pp

27 人物の外形に関しては、卓文君の例が有名である。「文君姣好，眉色如望遠山，臉際常若芙蓉，肌膚柔滑如脂，十七而寡。」葛洪（晋代）：西京雜記，卷二：四部叢刊景明嘉靖本。人物の資質に関しては、『世説新語』の例が挙げられる。「荀綽冀州記曰，喬字國彥，爽朗有遠意，髦字士彥，清平有貴識。」劉義慶（南北朝）：世説新語，世説新語卷之下：四部叢刊景明袁氏嘉趣堂本

28 本文は以下である。「山有三遠，自山下而仰山顛謂之高遠，自山前而窺山後謂之深遠，自近山而至遠山謂



図－5 郭熙「樹色平遠図」(謝稚柳『郭熙王詵合集』より)

て現在まで伝えられてきた(図-5)。庭園にも「三遠」の影響はみられる。常熟の半畝園<sup>はんぼえん</sup>という庭園では、溪山平遠閣という建築が設置され、「後為屋三楹，左有小樓，可以眺遠，再左為家塾，右一小閣，曰溪山平遠，循是閣名，可概其勝」<sup>29</sup>と記述され，これは「平遠」のような山水構成の風景を眺望することを意味している。似たような状況は宋代の洪適の「槃洲記」という園記にもみられ，槃洲<sup>はんしゅう</sup>という庭園の眺望について「菱蘆彌望，充仞四野，煙樹綠流，帆檣上下，類畫手舖平遠景」<sup>30</sup>と書かれている。山水詩の空間構成については，近代研究者は「移遠就近」という意匠を山水詩の空間意識として指摘しているが<sup>31</sup>，言い換えれば身近なスペースから巨大な自然を鑑賞し，有限から無限を体験することが「遠」の原理であるといえる。

庭園の意匠に関する議論としては，童寯は日本の小堀遠州の論述を引用し，「深遠」の理念を強調し，庭園空間と風景の分節化と視線の止揚を中国庭園の定則として提唱した<sup>32</sup>。実際，造園における「深遠」は一定の視点からの視覚的な奥行きと空間のシーケンス化の二つの方面に分けられ，小空間の中に大空間の雰囲気を創ることを目指す考え方であるといつてよい。

このように庭園の眺望において，すでに触れたように，「遠」は視覚的な骨子といえる。祁彪佳(1602-1645)の「寓山注」<sup>33</sup>には，寓園<sup>ぐうえん</sup>という庭園において，遠閣とい

---

之平遠，高遠之色清明，深遠之色重晦，平遠之色有明有晦，高遠之勢突兀，深遠之意重疊，平遠之意冲融而縹緲，其人物之在三遠也，高遠者明瞭，深遠者細碎，平遠者冲澹，明瞭者不短，細碎者不長，冲澹者不大，此三遠也。」郭思(宋代)：林泉高致集，山水訓：明刻百川學海本

29 趙允懷(清代)：半畝園記；馮桂芬(清代)：(同治)蘇州府志，卷四十八：清光緒九年刊本

30 洪適(宋代)：槃洲記；陳從周ら(2004)選編：園総：同済大学出版社，458

31 宗白華(1987)：美学与意境：人民出版社，245-264

32 童寯(1984)：江南園林誌：中国建築工業出版社，8

33 祁彪佳(明代)：寓山注；陳從周ら(2004)選編：園総：同済大学出版社，431

う建築が遠眺の場所として挙げられ、「閣以遠名，非第因目力所及也，蓋吾閣可以儘越中諸山水…閣宜雪，宜月，宜雨，銀海瀾回，玉山高并，澄輝弄景，俄看濯魄冰壺，微雨慾來，共詫空濛山色」として，山と川などの眺望対象および天気の変化から生まれた風景が指摘されている。続いて，遠について以下のように述べられている。「然而態以遠生，意以遠韻，飛流夾巘，遠則媚景爭奇，霞蔚雲蒸，遠則孤標秀出，萬家煙火，以遠故盡入樓臺，千疊溪山，以遠故都歸帘幕。」すなわち，眺望に関しては，具体的な対象にかかわらず，集落であっても山水であっても，「遠」であることが眺望の理想的な風景であるとされる。単独の山や川より，領域が広いランドスケープは眺望の対象として理想的であり，「大観」と表現することもいえる。ところで，鄒迪光（1550-1626）は「愚公谷乘」という園記に眺望の対象までの距離の「遠」と「近」のバランスを主張した。「大都園林之間，山太遠則無近情，太近則無遠韻，惟夫不遠不近，若即若離，而後其景易收，其勝可構而就。」<sup>34</sup>即ち，山は遠すぎると山の情態は見えなくなり，近すぎると「遠韻」はなくなり，「遠」と「近」が適当なバランスであるとき，理想的な眺望対象になるとされる。

以上のように，「遠」は造園によって山水画と山水詩の領域から得られた芸術理念であり，眺望に関する造園の理想といえることができる。しかし，「遠」の理想が造園の現実にとどのように投影したかについて，さらに庭園の眺望に関するケーススタディは必要が考えられる。

## 2-5. 眺望の理想と現実

これまでにみてきた庭園における「遠眺」即ち「登高眺遠」という意匠には，造園の理想と現実の両面の要素が含まれていると思われる。そこで，「遠眺」という行為の起源と展開を検討することによりこの両面性について考察する。

中国庭園の起源については，周維権（1927-2007）が商代と周代から発端した「囿」と「台」という人工物を庭園の原型として捉え，庭園は古代の狩りと祭りの活動から生まれたことを明らかにしている<sup>35</sup>。その中でも，「台」は建築の形の一つとして遠眺に関連しているといえることができる。『康熙字典』には，「台」についてのさまざまな解説が収集されている<sup>36</sup>。「觀四方而高者。」「臺，持也，築土堅高，能自勝持也。」「積土爲之，所以觀望。」すなわち，台の最初の形は土を積み上げ，固め，眺望を目指すことである。特に，「天子三臺，靈臺以觀天文，時臺以觀四時，圃臺以觀

34 鄒迪光（明代）：愚公谷乘：陳植ら（1983）選注：中國歷代名園記選注：安徽科學技術出版社，187-196

35 周維権（2008）：中國古典園林史：清華大學出版社，40-44

36 張玉書（清代）：康熙字典：中華書局香港分局 1958 年本，930

鳥獸」にみる周文王の台は典型として挙げられ、天文観測、風景の遠眺と狩りの観賞との三つの目的が明示されている。周維権の考証によれば、「台」は、古代の山岳崇拜と農業祭りから生まれ、山岳の形をまね、使い方は次第に実用から遊覧まで変遷したことが判る<sup>37</sup>。最初の「台」は土で作られ、規模が大きく、後世の形とは異なる。

『園冶』においては「台」は庭園建築の一つとして挙げられ、築山の上のテラス、木構造に支えるテラスと楼閣の大ベランダとの三つの形式に分けられている<sup>38</sup>。園記には、「台」に関する記述は少なくない。宋代の司馬光（1019-1086）の独樂園は名園であり、中に見山台が設置され、郊外の山が眺望された<sup>39</sup>。清代の依園は蘇州の古い町にあり、園内に妙巖臺があり、園外の風景が眺望できる<sup>40</sup>。庭園において、「台」は眺望の場所の一つとあってよい。しかし、すでに触れた現存する庭園の眺望においては、眺望の視点は主に楼、閣、亭などの建築であり、台の例は見つけられなかった。さらに、『園総』に載られる園記の事例をみても時代とともに、台の例は少なくなったことが判る。

こうした台の形態の変遷から、庭園においては眺望という行為が実用的な目的から造園の理想的な目的、即ち風景の遠眺に変化してきたことがうかがえる。そのほかに、眺望には封建荘園における農業形態の要素があり、近世までの庭園への影響もみられる。

謝靈運（385-433）を代表とする謝氏による謝氏荘園は早期庭園の典型であり、謝靈運が荘園について書いた「山居賦」<sup>41</sup>は山水庭園文学の名作である。ここには、眺望について「敞南戸以對遠嶺，關東窗以矚近田，田連岡而盈疇，嶺枕水而通阡」と記述され、山の遠眺のほかに、近くの農地が眺望の対象になっていたことがわかる。また、注釈には「葺室在宅裏山之東麓，東窗謂矚田，兼見江山之美」と書かれ、眺望には農地を望むことと風景観賞の二つの目的が含まれていたこともわかる。さらに農地の風景について、「阡陌縱橫，塍埒交經，導渠引流，脈散溝井，蔚蔚豐秋，苾苾香秔，送夏蚤秀，迎秋晚成…」と記された。ほか、数多の農業生産のことが記述されている。近年の考証より、謝氏荘園は農業生産と経営に基づいて計画され、生活と遊覧の荘園と同時に農業経済の組織であったことが指摘されている<sup>42</sup>。そうすると、謝靈運の「矚

37 周維権（2008）：中国古典園林史：清華大學出版社，42-43

38 本文は以下である。「釋名云，臺者，持也，言筑土堅高，能自勝持也。園林之臺，或掇石而高上平者，或木架高而版平無屋者，或樓閣前出一歩而敞者，俱為臺。」陳植（1988）：園冶註釋：中国建筑工業出版社，87

39 司馬光（宋代）：温國文正公文集，温國文正公文集卷第六十六：四部叢刊景宋紹興本

40 褚篆（清代）：依園記：邵忠ら（2004）編：蘇州歷代名園記：中国林業出版社，180-181

41 謝靈運（南北朝）：謝康樂集，卷一賦：明萬曆沈啓原刻本

42 王欣ら（2005）：謝靈運山居考：中國園林 21(8)，73-77

田」は「見江山之美」の風景眺望とは違い、実用的な役割を含む可能性が高いと考えられる。

これらの実用的な側面は後世の庭園記述によって検証されている。1933年に『枕戈』という雑誌に掲載された「廬江凌氏三榆草堂記」には、三榆草堂という庭園が記され、高楼からの眺望について具体的に、「樓為塔式，内分三級，孤危聳立，高出屋巔，可以不出戸限而覘耕者之勤墮，設一旦有警而藉之以瞭望也」<sup>43</sup>と書かれている。すなわち、高楼から眺望する目的は農業生産の監督と安全の警備の二つということである。このほかにいくつかの例も見つけられ、庭園に配置された農地の眺望を名付けた建築は、依緑園の欣稼閣<sup>44</sup>、且適園の觀稼軒<sup>45</sup>、帰田園居の秣香楼<sup>46</sup>、とすでに触れた羨園の眺農楼などがそのような例である。眺望の対象は、山と川などが通例であり、農地の風景もよくみられるということができる。

謝氏荘園のように、住居のための住宅、遊覧のための庭園と農業のための生産の場が混在する形式は私人庭園の原初的な形といえる。従来庭園研究では造園手法と美学が中心とされてきたが、当時の現実の状況としては生産が最重要であった可能性は高い。謝靈運に関して歴史の記述には、謝靈運が山水風景地を探検し、自分で特別な登山履いわゆる「謝公屐」を創り、出かける際に何百人の侍従を後につき従わせたことが記述されている<sup>47</sup>。過去の文学ではこれに基づいて、謝靈運が山水を熱愛し、山林において隠居する志向を持っていたことが批判された。それに対して、経済史の研究からは、謝靈運の山林の探検は単純な旅行ではなく、土地の開発の動機が決定的であることが指摘された<sup>48</sup>。謝氏荘園の「山居」は、山林に住むことであり、造園の興味ではなく、当時の政治と社会の状況および土地所有と制度に決められた<sup>49</sup>。なお、前述の凌氏三榆草堂のように、庭園と農業地の混在あるいは隣接は、謝氏荘園のような早期庭園の特有の性格ではなく、後世の庭園にもよくみられる。クルナスの明代庭園に関する研究には、庭園の経済面の特性を分析し、造園における農業経済投資の要

43 實符（1933）：廬江凌氏三榆草堂記：枕戈1(4)，8

44 徐乾學（清代）：依緑園記：邵忠ら（2004）編：蘇州歴代名園記：中国林業出版社，161

45 且適園は明代の王鏊によって蘇州郊外で作られた庭園であり、眺農楼について全文は以下である。「作亭曰楚頌，作軒臨田曰觀稼，作亭瞰池曰觀魚，餘若格筆峰浣花泉理絲臺歸帆涇菱港蔬畦柏亭桂屏蓮池竹徑，參時彙列，又作樓曰東望，示不忘本源也。」王鏊（明代）：震澤集，卷十七記：清文淵閣四庫全書本

46 帰田園居は拙政園の東部であり，明代に王心一によって創立された。王心一の「帰田園居記」に，秣香楼について，「樓可四望，每當春夏之交，家田種秣，皆在望中」と記された。言い換えれば，秣香楼から楼の近くに位置した農地の生産場面と風景が望め，これらの農地は園主の財産であった。

47 本文は以下である。「靈運因父祖之資，生業甚厚，奴僮既衆，義故門生數百，鑿山浚湖，功役無已，尋山陟嶺，必造幽峻，巖嶂千重，莫不備盡登躡，常著木屐，上山則去前齒，下山去其後齒，嘗自始寧南山伐木開逕直至臨海，從者數百人，臨海太守王琇驚駭，謂為山賊，徐知是靈運，乃安。」沈約（南北朝）：宋書，卷六十七列傳第二十七：清乾隆武英殿刻本

48 高敏（1996）編：魏晉南北朝經濟史：上海人民出版社，340-341

49 侯紹庄（1997）：中国古代土地關係史：貴州人民出版社，159-160

素を判断し、中に拙政園と吳寛（1435-1504）の東莊などを例として考察した<sup>50</sup>。確かに、東莊には、農業の要素はよくみられ、「東莊記」に「由甃橋而入則為稻畦，折而南為果林，又南西為菜圃，又東為振衣岡，又南為鶴峒，由艇子浜而入則為麥丘，由竹田而入則為折桂橋，區分絡貫，其廣六十畝」<sup>51</sup>と記し、「稻畦」，「果林」，「菜圃」と「麥丘」などの農地は庭園の要素として指摘された。その上，「題吳匏庵東莊諸景二十首」という詩に農業の経営の状況は指摘され，「方田若碁局，水煖稻先熟。一半給官家，一半供饘粥」と記された<sup>52</sup>。ほかの例として，袁枚（1716-1797）の隨園<sup>53</sup>と錢謙益（1582-1664）が記述した聊且園<sup>54</sup>などは挙げられ，庭園あるいは庭園に隣接する土地は農地として利用された。

そうすると，眺望は最初の現実的な要素から生まれ，造園の理想に進化してきたが，中に現実的な要素はまだ含まれた。眺望に関して，造園における現実と理想は混在してきたといえることができる。

### 3. 拙政園の眺望について

#### 3-1. 蘇州古城について

蘇州庭園の代表としての拙政園の検討を始めるにあたって，まず「蘇州古城」という概念を時間と空間の軸で明らかにすることが必要と考えられる。拙政園が創立された正徳年間（1506-1521）から現在まで約 500 年間を経た。この間に，さまざまな都市要素が変化してきた蘇州古城は，固定的なモデルでは抽象化できないと考えてよい。さらに，関連する文献材料は各時期に散在し，時間の要素を考えなければならない。

蘇州は長い歴史を持っている古都である。中国の首都となったことはないが，特に

50 クレイグ・クルナスの明代文化と庭園に関する研究は有名であり，中国庭園の研究に斬新な視角と方法を創造した。しかし，この著作の中にいくつかの史料の間違ひが見つけられ，研究結論の合理性に影響があると考えられる。例えば，拙政園における農業生産の要素について，文徵明の「來禽園」と「瑤圃」に関する記述に基づいて，林檎と梅の総面積は 20 畝と計算され，当時の庭園の面積について 62 畝というデータは取り入れ，経済のための植物の比率は非常に高い結論が得られた。実際は，62 畝のデータは劉敦楨が統計した現存の庭園の面積であり，古地方志に当時の面積は約 200 畝であったことが載られた。Craig Clunas(1996): Fruitful sites: garden culture in Ming dynasty: Reaktion, 16-59

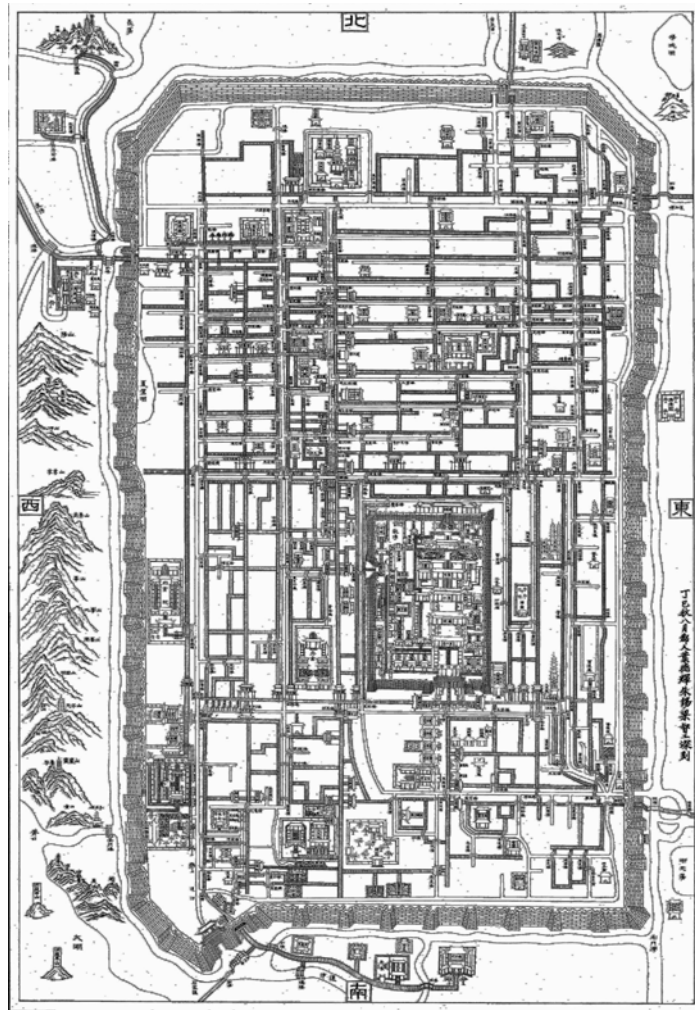
51 李東陽（明代）：懷麓堂集，卷三十文稿十：清文淵閣四庫全書本

52 この引用文から，農地は人工的な方形の形であり，農産品の半分は政府に上納されるあるいは売られることが判る。石璠（明代）：熊峰集，卷九：清文淵閣四庫全書本

53 本文は以下である。「就山起樓臺，常易斂頽，附園有水田菜畦百畝，足供春秋祭掃及歲修洒澤之資。」袁起（清代）：隨園圖説：陳從周ら（2004）選編：園総：同済大学出版社，192

54 本文以下である。「侍御萊蕪李君雍時謁余，而請曰，余爲園于城之北隅，其中亭之曰可以，槐栢翳如，花竹分列，鑿沼矢魚，蹲石陰松，此余之所芟也，其東亭之曰學稼，植以黎藿，雜以柿杏，亭之後除地築場，誅茅爲屋，溝塍迂錯，鷄犬識路，此余之所作勞也，其西亭之曰學圃，樹桑成陰，蔬得以避喝，澗井爲池，土得以滋墳榮木，周遭瓜果狼籍，此余之所食也。」錢謙益（清代）：牧齋初學集，卷四十三記三：四部叢刊景明崇禎本





図－6 宋「平江図」（張英霖『蘇州古城地圖集』より）

宋代以降の経済と文化の重鎮の一つであるといえる。『（同治）蘇州府志』に「禹貢揚州之域，春秋時吳國都也…又四世為闔閭，始築城都之，今府城是也…隋開皇九年平陳廢吳郡，改州曰蘇州」<sup>55</sup>と記録された。言い換えれば，蘇州は春秋時代（前 770-前 476）の間において吳という諸侯の国の首都であり，具体的に闔閭元年（前 514）に吳王闔閭と伍子胥によって創建され<sup>56</sup>，開皇九年（589）に蘇州という名前が変わった。南宋（1127-1279）の間には平江と呼ばれ，この時代に作られた「平江圖」という古地図は，現在まで中国における最古の都市地図として伝えられてきた<sup>57</sup>（図－6）。さらに，今人の発掘と研究によれば，蘇州古城は約 2500 年間立地を変えず，もとの場所で繰り返し再建されてきたという，中国における古城の中でも特別な例であること

55 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷二：清光緒九年刊本

56 陳泳（2006）：蘇州古城結構形態續化研究：東南大學出版社，35

57 董豎泓（1989）：中国城市建設史：中国建築工業出版社，68

が判る<sup>58</sup>。水系も蘇州古城の特徴であり、東西と南北の方向の道路で構成されたグリッドと重なり合い、碁盤の目のような構造になっている。各時期の歴史地図の間に数多の類似点があることから、蘇州古城の空間構造と要素にはある程度持続性と安定性が維持されてきたと考えられる。

なお、蘇州古城の本格的な近代化は 1950 年代から始まり、古城の大規模な改造は 1980 年代から急激に進行したといえる。明代の正徳年間から近代化までの長い間、全般的に、蘇州の人口は持続的に増加し、古城以内における建築の密度は高くなった<sup>59</sup>。

こうしたなかで古城内において塔と山を眺望する風景は、古城の発展とともに影響を受けてきたと推測され、眺望風景に関する分析の前提となる仮説とした。そこで、蘇州古城に関する具体的な歴史に対して、通時的な材料から情報を集めることで 500 年前あるいは 500 年間の一般の状況も推測することを試みた。

### 3-2. 蘇州古城における塔の風景

蘇州古城における塔の風景について、直接の画像の資料は得られないので、主に古城の空間構成を考証することを基礎として、地誌、文学作品、絵画と写真などの間接的な史資料を参考に検証する。

蘇州古城において、現存の古塔は北寺塔、瑞光塔と雙塔の三つである。すでに触れたように、北寺塔は古城の北部の報恩寺に位置し、高さは 76 メートルであり、蘇州古城の最高所である。瑞光塔は古城の南西部の瑞光寺に位置し、高さは 44 メートルである<sup>60</sup>。雙塔は名称が示すとおりツインタワーの形であり、古城の東部に位置し、高さは 24 メートルである<sup>61</sup>。しかし、歴史において塔はこれらの三つにとどまらなかった。宋代の「平江圖」から、当時古城内では約 10 点の塔があったことが明らかである<sup>62</sup>。しかし清代の乾隆十年（1745）に作成された「姑蘇城圖」を見ると、北寺塔、瑞光塔と雙塔の三つしか描かれていない。しかし、「平江圖」には詳細に公共建築や

58 同上, 72

59 蘇州市地方志編纂委員会の『蘇州市志』（江蘇人民出版社, 1995）第四巻の人口についての記述により、明代以来、主に清兵入蘇、太平天国戦争と第二次世界大戦との三つの時期以外、蘇州の城内の人口は概ね増加して来たことは明らかである。

60 楊永生（1996）編：中国古建築全覽：天津科學技術出版社, 388

61 同上, 390

62 「平江圖」は南宋の紹定二年（1229）に作られた地図である。この地図から 10 点ほどの塔の形がみとめられるが、14 点という説（陳其弟の「蘇州の古塔」）もある。この 10 点の中に、塔の形と似ている幢が含まれていると考えられる。幢は塔と違い、スケールは小さい。現存のものスケールと比較すると、「平江圖」は図面の表しに制限されたため、さまざまな建築の縮尺は統一されなかったといえる。「平江圖」などの蘇州の古地図（民国の地図も含まれた）はすべて『蘇州古城地圖集』に収集された地図であり、参考とされた。張英霖（2004）：蘇州古城地圖集：古吳軒出版社

官庁建築が描かれているのと比べると、「姑蘇城圖」には水路と街路が表示の中心とされていることから、建築は簡略化され全貌は表されていないということが出来る。1872年の「姑蘇城圖」と1940年の「吳興城廂圖」では、北寺塔、瑞光塔と雙塔の三つが表示されており、現在の状況と近いと考えられる。『(同治)蘇州府志』には、古城内における塔について、主に北寺塔、瑞光塔と雍熙寺塔などの五つが記された。これらの塔のうち、北寺塔と瑞光塔は規模が大きく、ほかと比べると、圧倒的な風景といえる。

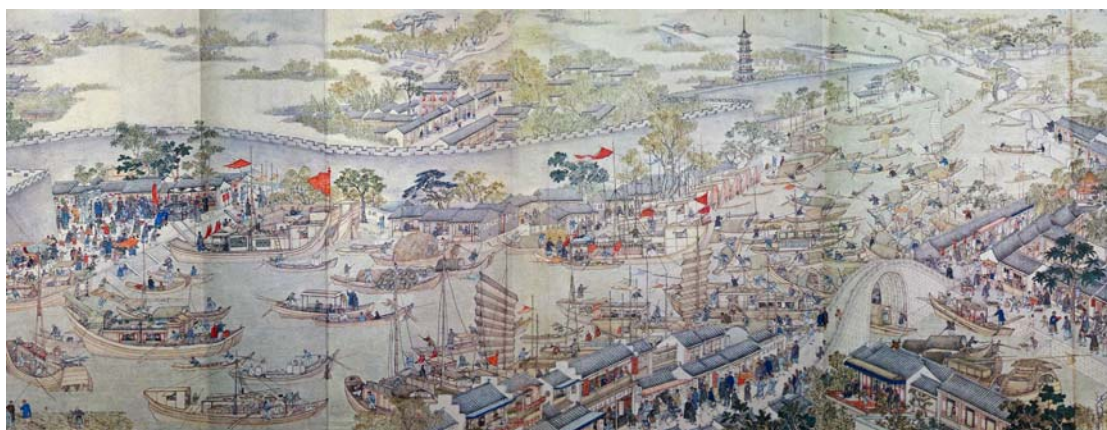
蘇州古城の空間構造において、特に北寺塔と瑞光塔は最高所であり、都市環境のシンボルといえる。すでに触れたように、平面的な配置は「水陸雙碁盤」の構造であり、即ち水系と街路のグリッドが重なりあう構造である。高さの点での配置は以下のような四つのレベルに整理されている。北寺塔と瑞光塔などの「高輪郭」、高さが16から37mまでの城門・役所・仏堂などの「中輪郭」、一階建てと二階建ての普通の民家の「低輪郭」、と水系および橋の「凹輪郭」である<sup>63</sup>。これは中国において宋代以来の古城の普通の形態である<sup>64</sup>。歴史上の空間構造は現在の町に基づいて分析することはできないが、古絵画に明示されている。蘇州の町に関して、「盛世滋生圖」<sup>65</sup>と「乾隆南巡圖」<sup>66</sup>などの古絵画には当時の都市空間と生活が鮮やかに表現されている。二つの古絵画には、乾隆年間(1736-1795)における蘇州古城の状況が示されている。このうち「盛世滋生圖」では、蘇州古城と郊外の広い地域が描かれ、閶門と古城南西隅の部分に北寺塔と瑞光塔が個別に記されている(図-7)。一方「乾隆南巡圖」の第六巻は「駐蹕姑蘇」と呼ばれ、「盛世滋生圖」のように、古城と郊外の広い地域が含まれ、「乾隆帝進胥門」の部分に、胥門の近くの繁華街が描かれ、瑞光塔も示されている(図-8)。これらの三つの画には、塔は遠景とされ、鳥瞰の構図とされた。

63 陳泳(2006):蘇州古城結構形態演進研究:東南大學出版社,80。相秉軍ら(2000):蘇州古城傳統街巷及整體空間形態分析:現代城市研究82,26-27

64 劉敦楨ら(1980)編:中国古代建築史:中国建築工業出版社,313

65 「盛世滋生圖」は乾隆二十四年(1759)に、蘇州の画家徐揚によって、清代の政治の安定と經濟の繁榮を稱賛するために描かれた。高さは35.8センチメートルであり、長さは12.25メートルであり、歴史的に有名な絵巻である。近代以来、「姑蘇繁華圖」という名前も使われている。この図で描かれた範囲について、徐揚は「其圖自靈岩山起,自木瀆鎮東行,過橫山,渡石湖,歷上方山,從太湖北岸介獅和兩山間入姑蘇郡城,自封槃胥三門出閶門外,轉山塘橋,至虎丘山止」と書き、描いた内容については、「其間城池之峻險,廡署之森羅,山川之秀麗,以及漁樵上下,耕織紛紜,商賈雲屯,市廛鱗列,為南東一都會」と記述し、リアリズムの特徴を持って、南東都會としての蘇州の自然風景,社会状況と都市景観を客觀的に映した。以下の文献は参考とした。王潔(2008):從建築與景觀解讀「盛世滋生圖」的資料性:華中建築26(4),21-24。蘇州市城建檔案館・遼寧省博物館(1999)編,徐揚(清代):姑蘇繁華圖:文物出版社

66 「乾隆南巡圖」は「盛世滋生圖」の作者の徐揚によって、乾隆帝の南巡を記し國家の繁榮安定と乾隆帝の統治を稱賛するために描かれた。創作は1764年から1770年までの時期のことである。全12巻であり、北京から紹興までの風景および乾隆帝のツーリングの場面を記録した。この中の、第6巻には、木瀆から虎丘を通して蘇州城までの間の風景が表現され、1766年に創作された。以下の文献は参考とした。楊多(2004):「乾隆南巡圖」研究:中央美術學院修士論文



図一七 「盛世滋生図」「蘇州城西南隅」部分（蘇州市城建檔案館・遼寧省博物館『姑蘇繁華圖』より）

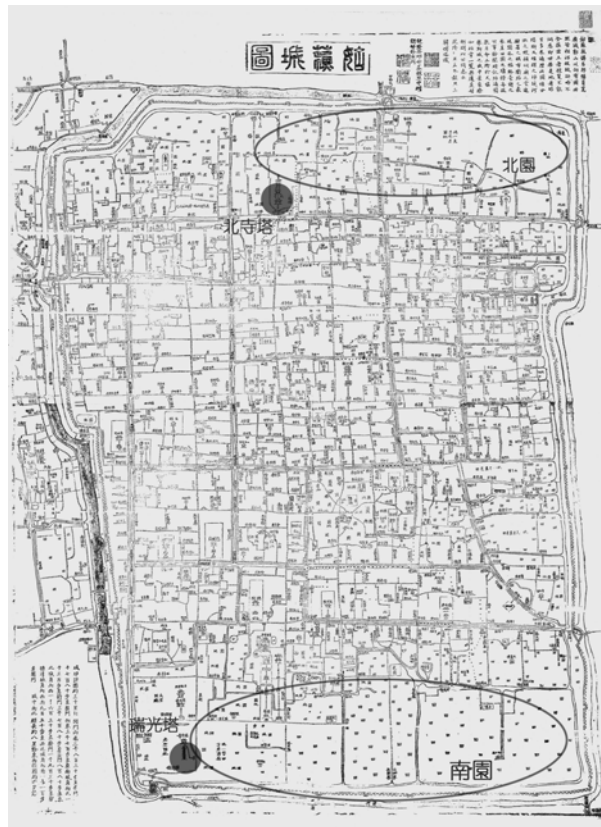


図一八 「乾隆南巡図」（卷六）「乾隆進胥門」部分（王宏鈞『乾隆南巡圖研究』より）

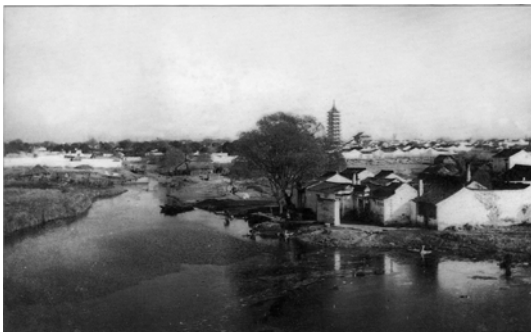
「盛世滋生圖」における二つの画では視点は古城の外にあるのに対し、「乾隆南巡圖（卷六）」における一つの画では視点は古城内にある。これらの画では、塔、城壁と民家の三つの構造レベルが明らかにみられる。民家の地区の密度は高いものも低いものもあるが、街道の両側の店舗以外、大部分の建築は平屋であり、塔は圧倒的なランドマークといえる<sup>67</sup>。

古城内において、当時南園と北園の空地があったことが古地図から判る。前述の古絵画とほぼ同じ時期の1745年に、「姑蘇城圖」という古地図は作られているが、水

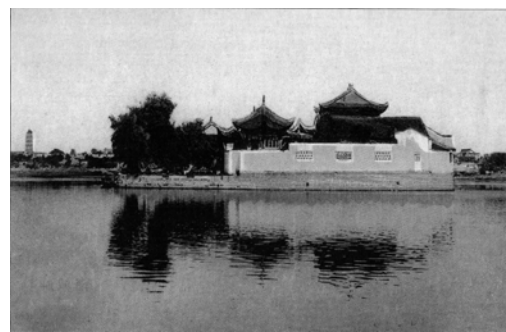
67 三つの画では塔のイメージはすべて図面の先端にあり、構図の背景とされた。確かに山や塔などの要素を構図の背景にすることは中国絵画の伝統の一つであるが、出身地が蘇州である画家の徐揚にとって古城の景観と塔の見え方の認識を反映させたもの一種といっても間違いはない。その上、「盛世滋生圖」の閶門の部分为例として挙げると、画に北寺塔は閶門を描いた部分の遠景に成された。実際に、北寺塔から閶門までの距離は約1.5キロメートルであり、画面のほかの部分に比べると、北寺塔から閶門までの距離が圧縮されたことは明らかである。何故ならば、環境認識と視覚の重要な要素とする北寺塔を表現するために、故意的に画面に取り入れたと推測してよい。



図－9 1745年「姑蘇城圖」にみられる南園と北園（ベースマップは張英霖『蘇州古城地圖集』より）



図－10 1940年代の北園（蘇州地方誌編輯委員會『老蘇州百年舊影』より）



図－11 1900年代の南園（蘇州地方誌編輯委員會『老蘇州百年舊影』より）

路，街路，橋，重要建築と地名などの都市要素が記された（図－9）。図面上に「田」という字で標示された地域が非常に大きな面積を占めているが，これは農地などの都市空地である。特に古城の南端と北端は，それぞれ南園と北園と呼ばれてきた。1872年の「姑蘇城圖」には「南園」と「北園」と標示されているが，1914年の「新測蘇州城廂明細全圖」と1940年の「吳昇城廂圖」では南園と北園の地域は元の通りに空地となっている。南園と北園は古くから春のピクニックをするのに有名な場所であった

68。瑞光塔は南園の西端に位置し、北寺塔は北園の西端に位置し、南園と北園は塔を眺望するのに相応しい場所といてよい。塔の眺望風景について、20世紀以前の直接的なイメージは見つけられなかったが、20世紀初頭の古い写真から<sup>69</sup>、南園と北園から塔が望めることが明らかになった（図-10）（図-11）。

南園と北園のような大規模の空地のほかに、前述の古地図と古い写真に基づく、古城において多くの場所から塔の風景が見えたことが推測できる。宋代の「平江圖」を発端とする古地図には、北寺塔はちょうど護竜街即ち現在の人民路の北端に位置し、



図-12 河西巷から北寺塔を見る（徐剛毅『蘇州舊街巷圖録』より）



図-13 1930年代盤門から瑞光塔を見る（蘇州地方誌編輯委員會『老蘇州百年舊影』より）

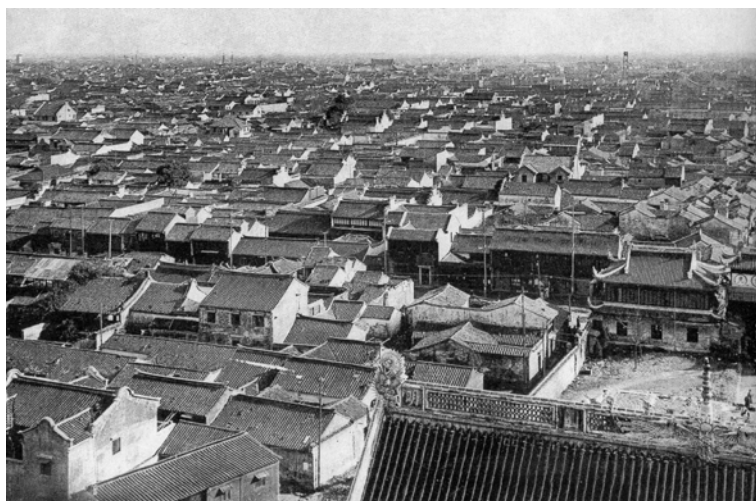


図-14 1930年代北寺塔からの俯瞰（蘇州地方誌編輯委員會『老蘇州百年舊影』より）

68 『(同治)蘇州府志』の「習俗」に「南北園菜花茂盛，踏青人如織」と記された。馮桂芬（清代）：(同治)蘇州府志，卷三：清光緒九年刊本。ほかに、以下の文献にも指摘された。王稼句（2006）：消失的蘇州風景：福建美術出版社，48-49

69 古城における塔の見え方を明らかにするために、可能な限り古い写真を収集し、以下の文献に掲載されている写真を利用した。1910年代から1970年代までの47点の写真を得た。そのうち、北寺塔については25点であり、瑞光塔については11点であり、ほかの11点は雙塔に関する写真である。蘇州市地方志編纂委員會（1999）：老蘇州—百年舊影：江蘇人民出版社。徐剛毅（2005）編：蘇州舊街巷圖録：広陵書社。王稼句（2006）：消失的蘇州風景：福建美術出版社。陸文夫（2000）：老蘇州—水郷尋夢：江蘇美術出版社

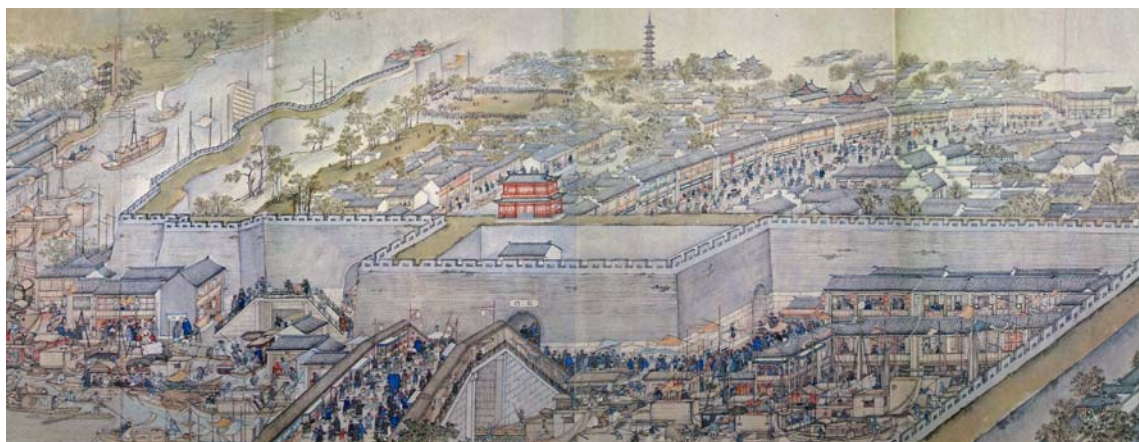


図-15 「盛世滋生圖」にみられる民家と塔（蘇州市城建檔案館・遼寧省博物館『姑蘇繁華圖』より）

近年の研究では「対景」と称されている<sup>70</sup>。このほかの古い写真では、北寺塔の25点の中には、城壁外を視点とした3点を除くと、多くは北園、平門路と人民路から撮られ、さらに北西街、大王街巷と河西巷などを視点場とする例もある（図-12）。瑞光塔に関して、多くの写真の視点場は主に盤門の周辺の地域と南園であり（図-13）、雙塔は三つの塔の中では比較的低いので、写真の視点場はほとんどが近傍である。なお、北寺塔の上から、1930年代の西方への鳥瞰写真、1930年代の南方への鳥瞰写真と1950年代の北方への鳥瞰写真の3枚を見付けることができた。眺望の範囲は非常に広く、特に1930年代の南方への鳥瞰写真にはスカイラインまでの間に古城南部の雙塔と三清殿も見える（図-14）。写真に写った多数の建築は蘇州の伝統的な住宅であり、特徴の一つは二階建ての建物の中に奥行きが非常に小さい中庭が配置されていることである。この中庭は塔の近傍のものしか見えないので、逆に考えると塔から少し離れると多くの民家の中庭からは塔が眺望できないと考えられる。しかし、写真に写った場面のように、塔の上から非常に多くの民家の二階の窓が眺められるから、反対に多くの民家の窓から北寺塔が眺められると推定してよい。すでに触れた「盛世滋生圖」と「乾隆南巡圖」に描かれているように、当時の民家は一階建てが多いので、多くの二階建てのバルコニーからは塔が眺望できると推測される（図-15）。

さまざまな文学の記述と描写から、塔の風景は蘇州における都市イメージの中心となる視覚的な象徴物であることが判る。北寺塔に関して、明代の詩人の高啓（1336-1373）が書いた「入郭過南湖望報恩浮圖」に「雨過春陂柳浪香，布帆歸緩怕斜陽。漁人為指江城近，一塔船頭看漸長」<sup>71</sup>とある。即ち、当時蘇州古城に入る途中

70 董鑿泓（1989）：中国城市建设史：中国建筑工業出版社，71

71 錢穀（明代）：吳都文粹續集，卷四十八詩：清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本

で北寺塔は古城のシンボルとしてはっきりと見えた。似たものとして、清代の徐崧が著した「辛酉九月晦日賦似方丈一源禪師暨省常古菴二監院悟月書記」<sup>72</sup>も挙げられる。古漢文に止まらず、近代以来の散文にもこのような描写を見出すことができる<sup>73</sup>。さらに、古城の一部における全面的な改造と古城の周りの急速な開発を経た現代の蘇州においても、北寺塔は依然として古城の標識と景観の中心といえる<sup>74</sup>。

蘇州古城において、塔を眺望する庭園に関して、蘇州地域における調査から、拙政園のほかに、泌園、東莊、芳草園、紅豆書莊、綉谷と雙塔影園の六つを見つけることができた（表-2）。庭園から眺望される塔までの距離は90メートルから1200メートルの間に分布した。さらに、雙塔影園、紅豆書莊および芳草園は眺望される塔までの距離が比較的近く、関連する記述には特定の視点は記されていないのに対して、ほかの三つは塔から比較的離れており、眺望に関する記述には園内の高所が眺望の視点として指摘されている。例えば、芳草園の眺望について、「樹杪明孤塔，雲邊識遠山」<sup>75</sup>と記されており、視点は言及されておらず、北寺塔のイメージは高所からの眺望ではなく園内の各所で見えた風景と考えられる。それに対して、綉谷という庭園から北寺

表-2 蘇州古城における見塔庭園

庭園	創立者	創立時間	位置	眺望対象	視距離 (m)	視点場	指摘文献
東莊	吳孟融	15世紀後期	葑門之内	雙塔	800	芝丘	「秋日東莊雜詩二十首」
拙政園	王獻臣	正徳年間 1505-1521年	婁齊二門間	北寺塔	950	東廊，擁書閣	「張子青之萬制府屬題吳園圖十二冊」，「擁書閣十詠與仲舅同作」
芳草園	顧凝遠	1570年代頃	花溪	北寺塔	500	無	「花溪雜詠」
泌園	張世偉	萬曆甲寅 1614年	胥門内	瑞光塔	900	叢閣	「泌園記」
綉谷	蔣深	1647年	閶門内後板廠	北寺塔	1200	西疇閣	「西疇閣記」
紅豆書莊	惠周惕	17世紀後期	城東南冷香溪之北	雙塔	270	無	「和韻題紅豆書莊」
雙塔影園	袁學瀾	1852年	太尉橋	雙塔	90	無	「雙塔影園記」

72 本文は以下である。「接踵九層穿雪洞，循環六字繞沙門。吳城幾許人遙見，盡道他家報佛恩。」徐崧（清代）：百城烟水，卷二：清康熙二十九年刻本

73 これについては二つの例が挙げられる。郁達夫（1896-1945）は「蘇州煙雨記」に蘇州へ帰る途中の女の学生が北寺塔を見たら「蘇州に着いた」と叫んだことを記した。同じように、臧克家（1905-2004）の「上天堂」には地元の人にとって北寺塔が故郷の標識としての意義があったことが記述された。王稼句（1989）：消失的蘇州風景：福建美術出版社，92

74 現代の蘇州の都市イメージに関する研究に、リンチの調査方法が用いられ、北寺塔などの塔は蘇州の都市イメージの重要なランドマークであるという結論がまとめられた。費一鳴（2008）：蘇州城市意象解析：蘇州科技學院修士論文，63

75 これは「花溪雜詠」の一つであり、本文は以下である。「横門開不正，側向稻畦間。樹杪明孤塔，雲邊識遠山。儘教遊子住，未許主人閒。曲折沿塘路，時時送客還。」錢澄之（清代）：田間詩文集，詩集卷二十二客隱集：清康熙刻本





図－16 可視範囲の推測図（ベースマップは古城における庭園分布図である）

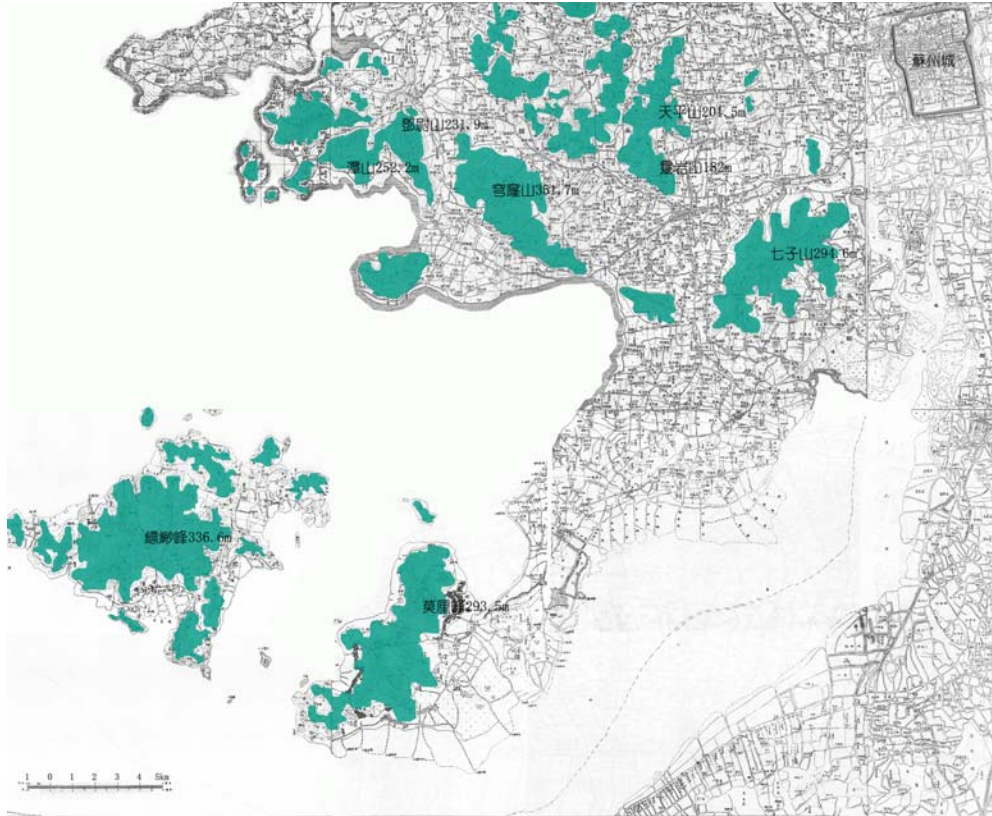
塔を眺望する記述には、西疇閣という築山の上に建てられた高建築が眺望の視点として明確に指摘されている<sup>76</sup>。庭園は塔から離れば離れるほど塔を望む仰角は小さくなり、見えにくくなるため、塔から比較的遠い庭園では、楼閣と築山などの高所から塔を眺望することになったと考えられる。

ちなみに、綉谷の西疇閣と沁園の叢閣のように高い建築が配置されていることは蘇州庭園において普通であり、古城のいたるところに存在した。そうすると、北寺塔の眺望風景を例として分析すると、北寺塔を中心として、北寺塔から綉谷までの距離を半径とする地域に分布した庭園では、園内の高所から北寺塔を眺望する可能性があったと推測される。蘇州古城における庭園分布図<sup>77</sup>から、この地域の範囲は広く、古城の北部における多くの庭園が含まれることが判る。似たように、瑞光塔と雙塔を中心とする地域も広いといえる。したがって、蘇州古城において多くの庭園から塔の風景を觀賞できた可能性があると推測してよい<sup>78</sup>。（図－16）

76 孫天寅（清代）：西疇閣記：陳從周ら（2004）選編：園総：同済大学出版社，278

77 「蘇州古城における庭園分布図」は東南大学建築学専攻の王勁の修士学位論文の『蘇州古典園林理水与古城水系』から引用したが、本章の研究の蘇州地域における庭園調査を参考として修正した。

78 これらの分析方法に基づいて、滄浪亭と獅子林などの現存庭園は定められた範囲に含まれる。滄浪亭と獅



図－17 吳県における山の分布（ベースマップは科学書院『中国大陸五万分の一地図集成』より）

以上をまとめると、近代化以前蘇州古城においては、町からも庭園からも、塔のイメージは日常的な風景の中の要素であったといえることができる。

### 3-3. 蘇州古城における山の風景

蘇州古城は周囲の山から遠くない所に位置し、古城の西と南西方には多くの山がある<sup>79</sup>。蘇州の地形は主に平地であり、山は丘陵性の地形であり、多くは吳県の地域に存在する。古城の近くには、虎丘山、横山、天平山と上方山があり、さらに離れているのは穹窿山、七子山、堯峰山、鄧尉山、西山及び東山などであり、そのいくつかは太湖に臨んでいる（図－17）。この中でもっとも高いのは穹窿山であり、海拔 341.7メートルである。七子山しちしざんも高い山の一つといえ、海拔 294.6メートルであり、これらの分布地域は広く、約 25 平方キロメートルの広がりの中にある。さらに、七子山は古城から比較的近く、主峰から古城の南西端に位置する盤門ばんもんまでの距離は約 8.2 キロ

子林の構成と配置を考察すると、塔を眺望する記述は見つげなかったが、園内の高所から当時塔のイメージが見えたと考えられる。

79 蘇州における山のデータはすべて『蘇州市志』から取り入れられた。蘇州地方志編輯委員會（1995）編：蘇州市志：江蘇人民出版社

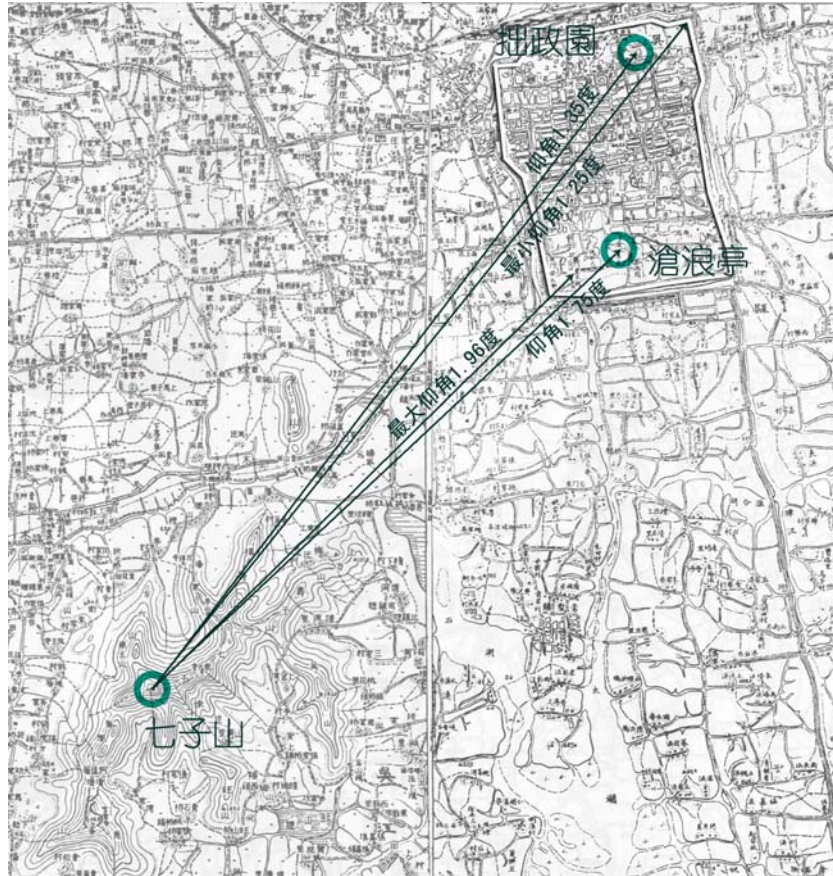


図-18 蘇州古城における七子山を眺望する仰角の分布 (ベースマップは科学書院『中国大陸五万分の一地図集成』より)



図-19 現存の拙政園の配置図 (劉敦楨『蘇州古典園林』より)

メートルであり、拙政園までの距離は約 12.3 キロメートルである。このことから、山の見え方は七子山を対象として分析した。

すでに触れたように、明代と清代における蘇州古城では、一階建てと二階建ての民家建築が構成する屋根の連なりは古城構造のいわば「底」であったといえる。塔、官庁、仏堂などの建築は規模が大きいのが、民家と比べると少なく、古城全体のレベルでは視覚的な妨げの可能性は無視できるといってよい。さらに、庭園は一般的に民家と接続し、民家の地域に分布した。したがって、古城内における視点と視対象となる七子山の間視覚的な妨げは主に古城の城壁と民家の建築であったといえる。城壁について『（同治）蘇州府志』に「高二丈八尺，廣一丈八尺，女牆高六尺」<sup>80</sup>と記され、同治年間（1862-1874）に城壁の高さは 10.5 メートルであった。なお、山までの眺望は高い樹木と樹林に妨げられた可能性もあると考えられる。

ここで城壁を視覚的な妨げとして分析すると、城壁が視覚的な妨げとなるのは、古城内の限られた地域であることが明らかになった。盤門の近くの城壁を障害物として選定し、古城内の平原の海拔を 3 メートルと仮定すると、城壁から 260 メートル程離れば、七子山の山頂が望めるようになる。つまり城壁によって山の眺望が妨げられる範囲は狭く、城壁による妨げの影響は大きくない。むしろ古城内の町において、一階建てと二階建ての民家は重要な構成要素であり、街路などの空間を視点場とした場合、民家が山までの眺望を妨げることになる。前述の計算を続けると、古城内から七子山の山頂を眺望する仰角は 1.25 度から 1.96 度までの間に分布し、非常に小さい<sup>81</sup>（図-18）。例えば、盤門から 260 メートル離れたところは仰角がもっとも大きい場所であるが、ここに一階建ての民家があり棟の高さは 5.5 メートルであると仮定すると、この民家によって山の眺望が妨げられる範囲は住宅から約 120 メートル以内のところである。そうすると、南園の北部の空地以外、古城における多くの街路と屋外空間では、山の風景が通常望めないと推測してよい。

庭園から山の風景を眺望することについて、蘇州地域における庭園調査から、古城内において山が眺望できる庭園として楽圃、五柳園、紅豆書莊および滄浪亭などの 18 点を得た<sup>82</sup>。これらは特定の範囲ではなく、古城内に分布していた。それらのうち、

80 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四：清光緒九年刊本

81 計算方法は以下のとおりである。古城内、七子山から最も近いところは仰角が一番大きい場所であり、城壁の妨げを検討した上で、盤門内瑞光塔の近くの場所を視点場として選定した。その地点での視距離は約 8460 メートルである。それに対して、七子山から最も遠いところは仰角が一番小さい場所であり、古城の北東端は七子山から最も遠く、視距離は約 13250 メートルである。七子山の海拔は 294.6 メートルであり、古城における平地の海拔はすべて 3 メートルと仮定し、人の視点の高さは 1.6 メートルであると設定した。

82 具体的には、18 点の内訳は宋代の楽圃と滄浪亭の二つ、明代の怡老園、蘇家園、藥圃、拙政園、葑溪草

現存の庭園は滄浪亭、藥圃（現在は芸圃と呼ばれる）、拙政園および怡園の四つである。18点の庭園における山の眺望に関する記述は、視点が指摘されなかったものを除くと、すべて「登高眺遠」のモデルであり、視点は台、築山或は楼などの高所である。姜埰（1607-1673）の「藥圃」を例として挙げると、「諸山遶城郭，指點臨高臺」<sup>83</sup>と記され、台が視点場として言及されていた。この特徴は前述の推測結果と合い、即ち古城内における大部分の地域では、地上に立つ人の視点からでは山の風景が眺望できなかったといえることができる。したがって庭園における高所を視点場として、視点を高く上げることで郊外の山が見えるようになる可能性がある。

拙政園の地域では、七子山の山頂を眺望する仰角は約 1.35 度であり、隣接の建築或は樹木に妨げられる可能性が高いといえる<sup>84</sup>。現存の拙政園における見山楼は清代後期に創建され、当時郊外の山が眺望できたと言われ、現在の対聯には山の風景が表現されている。見山楼から七子山を眺望する方向即ち南西方には、玉蘭堂という建築と近くの高い樹木、および住宅がある。玉蘭堂は一階建てであるのに、棟の高さは約 9 メートルである。玉蘭堂はどの時代に建設されたか確認されていないが、清代末期の「八旗奉直会館圖」に同じ場所でスケールが大きい建築がみられる。住宅は張履謙によって 1877 年に造られたのち、改修され、現在まで伝えられた<sup>85</sup>。現存の状況をみると、住宅には二階建ての建築がいくつかあり、北端に位置するのは二階建てであり、玉蘭堂から近いことが判る。したがって、見山楼は二階建てであり、二階の床面の高さは 3 メートル以上であるが、見山楼と玉蘭堂などの高い建築との間の距離は 50 メートルに過ぎないため、「見山」が妨げられていたと考えられる（図-19）。そうすると、遅くとも清代後期に、見山楼から郊外の山の風景を眺望できた可能性はないといえてよい。

滄浪亭の地域では、七子山の山頂を眺望する仰角は約 1.75 度であり、拙政園と同様に隣接の建物或は樹木に妨げられる可能性が高い。しかし、滄浪亭において、看山楼という高建築は山の風景を眺望する場所として設置され、特別であり三階建ての形である。看山楼は清代末期に建てられ、一階は築山であり、二階と三階は楼とテラスである（図-20）。したがって、山の眺望風景が民家に妨げられた可能性は低いといえる。さらに、前述の古地図から、清代に滄浪亭の南側、城壁までの間は、ほとんど

堂、東莊と芳草園の七つ、及び清代の五柳園、志圃、蕉隱、繡谷、怡園、鳳池園、依園、亦園と紅豆書莊の九つである。

83 孫枝蔚（清代）：溉堂集，續集卷六：清康熙刻本

84 山が眺望できる 18 点の庭園のうち、拙政園から分析対象とする七子山までの距離は最も大きく、視覚の仰角が一番小さい。それに対して、滄浪亭は七子山から最も近く、視覚の仰角が一番大きい。

85 張瑞雲（2008）編：補園旧事續編：古吳軒出版社，83-85



図－20 滄浪亭看山樓（劉敦楨『蘇州古典園林』より）



図－21 獅子林見山樓からの眺め

農地であったことが判る。そうすると、清代において滄浪亭の看山樓から「南西遠山」即ち七子山が眺望できたといえる。

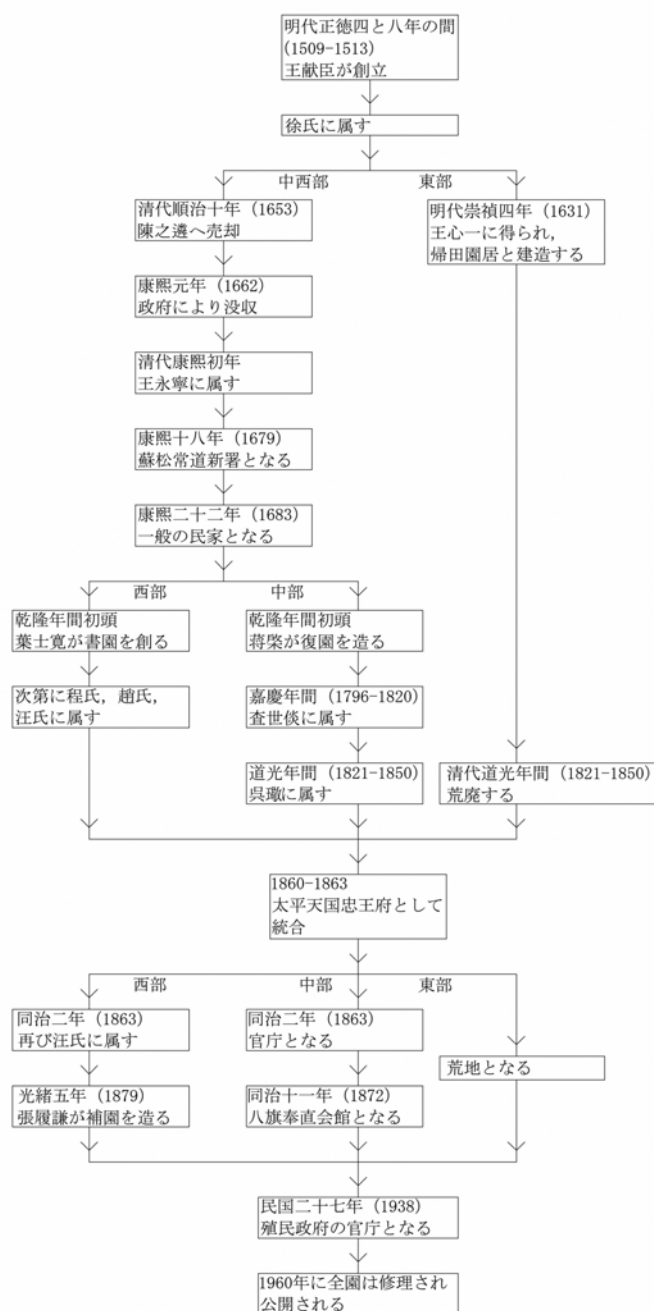
合わせて、明代或は清代におけるこの地域の大気の影響による可視度を測定することは不可能であるが、当代の大気に関する研究から、蘇州を含む江南地域に十月と十一月の日間平均可視距離は約 10 キロメートルであり、最大の可視距離は 20 と 30 キロメートルの間である<sup>86</sup>。いうまでもなく、明代と清代の状況は現在より良い。

これらの古城の都市構造と蘇州地域における山の分布の検証から、明代と清代の蘇州古城において、山は日常的に見えた風景ではなかったといえることができる。多くの庭園では、滄浪亭の看山樓のような高建物を設置し、郊外の山の風景を庭園の中に「生け捕る」ことを目指していた。ところが、一般に当時の高い建築は二階建て或は三階建てであり、さらに庭園の建築は一般の住宅、特に重要な住宅の建築よりスケールが比較的小さい。したがって山の風景は清代後期における拙政園の見山樓のように、周辺の建築に妨げられた可能性がある。前述の 17 点の庭園の眺望には、拙政園の見山樓のような例がいくつかあることも考えられ（図－21）、当時の実際の状況の映しというよりは、「登高眺遠」の伝統からの影響であり、造園の理想と現実が混然としていた状況と考えるべきと思われる。

### 3－4．拙政園の変遷

86 馬曉溪（2008）：長三角區域秋季能見度特征及影響因子分析：東北大学修士論文，12-14

表－3 拙政園の沿革の概要（蘇州地方志編集委員会『拙政園志稿』より作成）



拙政園は蘇州古城の齊門と婁門の間にあり、江南庭園の代表として、歴史上の庭園および現在残っている庭園の中でも一番有名な庭園の一つと言える。「吳下名園惟拙政，名園拙政冠三吳」即ち拙政園は江南第一と言われていた<sup>87</sup>。

拙政園の沿革については、明代と清代において多くの記述が見つけれられる。そのう

87 俞樾（清代）：春在堂詩編，己壬編拙政園歌：清光緒二十五年刻春在堂全書本

ち、徐乾學（1634-1694）の「蘇松常道新署記」<sup>88</sup>と錢泳（1759-1844）の『履園叢話』における拙政園の条目<sup>89</sup>が比較的詳細である。近代以来の研究における拙政園の沿革としては、蘇州市地方志編纂委員会の『拙政園志稿』が最も詳しい（表-3）。『拙政園志稿』によれば<sup>90</sup>、現在の拙政園は約72畝であり<sup>91</sup>、西部、中部および東部の三部分に分けられる。この庭園は明代の正徳年間（1506-1521）に王猷臣によって創立され、文徵明（1470-1559）によって「王氏拙政園記」という園記が記され、三十一景に関する絵画と詩が作られた。その後、徐氏に属するようになった。崇禎四年（1631）に、拙政園の東部の一部は王心一（1572-1645）の下に入り、崇禎四年（1635）に帰田園居という庭園が新たに造られた。その後の長い時期、帰田園居は王氏によって所有され、清代の道光年間（1821-1850）から次第に荒れ果ててきた。現在の拙政園の東部である。帰田園居の部分を除いて、拙政園は徐氏子孫によって1653年に陳之遴（1605-1666）へ売却されたが直ちに康熙元年（1662）に政府に没収され、軍事官庁になった。続いて康熙初年に王永寧の所有を経て、康熙十八年（1679）に再度政府に没収され蘇松常道新署という官庁になった。康熙二十二年（1683）には、蘇松常道は取り消され、庭園は分散され一般の民家になった。乾隆年間（1736-1795）の初頭には、庭園は中部と西部に分けられ、中部の敷地は蔣槩に取得され復園が造られ、西部の敷地は葉士寬に取得され書園が造られた。この時期から元の拙政園は三つの部分に分けられた。中部の復園は嘉慶年間（1796-1820）に、查世倓と道光年間（1821-1850）に吳璣の手を経て1863年に官庁となり、同治十一年（1872）には八旗奉直会館となった。それに対して、西部の書園は汪氏、程氏、趙氏などの手を経て、光緒五年（1879）に張履謙に取得され、補園に変わった。この長い時期のうち、1860年から1863年までの間に、東部、中部と西部は太平天国の皇族の屋敷として、統合されたことがある。民国二十七年（1938）には、三部分は統合されて殖民政府の官庁になり、この時期から再び一つになり、1960年には全園は修繕され公開された。

88 徐乾學（清代）：憺園文集，卷二十六：清康熙刻冠山堂印本

89 本文は以下である。「拙政園在齊門内北街，明嘉靖中御史王猷臣築，文待詔有記，御史歿後，其子好擣菹，一夕失之，歸于徐氏，國初為海寧陳相國之遴所得，未幾以駐防兵，圍封為將軍府，園内有連理寶珠山茶一樹，吳梅村祭酒有詩紀之，迨撤去駐防，又改為兵備道行館，既而為吳三桂壻王永康所居，三桂敗事，刀籍入官，康熙十八年改蘇松常道新署，旋復裁缺，散為民居，後歸蔣太守槩，改名復園，春秋佳日，名流觴詠，有復園嘉會圖，太守歿後，非復舊時景象，嘉慶中為海昌查憺餘孝康所得，修葺年餘，頓還舊觀，今又歸當湖吳菴園相國家，為質庫矣。」錢泳（清代）：履園叢話，卷二十：清道光十八年述德堂刻本

90 蘇州市地方志編纂委員会（1986）編：拙政園志稿：内部発行本，193pp

91 蘇州市地方志編纂委員会の『拙政園志稿』には72畝、劉敦楨の『蘇州古典園林』には62畝と記されている。「畝」は中国において昔から利用されてきた面積の単位である。歴史的に「畝」という単位は変化してきたが、明代からの変化は大きくないといえ、現在では約666平方メートルに当たる。具体的には、唐代から清代までの時期に、1畝は240平方歩に当たり、1歩は5尺に当たり、尺に関する変遷があるが、大体30センチメートルに等しい。全國部分高等師範院校協編會議（1981）：中國古代度量衡器標準變遷表：全國部分高等師範院校協編會議（1981）編：古代漢語參考資料，甲編第二冊：河南師範大學，379-388

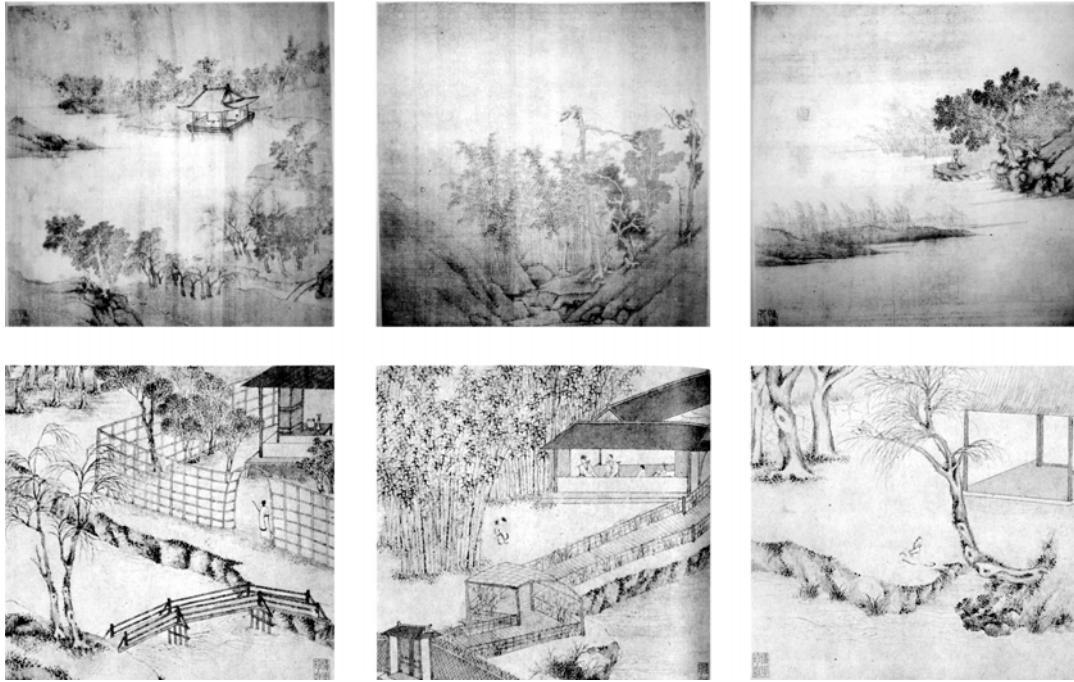


次に庭園配置の変遷については、創立期からの数多の文献と絵画および現代までの既往研究が見つけられた。園記としては文徵明の「王氏拙政園記」、王心一の「帰田園居」、沈徳潜（1673-1769）の「復園記」および張履謙の「補園記」（1894年撰）の四点が挙げられるが、このうち「王氏拙政園記」と「帰田園居」が比較的詳しいといえる。既往研究としては劉敦楨の研究が嚆矢といえ、その後の研究の基準になった<sup>92</sup>。劉敦楨は拙政園における配置の変遷について、「王氏拙政園記」と「拙政園圖」に基づいて、創立期と現存の配置の関連性、特に当時の若墅堂が現在の遠香堂の場所にあったことを推論した。さらに、中部において二回の改造が元の状況に基づいて行われ、現存の建築の配置は清代後期のもとの、山水などの地形は清代初期の意匠にさかのぼることを結論として示した。

しかし、創立期における具体的な配置を復元することには難点が多いと考えられる。例えば、「王氏拙政園記」と三十一景の園詩に載る記述は省略が過ぎるため、当時と現存の状況の関連性は明らかにできないと考えられる。さらに、劉敦楨が参照した「拙政園圖」は文徵明が拙政園について創作した絵画の一部であり、芸術作品の文人画としてどの程度拙政園の様相を反映したかが確認できない。実際、拙政園に関して文徵明は王獻臣の求めに応じて5回絵画を作り、そのうち現存しているのは1533年と1551年の作品であるが、劉敦楨が参照したのは1533年の「拙政園三十一景圖」である<sup>93</sup>。1533年のものは三十一景であり、1551年のものはその中の八景である。両者を比較すると、序文と詩の内容は同じだが、図画に表されたものは違う。この違いには、勿論芸術的な表現の要素はあり、この18年間の間に庭園配置の変化の影響も含まれたと考えられる。特に、「小滄浪」、「湘筠塢」および「釣罾」の三つの景に関して、図画の要素の違いは明らかである（図-22）。「小滄浪」に関して、1533年の版では建築は池に臨み、1551年の版では建築は池から離れ、まがきに囲まれている。さらに地形の変化もみられる。また「湘筠塢」と「釣罾」に関して、1551年の版では1533

92 劉敦楨（2005）：蘇州古典園林：中国建築工業出版社、56-59

93 周道振の『文徵明書畫簡表』（人民美術出版社、1985）には、文徵明が拙政園に関して創作した絵画は4点記述された。具体的には、1513年の「拙政園圖」、1528年の「槐雨園亭圖」、1533年の「拙政園三十一景圖」と1558年の「拙政園圖」である。このうち、現在確認できるのは1533年の「拙政園三十一景圖」であり、園記と園詩および跋文と合せて『拙政園圖』（中華書局、1949）は出版され、中国における拙政園の研究の重要な参考資料である。現在は真筆は蘇州市博物館に保存されている。ほかに、ニューヨークのメトロポリタン美術館に保存されている「拙政園圖冊」が見つけられ、1551年と標示され、いくつかの欧米の書物に指摘されている。Roderick Whitfield(1969): In pursuit of antiquity: Chinese paintings of the Ming and Ching dynasties from the collection of Mr. and Mrs. Earl Morse: Art Museum Princeton University, 71-75; Richard M. Barnhart(1983): Peach Blossom spring: gardens and flowers in Chinese painting: Metropolitan Museum of Art, 64-65; Craig Clunas(1996): Fruitful sites: garden culture in Ming Dynasty China: Reaktion, 32-37. 東京大学東洋文化研究所が編集した『中國繪畫綜合圖録』（鈴木敬ら編、1982-2001）に収集され、ミニチュア版が載せられた。



図－2 2 上, 左から：1533年版の「小滄浪」, 「湘筠塢」, 「釣磬」(中華書局『拙政園圖』より) 下, 左から：1551年版の「小滄浪」, 「湘筠塢」, 「釣磬」(Roderick Whitfield“*In pursuit of antiquity: Chinese paintings of the Ming and Ching dynasties from the collection of Mr. and Mrs. Earl Morse*”より)

年の版と比べると両方とも建築が加えられたことが明らかである。こうした両者の違いから、芸術的な表現を除いても庭園の配置の変化があり、18年間に庭園の改修が行われたことが推測される。中国の造園では拙政園のように長い時期の間で少しずつ改修されていくことが造園のプロセスの一種とってよい<sup>94</sup>。このために文徴明は、庭園の配置と様相が少しずつ変化するのに対応して1513年から1558年までの45年間に5回にわたって拙政園の絵画を創作したものと考えられる。

### 3-5. 拙政園における眺望

周知のように、拙政園から園外の北寺塔を眺望することは中国の庭園における借景の典型といえる<sup>95</sup>。一般に、拙政園の「吾竹幽居」の辺が北寺塔を眺めるのに適当な場所とされている。「吾竹幽居」という亭は拙政園の中央部における池の東側に位置

94 この現象は多くの庭園にみられ、東荘と蘭園は例として挙げられる。東荘については、最初に呉孟融によって創立され、創立期に十景が記された。呉孟融の息子である呉寛に伝えられ、呉寛の時期に二十景が増え、呉孟融の孫である呉奕の時期にさらに新たな建造が行われた。蘭園については、最初に葉恭煥によって創立され、葉恭煥の孫である葉國華によって拡張され、葉國華の息子三人に分けられ、中に葉奔苞によって改修され、半蘭園に建造された。

95 最初に北寺塔までの眺めに着目し、借景という概念に結んだのは劉敦楨と陳從周の1950年代の研究である。陳從周(1956):蘇州園林:同濟大學建築系。劉敦楨(1957):蘇州的園林:南京工學院學報4

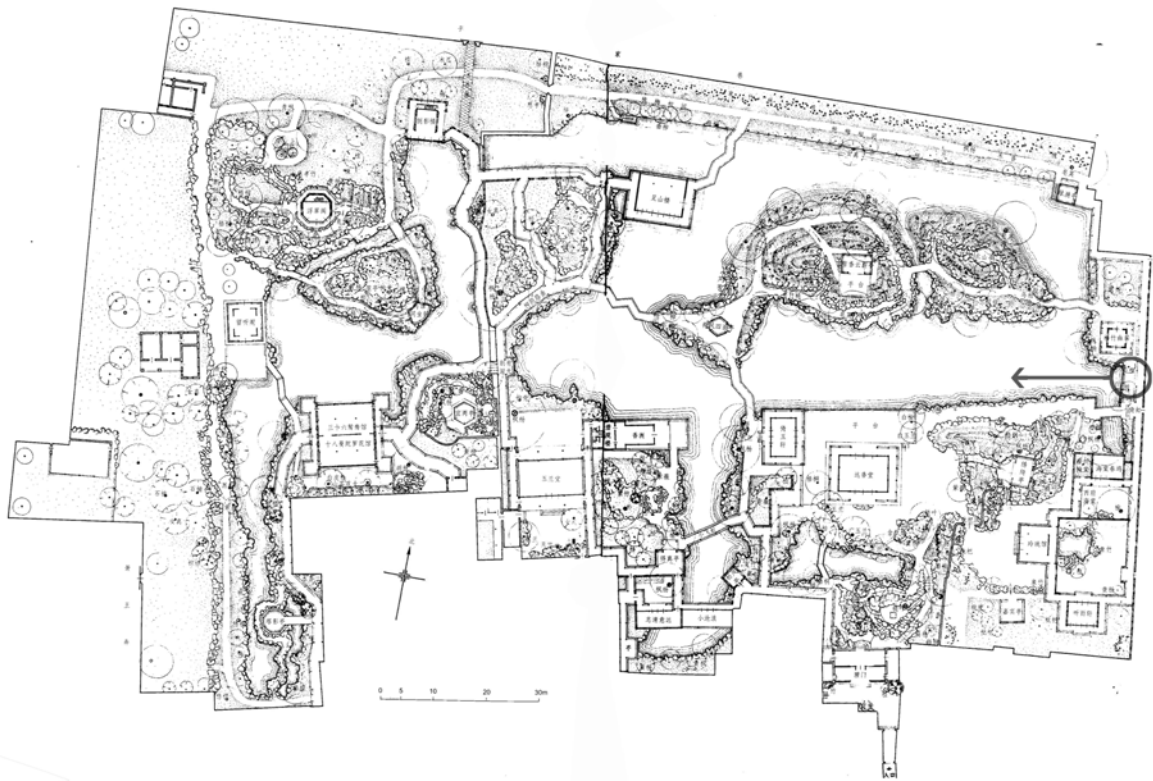


図-23 拙政園平面図（劉敦楨『蘇州古典園林』より）

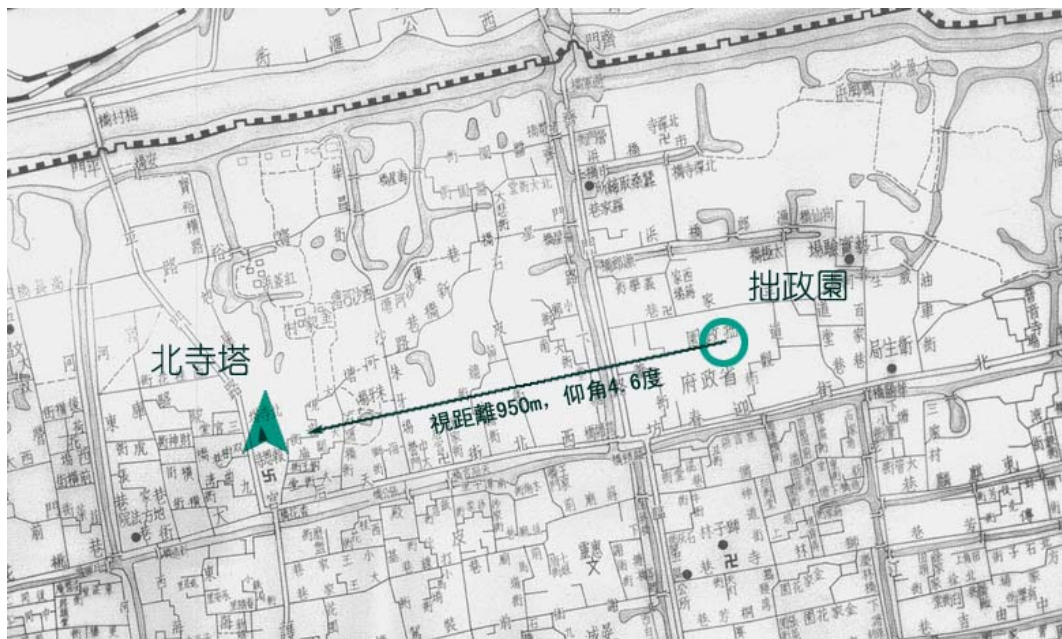


図-24 借景に関する立地分析図（ベースマップは1940年版「吳县城廂圖」である。張英霖『蘇州古城地圖集』より）



図－25 拙政園における借景

し、この東西方向に長い池に臨んでいる（図－23）。さらに、北寺塔はほぼ拙政園の西に位置し、丁度池の西方への延長線まで近い（図－24）。したがって、北寺塔は「吾竹幽居」で西までの眺めの遠景になり、景観の奥行きを出すのに役立ち、特徴ある風景を構成しているといえる（図－25）。現状において「吾竹幽居」から北寺塔までの距離は約 950 メートルである。

北寺塔は蘇州古城の北部における報恩寺に位置する古い塔である。『（同治）蘇州府志』には報恩寺と北寺塔に関する記述が見つけれられる<sup>96</sup>。これによると、報恩講寺は 238 年から 251 年までの間に創立され、北寺塔は 502 年から 557 年までの間に建造され、1131 年から 1162 年までの間に再建された。その後、北寺塔は何回か壊され、修理されたが、近代の考証により、現在存在している塔は主に 1131 年から 1162 年までの間に造られたものである<sup>97</sup>。すなわち、北寺塔は再建から約九百年間ずっと存在してきた。塔は九階建てのレンガと木造であり、高さは約 76 メートルである<sup>98</sup>。そして、報恩寺と拙政園の海拔の差異が小さく無視できるとすれば、眺望の仰角は約 4.6 度である。

拙政園については、すでに触れたように「王氏拙政園記」以外に文徴明が 1533 年に「拙政園三十一景圖」という画を描くとともに、景物ごとに詩を創り、これは画と

96 本文は以下である。「報恩講寺在府城北陲，俗稱北寺，古為通玄寺，吳赤烏中孫權母吳夫人捨宅建…舊有塔十一成，梁僧正慧建，宋元豐時經火，復新，蘇軾捨銅龜以藏舍利，至是再燬，紹興間行人者大圓重建，僅九成。」馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷三十九：清光緒九年刊本

97 劉敦楨（1936）：蘇州古建築調查記：中国营造学社，31

98 蘇州地方志編輯委員會（1995）：蘇州市志：江蘇人民出版社，961



図-26 1533年版「夢隱樓」(中華書局『拙政園圖』より)

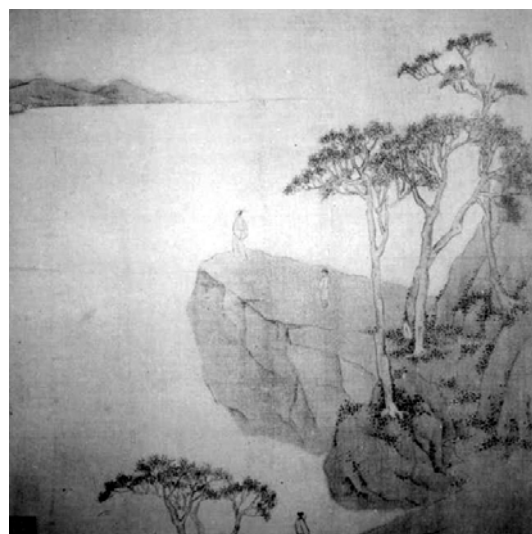


図-27 1533年版「意遠臺」(中華書局『拙政園圖』より)

詩を合せて「拙政園圖冊」と呼ばれる。三十一景の中で、二つには眺望に関する記述がみられる。具体的には、三十一の景の中に「夢隱樓」という景があり(図-26)、「夢隱樓」の画と組み合わせる詩と序文は以下のように書かれた。

「夢隱樓在滄浪池之上，南直若墅堂，其高可望郭外諸山。君嘗乞靈於九鯉湖，夢隱隱字，及得此地為戴顛陸魯望故宅，因築樓以識。林泉入夢意茫茫，旋起高樓擬退藏。魯望五湖原有宅，淵明三徑未全荒。枕中已悟功名幻，壺裡誰知日月長。回首帝京何處是，倚欄惟見暮山蒼。」<sup>99</sup>

ここには、夢隱樓は高い建築であったので、上から郊外の山が眺望できたことが書かれている。眺望の対象とした山は具体的に不明であるが、蘇州の古城から虎丘、天平山、靈岩山と上方山などの西方と南西方の山は比較的近い。例えば、拙政園から虎丘までの距離は約4.7キロメートルであり、天平山までの距離は約12キロメートルであり、七子山までの距離は約12.3キロメートルである。すでに触れたように、後の考証により、当時の夢隱樓は現在の見山樓の場所から近いことがわかっている。さらに、すでに検証したように、清代後期に、見山樓から郊外の山の風景を眺望できた可能性は低い。しかし、創立期の拙政園における夢隱樓は、現存より広く、他に高い建築は比較的少なく、眺望が得られていた可能性があると考えられる。さらに、「意遠臺」というものが設置され(図-27)、詩と序文は以下のように書かれている。

「意遠臺在滄浪池北，高可尋丈，義訓云，登高使人意遠。閒登萬里臺，曠然心目清。

99 倪濤(清代):六藝之一録,卷三百八十七文衡山書拙政園記并詩卷:清文淵閣四庫全書本

木落秋更遠，長江天際明。白雲渡水去，日暮山縱橫。」<sup>100</sup>

「意遠台」について、山の風景が指摘されているが、实景の記述よりも、想像されたものである可能性が高いと考えられる。この詩に「長江」という要素も指摘できるが、実際には遠すぎ、見えないことは確実であるためイメージとしての表現といえることができる。そのため、本文には「眺遠」ではなく、「意遠」即ち遠距離までの想像が強調されている。いずれにせよ、拙政園を最初に建造した時期に、郊外における山までの眺望が造園において意識されていたとみるのが妥当と思われる。

以上の文徴明の庭園詩を除いて、文献の検索から<sup>101</sup>、拙政園の眺望に関する記述が11点得られた(表-4)。この中で、3点は明代のものであり、6点は清代のものである。眺望対象として、山、塔、町と城壁などが含まれ、山が最も高い頻度で指摘されていることがわかった。最初に北寺塔までの眺望を指摘したのは袁枚の「宿蘇州蔣氏復園題贈主人」という漢詩<sup>102</sup>である。詩のテーマから、当時に拙政園の中部はすでに蔣氏によって復園に変えられ、詩に描写された光景は清代の乾隆年間(1736-1795)

表-4 拙政園における眺望に関する記述

時期	対象	視点場	園名	出处	著者	記述
1533年	郭外諸山	夢隱樓	拙政園	「拙政園三十詠」	文徴明	夢隱樓在滄浪池之上南直若墅堂其高可望郭外諸山
1558-1580年	遠山、市井	後苑層樓		「与袁太常顧水部蔣郡守同登徐鴻臚后苑層樓」	郭謙臣	叢林架高閣飄渺插青天遠送千山雨平吞万井煙
1572-1645年	西山、城		歸田園居	「和歸田園居五首」	王心一	遠眺西山爽俯窺井里煙
1572-1645年	雉堞、浮園	放眼亭	歸田園居	「歸田園居記」	王心一	北則齊女門雉堞半控中野似網川之孟城東南一望煙樹彌漫惟見隱隱浮園插青漢間近亦林木蒼鬱不可縱目
康熙年間(1622-1722)	山	樓	拙政園	「拙政園」	盛璋	登樓遐遠眺姑射如刻畫
1736-1797年	塔	亭	復園	「宿蘇州蔣氏復園題贈主人」	袁枚	亭孤容易夕陽斜寶塔金泥射落霞每到細烟生水上晚鳥啼出隔牆花
1747-1823年	寺、塔、城、原、山	擁書閣	書園	「擁書閣十詠與仲舅同作」	趙懷玉	北禪香市古寺當地偏妙香發深省眼底爲誰忙紛紛集人影古塔晴雲鳥語和鈴語因風半入雲畫圖金碧裏指點李將軍春城夕照破楚門東路城荒半夕陽我來增悵望不獨爲春光北郭歸帆歷歷窗中帆遙從林角去夕暝風雨來煙深不知處秋原穫稻頻年嗟早潦農事最關心瞥見黃雲積郊原秋已深陽山積雪遙山雪未消高閣春猶早野燒幾時青東風連日掃
1720-1790年頃	寺、塔、城、原、山	擁書閣	書園	「吳門表隱」	顧震濤	擁書閣有十景曰北禪香寺曰古塔晴云曰春城夕照曰曉寺鐘聲曰野園蔬香曰北郭歸帆曰戴溪月色曰雙沼荷風曰秋原獲稻曰陽山積雪
1764-1843年	遠邨	煙樹雲樓	查氏園	「同張明經潘孝廉過查氏園」	李富孫	石橋蘇磴通幽徑煙樹雲樓見遠邨
1870年代	塔	東廊	拙政園	「張子青之萬制府屬題吳園圖十二冊」	李鴻裔	不見驄馬坊斜陽在高塔
民國頃	山	見山樓	拙政園	「記吳中兩名園」	林天夢	對聯曰西南諸峰林壑尤美春秋佳日艷詠期間
民國頃	塔影	倚虹亭と吾竹幽居の間の廊下	拙政園	「遊蘇備覽」	朱揖文	南岸是一系列的廳堂臺榭北岸是高低起伏的山林中間又有波光塔影

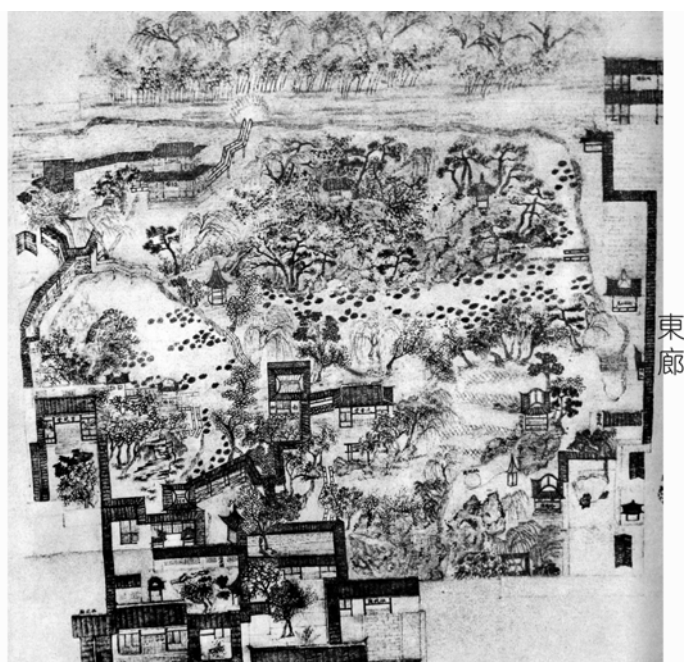
100 同上

101 これらの文献検索は主に中国基本古籍庫に基づいて行った。ほかに、範煙橋が編集した『拙政園志稿』と中国国家図書館の民国文献検索システムも重要な手段である。このうち、『拙政園志稿』から多くの検索結果が得られた。2点の民国の記述以外、ほかはすべて古典漢文である。

102 本文は以下である。「宿蘇州蔣氏復園題贈主人，亭孤容易夕陽斜，寶塔金泥射落霞。每到細烟生水上，晚鳥啼出隔牆花。」范煙橋(1964)：拙政園志稿；鄭曉霞ら(2006)主編：中國園林名勝志叢刊30：廣陵書社，83

であることが判る。本文には「寶塔金泥射落霞」のように夕日の光に照らした塔のイメージが記され、このイメージは北寺塔までの眺望である可能性が高いと考えられる<sup>103</sup>。また概ね同時期の記述として趙懷玉（1747-1823）が書いた「擁書閣十詠與仲舅同作」がある。擁書閣は当時の拙政園の西部の書園に位置し、現在の拙政園の西部の浮翠閣に当たると推測され、園内の最高所である。擁書閣は眺望の場所であるから、「十詠」あるいは「十景」すなわち十景の風景に関する描写のうち、多くは園外の景物までの眺望である<sup>104</sup>。この中で、「北禪香寺」のテーマから、対象は報恩寺であることが判り、続いての「古塔晴雲」の塔は北寺塔であると同定できる。さらに、「遊蘇備覽」という民国の文章が見つけれられ、「吾竹幽居」の近くから現在見える借景の風景のような場面の眺望について記されている<sup>105</sup>。即ち、左側には遠香堂などの建築があり、右側には山林があり、真中は「波光塔影」という風景である。これ以前には、呉園の時期における記述があり、「東廊」即ち東部の廊下から、塔のイメージを望むことができたと言われる<sup>106</sup>。これらの東廊は八旗奉直会館の時期におけることであり、現在の「吾竹幽居」の近くの廊下に当たると推測され、塔を眺望する景観は現在の借景の構成に近いと考えられる<sup>107</sup>（図-28）。そうすると、拙政園から北寺塔までの眺望が庭園観賞において意識されたのは清代の乾隆年間における復園と書園の時期であるということができる。

- 103 王心一の「帰田園居記」には、「有亭曰放眼，西與州之拙政園連林靡間，北則齊女門雉堞，半控中野，似網川之孟城，南東一望，煙樹彌漫，惟見隱隱浮園，插青漢間，近亦林木蓊鬱不可縱目」と記され、放眼という亭から塔が遠眺できたことは記述されているが、塔は庭園の南東方面に位置し、北寺塔ではなく蘇州古城のほかの塔であり、雙塔禪寺の雙塔である可能性はある。しかし、雙塔はこの庭園から約2000メートル離れ、高さはただ33メートルである。写真よりも、文学的な表現の側面が強いといつてよい。
- 104 「十景」は「北禪香寺」、「古塔晴雲」、「春城夕照」、「曉寺鐘聲」、「野圃蔬香」、「北郭歸帆」、「戴溪月色」、「雙沼荷風」、「秋原獲稻」と「陽山積雪」である。「野圃蔬香」、「戴溪月色」と「雙沼荷風」の三つの具体的な場所は不明であり、ほかはすべて園外までの眺望と確認できる。范煙橋（1964）：拙政園志稿：鄭曉霞ら（2006）主編：中國園林名勝志叢刊30：廣陵書社，87-88
- 105 范煙橋（1964）：拙政園志稿：鄭曉霞ら（2006）主編：中國園林名勝志叢刊30：廣陵書社，152
- 106 原文の著者は李鴻裔であり、テーマは「張子青之萬制府屬題吳園圖十二冊」の「東廊」であり、本文は「不見驄馬坊，斜陽在高塔」と書かれた。范煙橋（1964）：拙政園志稿：鄭曉霞ら（2006）主編：中國園林名勝志叢刊30：廣陵書社，98
- 107 「東廊」に関する記述の時期について、以下のように考証した。「張子青之萬制府屬題吳園圖十二冊」は拙政園の中部に関する絵画だが、現在見つけられなかった。テーマから、画家は張之萬であることがわかる。張之萬は1811年に生まれ、1897年になくなり、1847年一甲一名進士になり、同治九年（1870、十一年の説もある）に江蘇巡撫という職務を担当した。当時、江蘇巡撫の官庁は蘇州に位置し、張之萬は拙政園に住んでいた。1871年に、張之萬は閩浙総督という職務に任命されたが、すぐ辞職し、1882年まで拙政園に住んでいた。テーマの「制府」という言葉は一般的に当時の総督の敬称であり、「吳園圖」はこの時期の作品であるということができる。さらに、1872年に張之萬によって同郷の人のクラブとして「八旗奉直会館」が創立され、庭園の名前は「拙政園」と踏襲された。この詩の作家は李鴻裔であり、江蘇布政使の職務を担当したことがあり、蘇州の網師園を持ち、1885年になくなった。したがって、吳園圖という絵画と李鴻裔の詩は1870年代に作り出されたと推測される。同治年間（1862-1874）に吳俊が書いた「拙政園圖」と光緒二十七年（1901）の「八旗奉直会館圖」は「吳園圖」とおおよそ同じ時期のものであり、両者の画面に表れる庭園の構成は近く、現存の配置とも似ている。東の境界として、長い廊下が設置されており、張之萬の「吳園圖」に載る「東廊」に当たると推測される。



図－28 八旗奉直會館圖（劉敦楨『蘇州古典園林』より）

しかし、これ以前から拙政園からは北寺塔が眺望できたと考えられる。文徵明の園記から、創立時期に全園ではすべて三十一景であり、そのうち建築は楼一つ、堂一つと亭軒台などの11点であり、そのほかは郊外の天然風景に近い。「拙政園三十一景圖」には、文徵明の芸術的な表現の特性があるが、庭園空間が広いことが明らかにみてとれる。当時の面積は現存の三倍ほどであり、現在の庭園では、水系が庭園の中心であるが、中央部と西部では曲がりくねっている廊下のほかに、約26点の建築が配置されている。また、創立期の庭園における樹木は新たに植えられ、高くなかったとあってよい<sup>108</sup>。そうすると、当時北寺塔は必ず眺望できたといっても過言ではない。

拙政園の創立期から北寺塔は眺められたが、清代の乾隆年間に庭園観賞の中で意識されるようになったことは、庭園の変化とくに水景と境界の変化に関連すると考えられる。

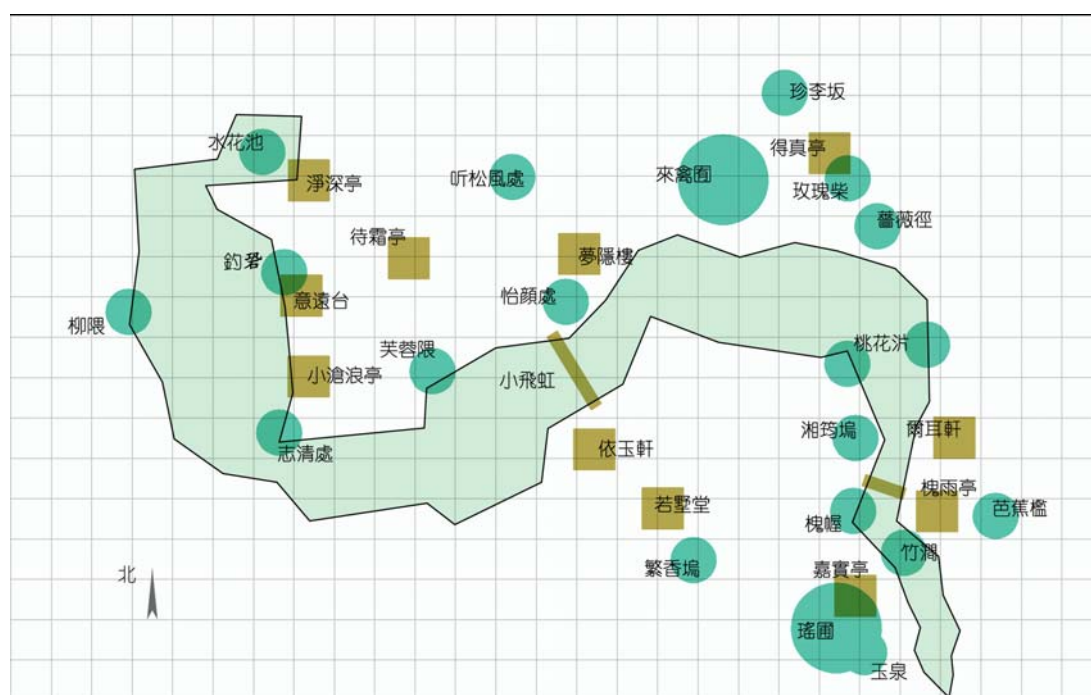
### 3-6. 水景について

すでに触れたように、山水の地形は清代初期の意匠と似ていることはまとめることができ、創立期における具体的な配置は不明であるが、以下は文徵明の園記、園詩と絵画に基づいて可能な限り当時の水景の輪郭を究明する。1533年に創られた「王氏拙政園記」と「拙政園三十一景圖」および園詩に基づいて、庭園の三十一景の分布の輪

108 蘇州市地方志編纂委員会の『拙政園志稿』にある「拙政園現存古老樹木統計表」から、現存する庭園に百年以上の古い樹木が多く残されていることが判る。



郭を推測することができた（図－29）。分布の輪郭図から、主な水景は雁行する形であり、「小滄浪」の西方の、「志清處」から「水華池」までの間は大体南北方向の池であり、「桃花汭」の南側に位置した水景は南北方向の狭い溪流であり、「小滄浪」と「桃花汭」の水景は東西方向に近いことが判る。主な水面はただ滄浪池しかなく<sup>109</sup>、多くの「景」が滄浪池に臨むことが明らかである。三十一景の中で、約半分は水景に関する景観である。特に、滄浪池に臨む「景」のうち、「夢隱樓」、「小飛虹」、「小滄浪」、「志清處」、「柳隩」、「意遠台」、「釣罾」と「桃花汭」の八つの図画に、大面積の池がみられる。言うまでもなく、大面積の池はただ風景の写真ではなく、芸術的な表現のため余白とされた可能性も高いと考えられ、例えば、「夢隱樓」と「意遠台」に表れた山と池の規模は実景よりも、むしろ芸術的な誇張であるといつてよい。実は、園記に「有積水互其中，稍加浚治」と書かれ、園詩の序文に「園有積水，横亘數畝」と記された。言い換えれば、滄浪池は新たに掘られたものではなく元の池に改修を加えたものであり、面積は3畝から7畝までの可能性があり、大きい池とはいえない<sup>110</sup>。その上、小滄浪の北西方の水面に関しては「混漾渺瀰，望若湖泊」



図－29 推定された水景及び三十一景の配置図（円形は自然風致であり，方形は建造物である。）

109 「水華池」の図画に非常に広い水面が表れたが、園記に「小沼」即ち小さい池と記され、水華池に臨む浄深亭に関する画に表される池は実際のスケールに近いと考えられる。

110 「數畝」という言い方は概数であり、1 から 9 までの間の数字はすべて可能である。しかし、漢文の慣例として、一般的には3 から 7 までの数値を意味する可能性が高いといつてよい。蘇州地方志編輯委員

と書かれ、小滄浪の北西方における水面は比較的大きいといえる。さらに、園詩の序文には芙蓉隈と待霜亭の場所について「在坤隅」と記され、これは庭園の南西部である。仮に、桃花泚と小滄浪の間の池は東から西までまっすぐな形だとすれば、芙蓉隈と待霜亭は庭園の北西部に立地することになる。そうすると、この間の池は大体北東から南西に向けて湾曲する形であったと推測される。

庭園の規模について、清代康熙年間に祝聖脈と蔡方炳が編集した『長洲県志』には、創立期の面積は200畝以上であり、現存の庭園敷地の全部に北側の多くの農地が含まれ、水景を中心とした全体的として自然風の風景であったことが記されている<sup>111</sup>。すでに触れたように、庭園の中心とした滄浪池は「数畝」に過ぎなく、現存する水面の半分ぐらいに当たると考えられる。その上、三十一景のうち、十点以上は滄浪池の傍に立地し、槐雨亭を中心とする南東部の地域以外、滄浪池は庭園における「景」を配置する中心といえる。かくして、文徵明が描いた三十一景はこの200畝以上の範囲の全部ではなく、『長洲県志』に載せられた記述の通り、北側の広い農地は所謂庭園の範囲に含まれたと推測される。前述のように滄浪池は元の水系に改修を加えたものであり、築山の記述も見つけられなかった。さらに、三十一景の中に半分以上は植物を主題とし、「拙政園三十一景圖」には約10点の建築が描かれた。これはクルナスの拙政園における農業生産と経済性に関する分析にも合致するが、彼は瑤圃と來禽園などに植えられた植物の経済的な価値を強調した<sup>112</sup>。そうすると、創立期には、200畝の土地の一部を選定し、元の地形に基づいて改修を加え、農業生産の要素を含めた、天然風景に近い庭園景観が創られたものと推測される。

当時、建築と植物の密度が比較的に低かったと考えられる拙政園では北寺塔が眺望できたが、北寺塔を眺望する場面は、現在の「吾竹幽居」と「倚虹」の間の視点における借景と比べると、景観の構成が違うと考えられる。既に分析したように、現在の借景に関する景観の構成には、視点と視対象とする塔の間には視覚的なチャンネルとなる水景があり、塔はちょうどバニッシングポイントの近くに位置し、塔の借景は庭園を特徴づける風景の一つになった。この視覚的なチャンネルは東西方向の水景と両側の樹木で構成された。しかし、文徵明の文献に基づいて推測された創立期の水景は現存の形と違い、現在の借景のような視覚的なチャンネルは構成されなかったと推測してよい。そうすると、仮に劉敦楨が示した結論、即ち創立期に若墅堂の場所は現存

---

會の『拙政園志稿』から、現存庭園の面積は72畝であり、水面はすべて12.1畝であり、中部のものは5.94畝である。したがって、創立期の滄浪池は大きくないといえる。

111 蘇州市地方志編纂委員会（1986）編：拙政園志稿：内部発行本，200

112 Craig Clunas(1996): Fruitful sites: garden culture in Ming dynasty: Reaktion, 22-38

の遠香堂と同じであったとする認識に基づけば、滄浪池の東端の玫瑰柴と桃花汛の近くでは、北寺塔が眺望できた可能性はあるが、塔影とこずえのコラージュというありふれたイメージになったといっても過言ではない。このようなイメージは創立期の拙政園における高所と農地などの場所で望める塔のイメージと同じ、庭園の周辺即ち北園で眺望できる一般的な塔のイメージに近かったといつてよい。したがって、現在の借景の構成は清代中期から形成され、清代後期に固定されてきたものと推測される。

### 3-7. 境界について

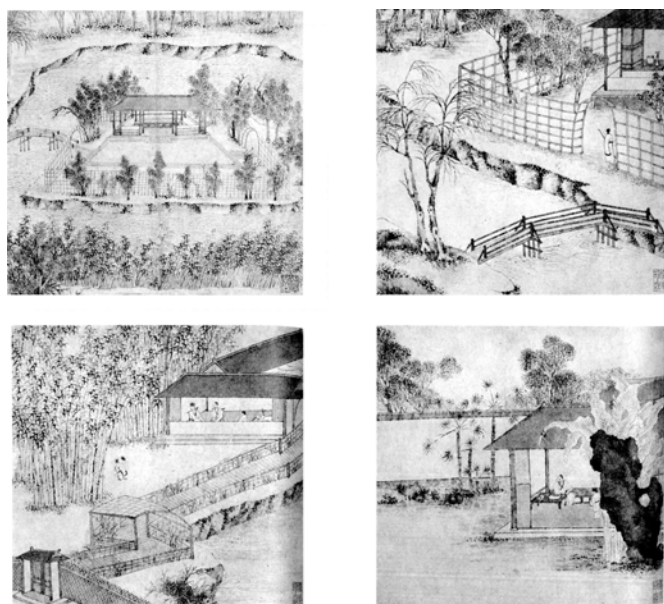
現存の拙政園は白い塀によく囲まれているが、創立期にそのような塀の存在は確認されていない。一般的に、現在の蘇州庭園は境界とする塀に完全に囲まれた求心的な空間、即ち密度が高い都市における「城市山林」として解説されている。しかし、古い時代の古城においては、町だけではなく数多の空地或は農地が存在していたために、庭園の様相、特に庭園の境界と境界に定められた求心性は現在の見え方と同じではなかったと考えられる。

文徵明の文献から、創立期の拙政園は庭園の境界性と求心性が強くなかったと推測される。庭園の境界に関しては、1533年の「拙政園三十一景圖」と「拙政園圖詠」、及び1551年の「拙政園圖冊」から、いくつかの記述が見つけられる。1533年の「若墅堂」の画には、建築の南側にまがきがあり、戸扉もみられる。このまがきの表面に、中国の伝統的な竹で編まれたごごのような模様がみられ、文徵明のほかの作品にも見つけられる<sup>113</sup>（図-30）。1533年の「來禽園」の画には、塀の図像があり、來禽園は塀に囲まれていたはずである。塀の様子は明らかではない。1533年の「瑤圃」の画には、まがきがみられ、「得真亭」の画にも画かれた。これらの画図から、來禽園と瑤圃は塀或はまがきに囲まれ隔絶された土地であったことが判る。その上、1551年の「繁香塢」の画では、建築は小島に位置し、まがきに完全に囲まれ、周辺の空間から隔絶された（図-31）。「小滄浪」と「湘筠塢」の画には、似ている描写がみられる。そうすると当時の各個の「景」はそれぞれ囲まれ、或は「景」の集団は一つのユニットとして囲まれていたといつてよい。建物は人間生活の場所であり、安全のためにまがきなどの境界が設置された。來禽園と瑤圃などはクルナスの指摘の通り生産と経済の意義もあり、外部から隔離されていた。いうまでもなく、このように囲まれたのは「景」

113 例えば、「独樂園圖」が例として挙げられる。國立故宮博物館編輯委員會（1987）編：園林名畫特別展圖録：國立故宮博物館，44-45



図－30 1533年版「若墅堂」,「來禽園」,「瑤圃」,「得真亭」(一段目左から順に,中華書局『拙政園圖』より)



図－31 1551年版「繁香塢」,「小滄浪」,「湘筠塢」,「芭蕉檻」(一段目左から順に, Roderick Whitfield “In pursuit of antiquity: Chinese paintings of the Ming and Ching dynasties from the collection of Mr. and Mrs. Earl Morse”より)

の一部分であったと考えられる。すなわち、庭園はすでに触れたように200畝の土地の一部で造景が行われたということであり、全体を囲う境界がなかった可能性は高いと推測され、庭園における各部分は独立のユニットとして囲まれたのはそのためといえる。このほかに、文徴明の園記にも境界或は出入口に関する記述が見つけれな

った<sup>114</sup>。ところで、1551年の「芭蕉檻」の画には建築、芭蕉と太湖石が画面の中心にあり、後ろに塀が背景としてみられる。この塀は拙政園の境界ではなく、隣の住宅を囲んだ塀であったと推測される<sup>115</sup>。

現存のような白い塀は遅くとも清代初期に建てられたものと推測される。清代の顧汧（1646-?）が創った「拙政園」という詩に「一帯粉牆遮絶澗，四圍奇石似深山」と書かれ、境界とする「粉牆」即ち白い塀が指摘されている<sup>116</sup>。また清代後期における拙政園に関する絵画には、庭園が塀に囲まれていたことを明らかに読みとれる。ところで、1635年に完成された帰田園居には、庭園の境界となる塀が造られ、このことが王心一の園記と園詩に記述されている<sup>117</sup>。しかし、帰田園居は拙政園と比べると性格が異なり、庭園を含む住宅であったとあってよい。

庭園の境界に関して、ほぼ同じ時期の東荘と唐代の輞川<sup>わんせん</sup>という庭園にも似た特徴がみられる<sup>118</sup>。このうち輞川<sup>おうい</sup>は王維（701-761）によって藍田の郊外に造られた庭園であり、中国造園史において文人庭園の濫觴として評価されている。輞川という庭園の状況に関して、王維の『輞川集』と「輞川圖」が後世に伝えられている。「輞川圖」の真筆は残っていないが、宋代の郭忠恕（?-977）臨本は有名であり、文徵明の臨本も存在する<sup>119</sup>。両者を比較すると図画の表現と内容は概ね同様に輞川の二十景が描かれており、王維の真筆に近いと推測できる。図画には、拙政園と似た特徴がみられ、全体的には塀或はまがきなどの境界はないが、建物と建物群は境界に囲まれている。特に、漆園と椒園は遊覧地とともに農業生産の園地として経済的な価値があり、まがきに完全に囲まれている（図-32）。したがって、庭園を造るというのは、立地のごく一部分に人工的な改造を加え、自然風の景観を作り出すことであった。庭園景観は周囲の自然風景と溶け合うような状況であったとすることができる。

114 「玫瑰柴」に関する詩には、「名花萬里來，植我牆東曲」と書かれ、「玫瑰柴」という景は「得真亭」のそばに位置し、庭園の北東部にあった。これらの「牆」即ち塀は庭園全体の境界ではなく、來禽園の境界となる塀であったと推測される。文徵明の園記から、「玫瑰柴」は大体「來禽園」の東側に位置したことが判る。

115 徐渭（1521-1593）が書いた「飲枇杷園送某君東道」は範煙橋によって『拙政園志』に収集された。この詩の序文に、「園逼東鄰鈕給事家」と書かれ、芭蕉檻の東側にはこの鈕給事の住宅があり、図面にみられる塀は住宅を囲んだ塀であったと推測される。画より、塀の向こうには建物があつたことは明らかである。

116 范煙橋（1964）：拙政園志稿：鄭曉霞ら（2006）主編：中國園林名勝志叢刊30：廣陵書社，79

117 「帰田園居記」に「門臨委巷，不容旋馬，編竹為扉，任質自然」と書かれ、境界の存在が暗示されている。「和帰田園居五首」に「牆外連數畝，資為種秫田」と記され、境界とする塀と園外の農地はあつたことが判る。柳遇の「蘭雪堂圖」にも白い塀が描かれた。

118 明代における庭園の境界或は中国造園における庭園の境界は難しい問題であり、系統的な先行研究は未だない。拙政園と大体同じ時期においては、庭園の境界に関して、多様性がみられる。この研究では、明代或は中国造園における庭園境界の問題を探究する目的ではなく、拙政園の境界の問題を中心として、類似する例を含めて分析を行う。

119 文徵明の臨本海外に収蔵され、東京大学東洋文化研究所が編集した『中國繪畫綜合圖録』（鈴木敬ら編，1982-2001）に収集され、ミニチュア版が載せられた。

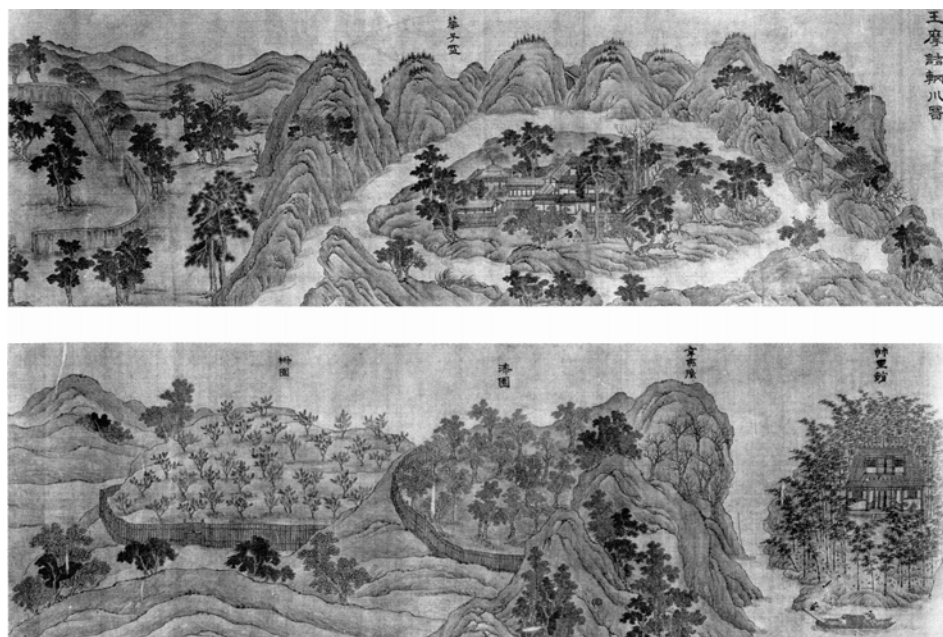


図-32 郭忠恕「臨輞川圖」の一部（国立故宫博物院『園林名畫特展圖録』より）



図-33 一段目左から順に、「菱濠」、「拙修菴」、「耕息軒」、「續古堂」、「桑洲」、「東城」（南京博物院『沈周東莊圖冊』より）

一方、東莊は蘇州古城の葑門の内即ち古城の南西部に位置し、拙政園の創立と近い時期における庭園であり、明代の吳寛（1435-1504）と吳氏ごかんの一族の所有であった<sup>120</sup>。

120 東莊は吳寛の父によって創立され、明代末期まで吳氏の一族の所有であった。文徵明は東莊を遊覧したことがあり、「過吳文定公東莊」という詩を書き、『莆田集』に収集された。この詩のテーマから、文徵明が東莊を遊覧したのは吳寛が亡くなった後であることが判る。

東荘については、「東荘記」という園記がある<sup>121</sup>。これによれば、東荘は約 60 畝であり、園内の景として、稻畦、果林および菜圃などの農地景観、加えて續古堂、拙修菴および耕息軒などの建築が列挙され、境界或は出入口については記述がみられない。庭園の景に関しては、沈周（1427-1509）が「東荘圖冊」を創り、二十四の景を描いたが、現存するのは二十一景である<sup>122</sup>。具体的には、東城、西谿、拙修菴、北港、朱櫻徑、麥山、艇子濱、果林、振衣崗、桑洲、全真館、菱濠、南港、曲池、折桂橋、稻畦、耕息軒、竹田、續古堂、鶴洞および知樂亭の二十一景である。このほかに、二十景と二十一景の記述も見つけられ、「東荘圖冊」に近いものである<sup>123</sup>。東荘の景にも、農業生産の要素は明らかにみられ、特に麥山、果林と稻畦などの単純な農地も景観として扱われている。人工的な造景の要素は比較的少なく、天然の風景に近いといえ、「東荘圖冊」の図がの表現にも明らかにみてとれる。「東荘圖冊」の二十一景には、五つの画に境界が見つけれられた（図-33）。この中で、「菱濠」には菱が植えられた水景が中心として表現され、まがきに囲まれた建物群は遠景とされている。ほかの「拙修菴」、「耕息軒」および「續古堂」の三点には、塀に囲まれた建築と庭が表現されている。「桑洲」には、水辺の桑の林と塀が描かれ、桑の林は塀の外に位置するように表現され、この塀は桑の林の境界ではなく、近くの建築と庭の境界であったと推測できる。なお、「東城」には古城の葺門と城壁が背景として画かれ、東荘と葺門或は城壁の間に境界として塀或はまがきは一切ない。そうすると、東荘の全体が境界に囲まれていたということではなく、人間が住む建築を中心とした景が境界に囲まれていたと推測できる。

創立期における拙政園のような境界性が弱い庭園は、明代及び明代以前の造園における独自の現象ではなく、清代にも見出すことができる。袁枚（1716-1797）の随園はこのような例として挙げられ、庭園を囲む塀は造られなかった<sup>124</sup>。

121 庭園の配置と景観に関する本文は以下である。「蘇之地多水，葺門之内吳翁之東荘在焉。菱濠滙其東，西溪帶其西，兩港旁達，皆可舟而至也。由堯橋而入，則為稻畦，折而南為果林，又南西為菜圃，又東為振衣岡，又南為鶴峒，由艇子濱而入則為麥丘，由竹田而入則為折桂橋，區分絡貫，其廣六十畝。而作堂其中曰續古之堂，菴曰拙修之菴，軒曰耕息之軒，又作亭于桃花池，曰知樂之亭，亭成而莊之事始備，總名之曰東荘。」李東陽（明代）：懷麓堂集，卷三十文稿十：清文淵閣四庫全書本

122 「東荘圖冊」は沈周によって 1478 年に創られた作品であり、沈周の写実主義の絵画の代表である。元はすべて二十四幅であり、現在は二十一幅が残り、南京博物院に保存されている。南京博物院（1966）編：沈周東荘圖冊：文物出版社

123 「題吳匏庵東庄諸景」に二十一景は記された。具体的に、東城、菱濠、竹田、南港、北港、雙井村、方田、果林、桑洲、朱櫻徑、振衣岡、鶴洞、曲池、艇子濱、芝丘、折桂橋、全真館、續古堂、拙修菴、耕息軒と和樂亭の二十一である。費宏（明代）：費文憲公摘稿，卷三：明嘉靖刻本。「題吳匏庵東庄諸景二十首」に二十景は記された。具体的に、東城、菱濠、南港、北港、雙井、方田、果林、曲池、桑洲、振衣岡、朱櫻徑、鶴峒、芝丘、艇子浜、折桂橋、白雲館、知樂亭、耕息軒、續古堂と拙修菴の二十景である。石瑤（明代）：熊峰集，卷九：清文淵閣四庫全書本

124 袁起（清代）：随園圖説：陳從周ら（2004）選編：園総：同済大学出版社，192

## 4. 塔までの眺望

### 4-1. 塔影と名付ける庭園

すでに触れたように、拙政園における北寺塔の眺望の問題を中心として、塔の眺望に関する意識が研究課題として設定された。塔影に関する調査から収集された10点の庭園の中に、6点の庭園が塔、特に塔影を呼称に含み、ほかの4点の庭園には、塔影と名付けられた建築が配置された。また、10点の6点は蘇州地域に位置していた庭園である。以下に10点の庭園を検証し、各庭園の特徴を明らかにする。具体的には、  
こしとうえいえん 顧氏塔影園、しょうしとうえいえん 蔣氏塔影園、とうしゃえん 塔射園、おうしとうえいえん 王氏塔影園、ゆうしとうえいえん 熊氏塔影園、たんえん 雙塔影園、たんえん 憺園の塔影  
とういさんそう 軒、とうえいらんこうかく 鄧尉山莊の塔影、きゅうなんしやういん 山光塔影樓と、さんこうとうえいろう 江安糧道署の塔影樓との10点である（表-5）。

顧氏塔影園は明代に江蘇省の蘇州府で創立された庭園であり、清代まで存続したが現存はしていない。この庭園は文肇祉（1519-1587）が造営し、その後顧苓（1627-?）に譲渡された<sup>125</sup>。庭園の配置については、顧苓の「塔影園記」と万寿祺の「游顧氏塔影園記」との二つの文献が見出された。この塔影園の立地は、文肇祉が「築園于虎丘

表-5 塔影に関する10点の庭園

庭園	所在地	オーナー	創立時期	立地	眺望対象	視距離 (m)	仰角 (度)	視点場	相互の 關聯性	眺望され た山
顧氏塔影園	蘇州	文肇祉と 顧苓	1519-1587 年の間	虎丘の 南側	虎丘塔	450	9.8	無	有	山光
蔣氏塔影園	蘇州	蔣重光	1736-1795 年の間	虎丘の 南側	虎丘塔	320	13.5	無	有	嵐翠
塔射園	松江	張維煦等	1727年	東塔街	圓應塔	45	45	無		松江九峰
王氏塔影園	福州	王永啓	1600年頃	不明	不明	不明	不明	無		山光
熊氏塔影園	南京	熊本	1736-1795 年の間	武定橋	報恩寺塔	800	5.6	無	有	
雙塔影園	蘇州	袁學瀾	1852年	太尉橋	雙塔	90	20	無	有	
憺園	昆山	徐乾學	1631-1694 年の間	玉山の 南側	凌霄塔	600	11.9	塔影軒		玉山
鄧尉山莊	蘇州	查世倓	1770年頃	光福	龜山之塔	350	5.8	塔影嵐 光閣		
邱南小隱	蘇州	汪琬	1624-1691 年の間	虎丘の 南側	虎丘塔	240	16.2	山光塔 影樓		山光
適園	南京	官庁	18世紀	瞻園の 東側	報恩寺塔	1300	3.2	塔影樓	有	鐘山

125 庭園の歴史に関して、『(同治)蘇州府志』に以下のように記された。「塔影園、即海湧山莊、在虎邱便山橋南數武、上林苑録事文肇祉所築、後顧苓云美居之、更名雲陽草堂、中有倚竹山房、松風寢、照懷亭諸勝。」馮桂芬（清代）：(同治)蘇州府志、卷四十六：清光緒九年刊本。文肇祉は出身が蘇州であり、文徵明の孫として当時有名な詩人と書道家であった。顧苓は出身も蘇州であり、歴史で有名な書道家と篆刻家である。陶莎莎（2009）：明清時期蘇州文氏世家研究：蘇州大學修士學位論文、17。震鈞（清代）：國朝書人輯略、卷三：清光緒三十四年刻本。



南村」<sup>126</sup>と記しているように、虎丘という山から近いことが判る。虎丘は、普段「吳中第一名勝」と呼ばれ、前述の玉山のように平野に聳え立っている山であり、塔影園にとって重要な環境要素になっていたと考えられる。現在の山頂に残っている塔は明代の正統年間（1436-1449）に再建された七階建てのレンガ造である<sup>127</sup>。「塔影」と名付けたことは庭園の風景において塔までの眺望が重要な要素であったことを示している。当初は海湧山荘の名称であったが、池を掘り塔影が見えるようになったため、塔影という名称に変わったとされる<sup>128</sup>。さらに、収集し記録には詩文のすべてに塔影が指摘されているが、直接の景像ではなく、代わりに水面の倒影が描写されている。したがって、池の南側或いは西南側は東北方向にある塔と倒影を望む理想的な場所であったと推測される。これに加えて、「山光當戸靜，塔影到池平」<sup>129</sup>にみられるように虎丘を眺望されていた可能性が高い。視距離と仰角については以下のように算定される。塔影園は便山橋の南側に位置し、便山橋までの距離は「數武」と言われるように近い。便山橋は現在望山橋と呼ばれ、山塘河を跨り、山塘街の終点としてちょうど虎丘の正門の外に位置している<sup>130</sup>。望山橋から虎丘塔までの水平距離は約400メートルであり、塔影園から虎丘塔までの距離は約450メートルである（図-34）。虎丘の海拔の高さは約34.3メートルであり、塔の高さは47.7メートルと記録され、また望山橋の近くの海拔は5メートルであることなどを統合して<sup>131</sup>、かくして、園内から塔までの眺望の仰角は9.8度と推定される。

蔣氏塔影園は清代に江蘇省の蘇州府に創立され、前述の顧氏塔影園からも近い。塔影園は虎丘の東南側にあり、乾隆年間（1736-1795）に蔣重光より造営され、1797年に白居易を祈る白公祠に改築された<sup>132</sup>。その後、光緒二十八年（1902）に李鴻章祠になった<sup>133</sup>。顧氏塔影園と同じように、虎丘は園外における重要な景観要素である。さらに、周辺の三つの方向には河があり、「山遙青而點黛，水繞白而曳練」<sup>134</sup>とあることから山と川が環境要素として挙げられる。園外までの眺望については、さまざまな

126 文洪（明代）：文氏五家集，卷十三録事詩集：清文淵閣四庫全書本

127 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十二：清光緒九年刊本

128 顧苓（清代）：影園記：邵忠ら（2004）編：蘇州歷代名園記：中国林業出版社，205

129 秦松齡（清代）：蒼嶼山人集，卷一碧山集，過顧云美塔影園：清嘉慶四年秦瀛刻本

130 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷三十三：清光緒九年刊本

131 蘇州市地方志編纂委員会（1995）：蘇州市志：江蘇人民出版社，191-192

132 この庭園の変遷に関して、『（同治）蘇州府志』に以下のように記述された。「蔣氏塔影園俗呼蔣園，在虎邱東南隅，蔣重光所築別業，有寶月廊，香草廬，浮蒼閣，隨鷗亭諸勝。園本程氏故居，蔣氏有之，蓋襲塔影之名，而非舊址也。嘉慶二年任太守兆珩即塔影園改建白公祠，中有思白堂，懷杜閣，仰蘇樓。」馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十六：清光緒九年刊本。沈德潛の「塔影園記」に関連する記述も見つけられた。陳從周・蔣啓霆（2004）選編：園綜：同濟大學出版社，267

133 錢勤學（2003）：山塘訪古筆記：徐剛毅（2003）編：七里山塘：上海古籍出版社，57

134 沈德潛（清代）：塔影園記：陳從周・蔣啓霆（2004）選編：園綜：同濟大學出版社，267



図-34 顧氏塔影園，蔣氏塔影園と邱南小隱の立地図（ベースマップは科学書院『中国大陸五万分の一地図集成』より）

記述が得られた。「山顛浮圖，隱見林隙，故名」<sup>135</sup>と書かれ，塔影は池の倒影ではなく，塔の実像である。「滿園蒼翠，淡煙平楚，塔影亭亭林樾杪，一抹遙岑入戶」<sup>136</sup>が表すように，眺望の風景は塔と樹木の梢の景像のコラージュである。塔影園の位置は，近年の研究で既に確認されている。現在，塔影園を改築して生まれた李鴻章祠はまだ部分的に残っており，蘇州市の幼児師範学校に使われている<sup>137</sup>。塔影園から虎丘塔までの水平距離は約 320 メートルであり，前述の顧氏塔影園の計算方法と同じに，眺望の仰角は 13.5 度と推定される。

塔射園は清代に江蘇省の松江府に造営されたが，現存していない。この庭園は西林寺の塔から近く，当初は許纘曾（1600 年代左右）の別業であり，後に張維煦が敷地の半分を手に入れ塔射園を造った<sup>138</sup>。拙政園のツバキのように，塔射園における「朱藤」という花は当時に有名であった<sup>139</sup>。既往研究によれば塔射園は歴史で有名な造園家張

135 同上

136 丁紹儀（清代）：國朝詞綜補，卷八，金縷曲日從弟子宣招飲塔影園：清光緒刻前五十八卷本

137 夏冰（1998）：虎丘塔影園考：蘇州史志資料選集，第 23 輯：229-230

138 庭園の変遷に関して，本文は以下である。「塔射園，在東塔術後，本按察許纘曾別業，張孝廉維煦購得其半，營葺成園，以近西林寺塔故名，黃之雋有詩。」孫星衍（清代）：（嘉慶）松江府志：上海書店 1991 年影印本，784。庭園のオーナーに関して，二点の記述が見つかった。許纘曾是出身地が松江府華亭県であり，順治己丑（1649）に進士になり，雲南按察使から退職した。張維煦は出身地も松江府華亭県であり，康熙四十一年（1702）に壬午科挙人になった。趙宏恩（清代）：（乾隆）江南通志，卷一百四十一人物志：清文淵閣四庫全書本。趙宏恩（清代）：（乾隆）江南通志，卷一百三十三選舉志：清文淵閣四庫全書本

139 錢泳（清代）：履園叢話，卷二十：清道光十八年述德堂刻本

南垣が造営した作品であり、最初の名前は西園であり雍正五年（1727）に張氏によって塔射園に改築された<sup>140</sup>。塔射という名前は塔からすぐ近いことを意味する。塔射園の近くに西林禅寺という寺院がある。この寺院は宋代咸淳年間（1265-1274）に創立され、塔は崇恩或は圓應と呼ばれ、洪武二十三年（1390）に再建され、現在まで存在して来た<sup>141</sup>。塔は七階建ての木造である。塔までの眺望について、さまざまな記述が見付けられた。その中の多くの記述に塔の池への投影が観賞の対象として記されている。「送張遠春孝廉下第南歸」という詩には「塔影最宜臨水照，雲心休怨出山遲」<sup>142</sup>と書かれ塔の風景について最も適当な観賞方法は塔の水面に映す倒影を望むことであるとされる。このように水面を利用し園外における観賞対象の倒影を望むことは古典庭園における眺望の意匠の一つであろう。塔射園が立地したところは東塔衝とよばれ、現在まで残ってきた。塔射園から塔までの距離は約 45 メートル、崇恩塔の高さは 47 メートルであることから<sup>143</sup>、仰角は約 45 度と推定される。

王氏塔影園に関する文献は少ないが、主に曹學佺、徐惟起と趙世顯などの唱和の詩が見付けられ、明代に存在していた庭園であると確認される。この三人は明代に福州における文人の代表であり、特に曹學佺（1574-1646）は当時の福州文人のリーダーといえる<sup>144</sup>。曹學佺が書いた『曹大理集』の卷七は芝社集と呼ばれ、中に「三月晦日集塔影園送春」という詩があり、「天垂古塔將分影，水到疎鐘不隔流」<sup>145</sup>との記述がある。この芝社は万歴三十一年（1603）に福州で曹學佺によって組織された文人達の漢詩唱和の集まりであり、主なメンバは徐惟起、趙世顯と謝肇淛などであった<sup>146</sup>。徐惟起（1570-1642）は塔影園に関して数多の詩を創り、例えば「題王永啓塔影圖」に「卜居隣古寺，孤塔影園中」<sup>147</sup>と描写された。このほかに、趙世顯の「三月晦日元旦携酒過集王永啓塔影園送春分得十三元韻二首」には「雲開別院山光入，水溢方塘塔影翻」<sup>148</sup>とある。これらのことより、この塔影園は福州に位置し、王永啓の所有であったものと推定される。『閩中理學淵源考』によれば王永啓は出身が閩県即ち福州であり、万歴三十八年（1610）に進士になり、詩文集と經書説を著述したことが判る<sup>149</sup>。前述

140 何恵明・張蘭森（1988）：松江明代園林話旧：上海市文史館文史資料工作委員會（1988）編：歴史文化名城－上海：上海社会科学院出版社，157

141 孫星衍（清代）：（嘉慶）松江府志：上海書店 1991 年影印本，724

142 劉嗣綰（清代）：尚綱堂集，詩集卷四十三不易居齋集，送張遠春孝廉下第南歸：清道光大樹園刻本

143 松江文化志編写組（2001）編：松江文化志：百家出版社，197

144 陳超（1999）：曹學佺與閩中才子交遊考：東南學術 6，171-176

145 曹學佺（明代）：曹大理集，卷七芝社集，三月晦日集塔影園送春：明萬歴刻本

146 陳超（2007）：曹學佺研究：福建師範大學博士論文，177

147 徐惟起（明代）：鼇峰集，卷十五言律詩：明天啓五年南居益刻本

148 趙世顯（明代）：芝園稿，卷二十三言律詩：明萬歴刻本

149 李清馥（清代）：閩中理學淵源考，卷四十七，員外郎王永啓先生宇：清文淵閣四庫全書本

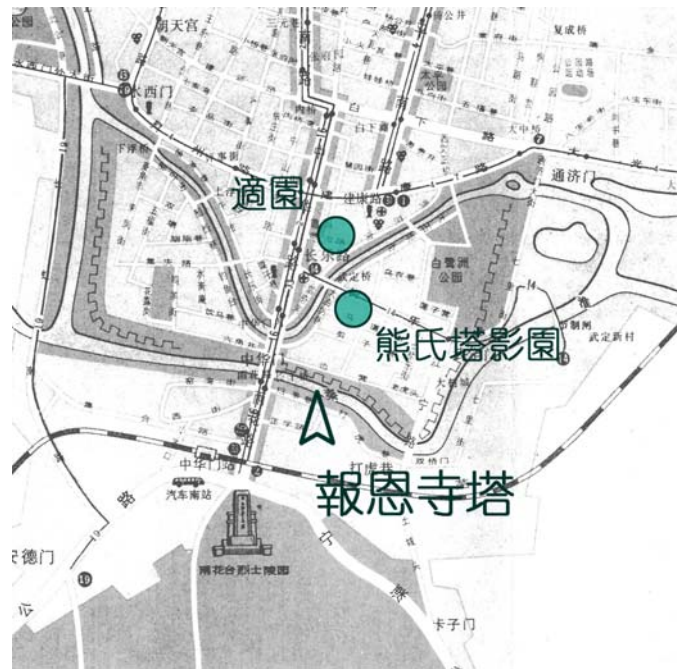


図-35 熊氏塔影園と適園の立地図（ベースマップは南京市勘测设计院『南京市交通圖』より）

の引用文によれば、庭園は寺院から近く、寺の塔が眺望できたことが明らかである。塔の景像に関する記述には、池に映された塔影の描写が多い。

熊氏塔影園に関しては、「題熊丈滌齋塔影園圖」という詩の注釈に「園爲前明姚南礪市隱園舊址，龔芝麓復營池館，攜橫波夫人居之，園瀕於湖，可瞰報恩寺塔影，故名」<sup>150</sup>と記述され、眺望対象は報恩寺塔であったことが判る。この庭園は南京の武定橋油坊巷に位置し、明代に姚元白によって造営され、姚氏の子と孫によって拡張され、清代に龔芝麓（1615-1673）に譲渡され、乾隆年間（1736-1795）には熊本に属し、塔影園という名称に変えられた<sup>151</sup>。姚元白が造営した市隱園に関しては「市隱園」という園記があるため、乾隆年間までの長時期に、庭園の配置は大きく変わったと考えられる。オーナーの熊本の出身が南昌であり、康熙（1661-1722）の間に編脩という官吏を担当し退職後は南京に住んでいた<sup>152</sup>。眺望対象とする報恩寺塔は現存していないが、当時は有名な建築であり、高さは約77メートル<sup>153</sup>であった。庭園と隣接した武定橋は現存する。庭園から報恩寺塔までの距離は約800メートル、仰角は約5.6度と推定される（図-35）。

雙塔影園は袁學瀾（1804-1880）によって1852年に蘇州の太尉橋の近くで造営され、

150 蔣士銓（清代）：忠雅堂文集，卷十四：清嘉慶刻本

151 陳植（1983）：中国歴代名園記選註：安徽科学技術出版社，171-172

152 朱則傑（2000）：袁枚蔣士銓訂交考：蘇州大學學報（3），45-49

153 「大報恩寺塔高二十四丈六尺一寸九分。」顧炎武（清代）：肇域志，卷五：清鈔本



図-36 雙塔影園の立地図（ベースマップは劉敦楨『蘇州古典園林』より）

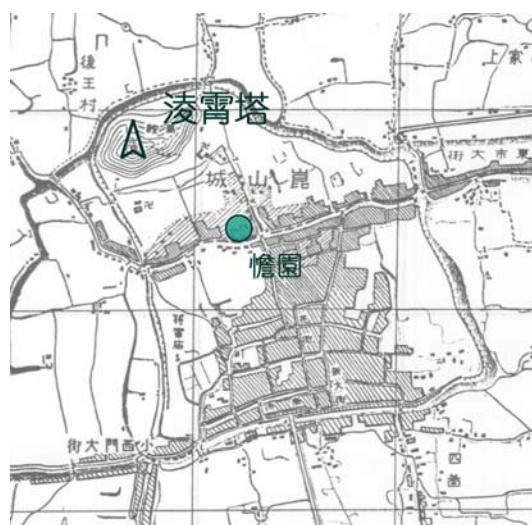


図-37 憺園の立地図（ベースマップは科学書院『中国大陸二万五千分の一地図集成』より）

当初は住宅の隣接する1畝の空地を利用して庭園が造営された<sup>154</sup>。庭園にはさまざまな植物が植えられ、山が築かれ、周囲に廊下が建造された。庭園から概ね南に雙塔が見える<sup>155</sup>。この庭園は現存し袁學瀾故居の東部に位置している<sup>156</sup>。雙塔というのは、雙塔禪寺におけるツインタワーであり、宋代の雍熙年間（984-987）に建造され<sup>157</sup>、高さは約33メートルである<sup>158</sup>。雙塔影園から雙塔までの距離は約90メートルであり、仰角は約20度と推定される（図-36）。

憺園は清代に蘇州府崑山県における庭園であり、古城の内の半山橋の西側に位置した<sup>159</sup>。徐乾學（1631-1694）が憺園の創立者であるが、その出身地が崑山県であり康熙庚戌（1670）に進士になった文人である<sup>160</sup>。憺園は現存していない。憺園の立地については、「半山」という橋が重要な結節点であることや、山と川との関連性の記述が認められる。「憺園詩為健菴編脩作」に書かれた「隔縣通婁水，閉門收玉山」<sup>161</sup>のように、婁水という川と玉山は憺園の周辺の重要な環境要素であるといえる。特に玉山

154 袁學瀾（清代）：雙塔影園記：邵忠ら（2004）編：蘇州歷代名園記：中国林業出版社，261

155 同上

156 施曉平（2000）：渡橋袁氏：蘇州史誌資料選集，84

157 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十二：清光緒九年刊本

158 蘇州市地方志編纂委員會（1995）：蘇州市志：江蘇人民出版社，960

159 「刑部尚書徐乾學宅在半山橋西，堂曰冠山堂，復構傳是樓，聚書數萬卷於其中。宅後有園名憺園，中有怡顏堂，看雲亭。又有遂園在馬鞍山北麓，亦名北園，聖祖仁皇帝南巡幸焉，今廢。」馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十七：清光緒九年刊本

160 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷九十五：清光緒九年刊本

161 本文は以下である。「不勞多結構，竟日足躋攀。隔縣通婁水，閉門收玉山。荷風清簟外，竹日曲欄間。繞閣雲長住，近人鷗不還。花繁在藥圃，心遠鍵松關。覓徑青林入，題詩錦石斑。書編隨坐臥，朋舊散襟顏。只恐金閨客，棲遲未許閒。」施閏章（清代）：學餘堂集，詩集卷四十四五言排律，清文淵閣四庫全書本

は昆山の城壁内側で古城の西北部に位置し、周囲の長さは1.5キロメートル、海拔は約80.8メートルである<sup>162</sup>。形は馬の鞍に似ているので別名は馬鞍山である。平野に聳え立っている山であり、「孤峰特秀，四望皆百里無所蔽」<sup>163</sup>に示されるように重要な景観要素になった。頂上には凌霄という塔が建てられたが、現存していない。この凌霄塔は最初に梁代の天監年間（502-519）に建造され、乾隆三十年（1765）に再建され、同治年間（1862-1874）にはまだ存在していた七階建ての木造建築であった<sup>164</sup>。憺園から園外までの眺望、即ち玉山と凌霄塔を対象とした眺めが際だった風景であるといえる。憺園と玉山の間には高い建物がなく、単に農地と一般の民家しかなかった<sup>165</sup>。

「階前丘壑居然古，檻外峰巒若爲堆」<sup>166</sup>と「晴峰壓檻青偏好，老鶴迎門雪未疎」<sup>167</sup>などの園詩に示されるように、眺望の視覚的な構成として建築が視点場として指摘された。軒と楼がそれぞれ「塔影」と「納山」と名付けられたことはこの眺望の表現であり、「塔影」と名付けた軒は最も北部に設置され、軒の前に位置する池に映された塔影が見ることができた<sup>168</sup>。つまり、二つの建築は園外の風景を眺望する場として意匠され、園外までの眺望が造園の上で意識されていたといえる。憺園における塔までの眺望の構成には、視距離と仰角はとくに重要な指標と考えられる。視距離について、半山橋は参考基準といえ、具体的な位置に関してさまざまな記述が見つげられた。一般的に、半山橋は昆山県の庁舎から玉山までの道程の midpoint であると言われた<sup>169</sup>。しかし昆山県の庁舎から玉山までの距離について、互いに矛盾する記述があり、確認は難しい<sup>170</sup>。一方、清代の「昆山新陽縣城圖」<sup>171</sup>と近代の地図<sup>172</sup>を比較すると、両者の間

162 玉山の大きさと高さについては、清までの多くの地誌に「廣袤三里，高七十丈」という記録がある。例えば、凌萬頃（宋代）：（淳祐）玉峰志，卷上：清黃氏士禮居鈔本；楊諤（元代）：（至正）崑山郡志，卷一：元至正元年修清宣統元年本；王鏊（明代）：（正德）姑蘇志，卷九：清文淵閣四庫全書本；王學浩（清代）：（道光）崑新兩縣志，卷二：江蘇古籍出版社；徐崧（清代）：百城烟水，卷六：清康熙二十九年刻本；馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷七：清光緒九年刊本。しかし、清代の張雲章が著作した「樸村文集」（清康熙華希閔等刻本）卷二十三には「其高不能數十丈」と書かれた。実は、さまざまな地誌が事実ではなく前代の文献を基準とする傾向がみられる。こちらでは江蘇省崑山縣縣志委員會の「崑山縣志」（上海人民出版社，1990）のデータを取り入れた。

163 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷七：清光緒九年刊本

164 同上，卷四十三

165 本文は以下である。馬鞍山適當其後，間以平田矮屋，望之在數百步中，列若藩籬，舒若屏障。」張雲章（清代）：樸村文集，卷二十三：清康熙華希閔等刻本

166 錢澄之（清代）：田間詩文集，詩集卷二十二客隱集：清康熙刻本

167 吳綺（清代）：林蕙堂全集，卷十六亭泉詩集：清文淵閣四庫全書本

168 本文は以下である。「關其後為遊息之所，有堂曰青林，曰怡顏，有亭曰看雲，最後有塔影軒，則以山之塔下映於軒前之沼而名之也，軒左有樓，閎敞高朗，窗牖四達。」張雲章（清代）：樸村文集，卷二十三：清康熙華希閔等刻本

169 この言い方に関して、二つの記述が見つげられた。「崑邑之勝在馬鞍山，而半山橋為山之喉襟焉，云半山者以縣治至山當路之半也。」鄭文康（明代）：平橋稿，卷九序：清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本。「半山橋，縣治西北，跨至和塘，崑邑之勝在馬鞍山，自縣治至山橋當路之半故名。」趙宏恩（清代）：（乾隆）江南通志，卷二十五輿地志：清文淵閣四庫全書本

170 その矛盾は同じ文献にも見つげられた。例えば、馮桂芬の『（同治）蘇州府志』（清光緒九年刊本）卷七には「馬鞍山在縣治西北一里」が書かれているが、卷二十一に「縣治在馬鞍山東南三里」が記述されて

で、水路の一部分と道路および山の構成は似ていることが明らかになった。「昆山新陽縣城圖」に載せられた半山橋は概ね近代の地図に描かれた亭林路と西塘路の交点から近いと推測される。その上、徐乾學の自宅の場所は現在の昆山中学校に当たるといふ考証が見つけられた<sup>173</sup>。近代の地図ではこの中学校はちょうど交点の西側に位置する。このように、憺園の立地は現在の昆山中学校の場所から近く、憺園から玉山の頂上にあった凌霄塔までの水平距離は約 600 メートルと推定される（図-37）。前述のように、玉山の海拔は約 80.8 メートルである。それに対して、昆山の平野の海拔は低く、特に古城における北部の地域の海拔は約 3 メートルである<sup>174</sup>。したがって憺園に対する玉山の相対的な高さは約 78 メートルと推定される。凌霄塔は大体山の頂上に位置し、万歴三十二年（1604）から七階建ての木造になり、高さは「一十五丈」即ち 48 メートルである<sup>175</sup>。「馬鞍山圖」<sup>176</sup>に描かれた玉山の高さは大体凌霄塔の二倍である。そうすると、憺園における玉山までの眺望の仰角は約 7.5 度であり、凌霄塔までの眺望の仰角は約 11.9 度であると計算された。

鄧尉山莊という庭園には塔影嵐光閣という建物があり、名称に塔と山の眺望風景が表現されている。鄧尉山莊は蘇州郊外の光福鎮に位置し、現存していない。清代において查世倓は明代の徐達左が創立した耕漁軒の地跡を手に入れ、鄧尉山莊を築いた<sup>177</sup>。耕漁軒は歴史上有名な庭園であったが、查世倓が庭園を造る前に、廃棄された。したがって、庭園配置に関して両者の関連性は弱いといつてよい。蘇州地域における庭園調査から、鄧尉山莊は鄧尉山の北裾と下崦湖の南岸の間に位置し、山と湖が重要な環境要素であったことが判る。庭園の配置に関しては「鄧尉山莊記」が見つけられ、ここでは二十四景が記述されている<sup>178</sup>。この中で建築の景は 18 点あり、釣雪潭という池もあったが、そのスケールは大きくなかったと推測される。このほかに楊柳灣という堤があり、塔影嵐光閣はちょうど堤の端に位置し、場所は下崦湖の湖岸に当たると推測される。塔影嵐光閣という高所から亀山の塔と太湖の山が眺望できたことが記述さ

いる。

- 171 汪堃・朱成熙（清代）：（光緒）崑新兩縣續修合志：江蘇古籍出版社 1991 年「中国地方志集成」影印本，10
- 172 江蘇省崑山縣志委員會（1990）編：崑山縣志：上海人民出版社，扉
- 173 呉仁安（2001）：明清江南望族與社會經濟文化：上海人民出版社，26
- 174 江蘇省崑山縣志委員會（1990）編：崑山縣志：上海人民出版社，111
- 175 王學浩（清代）：（道光）崑新兩縣志，卷十，沈應奎「重脩山塔記」：江蘇古籍出版社 1991 年「中国地方志集成」影印本。古い尺度の換算は劉敦楨の『中国古代建築史』（中国建築工業出版社，1980）の付録に載られた「歴代尺度簡表」を基準とした。
- 176 汪堃・朱成熙（清代）：（光緒）崑新兩縣續修合志：江蘇古籍出版社 1991 年「中国地方志集成」影印本，10
- 177 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十五：清光緒九年刊本
- 178 張問陶（清代）：鄧尉山莊記：馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十五：清光緒九年刊本



図-38 鄧尉山莊の立地図（ベースマップは科学書院『中国大陸五万分の一地図集成』より）

れ、この塔は光福塔であったと推定される。光福塔は亀山の山頂に位置し、高さは約25メートルであり、亀山の高さは約15メートルであったと推測される<sup>179</sup>。塔影嵐光閣から塔までの水平距離は約350メートルと推定される（図-38）。塔影嵐光閣における視点の高さは4.6メートルと仮定すると、仰角は約5.8度と計算される。

同様に、邱南小隱という庭園にも山光塔影樓という建築が設置された。庭園は虎丘の近くに位置し、名前から虎丘の南側にあったことが判る。この庭園は清代に汪琬（1624-1691）によって建造され、具体的な場所は虎丘の二山門の東側であった<sup>180</sup>。庭園の配置は、「迎汪鈍翁先生至丘南小隱」という詩に記述されている。「園居無一畝，攬勝在凭樓。近市仍違俗，看花最耐秋。山光庭樹引，塔影硯池收。會得幽棲概，何須問虎丘。」<sup>181</sup>この記述から、庭園の面積は大体1畝であり、園内に池があり山光塔影樓は園内の景勝地であったことが判る。即ち、庭園が小さくいだけに、園外までの眺望が重要な風致であったといえる。山光塔影樓以外には、園内において乞花場という

179 亀山は鄧尉山の支脈であり、塔山という名前で呼ばれた。『(同治)蘇州府志』に「鄧尉山在府西南六十里，錦峰山西南，相傳漢有鄧尉隱此，亦名光福山，以地名光福里也，山之東麓二里有妙高峰，下有七寶泉，西有壽巖泉，山之西北曰龜山，光福塔在焉，俗名塔山，盧志龜山上有光福寺，即梁九真太守顧氏之家山也」と記述された。亀山の高さに関する記述は見つけられず、写真に基づいて推定した。光福塔に関して、『光福鎮志』に塔は明代万歴二十年（1592）に再建されたことであり、25メートルの七階建てであることが記録された。

180 本文は以下である。「在二山門之左，係汪鈍翁先生讀書別業，諸門人所修葺也，内有員石，光潤可鑒，故又名十四石圃，其最勝有山光塔影樓。」徐崧（清代）：百城烟水，卷一：清康熙二十九年刻本

181 曹基（清代）：迎汪鈍翁先生至丘南小隱；徐崧（清代）：百城烟水，卷一：清康熙二十九年刻本



景があったという記述が見つけれられた<sup>182</sup>。『虎阜志』に載せられた「前山圖」には、乞花場という場所が表示され<sup>183</sup>、現存の斷梁殿即ち二山門のすぐ東側のところであったと推定される。邱南小隱における山光塔影樓と虎丘塔の間の水平距離は約 240 メートルであったと推測される。顧氏塔影園に関する分析方法と同様に、山光塔影樓の二階における視点の高さは 4.6 メートルと仮定し、仰角は 16.2 度と推定した。

これらのほかに、江安糧道署に塔影樓があった記述を見つけることが出来た。江安糧道署は清代に江寧府即ち現在の南京に位置した官庁であり、場所は府城の西南部であったことが記述されている<sup>184</sup>。江安糧道署という官庁は元來は明代の徐達の邸宅の立地であり、この立地の東部を利用し建設された。この中に適園てきえんという庭園があり、塔影樓は適園内の建物であったと考えられる。適園は現存していないが、西部の瞻園は現在まで伝えられ、南京庭園の代表である<sup>185</sup>。適園の考証はできなかったが、塔影樓の眺望に関しては 2 点の記述が見つけれられ、塔影樓から南方には報恩寺塔が望め、北方には鐘山が眺望できたことが記録されれている<sup>186</sup>。このことから、塔影樓の立地は瞻園の東側であり、塔までの視距離は約 1300 メートルと推定される。前述の例と同様に、塔影樓の二階における視点の高さは 4.6 メートルと仮定すると、仰角は 3.2 度と推定される。

#### 4-2. 「塔影」にみられる造園文化

塔のイメージが庭園或は庭園建築の名称となされたことは、庭園の風景における塔の重要性和造園における塔の景観に関する意識の表れといえる。中国造園において、とくに明代と清代以来、建築は庭園における重要な風景の要素として意匠されてきたとともに、庭園風景を觀賞する場所として設置され、その風景は近代の研究では「対景」と呼ばれてきた。現存の庭園をみると、主に建築を中心として景観が設計され、

182 『(同治)蘇州府志』に「又有別業在虎邱，曰邱南小隱，中有乞花場山光塔影樓」と記述された。馮桂芬(清代)：(同治)蘇州府志，卷四十六：清光緒九年刊本。ほかに、「訪汪鈍翁先生故居」の詩に「草沒垣衣何限感，乞花場上吊詩人」と書かれ、注釈に「乞花場，鈍翁先生所居」と記述された。繆沅(清代)：訪汪鈍翁先生故居：沈德潛(清代)：清詩別裁集，卷二十二：清乾隆二十五年教忠堂刻本

183 陸肇城・任兆麟(清代)編纂，張維明(1995)校補：虎阜志：古吳軒出版社，39

184 趙宏恩(清代)：(乾隆)江南通志，卷二十二輿地志：清文淵閣四庫全書本

185 明代に中山王徐達が創立した邸宅の立地は清代に二つの官庁によって分けられた。東部は江安糧道署の官庁であり、適園という庭園が設置された。それに対して、西部は布政使司の官庁であり、中に瞻園があった。もともと、この瞻園は徐達の邸宅の西部に位置した小さい庭園であった。清代後期に太平天国が占領した時期に、親王の邸宅になった。現在は瞻園しか存在していない。この考証は以下の文献に基づいて行われた。趙宏恩(清代)：(乾隆)江南通志；清文淵閣四庫全書本。魯之裕(清代)：式馨堂詩文集，詩集前集七卷：清康熙乾隆間刻本。尹繼善(清代)：尹文端公詩集，卷七：清乾隆刻本。佚名(清代)：陽秋剩筆：巴蜀書社(1988)編：清代野史，第七輯：巴蜀書社

186 2 点の文献は以下である。翁方綱(清代)：復初齋詩集，卷十三寶蘇室小艸三：清刻本。繆荃孫(清代)：雲自在龕隨筆，卷六：稿本

建築と建築が相互に觀賞されるように設置されていることがわかる。さらに、建築あるいは庭園の「景」を名付けることも通例である。命名することには実景と文学的な表現の両方にみられ、造園における実景と理想像の交織であるといつてよい。「洛陽名園記」に記された水北胡氏園には眺望の場所として台が記されていたが、台の名前と眺望の実況の不一致が当時から批判されていた<sup>187</sup>。従来の園記には、庭園の「景」を記述した上に、その内容に基づいて「景」を名付けたことが多くみられる。その好例として、「独樂園記」に記された洛陽の郊外における山が眺望できた「見山台」と「弁山園記」に記された多くの竹に囲まれた「此君」という亭などが挙げられる<sup>188</sup>。すでに触れたように、憺園には塔影軒と納山楼という眺望の視点場とする建築が配置されたが、「納山楼記」にその命名の経緯が明らかに記されている。即ち、塔影軒に関しては「則以山之塔下映於軒前之沼而名之也」とあり、納山楼に関しては当初は命名されなかったが楼で山の風景を觀賞した際に「納山」という名称が生まれたことが記されている<sup>189</sup>。さらに命名にとどまらず、外景を望むために高い建築が設置された例も見つけられた。前述の熊氏塔影園の近くには、明代に快園という庭園があり、報恩寺塔のイメージを生け捕るように楼が建てられたことが記述されている。それによれば、当初の庭園から城外の報恩寺塔までの眺望は城壁に妨げされ、庭園の風景にとつては遺憾に感じられていたが、楼を建てたことで塔が眺望できるようになったという<sup>190</sup>。快園の例は塔の風景に関する意識が最も強い場合といつてよい。

一方、塔の景観と命名に関連性のない例も明らかにみられる。昆山における庭園の例を挙げると、すでに触れた憺園のほかに、はんげんえん みょうきえん とくじゅえん半蔭園、妙喜園と得樹園の三つの庭園においては、その名称からは塔との関連性はうかがえないが、実際には庭園から塔までの眺望が記述されている。さらに、玉山の周辺は数多の庭園が設置され、これらの庭園の立地は似ているので、多くの庭園には憺園のように塔が眺望できたと推測される。したがって、塔の景観は、造園に不可欠の景観要素ではなく、塔までの眺望に関する造園意匠には多くの要因があり、複雑な現象であるといつてよい。このような関係は昆山における庭園だけではなく、蘇州庭園における一般的なことといえる。

187 李格非（宋代）：洛陽名園記，水北胡氏園：明古今逸史本

188 「独樂園記」に眺望で建築を命名することに関して、「洛城距山不遠，而林薄茂密，常若不得見，廼於園中築台，作屋其上，以望萬安軒轅，至於太室，命之曰見山台」と記された。司馬光（宋代）：温國文正公文集，温國文正公文集卷第六十六：四部叢刊景宋紹興本。「弁山園記」に竹の林の中に位置する亭は記され、景観の実況に基づいて、『世説新語』に載られた王子猷に関する典故を引用し、亭は「此君」と名付けたことが記述された。王世貞（明代）：弇州山人四部續稿，卷五十九文部：清文淵閣四庫全書本

189 張雲章（清代）：樸村文集，卷二十三：清康熙華希閔等刻本

190 この記述のテーマは「造樓觀塔燈」であり、本文は以下である。「徐子仁快園落成，錦衣黃美之攜酒飲於園中，一友人曰此園正與長于浮圖相對，惜為城隔，若起一樓對之，夜觀塔燈，最是佳境，美之曰，是不難，詰旦送銀二百兩與子仁造樓。」褚人穫（清代）：堅瓠集，三集卷四：清康熙刻本

前述の昆山における庭園に関する分析から、眺望対象とする山と塔の差異を整理する。昆山古城及び古城の近くには多くの庭園が配置され、中に 15 点の庭園に関して玉山までの眺望の記述が見つげられた。この 15 点の庭園は主に玉山の南側に位置し、概ね玉山を中心として分布し、玉山までの距離は約 1.5 キロメートル以内である。すでに触れたように、15 点の庭園の多くからは塔が眺望できたと推測されるが、ただ 4 点のみに塔の眺望に関する記述が見つげられ、また檐園の 1 点にのみ建築に塔の景観に関する命名がある。同時に、塔影に関する調査における 10 点の庭園に関して、ほとんどの関連記述には塔のイメージに伴い、山までの眺望についても指摘されていた。例えば虎丘に位置した顧氏塔影園などの三つの庭園に関しては、虎丘を眺望する風景が記され、塔射園に関しては庭園から松江九峰という山を望む場面が指摘された<sup>191</sup>。これらのことから、庭園の眺望には、山が塔より重要な要素であったと考えることができる。確かに、山水は中国庭園の別名としても使われ、庭園は山水庭園と呼ばれ、山は造園における最も重要な要素であるといつてよい。

また 10 点の庭園の間に、塔の眺望に関する相互に文化的な関連性がみられる。文肇祉の建造になる塔影園は 10 点の中の濫觴といえる。文肇祉の後に庭園は顧苓に渡され、顧苓は塔影の名前を受け続いた。蔣重光の塔影園に関して、沈徳潜の園記に庭園の名前は顧苓の塔影園から取り入れたことが記述されている<sup>192</sup>。同様に「雙塔影園記」にも文肇祉と顧苓の塔影園が指摘され、雙塔影園と顧氏塔影園の特質上の関連性が強調されている<sup>193</sup>。江安糧署の塔影楼に関する記述には「前文後有顧，虎阜一窻青」<sup>194</sup>と書かれ、文肇祉と顧苓の塔影園が指摘されている。『履園叢話』に載られた塔射園に関する条目には、檐園と虎丘の塔影園における塔の景観が指摘され、塔の眺望は庭園と塔の近さを反映したものであったことを示している<sup>195</sup>。

すでに触れたように、庭園或は庭園建築に命名することは庭園における風景の配置と特質の表現であったとともに、一方で庭園風景に関する観賞と記述もまた庭園或は庭園建築の名称に影響された。この傾向は前述の庭園の例に明らかにみられ、塔射園

191 松江九峰は松江古城の北方向に位置する九つの山であり、スケールは小さいが、松江において唯一つの山である。塔射園に関する記述に、2 点が見つげられ、山までの遠眺が記された。具体的に、本文は以下である。「幾層塔影烟中寺，一抹山痕竹外樓。」沈大成（清代）：學福齋集，詩集卷十四百一詩鈔：清乾隆三十九年刻本。「泖湖水碧九峰青，峰色橫雲是錦屏，收拾全家圖畫裏，讀書聲作管絃聽。」張祥河（清代）：小重山房詩詞全集，詩餘詩外卷四：清道光刻光緒增修本

192 沈徳潜の「塔影園記」には「昔顧高士苓居塔影園，高士結志區外，洒心清川，所謂畏榮好古者也，今異其地而同其名，殆有尚友前民之意焉」と書かれ、園名の受け継ぎが明らかに指摘されている。さらに、『(同治)蘇州府志』に載られた蔣氏塔影園に関する条目には「蓋襲塔影之名，而非舊址也」すなわち園名を踏襲したことと記されている。

193 袁學瀾（清代）：雙塔影園記：邵忠ら（2004）編：蘇州歷代名園記：中国林業出版社，261

194 翁方綱（清代）：復初齋詩集，卷十三寶蘇室小艸三：清刻本

195 錢泳（清代）：履園叢話，卷二十：清道光十八年述徳堂刻本

は中の典型の一つといえる。塔射園に関する記述には、ほとんど塔の景観が言及されていることに対して、儋園の場合は庭園ではなく一つの建築に対して塔影と名付けられ、塔の景観に関連する記述は比較的少ない。したがって、塔影のような呼称は造園の着想、或は風景造営に関する理想であり、庭園における風景観賞はこのような理想に影響され、塔影に関する記述には現実の表現とともに理想の投影も含まれたといつてよい。

なお、塔と庭園の視覚的な関連から、庭園のプライバシー性に関わる習慣的な考え方に矛盾する特徴がみられる。一般的に、中国庭園特に蘇州で現存している庭園は古い町に立地し、高密度な都市環境に囲まれ、都市における隠居所と呼ばれた。庭園の配置には、庭園を囲む塀が重要な要素であり、内部空間が外部空間から切り分かれ、高度なプライバシーの空間になったといえる。確かに、境界とした塀は庭園に欠かせない要素であり、さらに庭園の建造は塀の造りから始まったと言われる<sup>196</sup>。しかし、庭園は塔の近くに位置し、塔が眺望できると、逆に塔の上から庭園の中が望める可能性が高いといっても過言ではない。塔射園はその典型として挙げられ、園内から園外までの眺望だけではなく、園外から園内までの眺めに関する記述が見つけれられる。「游塔射園」という園記には塔の上で園内への眺めを以下のとおりに記述している。「余嘗入寺，登浮圖之頂，憑欄四望，東則埤垵雉堞，參差可數…而張氏之園，水木明瑟，近在雙屐之下。每當亭午晴晝天無纖雲，則此塔之金碧歷録然，若放奇光異采注射于園之中，則所謂光遠而自他有耀者，殆亦有然矣。」<sup>197</sup>さらに、「此伽藍記之所未載，而洛陽名園之可游者所罕遇也」<sup>198</sup>とある。すなわち、塔と庭園は互いに観賞の対象になり、相互に風景の輝きを増し、寺院と庭園の両方にとって貴重なことという。この記述には、批判的或いは禁忌的ではなく賛嘆の立場がみられる。実際に庭園のプライバシー性に関しては、曖昧性と両面性があるといつてよい。庭園は私人的な空間であるが、古くから公開される慣例があるからである<sup>199</sup>。このほかにも、庭園以外の近くの

196 この結論は漢宝徳によってまとめられた。董豫贛(2009): 經營位置: 時代建築(2), 94-99

197 黄達(清代): 一樓集, 卷十七: 清乾隆刻本

198 「伽藍記」は『洛陽伽藍記』の略称である。『洛陽伽藍記』は北魏時代(386-557)に楊炫之によって完成された書物であり、主に北魏時代の洛陽における寺院は記述され、宗教、歴史と建築などに関するさまざまなデータは含まれた。すでに触れたように、「洛陽名園」は李格非(1045-1105)が著述した『洛陽名園記』に載られた当時の洛陽における有名な庭園を意味する。

199 歴史上、私人の庭園はある季節特に春に開放され、低い値段で或いは無料で普通の観光客を招き、同時に公共の遊園地になった。「洛下園池」に書かれた「洛下園池不閉門，洞天休用別尋春。縱游只却輪閑客，遍入何嘗問主人」のように、少なくとも宋から特定の時期に開園という伝統が出て来たと言える。呂祖謙(宋代): 宋文鑑, 皇朝文鑑卷之二十五邵雍洛下園池: 四部叢刊景宋刊本。ほかに、宋代の陳元靚の『歲時廣記』(清十萬卷樓叢書本) 卷一に「探春遊」という条目があり、「皇朝東京夢華錄, 上元收燈畢, 都人爭先出城探。大抵都城左近皆是園圃, 百里之内並無閑地, 並縱遊人賞玩」と書かれ、当時の庭園で「探春」という習俗が記述された。その上、拙政園についての記録に前述と似たような開園の記述も見付けられ、実際に拙政園だけではなく獅子林、留園と怡園などの蘇州名園は大体同じであり、当時の庭園の

場所で園内の風景を眺める例がいくつか見つけられた<sup>200</sup>。

#### 4-3. 「隔」：塔のイメージ

塔に対する眺望の視点場は、庭園における高所であることも、低い場所の場合もある。江安糧署における塔影楼と鄧尉山莊における塔影嵐光閣などの場合では、仰角は比較的にかさいため、視点場が高所に配置されたのは当然なことといえる。眺望の視距離に関して、一定の傾向はなく、45メートルから1300メートルまでの範囲に分布した。すでに触れたように、泌園、東莊、芳草園と紅豆書莊などの蘇州古城における庭園において塔の眺望に関する記述が見つけられ、庭園から眺望対象の塔までの距離は90メートルから1200メートルの間に分布した。したがって、一定の規則性としてはまとめられにくいといえる。このような状況は前述されたように蘇州のような古城において塔は普段から見える風景の要素であり、古城の郊外でも同様であったと推測できる。したがって、眺望の仰角についても一定の規則性はまとめられない。

塔を眺望する景観に関して、塔影という言葉がよく使われたことが前述の庭園に関する記述における共通性である。塔影という言葉には、二つの意味があり、水面に映された投影のほかに、遠景とする塔のもうろうな景像の意味も含まれる。後者に対して前者は媒介を介して得られた間接的な景観であり、10点の庭園眺望に関する「塔影」は主にこの意味で使われていた。すでに引用したように、塔の風景に関して最も適当な観賞方法は塔が水面に映す倒影を望むことであるという評価が見つけられ、これは伝統美学における慣例の一つとなっていたことが考えられる。塔影という言葉に関する最初の例のとして、「塔影遥遥緑波上，星龕奕奕翠微邊」<sup>201</sup>という漢詩が見つけられ、ここには水面に映された塔のイメージが記されている。

直接見えるにもかかわらず、水面のような媒介を通して塔の景像を捕ることは、風景と鑑賞者の間の媒介に関するある意識がみられる。検証の結果、この媒介について、塔のイメージに関する記述に「隔」という漢字がよく使われたことが明らかとな

開放性の一種の慣例と言え。 「春月開園，游人甚多。」方濬頤（清代）：二知軒詩鈔，卷五，吳園：清同治五年刻本。「是四園者，春秋佳日皆開園縱人游觀，連袂駢輿，士女雲集，每人取青蚨數十文以給園丁。」金武祥（清代）：粟香隨筆，粟香二筆卷二：清光緒刻本。「是日穀雨遊園者少」趙翼（清代）：甌北集，卷三十九，吳梅村所詠陳相國拙政園今為蔣氏所有立崖梅厂置酒招同王述菴侍郎范蔚林秀才謙集于野兄弟並侍焉詩以誌好：清嘉慶十七年滙貽堂刻本。

200 黄庭堅が記述した借景亭と同様に、王世貞が著述した「遊金陵諸園記」に「味齋園」という庭園が記録され、「有樓三楹，面東而峙，遍覽城内外，最為登眺勝處。俯視西園，如接幾案」と記述された。現代の著作ではこのような状況を借景とまとめ、「劫景」と称された。そういう場合は拙政園にもみられる。拙政園は清代末期に西部の補園と中部の八旗奉直會館に分けられ、西部の補園に两部分の間の塀の位置で高い亭を作り、現在の「宜雨亭」になった。「宜雨亭」で中部の風景が近距離で俯瞰できる。

201 宋之間（唐代）：宋之間集，卷上，龍門應制：四部叢刊續編景明本

り、「隔」は観賞者の立場に基づいて塔の風景が媒介により隔てられた状況の意味と解釈された（表－6）。邱南小隱における山光塔影樓の眺望に関する「隔岸園池分塔影，隨身襟袖共山光」<sup>202</sup>という記述は，塔と庭園が両者の間に位置した川によって空間的に隔てられるため，塔と庭園の間の境界が強調された表現と考えられる。さらに，顧氏塔影園における塔影に関して「園中結構佳，遠塔未曾隔」<sup>203</sup>という記述は，「未曾隔」は隔てられなかった意味であるが，視覚的に隔てられなかったことであり，空間的に隔てられたことは暗示されたといえる。このほかに，蔣氏塔影園に関する記述の中に，「塔影當空秋水靜，鐘聲隔岸暮雲間」<sup>204</sup>がみられ，直接には鐘の音が川によって庭園から隔てられたことであるが，塔影として隔てられているという意味も含まれていると解釈される。熊氏塔影園に関して「照水浮圖城豈隔」<sup>205</sup>という記述からは，塔影の眺望は城壁に隔てられていない同時に，塔は空間的に城壁によって隔てられていることが読み取れる。すでに触れたように快園の場合では，城壁に隔てられた塔のイメージを眺望するために高い樓が視点場として建てられたことが判る。一方，熊氏塔影園と快園の場合には，眺望対象とした報恩寺塔が非常に高く，城壁からは近く塔の眺望が城壁に妨げられたわけではなく，庭園の隣に位置した高い建築に隔てられた可能性が高いと推測される<sup>206</sup>。したがって城壁は庭園と塔の間における視覚的な境界

表－6 「隔」に関する各庭園の特徴

庭園	塔のイメージに関する記述	「塔影」の使い方	「隔」に関する記述	意味された境界
顧氏塔影園	天碧池光破園空塔影浮，倒窗塔影故依然， など	倒影，遠景	園中結構佳遠塔未曾 隔	塀
蔣氏塔影園	嵯峨七層塔影挂疏竹間，嵐翠斷邊銜落照波 光定處臥浮圖，など	倒影，遠景	塔影當空秋水靜鐘聲 隔岸暮雲間	川
塔射園	塔影最宜臨水照雲心休怨出山遲，幾層塔影 烟中寺一抹山痕竹外樓，など	倒影，遠景		
王氏塔影園	雲開別院山光入水溢方塘塔影翻，など	倒影	天垂古塔將分影水到 疎鐘不隔流	川
熊氏塔影園	塔影湖光竝宛然	倒影	照水浮圖城豈隔	城壁
雙塔影園	鄰寺雙塔影浮南榮丁位			
檐園	最後有塔影軒則以山之塔下映於軒前之沼而 名之也	倒影		
邱南小隱	山光庭樹引塔影硯池收，など	倒影	隔岸園池分塔影隨身 襟袖共山光	川

202 徐崧（清代）：百城烟水，卷一，沈始熙過虎丘望汪鈍翁先生山光塔影樓：清康熙二十九年刻本

203 丁宿章（清代）：湖北詩徵傳略，卷二十八：清光緒七年孝感丁氏涇北草堂刻本

204 陳文述（清代）：頤道堂集，詩選卷八古今體詩：清嘉慶十二年刻道光增修本

205 蔣士銓（清代）：忠雅堂文集，卷十四：清嘉慶刻本

206 二つの庭園は南京古城における武定橋という場所に位置した。それに対して，報恩寺塔は古城の中華門の外に位置した。距離は約1300メートルであり，中に古城の城壁から塔までの距離は約300メートルであった。その上，すでに触れたように，塔の高さは77メートルであり，城壁の高さは約20メートルぐらいであった。したがって，武定橋という場所で塔の眺望が城壁に妨げられた可能性はなかったと推定される。

ではなく、内から外を分ける空間的な境界であり、造園の際の意識として重視性されていたものと考えられる。

塔の眺望について、「隔」にみられる境界性はすでに触れた拙政園における北寺塔の眺望に関する境界性としても解釈でき、古城における塔の眺望が一般的であったのに対して、庭園から空間的な境界に隔てられた塔の景観は造園上意識される可能性が比較的高く、庭園と塔の間に位置する空間的な境界が庭園の塀、或は古城の城壁などの要素であったとみることができる。この境界性と前述された借景に関する「遠」の意匠の間に共通性がみられ、境界に隔てられることで「遠」の意匠が同時に目指され、「遠」という意匠の構成に視点と視対象の間の空間的な境界が設定されるべきといっても過言ではないだろう。

前述の分析から、境界は庭園と塔の間のボーダーであることが判り、城壁と川などの要素に加えて、拙政園の眺望に関する分析で示されたように庭園を囲む塀も境界の一種である。このような塔の眺望と境界の関係性の検討から、庭園を囲む塀という境界は眺望の特徴を定める要素の一つであるといえることができる。

#### 4-4. 庭園のスケールと外景に関する意識

塔影に関する調査から、10点の庭園はほとんどスケールが小さい庭園であったことが判った（表-7）。

顧氏塔影園のスケールに関して、1畝と3畝の二つの記述が見つげられた。園内の配置に関して「游顧氏塔影園記」には以下のように記述された。「委巷圭門，循廊右轉，一望皆菘疇瓜疇沼沚委蛇。廊窮得堂，堂臨池，春風澹蕩，秋日澄瀾。倚岸北矚，塔影正垂東北隅，鈴聲上下，若出波際，魚龍紛沓。行喬柯巉石間，游者解襟嘯詠終夕忘去。堂之右有齋一楹，曰成野，後有寢，曰松風，烈宗皇帝書。齋南左瞰池，右為亭，曰照懷。池東接一眉廊，再折，為倚竹山房，臨山房而望之有岡焉，曰小東岡，之徑臨池，可渡者架石焉，曰鶴梁。縱廣三畝，周規折矩，面與背相望，豁然而開，窈然以合，不可窮際。」<sup>207</sup>すなわち、建築は堂、齋、寢、亭と房の五つであり、池は配置の中心といえる。ほかに、堂と齋が池の南側或いは西南側に位置し、池に臨み、堂と齋の近くから水面を越して西北方の虎丘塔が眺望できたと推測される。したがって、1畝という言い方があるが、庭園の配置に基づいて3畝即ち約2000平方メートルがもっと信頼性のある値と考えられる。<sup>208</sup>

207 萬壽祺（清代）：隰西草堂詩文集，文集卷一賦序記書：民國八年明季三孝廉集本

208 本文は以下である。「園可一畝，遠俗妨塵…編籬剛一畝，寫韻足清歡…」施男（清代）：叩竹杖，卷五：清初留髡堂刻本

表－7 配置とスケール

庭園	スケールに関する記述	指摘された建築	池	スケール	備註
顧氏塔影園	縦廣三畝	5点	有	小	
蔣氏塔影園		6点	有	小	
塔射園		3点	有	小	
王氏塔影園			有	不明	
熊氏塔影園			無	大きくな い	庭園は湖に 臨んだ
雙塔影園			有	小	現存
檐園		5点	有	小	
鄧尉山莊		18点	有	大	24景が指摘 された
邱南小隱	園居無一畝		有	小	
適園	江安糧道署東 偏舊有小園		不明	小	

蔣氏塔影園に関して、沈徳潜の「塔影園記」には以下のように書かれている。「經營有年，斷手伊始，敞者堂皇，頰者樓閣，繚者曲廊，靜軒閑龕，邃窩深房。峙廼亭臺，環以垣墻。嚮措適宜，奧寒協序。隙地植梧柳榆檜桃杏來禽…此南岸之勝概也。迤北通以虹橋，沿以莎隄，突以高岡，岡襍鬆，杉，烏桕，銀杏之屬。石級縈繞，虎落連綴，洗鉢有池，翻經有台…睇眎涵空，浩然天成，非由人工，此北岸之勝概也。」<sup>209</sup>この記述から、庭園は水面によって南部と北部に分けられたことが判る。しかし北部に関して記された洗鉢池，翻經台と第三泉などは虎丘という名所における景であり、庭園の中に位置していなかったことは勿論である。そうすると庭園の範囲は南部だけであり、北部の虎丘から前溪によって隔てられていたと推定される。園記には南部における建物が主に6点指摘されている。このほかに蔣氏塔影園における典型的な景として寶月廊，香草廬，浮蒼閣および隨鷗亭の4点が挙げられ、園記に記された建築の種類と合致した<sup>210</sup>。さらにこの庭園に基づいて改築されて得た白公祠に関して、仰蘇樓，懷杜閣，思白堂と塔影山光閣との4点が典型としてよく挙げられている<sup>211</sup>。この件数から考えて、大きな庭園ではないといえることができる。

塔射園のスケールに関する記述は少なく、建築と景観の配置についての、記録も少ない。王昶の「湖海詩傳」には「岩石參差，池水環其下，有晚榮柿葉山房諸勝」<sup>212</sup>とあり、園内に築山，池と山房という建築があったとされる。さらに、張氏系の張夢階<sup>213</sup>は「晚榮山房」，「遜亭」，「拜石軒」および「塔影」の四つの詩を創ったが<sup>214</sup>，

209 沈徳潜（清代）：塔影園記：陳從周・蔣啓霆（2004）選編：園綜：同濟大學出版社，267

210 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十六：清光緒九年刊本

211 顧祿（清代）：清嘉録，卷三：清道光刻本

212 王昶（清代）：湖海詩傳，卷三十：清嘉慶刻本

213 清代に孫星衍の『（嘉慶）松江府志』（上海社会科学院出版社，1988）卷七十七に塔射園のオ



そのタイトルから山房、亭と軒などの建築とともに塔影が園内における重要な風致であったことがわかる。この中で「塔影」という詩には「珠輪裊微瀾，金碧層層現。向夜佛燈明，千花湧波面」<sup>215</sup>とあり、庭園に池が存在した証拠といえる。このほかに、「入門古藤壓修竹，綠陰遮覆深於屋。紫絲步障敵齊奴，百道流蘇懸複縵。涓涓淺水小橋邊，窈窕軒櫺絕可憐…」<sup>216</sup>という記述があり、園内の風景は自然風であり、建築などの要素が比較的少ない、小さい庭園であったことが推測される。

熊氏塔影園のスケールに関する記録は見つけられなかったが、さまざまな記述に基づいて総合するとそのスケールは大きくないと推測される。すでに触れたように熊氏塔影園の敷地に明代において元來は市隱園しいうんえんという庭園があり、清代の乾隆年間（1736-1795）に市隱園の北部の敷地が塔影園に改修された。関連する文献から、市隱園のスケールが小さくないことが判る。『金陵誌地録』に市隱園の配置について、中林堂、容與臺、秋影樓、浮玉樓、借眠庵と海月樓の六つの建築の名称が挙げられている<sup>217</sup>。そして、「市隱園二十二咏爲姚允初觀察賦」という漢詩に市隱園における二十二景が記述され、中に建築は9点である<sup>218</sup>。似たものとして、「追補姚元白市隱園十八詠」に十八景が記述され、8点の建築が挙げられている<sup>219</sup>。さらに庭園には大きな池があり、面積は10畝ぐらいであったと記録されている<sup>220</sup>。なお、「遊金陵諸園記」

---

一ナーは張維煦であると記されている。清代に陶澍の『陶文毅公全集』（清道光刻本）卷四十五文集に載せられた「安徽無為州學正誥封中憲大夫例晉通議大夫河南按察使司按察使張君墓誌銘」により、この張氏家族の状況が明らかになった。すなわち、祖は張維煦であり、張維煦から第二世代は張夢喈であり、第三世代は張興墉と張興載等であり、張興墉は乾隆二十七年（1762）に生まれ道光十七年（1837）に亡くなり、第四世代は張祥河などである。張祥河は嘉慶庚辰（1820）に進士になり、『小重山房詩詞全集』に塔射園について「家園新葺詩境三楹，塔影池中，盡攬其勝，大人寄詩命和元韻」と書かれた。張氏家族は長期にこの庭園を持っていたことが判る。

214 王昶（清代）：湖海詩傳，卷三十：清嘉慶刻本

215 同上

216 祝德麟（清代）：悅親樓詩集，卷二十五，塔射園讌集：清嘉慶二年姑蘇刻本

217 陳植（1983）：中国歴代名園記選註：安徽科学技術出版社，171-172

218 二十二景は具体的に玉林，茶泉，中林堂，思玄室，春雨畦，觀生處，容與臺，海月樓，鷺羣閣，鷗波，洗研磯，柳浪堤，秋影坪，浮玉橋，芙蓉館，鶴逕，萃止居，借眠菴，春草堂，石樹菴，移山と適舫との22点である。顧起元（明代）：遯園漫稿：己未明刻本

219 十八景は具体的に玉林，茶泉，中林堂，思玄堂，春雨畦，觀生處，容與臺，海月樓，鷺羣閣，鷗波，洗硯磯，柳浪堤，秋影亭，浮玉橋，芙蓉館，鶴徑，萃止居と借眠菴との18点であり，二十二景と比べると，春草堂，石樹菴，移山と適舫との4点は指摘されなかった。王世貞（明代）：弇州山人四部續稿，卷二：十一詩部清文淵閣四庫全書本

220 「遊金陵諸園記」に「前為大池縱橫可七八畝」と記され，7或は8畝と指摘された。王世貞（明代）：弇州山人四部續稿，卷六十四文部：清文淵閣四庫全書本。「市隱園歌贈朱石者少叅壬寅」に「出水芙蓉香十畝」と書かれ，10畝と指摘された。方文（清代）：蠡山集，再續集卷二：清康熙二十八年王槩刻本。

に載せられた記述により、庭園の中の築山と中林堂及び鷺羣閣などの建物が池に臨んでいることが明らかになった<sup>221</sup>。前述の二十二景の中に6点、十八景の中に5点と池が関連している。したがって庭園は池を中心として「景」が池に臨むように配置されたと推測される<sup>222</sup>。一方、「題熊丈滌齋塔影園圖」という漢詩の注釈に塔影園は湖に臨み、塔影が眺望されたことが書かれ、現在この場所で小西湖という地名がまだ残り、当時の市隱園における池も小西湖と呼ばれている<sup>223</sup>。したがって、「題熊丈滌齋塔影園圖」に記された湖は市隱園における小西湖という池の残りであり、小西湖という地名は現在に伝えられたと推定される。したがって、熊氏塔影園は市隱園における池の北側を敷地として建造され、庭園は池に開放され南向で塔影が眺望されたが、池は庭園の範囲には含まれず、よって庭園のスケールは大きくなかったと推測される。

憺園について「憺園記」という園記には「竹樹花石，高樓曲池，水檻平橋，幽房密闥，凡宜於四時適於登眺者無不備具」<sup>224</sup>としかなく、具体的な配置が推測できない。

「納山樓記」に「闢其後為遊息之所，有堂曰青林，曰怡顏，有亭曰看雲，最後有塔影軒，則以山之塔下映於軒前之沼而名之也，軒左有樓，閤敞高朗，窗牖四達」<sup>225</sup>と記述され、住宅の北側の敷地を利用した憺園では、二つの堂、一つの亭、一つの軒と一つの楼などの五つの建築が建てられたことが判る。したがって、やはり小さい庭園であったとも推測される。

邱南小隱に関する「園居無一畝，攬勝在凭樓」<sup>226</sup>という記述からは、具体的な面積は判らないが、庭園は非常に小さかったことは明らかといえる。ほかに、雙塔影園の現存状況から、庭園は小さいであることが判り、すでに触れたように雙塔影園に関する園記にも面積は1畝ぐらいと記述されている。このほかには王氏塔影園および江安糧道署における適園のスケールについては考証することができず、また鄧尉山莊はこ

「上巳微雨小集市隱園步英夢堂原韻」に「池廣可十畝許」と書かれた。欽璉（清代）：虛白齋詩集，匏繫集下：清乾隆刻本

221 本文は以下である。「叩北扉而入，有茅亭南嚮，偃僂猶妨幘，其左小山以竹藩之，不可登，則姚生之仲弟所受也，前為大池，縱橫可七八畝，其右有平橋，狹僅容足，蜿蜒而前，橋盡得平屋五楹，中三楹所謂中林堂者也，堂後一軒枕池，曰鷺羣閣，半敞矣。」王世貞（明代）：弇州山人四部續稿，卷六十四文部：清文淵閣四庫全書本

222 「上巳微雨小集市隱園步英夢堂原韻」に「勝概多緣水」と記された。言い換えれば、庭園において多くの景は池に臨むように配置された。欽璉（清代）：虛白齋詩集，匏繫集下：清乾隆刻本

223 「題熊丈滌齋塔影園圖」に「園瀕於湖，可瞰報恩寺塔影，故名」と記された。蔣士銓（清代）：忠雅堂文集，卷十四：清嘉慶刻本。すでに触れたように、「上巳微雨小集市隱園步英夢堂原韻」に「池廣可十畝許，俗呼小西湖」と記され、市隱園における池は小西湖と呼ばれたことが判る。小西湖という名称は現在まで使われてきて、小西湖路、小西湖小学校と幼稚園などはある。

224 計東（清代）：改亭詩文集，文集卷九：清乾隆十三年計瓊刻本

225 張雲章（清代）：樸村文集，卷二十三：清康熙華希閔等刻本

226 「迎汪鈍翁先生至丘南小隱」という漢詩に「園居無一畝，攬勝在凭樓，近市仍違俗，看花最耐秋，山光庭樹引，塔影硯池收，會得幽棲概，何須問虎丘」と記されている。徐崧（清代）：百城烟水，卷一：清康熙二十九年刻本

の中で大きな庭園であり、ただ一つの例外といえる<sup>227</sup>。

これらのことと、塔の眺望に関する分析から、外景への意識は庭園のスケールと関連しているといえることができる。先の邱南小隱に関する「園居無一畝，攬勝在凭樓」という記述からは、小さな庭園における風景は豊かではなく、高所から眺望することは重視性されていたことがうかがえる。この記述は眺望の意識と庭園のスケールの間の関連性を説明しているといえる。

スケールの小さい庭園において眺望が重視されたことは、庭園に関する「選景」という行為にもみられる。「選景」というのは庭園における典型的な景をいくつか選び、命名し、詩を作ることである。蘇州地域における庭園調査から「選景」に関して8点の庭園の事例が集められた。具体的には、拙政園三十詠、藝圃十二詠、東莊二十景、亦園十景、繭園十詠、妙喜園三十詠、學山園十詠と弁園雜詠四十三首である。このほかに杭州に位置した養素園について養素園十景が見つげられた。これらの9点の庭園を分析対象としたところ、亦園十景と養素園十景の2点には他と比べていくつかの異なる点がみられる。他の7点と比べると、亦園十景と養素園十景の景には、庭園内における風景に止まらず、庭園外の風景も含まれている。すなわち、亦園十景は南園春曉、草閣涼風、葑溪秋月、寒村積雪、綺陌黃花、水亭菡萏、平疇禾黍、西山夕照、層城烟火と滄浪古道との10点であるが、この中で南園春曉、葑溪秋月、寒村積雪、平疇禾黍、西山夕照、層城烟火および滄浪古道の7点は園外までの眺望風景である<sup>228</sup>。このように、亦園は眺望を中心とした庭園であったといつてよい。同様に、養素園に関する十景の中で、少なくとも2点は庭園外における風景である<sup>229</sup>。同時に亦園と養素園はこれらの9点の庭園の中でスケールが比較的小さい庭園である(表-8)。亦園は、「揖青亭記」という園記に「亦園隙地耳，問有樓閣乎，曰無有，有廊榭乎，曰無有，有層巒怪石乎，曰無有」<sup>230</sup>と記され、庭園は小さく、大きな建築あるいは築山などは一切なかったことがわかる<sup>231</sup>。園記では揖青亭から眺望される風景が庭園の中心として重視性されていたことが記述され、亦園十景の性格と合致するといえる。養

227 すでに触れたように、「鄧尉山莊記」に庭園における二十四景は記述され、その中で建物18点である。したがって、スケールは小さくないと推測される。

228 尤侗(清代):亦園十景竹枝詞:徐崧(清代):百城烟水,卷三:清康熙二十九年刻本

229 金農(清代):冬心先生續集,詩:清平江貝氏千墨庵鈔本

230 尤侗(清代):西堂雜組,雜組二集卷六:清康熙刻本

231 亦園の面積に関して、10畝という説が見つげられた。具体的には、園主とする尤侗の「亦園賦」には「有此小園，爾乃十畝，陶廬數間」と記されている。尤侗(清代):西堂雜組,雜組一集卷一:清康熙刻本。徐崧の『百城烟水』に載られた亦園の条目に「所謂亦園者不過十畝之間」と書かれ、尤侗の説は踏襲されている。徐崧(清代):百城烟水,卷三:清康熙二十九年刻本。しかし、尤侗の「揖青亭記」に記された庭園配置から、「十畝」は概数であり、庭園は大きくなく、大きくとも10畝未満と推測される。

表－8 「選景」と庭園スケール

庭園	創立時期	所在地	選景	著者	眺望に関する景	スケールに関する記述	スケール
拙政園	明代	蘇州府城 (長洲)	拙政園三十詠	文徵明	無		大
藝圃	明代	蘇州府城 (呉県)	藝圃十二詠、 和藝圃十二詠	孫枝蔚 施閏章	無		中
東莊	明代	蘇州府城 (元和)	東莊二十景	石瑤	無		大
亦園	清代	蘇州府城 (元和)	亦園十景	尤侗	南園春曉，葑溪秋月，寒村積雪，綺陌黃花，水亭菡萏，西山夕照，層城烟火，滄浪古道	「十畝之間」， 「亦園隙地耳」	中
繭園	明代	昆山	繭園十詠	葉九來	無		大
妙喜園	清代	昆山	妙喜園三十詠	釋曉青	無		大
弇山園	明代	太倉	弇園雜詠四十三首	王世貞	無		大
學山園	清代	太倉	學山園十詠	王昊	放眼亭		中
養素園	清代	杭州	養素園十景	王德溥	遠樹柔藍，古寺鳴鐘，遠山雪霽	「宅之西有地可五畝」	小

素園は約5畝であり比較的小さい庭園である<sup>232</sup>。

したがって、眺望はある程度庭園のスケールに左右され、スケールが小さい庭園の場合で眺望は比較的重視性され、塔影などの外景の眺望が庭園における中心的な風景とされたことはそのためであると推測される。庭園のスケールと眺望に関する意識との関連性は、前述の境界と眺望に関する意識との関連性と対応するといえることができる。一般的に、スケールが小さい庭園において塀などの境界部は視覚上の重要な要素となり、小さいスケールは高い囲み性を生ずる。さらに小さな庭園は求心的な空間として構成されることに対して、大きな庭園は分散的な空間として構成され、小さな庭園の場合に境界性が比較的強くなるといえる。

## 5. 山までの眺望

### 5-1. 見山庭園の分布

すでに触れたように、蘇州地域における庭園調査から108点の見山庭園、即ち園外の山を眺望できる庭園が得られた。また108点の見山庭園の位置を考証し、地図上に標示した。その結果、呉県、長洲及び元和県、常熟県、昆山県、太倉州における見山庭園分布図という五つの分布図が得られた<sup>233</sup> (図-39) (図-40) (図-41) (図-

232 本文は以下である。「余ト居湖墅，宅之西有地可五畝，舊為金氏友莊庵，養素園之名，余所新易也…」王德溥（清代）編：養素園詩：丁丙（清代）輯：武林掌故叢編，第五帙：錢塘丁氏嘉惠堂本

233 本論でいわゆる蘇州地域における「一府一州五県」に関して以下の説明が必要と考えられる。呉県，長

42) (図-43)。庭園数はそれぞれ呉県では40点、長洲県では6点、元和県では12点、常熟県では21点、昆山県では22点、太倉州では7点である。さらに、庭園の位置により、城内、山林、郊外の三つの種類に分けられ、庭園数を集計した(表-9)。

呉県、長洲県と元和県の県庁の所在とした府城、および常熟県、昆山県、太倉州の「一州二県」の県城と州城には城壁が設置されていた。檐園に関する考証ですでに触れたように、昆山県城の内には玉山という山がある。同様に、常熟県城の内には虞山という山の東部が刈込んでいた。しかし一方で、太倉州の範囲に山はほとんどない<sup>234</sup>。前述された虎丘という山林名勝地は元和県の範囲に含まれ、元和県における唯一つの山林地である。長洲県の南部に、陽山という高い山がある。前述のように、蘇州地域における山のほとんどは古城の西と南西方、即ち呉県の郊外に位置し、大きな山としては七子山、穹窿山、鄧尉山と天平山などが挙げられ、数多の支脈と合せて呉県の郊外に広く分布する。そうすると、呉県における庭園の位置は城内と山林(郊外)との二種類に分けられ、常熟県と昆山県における庭園の位置は城内(山林)と郊外との二種類に分けた。

表-9 見山庭園の統計

		呉県	長洲県	元和県	常熟県	昆山県	太倉州	総計
庭園総数		142	35	72	112	173	100	634
位置 分類	城内	38	24	35	49	77	40	
	山林	89	5	17				
	郊外		3	19	47	57	46	
	不明	15	3	1	16	39	14	
関連文献がある庭園		70	20	32	42	46	40	250
位置 分類	城内	18	13	15	26	24	22	
	山林	43	4	8				
	郊外		2	8	11	11	10	
	不明	9	1	1	5	11	8	
見山庭園		40	6	12	21	22	7	108
位置 分類	城内	10	4	6	16	15	3	
	山林	30	1	4				
	郊外		1	1	4	4	3	
	不明			1	1	2	1	

洲県と元和県の三つは常熟県、昆山県および太倉州の三つと違い、独立の県城がなく、県庁は府城に位置した。蘇州府城は西から東まで三つの部分に分けられ、順番に呉県、長洲県と元和県であった。

234 『(嘉慶)太倉直隸州志』に「案州境及鎮洋嘉定寶山三邑平衍無山、惟穿山卷石耳、餘皆壘土爲之」と記され、太倉州において穿山を除いて山はほとんどないことが明がであり、州城に関する地図に鎮洋と文筆などの山が載られたが、人工的な築山であった。「穿山一名驪山、在州北東四十二里、巨石屹立、崇一十七丈、周三百五十步、中有石洞、通南北往來。」穿山という山は州城からすごく遠い、スケールも小さい、現存していない。

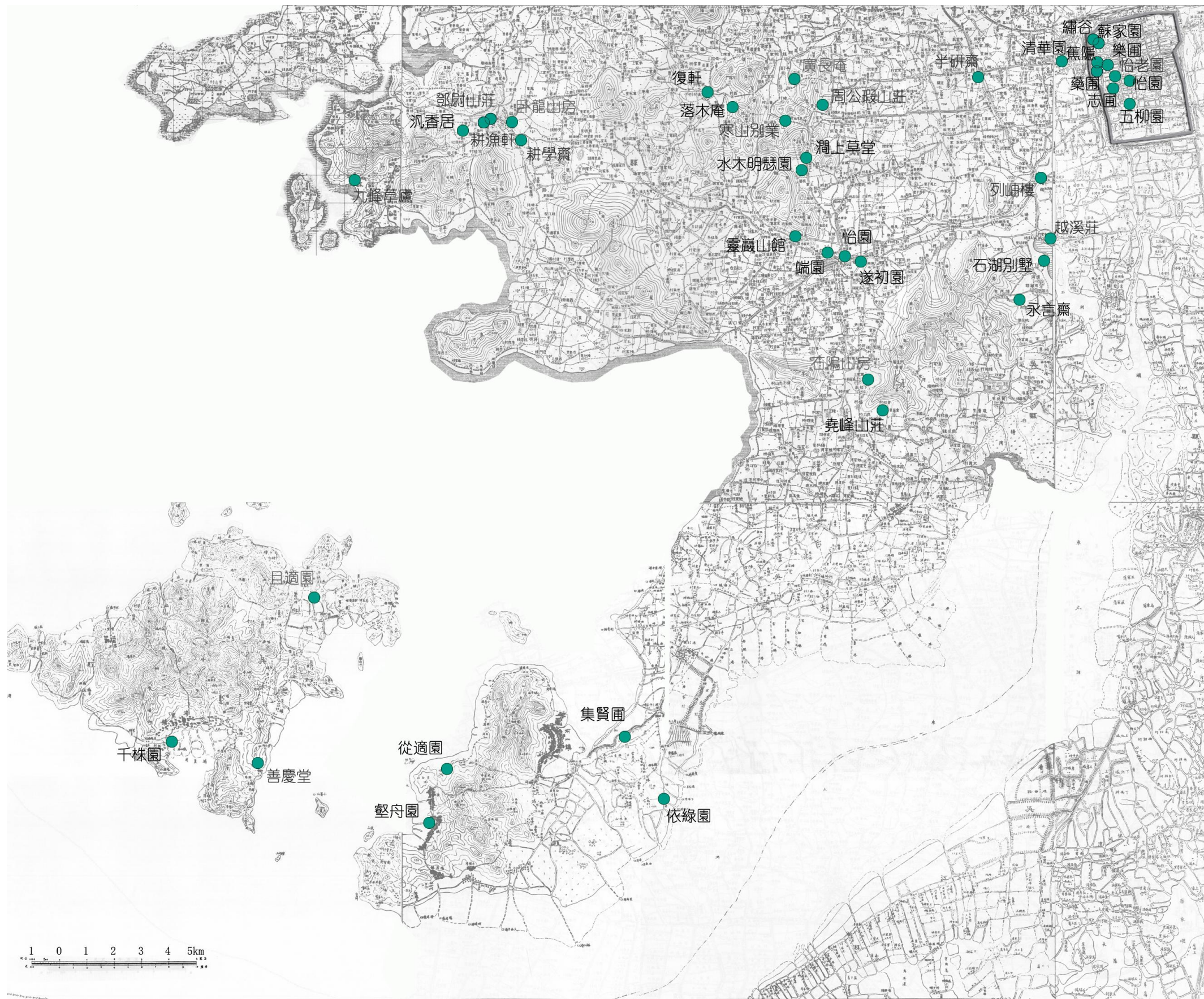


図-39 呉県における見山庭園分布図（ベースマップは科学書院『中国大陸五万分の一地図集成』より。園名について、黒字は具体的な場所が確定できるところであり、グレーは大体の場所が確定できるところであり、うすいグレーは推測されるところである。以下は同じである。）

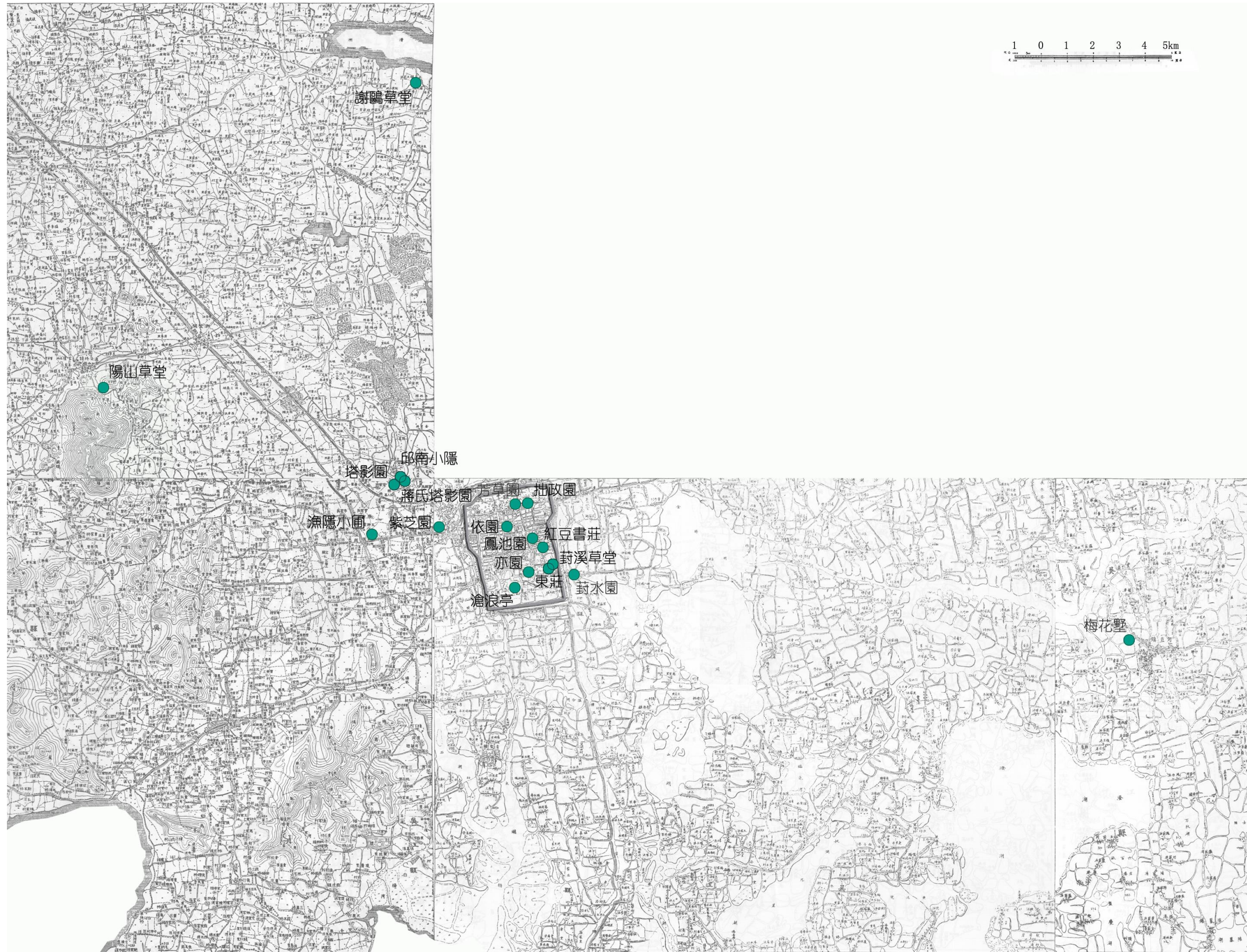


図-40 長洲・元和県における見山庭園分布図（ベースマップは科学書院『中国大陸五万分の一地図集成』より）



図-41 常熟県における見山庭園分布図（ベースマップは科学書院『中国大陸二万五千分の一地図集成』より）





図-42 昆山市における見山庭園分布図（ベースマップは科学書院『中国大陸二万五千分の一地図集成』より）



図-43 太倉県における見山庭園分布図（ベースマップは科学書院『中国大陸二万五千分の一地図集成』より）

庭園の分布に関する全般的な集計結果からは、山林地に庭園を設置する傾向がみられる。太倉州には山林地という種類がなく、城内と郊外に位置した庭園数がおおよそ同じである。一方呉県の場合、城内に位置した庭園と比べると、山林地を含む郊外に立地する庭園が圧倒的に多い。それに対して、常熟県、特に昆山県の場合は、山林地とする城内（城壁の周辺含む）に位置した庭園が比較的多い。庭園の立地が山に近づく傾向は、『園冶』で提唱された庭園立地に関する標準に合致しているといえる。『園冶』の中で、庭園の立地を選定することに関して山林地は第一位に位置づけられていた<sup>235</sup>。

各々の見山庭園分布図から、多くの見山庭園は山の近くに位置し、城内に立地した庭園も少なくなく、山あるいは城から離れた郊外に立地した庭園は非常に少ないことが判る。呉県、常熟県と昆山県において、数多の庭園は山の麓に分布し、特に常熟県と昆山県において庭園は山を囲むように分布していたことが明らかである。それに対して、城から離れた郊外に位置した庭園は非常に少なく、元和県はその典型として挙げられ、関連文献がある8点の郊外庭園のうち、ただ1点の庭園が見山庭園として記述されている。このような見山庭園の分布の特徴は、前述されたように山林地に庭園を設置した傾向の現れであり、同時に山に近い庭園には山を眺望する意識が比較的強いことの反映でもあると考えられる。太倉州は虞山と玉山から遠く、見山庭園が非常に少ないことはそのためである。一方で、山林地とともに城内に分布する見山庭園も多く、呉県、長洲県、元和県と常熟県において数多くみられる。これは一つには城内に分布した庭園の総数が比較的大きいことが考えられ、また一つには山から離れ城壁に囲まれた城内における庭園には眺望の意識が強かったことにあると考えられる。

山に近い庭園において眺望意識が強いことは、すでに触れた「遠眺」のモデルとも「遠」の伝統意匠とも齟齬する様相を呈している。しかし、山に近い見山庭園に関する眺望イメージの記述には、実際の近距離に関わらず「遠」の意匠がみられる。常熟県と昆山県における見山庭園はこの良い例である。藤溪とうけいと小楞伽しょうりょうかは、虞山の山麓に立地する庭園であり、山から非常に近い。小楞伽における眺望について「雲時濃復淡，山忽有還無」<sup>236</sup>という描写が見つけられたが、遠距離の山容として表現され、現実の距離と不一致であるといつてよい。藤溪については「藤谿記」という園記があり、山の眺望に関して「為堂三楹，翼兩室，引谿水週於檐下…前得虞於百武外，巖壑争奇，雲霞吐納，不運几徙席皆可周而有之」<sup>237</sup>と記され、山までの近距離が述べられている

235 陳植（1988）：園冶註釋：中国建築工業出版社，58

236 嚴熊（清代）：嚴白雲詩集，卷十三，小楞伽坐雨有懷平公：清乾隆十九年嚴有禧刻本

237 陸明輔（明代）：藤谿記：孫柚（明代）編：藤谿詩：清鈔本

と同時に、「雲霞吐納」のように遠山の様子も表現されている。同様に昆山市において、碩園という庭園は玉山から近く、山麓までの距離は大体 250 メートルであった。碩園における眺望に関して、「雲過全失雨，山遠半無霾」<sup>238</sup>という記述が見つけれ、「遠」と指摘された。また、留蘅閣りゅうこうかくと耘圃うんほとの庭園は玉山からあまり遠くないが、関連文献に「遠」という言い方が見られた<sup>239</sup>。以上の近距離における山の眺望に関する書き方から、眺望に関して眺望者が期待したイメージは遠距離の山の風景であると言っても過言ではない。

なお、山林地に位置した庭園に関する記述の中には、山までの眺望に関する視覚的な描写だけに留まらず、鳥瞰式な記し方も見られた。特に、これは呉県における見山庭園に関する記述に多く見られる。越溪莊という庭園は呉県の郊外に位置した石湖の北岸に立地し、山に関して「勾吳名山如錦屏，百里合沓廻青冥」<sup>240</sup>と書かれ、山は眺望の対象ではなく庭園を囲む環境の要素として指摘された。澗上草堂まじょうそうどうという庭園は天平山と靈岩山の間なんこうそうどうの山麓に位置し、山に囲まれたように立地した。山に関して園主は「澗上草堂在天平之陽，靈巖之陰，雞籠羊腸擁其右，笏林崖嶠峙其左，連峰疊巘，迤邐相屬，若環拱我草堂者」<sup>241</sup>と書いた。つまり、山は庭園を取り巻くように分布したことということである。常熟県における南皋草堂なんこうそうどうという庭園に関しては、「南皋草堂記」という園記があり、山に関して「堂負邑城，兩湖襟前，一山帶右，每天日清霽，則山光水色交映於目」<sup>242</sup>と記されている。この記述において山は、城と湖とを合わせて庭園の環境要素として指摘されているとともに、山と湖の眺望についても言及されている。これらのことから、古典造園において、山は眺望対象ではなく庭園を囲む環境要素として認識されていた場合も少なくないと言える。

また、山に関する造園意匠に関して、妙喜園は特別な例の一つである。妙喜園という庭園は明代に徐坦齋によって修築され、昆山市城西側に位置し、玉山にも近かった。『百城煙水』に妙喜園の条目があり、眺望に関して「園東池畔樹被風吹折一枝，適露玉峰，確公有樹缺山來補之句。」<sup>243</sup>と記され、さらに「老樹橫枝一夜摧，玉峰東望露崔嵬」と描写されている。つまり当初は妙喜園から玉山までの眺望は庭園の樹木に妨げられていたが、樹木が大きな風に壊されたことで、玉山が眺望できるようにな

238 徐崧（清代）：百城煙水，卷六，次日再集分得皆字：清康熙二十九年刻本

239 留蘅閣と耘圃の二つは城内に位置し、玉山の南側に立地した。留蘅閣の眺望に関しては、「其陰則遠眺玉山，紅樓翠嶂，突兀於萬瓦鱗次之上」と記された。李流芳（明代）：檀園集，卷八記疏，留蘅閣記：清文淵閣四庫全書本。耘圃の眺望に関しては、「遠色憑山借，清光就月睎」と描写された。鈕琇（清代）：臨野堂詩文集，詩集卷八，題果亭先生耘圃四首用錢飲光韻：清康熙刻本

240 王寵（明代）：雅宜山人集，卷八，越溪莊十絕句：明嘉靖十六年刻本

241 徐枋（清代）：居易堂集，卷八，甲寅重九登高記：清康熙刻本

242 季篔（明代）：南皋草堂記；馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十八：清光緒九年刊本

243 徐崧（清代）：百城煙水，卷六：清康熙二十九年刻本

ったということである。このように、初めは見えなかった眺望対象が偶然に見えるようになったことは園主にとって非常に面白いことであり、このことをテーマとしてわざわざ漢詩を作ったほどである。この妙喜園の例から、庭園を造った当初、山の眺望は造園に意識されなかったことが判る。

以上の分析に基づいて、山に対する造園上の意匠の考え方には、山の眺望よりも山林地への立地が第一であったと推測される。

## 5-2. 視点配置に関する理想と反理想

すでに触れたように、眺望の視点は庭園における遊覧経路の終端近くに配置され、眺望は景観のシークエンスの最後の一節として意匠されることが、庭園設計に関する理想的なモデルであることが知られている。

これに対して蘇州地域における庭園調査から、庭園における遊覧経路及び景観シークエンスが記述された庭園が14点得られた。14点の庭園はすべて呉県、長洲県と元和県の三県に位置している。庭園の立地に関しては、芸圃、怡園および鳳池園の3点は城内に立地し<sup>244</sup>、その他は郊外或いは城外の町に立地している。眺望の視点に関しては、水木明瑟園における研山堂という低い視点以外、すべては高い建物である。山までの距離に関しては、5点の庭園は山までの距離が遠いが、その他は比較的山に近い庭園である。すなわち、前述の芸圃、怡園および鳳池園の3点は蘇州府城の内に位置し山から遠く、紫芝園という庭園は府城の西側の町に位置し、これも山から離れ、梅花墅という庭園は元和県の郊外に位置し、山から非常に遠い。その上、遊覧経路及び景観シークエンスに関しては、芸圃、怡園、紫芝園と梅花墅との4点は前述された理想的なモデルに合致していることがわかった（表-10）。

芸圃は元々明代に文震孟（1574-1636）によって造営された薬圃であり、清代に姜埰に渡され敬亭山房という園名に変わり、現在まで伝えられ芸圃と呼ばれている<sup>245</sup>。

「芸圃記」および「芸圃後記」という園記があり、清代中期ごろの庭園が記されている。「芸圃後記」に庭園の配置と景観のシークエンスが細かく記され、現存する芸圃と比べると差異があるが、共通点も多いと判断された<sup>246</sup>。以下がその内容である。

「甫入門而徑，有桐數十本，桐盡得重屋三楹間，曰延光閣，稍進則曰東萊草堂…踰堂而右曰罇既齋，折而左，方池二畝許，蓮荷蒲柳之屬甚茂，面池為屋五楹間，曰念祖堂

244 14点の中に怡園と名付けられた庭園は2点ある。こちらの怡園は府城の樂橋西尚書巷に位置した庭園であり、現存している。もう一つは呉県の郊外の木瀆下沙塘に位置した庭園であり、現存していない。

245 馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十五：清光緒九年刊本

246 劉敦楨（2005）：蘇州古典園林：中国建築工業出版社，66

表－10 視点配置

時代	庭園	所在地	創立者	位置	立地	山までの距離	視点場の配置	眺望視点	眺望視点場	指摘文献
明代	集賢圃	呉県	翁彦陞	東山風月橋北	郊外	近	反理想	高	開襟閣	陳宗之集賢圃記
	耕學齋	呉県	徐衢	光福鎮東街楊樹頭	郊外町	近	反理想	高	耕學齋樓	張洪耕學齋圃記
	藥圃	呉県	文震孟	寶林寺東	城内	遠	理想	高	朝爽臺	汪琬藝圃記, 汪琬藝圃後記
	紫芝園	元和県	徐墨川	閭門外上津橋	城外町	遠	理想	高	騁望臺	王穉登紫芝園
	梅花墅	元和県	許自昌	甫里	郊外	遠	理想	高	湛華閣	陳繼儒許秘書園記, 鍾惺梅花墅記
清代	依綠園	呉県	吳時雅	東洞庭武山麓吳巷村	郊外	近	反理想	高	欣稼閣, 花鳥間樓	徐乾學依綠園記
	水木明瑟園	呉県	陸稹	上沙靈岩天平之間	郊外	近	反理想	低, 高	帷林草堂, 聽雨樓, 暖翠浮嵐閣	何焯渾上書屋記
	遂初園	呉県	吳銓	木瀆	郊外	近	反理想	高	凝園樓, 橫秀閣, 高臺	沈德潛遂初園記
	九峰草廬	呉県	程文煥	西磧山南麓或傍湖	郊外	近	反理想	高	九峰草廬, 清暉閣	蔣恭棻逸園紀略
	怡園	呉県	陶篔	木瀆下沙塘	郊外町	近	反理想	高	環山閣	陶正靖怡園記
	鄧尉山莊	呉県	查世倓	光福耕漁軒故址鄧尉山畔	郊外	近	反理想	高	塔影嵐光閣, 石帆亭	張問陶鄧尉山莊記
	怡園	呉県	顧文彬	樂橋西尚書巷	城内	遠	理想	高	松籟閣	俞樾怡園記
	鳳池園	長洲県	顧汧	鸞駕巷俗呼鈕家巷	城内	遠	反理想	高	岫雲閣	顧汧鳳池園記, 蔣元益鳳池園記
漁隱小圃	元和県	袁又愷	江村橋	郊外	近	反理想	高	五硯樓, 挹爽臺	王昶漁隱小圃記, 錢大昕五硯樓記	

…堂之前為廣庭，左穴垣而入，曰暘谷書堂，曰愛蓮窩，主人伯子講學之所也，堂之後曰四時讀書樂樓，曰香草居，則仲子之故熟也，由堂廡迤而右，曰敬亭山房…館曰紅鵝，軒曰六松，又皆仲子讀書行我之所也，軒曰改過閣，曰繡佛，則在山房之北，廊曰響月，則又在其西，橫三折板於池上為略約以行，曰度香橋，橋之南則南村鶴柴皆聚焉，中間壘土為山，登其巔稍夷，曰朝爽臺，山麓水涯，群峰十數，最高與念祖堂相向者，曰垂雲峰，有亭直愛蓮窩者，曰乳魚亭。」<sup>247</sup>これは「庭園に入り，閣と草堂などの建物を経て，やや大きい池に着き，池の側に位置した念祖堂と敬亭山房及び両者の近くの建物を通し，再び池に着き，池を渡し，築山と上に設置された台に到着した」という意味である。園記に台からの眺望は指摘されていないが，別の文献にはこれらの朝爽台の眺望に関して「崇臺面呉山」<sup>248</sup>と記述されており，呉県の郊外における山が眺望対象として記されている。このような空間の配置は童窩によってまとめられた理想的なモデルと合致するといつてよい。

ほかの三つも芸圃の場合と似ている。紫芝園は明代に徐墨川によって造営され，府

247 汪琬（清代）：藝圃後記；馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十五：清光緒九年刊本

248 これは王士禎の「藝圃雜詠七首」の一つであり，本文は「崇臺面呉山，山色喜無恙，朝爽與夕霏，氤氳非一狀，想見拄笏時，心在飛鳥上」である。王士禎（清代）：藝圃雜詠七首之朝爽臺；馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十五：清光緒九年刊本。ほかに，「藝圃十二詠」という漢詩に「朝爽閣」がみられ，眺望に関して「諸山遶城郭，指点臨高臺」と書かれた。孫枝蔚（清代）：溉堂集，續集卷六：清康熙刻本

城の閭門の外に立地した。「紫芝園」という園記に庭園における景観が記述され、景観のシークエンスの最後として「園盡処傑閣嵯峨，日玄覽，登兹四望，一園之勝悉在眉睫，無復隱形」<sup>249</sup>と記され、眺望に関しては指摘されていないが園内における風景を俯瞰する内容が記されおり、理想的なモデルに近かったとあってよい。梅花墅という庭園は明代に許自昌によって造営され、元和県の郊外に立地した。「許秘書園記」という園記に梅花墅を遊覧したことが記述され、記述の末に「湛華閣」という高い建物が記され、この建物から呉県における山の眺望について指摘されている<sup>250</sup>。怡園は清代後期に顧文彬（1811-1889）によって造営され、蘇州古城の内あり現存している。

「怡園記」という園記があり、この園記から当時の配置は現存する庭園と概ね同じであることが判った。「怡園記」によれば、庭園の入り口は西部に位置し、庭園に入り「看到子孫」という軒を通ると、すぐ「舫齋」の建物に着く。さらに、「舫齋」の二階は眺望の視点として指摘され、二階から城外の山の風景が眺望でき、続いて次第に庭園景観の中心とする池に着いたことが記されている<sup>251</sup>。「怡園記」に記された景観のシークエンスは理想的なモデルと相反しているようであるが、怡園における入り口の場所に関して検証が必要と考えられる。園記に載せられた「舫齋」は現存する庭園における「画舫齋」に当たり、入り口は現存の「湛華堂」の近くに位置したと推定される（図-44）。『蘇州古典園林』に掲載された庭園平面図と環境配置図<sup>252</sup>に基づけば、祠堂即ち園記に書かれた「春蔭義莊」は庭園の西側であり、庭園と隣接し、園主の住宅は庭園の南側にあり街路に隔てられ、庭園の入り口は庭園の南部と東部に設置されていたことが明らかである（図-45）。東部の入り口は1968年に新たに設置され<sup>253</sup>、南部の入り口は清代後期におけるものであり、この入り口で住宅と庭園が繋がれたことが推定される。園記によると、西部には入り口があったが、庭園と義莊との間の繋ぎであり、これは主な入り口ではなく、

現存庭園においても「画舫齋」の南側に小さい入り口がみられるだけである<sup>254</sup>。そ

249 王穉登（明代）：紫芝園；徐樹丕（明代）：識小録，識小録卷之四：涵芬樓秘笈景稿本

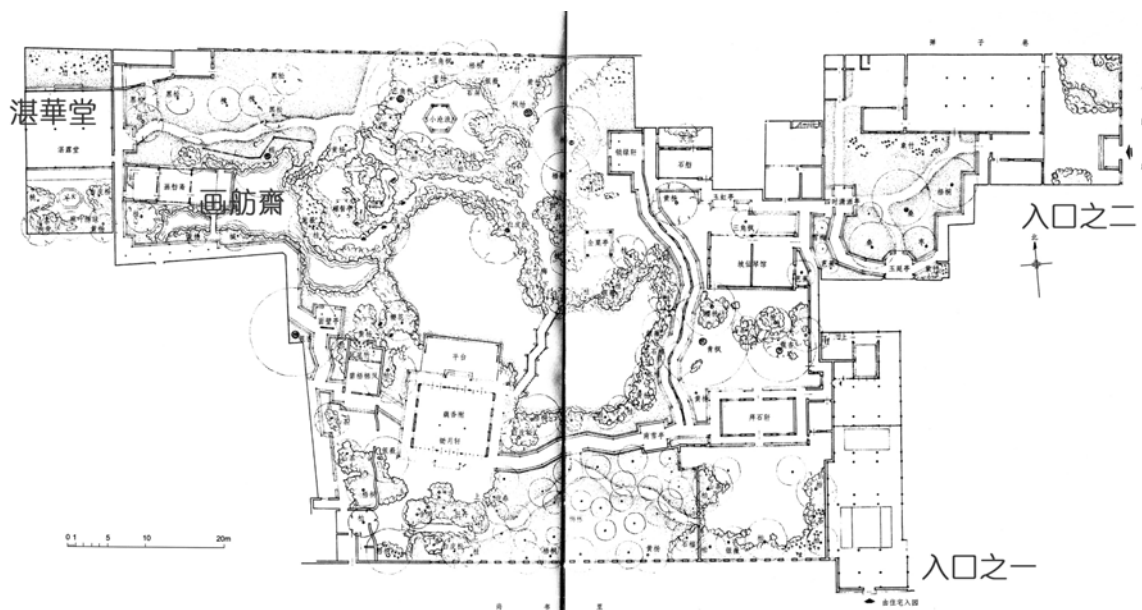
250 陳繼儒（明代）：許秘書園記；馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十六：清光緒九年刊本

251 俞樾（清代）：春在堂雜文，續編卷一，怡園記；清光緒二十五年刻春在堂全書本

252 劉敦楨（2005）：蘇州古典園林：中国建筑工業出版社，410

253 同上，66

254 一つの庭園に一個以上の入り口が設置されることは一般的であり、そのなか庭園と園主の住宅を繋ぐ入り口は正門として一番重要である。蘇州における庭園で、住居の機能は配置されない、庭園は住宅から外され設置されたことが多い。一言で言うと、庭園と住宅は分けられたが、両者の間の結びは緊密である。それに対して、義莊と庭園とのつながりは余り緊密ではないといえる。「怡園記」にわざわざ園主が創立した「春蔭義莊」は指摘されたことは、園主の徳行を褒めそやすためと推測される。義莊は封建時代に有力者が同じ家族の中の貧しいメンバーのために創立した福祉施設であり、家族のメンバーのため無料で開放され、学校、食堂とアパートなどは含まれた。こちらの「家族」は現在中国語と日本語における家族という言葉より範囲が広く、同じ氏名における同じブランチの人はすべて「家族」のメンバーであり、人数は多い。有力者が義莊を造ったことは褒めれる徳行である。



図－4 4 怡園平面図（劉敦楨『蘇州古典園林』より）



図－4 5 怡園立地図（劉敦楨『蘇州古典園林』より）

のため、怡園におけるかつての景観のシークエンスは「怡園記」に載せられた内容とは異なり、眺望視点とする「舫齋」という高建築は遊覧経路の終端部に設置され、理想的なモデルに一致していたといえることができる。

この4点に対して、このほかの10点は理想的なモデルとは齟齬があったことが明らかとなった。集賢圃は東山風月橋北に位置し、山と湖によって囲まれたような環境に立地した。「集賢圃記」という園記があり、庭園の配置に関して以下のように記された。「由一石橋入門，折右數武，為開襟閣，辰莫釐，衷武峰，西曬葑山，浮黛擘滄，東則具區潏泱，靈岩堯峰諸遠岫，出沒其中，葛洪煉墩，正与閣相直，來虹飛鳥，風帆滅沒，月夕激波，雪晨凍壑，蕩胸送抱，真成一快，下開襟閣有約，形如亭子，自此至群玉堂，八窗玲瓏…直抵來遠亭，繞亭叢桂森森…有屋三四楹，名一葉居，半借竹塢，



半跨水…此俱在群玉堂背也，躡石上薄寒香齋，古梅駁蘚，虬松離錯，齋后一小軒，湖之北東可眺…圃之北西偏既訖，群玉堂南對則有荷花池，乃与西石洞出朱橋處相連，池東有亭，可資納涼…此又非西石洞名飛香徑者同派，亦有樓榭，可攬湖光，回廊右旋，則又与開襟閣相屬矣。」<sup>255</sup>これは、「庭園に入り，すぐ開襟閣という高建築に着き，開襟閣から範囲が広い山と湖の場面が眺望でき，次に群玉堂などの建物を通し，湖が眺望できる軒を経て池に到着し，さらに湖が眺望できる高建築に着き，廊に沿って最後に開襟閣に戻った」という意味である。このようなシーケンスは理想的なモデルと比べると二つの点で違っている。一つは，眺望の視点とした高所がシーケンスの最後ではなく入り口の近くに設置されたことであり，もう一つは高所が一個だけに止まらず三つがあったことである。同様に，鄧尉山莊という庭園には塔影嵐光閣と石帆亭との二つの高所が配置され，近くの山が眺望された<sup>256</sup>。水木明瑟という庭園には聴雨樓，帷林草堂と暖翠浮嵐閣との三つの建物は眺望の場所として指摘され，帷林草堂は高建物ではなく一階建てであったと推測される<sup>257</sup>。帷林草堂の眺望に関して「帷林草堂三間，北望茶隴山，如對半壁」<sup>258</sup>と書かれており，低い視点からの眺望であったことが分かる。庭園は山に非常に近かったため，庭園内の多くの場所から山が見えたと推定され，高所だけではなく低い視点から山も眺望できたということが出来る。ほかの漁隱小圃，ぎょいんしょうほ 遂初園と耕學齋などの庭園に眺望の高所は一個しか配置されなかったが，庭園における景観シーケンスの終端部の近くではなく，理想的なモデルと異なるといつてよい。

以上の分析から，芸圃などのように山から離れた庭園では眺望は理想的なモデルに合致し，景観のシーケンスは小から大，低から高という変化とを伴って構成されていたことが判った。山から遠く離れた5点の庭園の中では，鳳池園は唯一つの例外である。一方で山に近い庭園における景観のシーケンスは理想的なモデルと不一致であり，「反理想」ということができる。

このような理想と反理想の差異を踏まえると，眺望に関する理想的なモデルにおいて眺望対象は高所のみから望める山であることが重要であったと推測される。蘇州古城における山の風景に関する分析から，芸圃と怡園との城内に位置した庭園にとって山は通常は見えない対象であり，高い建築の二階或は三階から山を眺望する可能性があったことが明らかである。勿論，城壁からすぐ近い紫芝園と元和県に位置した梅花

255 陳宗之（明代）：集賢圃記：邵忠ら（2004）編：蘇州歷代名園記：中国林業出版社，114-115

256 張問陶（清代）：鄧尉山莊記：馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志，卷四十五：清光緒九年刊本

257 何焯（清代）：義門先生集，卷二記傳雜文，渾上書屋記：清道光三十年姑蘇刻本

258 同上

墅には、山の眺望について同じ状況がみられる。逆に、集賢圃などの9点の庭園は呉県の山林郊外に位置しており、山に近く、庭園における低い視点からも山が特別なことではなく眺望できたといえる。これらの場合、山はありふれた風景の一種に落ちたといえることができる。眺望の理想的なモデルは、すでに触れたように小から大まで、低から高までの景観シークエンスの変化が意匠され、視野が次第に広くなり、最後の一節として視野が広げられた高所が配置されるものである。言い換えれば、理想的な眺望の対象は最後の一節の高所を登るまでは望めないものであるといえることができる。園記に記された眺望に関する記述には、高所に着く前の空間から眺望の視点場とする高所まで視野が激変したこと、及び視野の激変から生まれた遊覧者の喜びが多くみられる。

太倉州における庭園には、こうした理想を極端化した眺望がみられる。太倉州の範囲に山は存在せず、玉山と虞山は周辺におけるは最も近い山であるが、極めて遠く離れている。太倉州では見山庭園が6点得られ、この中の2点に関する記述に、玉山或いは虞山が眺望された山として指摘されている。具体的には、西田は太倉州の郊外に位置した庭園であり「西田記」という園記がある。「西田記」の本文の最初に玉山と虞山が庭園を囲む景観環境として指摘され、「廣平百里，却望極目，玉山南東，虞山北西，若前而揖，若背而負，日落霞起，日降水升，歸室屬連，倒影溥射，西田之景物也」<sup>259</sup>と書かれ、本文で再び虞山が眺望の対象として指摘され、「啓東軒則婁江如鏡，面北窓則虞山如障」と記されている。その他に、虞山の眺望に関して「列檻虞山近可呼」<sup>260</sup>という記述が見られ、45キロメートル以遠に位置した山があたかも近景のように描写された。えんざんえん 弁山園は太倉州の州城の内に位置した。眺望について「弁山園記」には細かい記述があり、飄渺樓と上の大觀臺は眺望の視点として指摘され、園主とした王世貞が書いたほかの文献に眺望に関する記述がみられ、その中で來玉閣という建物が玉山を眺望する場所として記されている<sup>261</sup>。しかし、「弁山園記」に飄渺樓と大觀臺からの眺望が記されている。その直後に、「名之曰大觀臺，又曰皆虞樹，皆不及馬鞍者，志遠也」の指摘がある。これは大觀臺は眺望の場所であったが、玉山・虞山は非常に遠いため、大觀臺からは望めなかった。皆虞樹という名称と園記に載られた

259 錢謙益（清代）：牧齋有學集，卷二十六記：四部叢刊景清康熙本

260 錢謙益（清代）：牧齋有學集，卷四絳雲餘燼集上，奉常王烟客先生見示西田園記寄題十二絕句：四部叢刊景清康熙本

261 王世貞の「弁山園記」は中国造園史にもっとも詳細な園記の一つといえることができる。王世貞（明代）：弁州山人四部續稿，卷五十九文部，弁山園記：清文淵閣四庫全書本。ほかに、「屠長卿使君見過弁園與曹子念同登縹緲樓分韻二首」という漢詩があり、縹緲樓からの眺望について「未規虞嶺披雲出如練婁江抱郭流」と記された。「弁園雜詠」の「大觀臺」に大觀臺からの眺望について「日脚低垂霧半籠，虞山一抹有無中」と書かれた。來玉閣という建物は「弁園雜詠四十三首」に記され、眺望について「窓裏玉山頽，窗外玉山至」と記述された。以上のすべては王世貞の『弁州山人四部續稿』に収集された。

眺望に関する描写は「志遠」であり、即ち眺望の理想の映しである」という意味である。実際、玉山は太倉の州城から約 17 キロメートルの距離であり、虞山の場合には距離は 45 キロメートルであり、非常に遠い。玉山の眺望に関しては、仰角は約 0.26 度であり、山体の見込み視角は約 1 度である。虞山の眺望に関しては、仰角は約 0.33 度であり、山体の見込み視角は約 2 度である。以上のことから山が眺望された頻度は低かったことが考えられる。弇山園の眺望にみられるように、視点の配置に関する理想と合わせて、眺望の対象には「遠」という理想もみることができ、通常は見えない対象、例えば非常に離れた山への眺望が庭園の意匠として考慮されていたことが考えられる。

### 5-3. 低視点について

蘇州地域における庭園調査から、高所からの眺望や、低い視点からの眺望、即ち一階建ての建築或いは庭園における平地からの眺望の例が 15 点得られた（表-11）。15 点の庭園は主に呉県、常熟県と昆山市に位置し、ほとんどは山に近い庭園である。その中で、9 点の庭園に関する記述に眺望の視点が指摘され、それらの視点はすべて

表-11 低視点の眺望

所在地	園名	時代	創立者	位置	立地	眺望に関する記述	眺望視 点場	見切り	指摘文献
呉県	廣長庵	明代	王穉登	支硎山	山麓	春風倚杖柴門下無數南山近女牆		女牆	王穉登廣長菴作二首
	寒山別業		趙宦光	支硎之南	山麓	編荆可當門疊石能爲牆青山露牆上野花墻下香		牆	趙宦光柴門
	澗上草堂	清代	徐枋	上沙	山麓	一坐草堂軒窗四開而山水之奇已盡得之	草堂		徐枋甲寅重九登高記
	水木明瑟園		陸稹	上沙	山麓	帷林草堂三間北望茶陽山如對半壁，水氣涵虛閣山光隱短垣	草堂	短垣	何焯潭上書屋記，等
長洲県	陽山草堂	明代	顧仁效	陽山下	山麓	草堂新築面陽山	草堂		王鏊陽山草堂記
常熟県	致爽堂	元代	徐氏	虞山麓	山麓	面山有堂曰致爽	致爽堂		妙聲桃源小隱記
	南皋草堂	明代	繆沆	城南之澚	不明	堂負邑城兩湖襟前一山帶右每天日清霽則山光水色交映於目	堂		季篋南皋草堂記
	西巖莊		桑瑾	拂水巖西	山麓	西莊半浸白鷗沙屋後峰巒紫翠遮			沈周題西巖莊
	藤溪		孫柚	虞山西北	山麓	為堂三楹…前得虞於百武外，藤蚪蟠下澗嶺翠落南墻	堂	牆	陸明輔藤谿記，等
昆山市	玉山佳處	元代	顧德輝	縣西界溪上	郊外水辺	草堂静對玉山岑谿路委蛇竹樹深	草堂		楊維禎玉山佳處記
	容春堂	明代	張擢秀	溇浦	郊外	園有堂啟北牖則馬鞍山如在簷際間	堂		歸有光容春堂記
	妙喜園		徐坦齋	西關外金童橋北	城外近山	老樹橫枝一夜摧玉峰東望露崔嵬		樹	徐崧因賦一律呈確公
	遂園	清代	徐乾學	馬鞍山北	山麓	一人則坐石上抱左卻看塔看山焉			方濬頤書玉峰遂園耆年禊飲圖後
	從吾館		葛芝	西門內新橋北	城内近山	坐客茅堂下悠然對玉峯	堂		葛芝從吾館記
	秋水軒		馬鳴鑾	鰲峰橋南	城内近山	坐消白日池頭下笑指青山屋角橫			秋水軒同飲光作

「堂」という建築であった。眺望の媒介というべき即ち視点と眺望対象の間に位置した中景的要素が4点の庭園に関する記述に記され、塀と樹木の場合がみられる。

一般的に、堂という建築は住宅においても庭園においても最も中心的な建築の種類である<sup>262</sup>。さらに堂は庭園における重要な場所に設置され、池と大築山などの主な庭園風景に臨むことが多い。すでに触れたように水木明瑟園においては帷林草堂から北に茶隴山という山が眺望できた。この帷林草堂の周辺の景観に関しては「其前嘉木列侍，若帷若幕，中有古桐一株，横臥池上，霜皮香骨，尤為奇絶，庭后蔬蒔藥畦，夏藹秋葩，未嘗去目」<sup>263</sup>と記されている。この記述から、帷林草堂の北側に多くの樹木と池があり、南側に花畑があったことが判る。こちらの池について同じ園記に「冰荷壑，帷林草堂之前廣池，兩岸梅木交映，水光沈碧，臨流孤坐，寒沁心脾」<sup>264</sup>とも記されており、池は比較的広かったことが判る。以上のことから、帷林草堂は冰荷壑という広い池に向き、池と池を囲む梅の林が草堂の近景と中景として構成され、茶隴山が遠景或いは背景として眺望されたものと推測される。しかし水木明瑟園にみるように堂は庭園に池などの中心的な景観要素に向けるように配置され、堂から観賞される風景の中心は池と林であって、堂は眺望のために設置されたわけではないものと推定される。さらに堂は庭園の境界部に配置されたわけではなく、堂から山が眺望できることは、庭園におけるほかの場所から眺望できる可能性も高かったといえることができる。水木明瑟園のように、帷林草堂とともに、聴雨楼と暖翠浮嵐閣との二つの建物も眺望の視点として指摘され、「水氣涵虚閣，山光隱短垣」<sup>265</sup>という特定の視点が言及されていない眺望に関する記述も見られた。したがって、「靈巖天平間，奇境勝全攬」<sup>266</sup>に表されるように、庭園は山に囲まれ、庭園から山を眺望する仰角は比較的大きく、山は庭園における多くの場所から眺望できる風景であったといえることができる。そうすると、低い視点の眺望の場合は、眺望のために低い視点の建築が配置されたのではなく、庭園が山に近いことで得られた眺望であったと考えられる。

## 6. 本章のまとめ

庭園における眺望に関する一般モデルは「登高眺遠」、即ち庭園内の楼閣或は築山

262 庭園における堂の建築の重要性は『園冶』に載られた論述にみられる。「凡園圍立基，定廳堂為主，先乎取景，妙在朝南」と記され、言い換えれば庭園を造ることは堂の配置から始まることである。

263 何焯（清代）：義門先生集，卷二記傳雜文，渾上書屋記：清道光三十年姑蘇刻本

264 同上

265 厲鶚（清代）：樊榭山房集，續集卷七詩庚：四部叢刊景清振綺堂本

266 畢沅（清代）：靈巖山人詩集，卷二十一萍心漫草，重遊水木明瑟園：清嘉慶四年經訓堂刻本

などの高所から園外に位置する山などの風景を眺めることである。現存する庭園における借景の例は一般モデルと合致していた。この一般モデルでは、視対象までの遠距離と視野の広さが重要視されている。このことから「遠」という意匠が重要であると考えられる。さらに、庭園の配置において眺望の視点場とする高所が景観シークエンスの終端部に設定されることが造園における理想的なモデルということができる。ほかに、「登高眺遠」という一般モデルは最初儀礼と農業などの要素から生まれ、風景観賞と造園の美に進化してきたが、その中に生産的な意味が依然含まれ、実用と理想景が混在してきた。

借景の典型である拙政園の眺望に関する分析から、時代とともに庭園の配置が変化し、眺望に関する意識も変化したことを明らかにした。拙政園の眺望に関する背景として、明代から清代末期までに蘇州古城において、塔は通常見ることのできた風景であったのに対して、郊外の山の風景は通常眺望できなかつたと推定される。拙政園では創立期（1506-1521 頃）に山の眺望が意識されていたのに対して、塔の眺望が意識されたのは清代乾隆年間（1736-1795）以後であった。これは庭園の水景と境界の変化が原因である。創立期における拙政園から北寺塔は眺望できたが、水景が現存の状態と異なっていた。現存する借景の場面における優れた視覚構成は清代中期から形成され、清代後期に完成したものと推測される。さらに、創立期の拙政園は境界性が弱く、庭園は周辺の田野に溶け合うように存在していたと推測される。その結果、塔の眺望は古城における日常的風景であったといえる。さらに、清代後期には見山楼から郊外の山の眺望は近くの建築に妨げられていたと推定され、見山という名称は「登高眺遠」の理想の反映したものとして捉えることができた。

拙政園の眺望の検討結果から、塔の眺望と山の眺望という問題が提起され、蘇州地域の庭園を対象として分析を行った。その結果、眺望対象としては山は塔より重要であったことが明らかになった。まず、塔の眺望に関して塔影に関する調査における 10 点の庭園には、「隔」という概念が重要なものとして考察された。言い換えれば古城における一般的な塔の眺望に対して、庭園から空間的な境界に隔てられた塔の眺望が造園では意識されていた可能性が高いことが推測された。さらに、10 点の庭園はほとんど小庭園であり、囲み性が比較的強いことも明らかになった。塔影に関する分析の結果、境界性及び境界性に定められる囲み性と眺望の関連は拙政園における眺望の特性とも合致した。

続いて山の眺望に関して、県別の見山庭園の分布の特徴を検討した。その結果庭園立地は山の眺望よりも山に近いことが重要視され、「山林第一」であったと推定された。さらに、見山庭園において眺望視点場とする高所の配置について、特別な現象を

見出した。即ち、山から遠ざかる庭園では眺望視点場の配置は理想的なモデルに合致し、高所は景観のシークエンスの終端部に設置された。それに対して、山に近い庭園における景観のシークエンスには理想的なモデルとの間に齟齬があった。なお眺望において高い視点と比べると低い始点の事例は非常に少なく、収集された例はすべて山に近い庭園であった。低い視点の場合、視点場は堂という建築であることが多く、山の眺望は主景ではなかったことが推定された。

全体的に、眺望という複雑な現象において、理想的なモデルが造園において準則として考慮され、数多の実例に投影されてきたということができる。具体的には、この理想的なモデルでは、眺望の視点は庭園の高所であり、高所は遊覧経路の終端部に設置され、遊覧経路に沿って景観シークエンスが小から大まで、低から高まで、近から遠までのように変化をもって意匠されていることがわかった。また「遠」という意匠、即ち距離が遠く範囲が広い眺望対象が理想的なモデルには期待されていることが考察された。これらのことから、理想的な眺望対象は庭園からある境界によって隔てられ、眺望の高所に限り眺められるものとして考えられてきたことが整理された。言い換えれば、理想的なモデルは「登高眺遠」の際に、空間と視野の激的変化が意匠されているものといえる。

いうまでもなく、理想的なモデルは多くの実例に反映されたが、さまざまな現実的な要因に影響され、すべての庭園が理想的なモデルのように配置されたとはいえない。すでに触れたように、眺望における風景美と農業生産の共存、拙政園において清代後期から山が眺望できなかつた楼を見山と名付けたこと、山に近い庭園の場合でも山の眺望は遠景のように記されたこと、山が遠すぎて望めなかつたのにも関わらず太倉州において庭園の景を山の眺望と名付けたこと、は造園における理想と現実が重ねられた結果であるといってもよいだろう。